
銀の弾丸なんてない ~紅月編

袴 左右

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀の弾丸なんてない ～紅月編

【Zコード】

N21520

【作者名】

袴 左右

【あらすじ】

ぼくが雑用としてバイトしている事務所では、ぼくだけが普通の人間だった。巫月事務所は、人外、怪物を人間の都合の言いよう処理する『狩人』を生業としている。その中で、ぼくが出来ることなんてたかが知れていて……。

更新速度が最近、かなり低速です。確認に来てくださる方には、毎日土下座したいくらいの心境ですが、どうか気長にお待ちくださ
い。

口常の裏地（前書き）

出血など、残酷描写わざと数出でます。
戦闘シーンはそんなに今後出でこない予定。

……それは幾織と重ねられた日常の裏地。
幾度となく続けられる夜と狩りの物語。
よくある日常の一欠片。

「いい加減、飽き飽きだ」

彼はそう毒気つきながらも、深夜の町を走る。
魔術によって強化された肉体を行使したその走りは、走ると言うよりも駆けるに近く、駆けるより飛ぶに近い。その速度は常人を遙かに超える。

高速で走れば走るほどに薄手のコート、というよりもマントに近いそれは、激しくなびき、まるで疾風が吹き続いているかのような様を見せていた。

だが、それでもなお彼の目の前には、疾駆する影。
そう、彼はその影を追う狩人だった。

しかして、彼が未だにその目標に追いつけないといつこの事実は、その目標も同様に普通の人間を超えた『何か』であることを意味している。

その『何か』の速度は予め立てられた予測よりも僅かに速く、追い手である狩人にとって、少々面倒な事態だった。もつとも、事態は既に少々面倒な事態から、少々面倒な失態に変化しつつあったが。

狩人にとっての救いは、事前に張られた結界によつて、周囲に自分達以外の人影が見えないということである。

結界の範囲内ならば一般人に被害が及ぶことも、事件に気付かれることもない。

だが、それももうすぐ……彼の計算と記憶が正しければ、30秒後にはその有効範囲を超える。

ちつ、と狩人は舌打ちした。

（これ以上手間をかけさせてくれるなよ、出来損ない。）

速度を上げても影を見失う可能性と、残り時間が迫ることに焦る。さらに言えばどこまでいっても人間でしかない肉体を持つ彼が、これ以上の時間を走ることは危険でしかなく、死の重圧がさらに彼の心に圧し掛かり始めていた。

万一、この速度で無様にも転倒するなり、身体制御、魔術制御双方への集中を少しでも欠くようなことがあれば、衝撃によつて問答無用で五体がバラバラになるだろう。

選択肢が頭の中にならついた、それも己の危険性を高める選択肢。と、さらに彼を影は引き離す。

それを確認する寸前に、魔剣をするり、と彼は引き抜いた。

影の速度を増すことを予期したためか、それとも単なる焦りのためかは彼自身にもわからない。

引き抜かれたのは、日本刀の姿をした魔剣……血汐閑咲。ちじおゆりさき

僅かな月明かりと、断続的に浴びる街頭の光により、鋭利に輝く刀身は、鍛え上げられた巧みな刀匠の技と魂、そして数百数十万もの魔術の結晶。

それを持つて、自らに身体に眠る、魔術を呼び起こす。

禍々しき、我が血統。呪われし凶血。狩られし魔血。

魔が封じられた鮮血により、魔を、異なる理を呼ぶ。即ち、鮮血魔術。

「……なんて、格好付けてみたり」

と、ここまですべて俺の脳内思考。

ようするに、格好付け。

ここまでミスつたら、格好を気にしても無駄なような気もするけどさ、そこは男の性といつものだよな。

んー、どこでもいつでも格好付けたいんだよ、俺は。

緊張感なく、そんなどうでもいいことを考えながらも、俺の速度と肉体を制御する魔術には一点の乱れはない。もっとも乱れがあれば考える以前に俺は肉塊ミンチへと変わつてただろ？。

というか、そんなことを考える暇があるのなら決着をつけるべきだ、と思わないでもない。

ふ、とわざとらしく笑い（無論、俺はそれが格好いいと思つている）、手の甲を僅かに出血する程度に傷を付けた。

出血の量は問題ではなく、魔剣に血液が付着することによって、魔術的に繋がりを得たことが重要だ。

それによつて、描く。

為したい魔術、その式を。そして、構築する。

源は魔血解放、果は鮮血沸騰。目的が明確ならば、その力によつて働く存在も、呼び起こされる結果も、能動的、受動的、瞬間的に働いてくれる。

それは一瞬で幾重にも紡がれる式。願い。想い。呪い。

そして、解く。今我が力の全てを統べ、その全てを……。

「解放しやがれ！」

途端に全身に燃えるよつた熱さを感じ、赤い霧、蒸気が身体からほとばしる。

田の前が一気に赤く染まる。同時に言ことよつのないほどに高まる高揚感。

その自らの身体の高ぶりに任せ、俺は飛翔んだ。

その衝動的な感情に全てを委ねた。

何かを察し振り返る影。

そいつの瞳に写したのは、死神の鎌のよつに冷たく輝く刃だった。

*

時間帯は健全な青少年はあまり外を出歩かないであつて、深夜。今宵も紅く染まる月夜は美しく、熱い身体に風は心地良い。

そつ、月は紅く空に映える。

だが、それは自分だけに見える光景、魔術による狂的覚醒作用によるもの。

魔術は自らを、強制的に極度の興奮状態へと 覚醒させることにより、常人ではありえないほどの集中力を得るによつて始めて発動させうるもの。俺には、その興奮作用が視覚に強く影響するタイプの人間だった。

つまり、月が紅く染まるのは、俺の中だけの出来事。

紅く、全ての視界が染まり、その刃を、身体を、獲物を、そのすべてが、勿論身も心すらも鮮やかに彩る。それは俺にとつて、甘美に酔いしれることの出来る光景。

危ういほどに、いや、一時期は正氣を失うほどにその世界に狂喜せずにはいられなかつ

たものだ。

今では、残念なこと。心の底から残念なこと、鍛え上げられている精神は自らを律し、その情熱を制御してしまえる。もはや、その紅い世界へと心躍らせることが難しい。

確かにそれでも魔術行使することは、一種の麻薬的快楽を覚えることには変わりないし、今までの紅い世界には思いを馳せたくなるものだ。

だがそれも、連日連夜の繰り返しとなつては感じ飽きてしまう快樂、見飽きてしまう光景にしか過ぎない。

同じ、刺激の繰り返しは飽いてしまう。

……乾いてしまう。

それを癒すには、さらに強い刺激でなくばならないのだ。

そんなくだらない思考を反芻していく中で、自らを興奮から冷ましていく。

思考によって、感情を鎮静させるのは癖であり、習慣であり、必要な儀式だ。

時間をかけ、徐々に身体と頭が冷え、紅い月の色が白く輝くように見え始めた頃。

ようやく俺は一見して日本刀のようなソレを鞘に収め、自身の姿を省みる。

日本刀片手に暗緑色のコートを身に纏い、コートの下は学制服（返り血付き）と血つ、怪しことにの上ない深夜徘徊常習犯の高校生がそこにいた。

どう考えても、ろくな大人に成れそうもない。

「しっかりと健康的に生きていきたいもんだなあ……」

やつぱ、^{バイト}職を変えるしかないものかね？

このままじや俺の人生の目標。「70まで生きよつ。とつあえずが達成できないかもしれない。

この70と言つ数字にまつたく意味はないけどな。

と、ようやく俺は自分の思考の回路が、いつものような適当でくだけたものになつたのを自覚する。

これが、本来の人前での俺、いつもの俺、と呼ばれる姿だ。

どつちが素なのか、とはよく聞かれるが、そんなものも決まっていない。

どうあつても自分は自分だ。性格と言つか、その場の雰囲気とかノリで人間は変わるものだわ。

……つて、元に戻ると、いきなり疲労感が来るんだよな。身体が鉛、とは行かなくとも、ビールケースぐらいにはなつた気がする重量感。

きつすぎるだろ、明らかに。寿命が縮みそつだよ、このバイト。
……出来ればやめたいな。

「でもよ、ほら、払いはいいわけよ。他のバイトと比べればな。でも、命がけだつて考えるとな。3、4万のために死ねるか？」

無理。そんなの無理。

命は一度賭けたら、払い戻しは利かないんだぞ？

ほほオールリスク、極一部リターンだ。割に合わないだろ。

……しかし、金は欲しい訳で。

切実な問題だ、生活は自分で支えないと生きていけない。
しかも、俺には金だけじゃなく、やらねばならないという切実な
理由がある。

まったく、どうしたもんかね。

「なあ、アンタ。どう思つ?」

俺はそういう元に転がつている首に話しかけた。
返事がないので、つま先で小突く。

「やっぱ、それでも他の職探した方がいいかな
キサマ、ふざけるなよ? 人間風情が」

ようやく首は返事をした。

自分で返事を強制しつつ、感心する。
すういな、俺だったら返答なんかよつとすうり思えねえよ。

……首と胴を切り離されたらな。

「俺はかなり本気なんだけど? 人間風情といつけどさ、化け物と
比べたらよつほど生きしていくことに努力が必要だと思わないか。だ
つたら、こう……ね、きらこの気持ちとか生まれてくるんじゃね?」

首は牙をむき出して笑う。

「ふん、阿呆もここまで来ると見事なものだ」

「……ほぼ初対面の相手にひでえ」と言つた

そういうのは言われなれてるけどな。
言われても、断固として認めないが。

「あ、そういうや体の方はどういわんの？ 探すのめんぢいんだけど」

実は首と胴はそれぞれ慣性の法則に従い。その出していった速度によつて宙を舞い、どこか飛んでしまつていた。

首がここにあるのは、わざわざ自分で斬り飛ばした首を自分でキヤツチなんて、ちょっと一人でバッターとピッチャーを同時にやつたみたいなありえない技を披露したからであつて。

そうでない胴体はどこへ行つたのか見当もつかなかつた。

「つか、よくしゃべれるよな、それで。肺も横隔膜もないのに」

生命の不思議発見。

いや、生きてるのかは知らんけど。

そんな状況にも関わらず、首はなぜか俺をヤル氣（殺る気^{アラシ}？）マソマソにらみつける。

「……貴様がどうしようが、我らが人間風情に殺されるなどありえん」

未だに自分に敗北が訪れる、もしくは、とつぐに訪れているとは思つていらないらしい。

調子こいてんな、コイツ。

首の分際で。

「……我らに敗北はありえない。なぜなら我らは生きてないからだ」

「不死者。非^{ノーライフ}生命体。魔術仕掛けのガラクタ。つまりはそういうことなんだろう？ 生きているの定義は知らないがな」

知らなくても、残念には思わないけど。

というか、白けているこの空気に気付け、首。

首は首しかないのにも関わらず、まだ自分の勝利を疑わない。

首の分際で。

首はにやり、と歯を見せて笑う。

「なら、わかつてゐるのだろう。穢れた魔術師よ
「なにを？」

いや、本氣でなにを？
むしろ、お前がわかれ、むしろ氣付け。

「ふん、阿呆にはわからんか？それはな……」
「いいから勿体ぶんなよ」
「……我らに逆らつた人間は」

首が不敵に笑みを浮かべる。

「死ぬしかない、と言つことだ！」

振り向きざまに、烈火の炎を纏う魔剣を振りかざし。

背後から、ご苦労にも奇襲しようとしたに来た首なしの身体に、刃^{それ}をお見舞いした。

そう、こいつの身体は、背後から慎重に忍び寄り俺を殺そうとしていたのだった。

焼かれ、燃え、斬られ、無残にも燃えるゴミから燃えたゴミになる物体。

そのまま、身体を一回転させ、刀を鞘にしまう寸前に、刃の炎を消す。

……ちょっと火を消すタイミングを外して手が痛んだ。

でも、俺は痛くない風を装つ。
だつて、格好悪いじゃん？

涙目の状態で目線を下ろすと、開いた口がふさがらない様子の首。
さつきまでのモヤモヤが若干スッキリした。

「で、なにが？」

帰つてくるのは沈黙。

「俺が独り言を言つてるみたいじゃん。返事しないよ」
「キツ」
「き？」
「キサマ！ 人間の分際で！」

首がなんか叫びだした。

「……キーキー わめくな、うつとうしい。男だろ。いいだろ身体が
燃えたぐらい。俺だつて、微妙に熱い思いしてんだからよ」

つか、本当に熱かつた。いやマジで。

……水ぶくれ出来てんじゃね？

と、途端に静かになる首。

いきなり冷静に戻りだした。なにそれ、一瞬^{ブチ}切れ？ ブチ切れ？

「つか、一人百面相？ いや、首しかないんだから、出来ることが
表情^{それくわう}変えるしかないのはわかるけどさ。周りから見ると、マジでう
つざいよ？」

「……だが、全身を焼き尽くされ、灰になろうとも。いくら刃で細

切れにされようとも。首だけと成り果てようが、我らが死すこと決してない。身体の再生を待つ、必ずキサマを喰らい尽くしてくれるぞ！」

「いや、人のはなし聞けよ」

……とにかく、まあ、そうなのだ。コイツ、魔術だけで生きてる（？）ようなものなので、魔術が解けるまで死はない。解くのは、ちょいと面倒な手順が必要だし、この場じや出来ないので事実上ここで殺せない。

あと考えられる方法は、コイツを作った術者に解かせるか、そいつを殺すぐらいのものだ。

決して直接的な物理的手段じゃ殺せない。

それが魔術仕掛け機械である不死者の一種、ノーライフ非生命体と言つ存在。

「確かに俺には殺せないんだよな」

「ようやく理解したか、そつともキサマに勝ち田などない、ん……なんだつ、何をするつ離せ！」

俺はその首のやや長めの髪の毛を右手で掴み、持ち上げる。なんか髪の毛がやけに汚らしく氣がするが、他に持つとこもない。下手に持つと噛みつかれそうだしな。

で、携帯を左手で出してぽちぽちっと。

……なんか左手じゃ使いづらい。つか、火傷？ でつりてくい。通話ボタンを押して……お、早いな。待ち構えてたか。

「あ、ハミ？ 今どの辺

「ハミ？ 今どの辺……じゃないですよ、なにでさつそと仕留めないんですかあ」

ハミがちょっと上手いモノマネを披露しつつ答えた。

つていうか、今の「ハミ、今どの辺」は本気で俺に似てたと思つ。

「たまにす」いな、お前

「なにを褒めてるんですかあ！ いま、トオくんのバイクで追いつきますからあ……ん？ なんかうるさくないですかあ」

「いや、バイクの音じゃね。と言つたか、よく俺の声聞こえるな、エンジン音で聞こえないだろ？」

「いや、ハミの場合は意外と平氣ですか。じゃなくて、なんか聞こえますよお？」

「あ？」

ふと、見てみると、首がまたキーキーわめいていた。

「のんきに仲間に連絡か、小僧！ 何人来ても同じことだぞ。いい加減、この手を離せ！」

どうやら再生が始まつてゐるようで、大分首が長くなつて來ている。このままじゃ、名称を『首』から、『首から鎖骨』に変更する必要性が出てきそうだ。

……どうりでなんか重たいと思つた。

「クククク、もうすぐだ。もうすぐキサクの命運も死んで

膝を曲げ、腕を振り上げ、一気に首をアスファルトに叩きつける。ぐひえつ、と聞こえて静かになつた。

「これで大丈夫」

「ぜんぜん大丈夫じゃないですよー！ あんまり汚しちゃ駄目ですかねえ！」

なんか、電話の向こう側から怒られた。

いや、そんな間延びした声で怒られても。

「でも、つるさいんだろ？仕方ないじゃん」

「もお、他人事だと思って……汚いじゃないですかあ」

「そう言われてもな」

だいたい元から汚いと思つた、」の『首から鎌骨』は。

「……これ、頭洗つてなさそりだしな」

「つで、なに食欲失くすようなコトいつてるんですかあ！」

「いけね、言つちやつた」

ま、見たらわかる」とだしな。

それでも、ハミは「もお」と一見、いや一聞するとあんまり怖くない感じで怒る。

「そのまま大人しく持つて下さこよお？地面にたたきつけるなんてしないで」

「わかつてゐつて……」

つて、おい。

なんで俺がなにをしたのかわかるんだ？

……まさか俺が見えてるのか？

そう思い、振り向く。

バイクの音がどこからか聞こえてきた。

遠くにライトをつけたバイクが走つてくるのが見える。

だが、肉眼で確認できる距離じゃない。

俺のよつと魔術で強化してたら別だが。

「……なあ、お前、視力いくつ?」「

「いいから、大人しく持つてて下さいねえ?」

ようやく俺は気付く、ああ見えてるんじゃないんだった。
まあ、『愁傷様だな。

携帯から聞こえる嬉しそうな声。

「そつじやないとお、腕」と食べちゃうかも知れないですからあ

ハミは無邪気に宣告するだらう。

それは死刑宣告と言つよりも、ちょっととした礼儀だ。
その寸前で意識を取り戻した首が呟く。

「なんだアレは……アレは……」

バイクから伸びる漆黒のモノ。

獲物を求めて、迫り来る触手のよう、漆黒は迫る。
……実際、あまり触手と変わらないだらう。

彼女にとつてはこれは処刑ではなく、日常。
宣告の前に首に言つておく。

「……死ねたらよかつたのに、な。自称不死」

つまり、彼女の宣告は。

「いただきまーす」

と、ただそれだけのことだった。

ぼくはバイクで、必死に赤霧咲斗先輩を追つことだけに集中しようと/orしていた。

それが出来ないのは、生きたまま(?)生首が咀嚼される音が、ぼくの携帯電話から聞こえてきているのだろうことが、予想できるからだ。

とは言つても、ぼくは幸運にも、きちんとヘルメットを着用していたので、例えどんなにその音が大きくても、携帯が音量どんに大音量でも、ぼくの耳に届くことはない。

だけど、その音が鳴つてているのはわかる。

なぜなら、ぼくの背中にしがみついて同乗する人物、ハミがしっかりと抱きつきながらも、わざわざぼくの身体にぴったりと頬を当てるようにして、もうひと口を動かすようにしてそれを親切にも伝えてきたからだ。

実際に口の中に何か入つてているわけではないので、本来なら口を動かす必要はないのだけど、親切なハミは、ぼくにわかるようにわざわざ声のいらない実況中継してくれている。

……一応言つておくけど、ぼくはそんなこと望んでない。

むしろ、嫌がつててる。

もちろん、それはハミも知つててる。

ああ……つまり、よつすることいやがらせだ。

延々と咀嚼がなされているのを、背中に字を書くよりもわかりやすく伝えてくる。

身体に伝わる動作だけで、状況を想像できてしまつぼくにすれば、その場にいなくてよかつたと思われるを得ない。

万一、現場にいたらどんな衝撃映像を見せられたか。
いや、その場にいたら、目を逸らして、耳を塞げばいいだけなので、むしろ現場にいた方が良かつたような。

次第に、咀嚼する物体も細かくなつて来たのだろう。だんだん動きが小さくなつてきた。

実際に口に入つている訳でもないのに、苦労なことだ。

そして、彼女の咀嚼が完全に止まつた頃、赤霧先輩の所に着いた。バイクを止め、ヘルメットを両手で外す。

「先輩、おつかれさまで……」

何かを指差す先輩。

ぼくの真後ろ?

その方向へと顔を向ける。

そこには大きく口を開けている、アップされたハミの顔……とバイクの真後ろにそびえる黒い何か。

同世代の女の子、それも至近距離の顔にドキドキするよりも、その黒い物体の方へ自然と意識がいく。

なぜなら、ハミが口を開けているのと同じように、黒い物体が大きく全身を見開いていたからだ。

その見開いた黒い物体の中に垣間見えるのは、赤黒く、とじりとじる白く、ぐぢやぐぢやでドロドロとした『もの』。気のせいかもしないが、田玉が一つ、それと人間の舌らしきものがその中に見える。

もし、咀嚼された後の生首、なんてそんなものがあるとしたらこんな感じだろう。

いや、もう、ホントにそんな感じだろう。

そして、ハミがゆっくり口を開じると、黒い物体もゆっくり全身を閉じ。

ハミがぼくの肩に顎を乗せると、黒い物体もぼくのバイクに僅かに身体を乗せ。

ハミがなにかを飲み込むような動作を見せる、黒い物体もなにかを飲み込むような動作を見せた。

「こり笑つてハミは言つた。

「ハミもやつせぬ

ぼくもこり笑う。

「ハミ？」

「なに？」

「わざと皿玉と、舌。形残したね」

「うん……がんばっちゃつた」

てへ、と言ひ感じでハミは言つた。

……うん。

全然、可愛くないよ。本氣で。

それを見て、赤霧先輩は頷いた。

「まあ、あれだ。なにともなくてよかつた、よかつた」

「どこがですか！」

「いやいや、一時は逃がすんじゃねえかとひやひやしたけどな。まあともう少し、遠野がバイクの運転上手けりや、余裕で確保出来たんだが」

一応言つておぐ、遠野はぼくだ。

それと、ぼくのバイクの運転技術に関して言えば、2人乗りが精一杯とだけ言つておく。そこまで一般より劣ることはない……はずだ。

別に不当な発言を受けた仕返しではないが、一応、赤霧先輩に一言。

「そもそもその発端は先輩が出し抜かれたせいですけどね、先輩の油断されなければ仕留めるのもだいぶ近場だつたと思いますよ」

「ああ？ そんなもん、俺が仕留めたからいいんだよ」

そうわるびれずに先輩は言い、帽子を被りなおす。

この学生服に暗緑色のコートをはおり、同じく暗緑色の帽子を被つた人物、赤霧咲斗先輩（こんなんでも年上で先輩なのだ）は魔術師でありながら、日本刀を扱う凄腕の狩人だ。ただし、魔術師としては3流らしい。

しかも、この人、仕留めようとする獲物に口数が多くなるタイプの人間で、今回の非生命体^{－ライフ}を逃がしたのは「冥土の土産に教えてやろう」なんて余裕ぶつて口走ったからだつたりする。

なぜかこの人は仕事で可能な限り全力でふざけるんだよな。

そのうちそれが原因で殺されるんじやないか、と思わなくもないけど、その性格で修羅場を潜り抜け、今こうして生きていることに、むしろ実力を感じさせる結果になつていてと言つばかばかしいぞ。

そう、実力はあるけど阿呆、いや、もといアホなのだ。

「お前、なんか失礼なこと考えてるだろ」

何気に鋭いな、この人。いや、よく考えたら先輩に関して言えば、だいたいいつも本人に言えないことを考えているので、そう言われ

ればだいたい当たる。

と、赤霧先輩との会話に、ハミがぼくに同意を示した。
……ただし、かなり言葉口調を崩して、だ。

「でもお、トオくんの言つとおりですよ。サクさんならあ、もつと早く仕留めてれたんぢやないですか？　ハミの食事が遅くなつちやいましたよお」

「別にいいだる、そんぐらい。最終的には食えたんだし」

ハミは赤霧先輩をサクさんと呼ぶ。そして、ぼく以外の人前では、なぜかかなりアホっぽい口調で話すのだった。

「なに言つてるんですかあ、就寝の2時間前に食事したら太っちゃうんですよお」

「いいじやん、太つても。今日日、多少ポチャつとしてるほうが可愛いて」

「駄目ですか、別にサクさんの好みになりたくありませんからあ」「それ、何気にひどい。……じゃあ、いつそ後2時間起きてればどうよ？」

「睡眠不足はあ、お肌の敵ですよお？」

ちなみにハミの方はぼくの同級生だ。こつしてみると、緊張感のないまのび口調と会話の内容と合わせて、さつきまでグロイ食事風景を見せてくれた人物と同一人物とは思えない。

実はその言葉遣いは彼女本来のものではないんだけど、このしゃべり方はその場の空気を常に柔らかいもの、を通り越して間の抜けたものへと作り変える。

それでも彼女はさつき見たとおり、化け物だらうが、不死者だらうが、食べる能力者だ。難しく言つと捕食、それもきつちり消化して栄養にする。あ、栄養にするのは食べるんだから当たり前か？

じゃなあや、食べると言わないのか？

まあ、そこはおじとじ、そつ食べるのだ。恐ろしいことに。

相手が悪魔だろうが、悪霊だろうが、食人鬼だろうが、吸血鬼だろうが、一口だ。信心深い人間には未だに怖れられる彼らも、ハミに遭遇すれば（それも不幸にも空腹時だとすれば）、彼らは彼女の口の中でグロテスクな液体と化すことになるだろう。さらに言えば、その成果が、わざわざ、ぼくの目に見せられることになりかねない。

まあ、ハミが空腹じゃなうって言うのも、実際の所なかなかない話だから、遭遇もなにもハミの方からこうしてそういうった獲物に寄つていくわけで、一応相方のぼくは必然的にそれにお付き合いすることになる。

赤霧先輩とハミ、こうして一人揃えば剣呑物騒極まりない人達な訳だ。
ただ……。

「もう、だいたいもうこじこじか？ 歩いて帰る距離じゃないじゃないですか。もお、どこまで走れば先輩つてば気が済むんですう？」 サクさんもしかしてダイエット中なお？

「ああ、ダイエットはスポーツティなのが一番だろ？ つかさ、結構大変なんだぞ。人間の身体で高速で走るのは、どれくらい難しいかお前わかるか？」

「さあ～？ どれぐらいですか？」

「綱渡りしている状態で、1輪車に乗るぐらいは難しい」

「へえ～、すごいですねえ。日光猿軍団ですねえ」

「だろう？ 中国雜技団だろう？ その状態で敵を斬るつてなつたらどんなだけ難しいんだ？ …… あー、難しそうで、もう例えねえぐらいだな」

「あ～、そういうことってありますよねえ」

なんだか、いつして見てもその感覚が全く伝わってない。なんか、アホだなこの会話とか思つてしまつ。むしろ、逆にそれが恐ろしい。

そんな会話を聞きつつも、ハミから戻ってきた携帯で、所長に業務完了のメールをつづつ。

所長と語るのは、ぼく達の雇い主で……あんまり登場人物が一気に出てくると、憶えるのが大変なので紹介は後回しにしておく。と、先輩とハミの方へと目を向けると、話が見当違いの方向に飛びすぎて、ハミは怒りを忘れたらしく、嬉々として、食事の感想に入つた。なぜか、ぼくの方を見て。

「まあ、贅沢は言わないけども、味薄い気がしない？ サクさんが身体焼いちゃうから、食べられなかつたし、物足りないよお」「いや、あれだけ美味しそうに食べてたじやない」

と、いうか、ぼくに振られても困る。今忙しいし。味なんか知らないし。

「確かにい、味はそのものよかつたんだけど」「ならないじゃん」「でもお、薄いし」「なら、調味料足せよ」「感触とかがあ……」「そこは詳しくは聞きたくないから」

むへ、と納得いかなそうなハミ。

本当にぼくはそんなグロ談義いらないし、興味ない。

ようやく、うち終わった報告メールを所長に出した。というか、

「いつこいつのは本来、先輩の仕事じゃないだろ？」「ぼく達の会話を聞いてか、赤霧先輩が言つた。

「ま、にしてもハミのあれは何度見てもすげな。ホントに」

あれは、もちろん食事のことだ。

ハミはぼくに向かつて腕を組み、そこまでない胸を張つた。

「生き物の食事風景と書ひのと、元々壯絶な（ゆうじやく）んですよ

お

「なんで、そんな自慢氣なのー？」

……別に褒めてないぞ。

「つか、生きたまま（？）食われたんだよな、今の

「えへ、まあ、本人達曰く、決して死ないんそうなんで、食べられてる間も、意識はあつたんぢやないですか？　とりあえず、完全消化されるまでは意識はあるんぢやないですかねえ」

「……マジでひどい死に方だな、俺はそんな死に方だけはしたくな

い

ぼくは赤霧先輩の言葉に頷く。

「……確かにやつですね」

「ればかりは同意せざるを得ない。

あると、ハミはなにせり、とボソッと呟いた。

「違いますよ、死んだじやなくて生き続けるんですよ」

……ハミの血肉として。

そつかー、生き続けるんだ。なるほどなあ。

じゃあ、言い変えよつ。

そんな生き方したくない。

そこで、携帯の着メロが鳴り、所長から返信に気付いた。元からで入っていたオルゴール調のメロディが鳴り響く。曲名は……なんだつけ？

……そり、確か、カノン、だ。

「うわ、地味だね。なにか着歌にすれば？」

ハミに間延びしない声で、つまり素で突っ込まれた。しかも余計なお世話だ。

返信の内容は短文でそつけない。ぼくはそれを読み上げる。

「了解、結界解除。帰宅可」

「あ、なに？ 帰つていいんだ」

先輩がコートを羽織り直しつつ、言った。

「あー、じゃあー、すぐに帰つて寝たいからあ、……まつすぐハミの家に送つてくれる？」

「最初からそのつもりだよ

時間は11時半、さすがに女の子を放り出しておける時間じゃない。

いつもなら、赤霧先輩と一緒に置いて帰らつと黙つた（思つだけだ、本当に帰るなんて命知らずなことはしない）

「なあ、遠野」

先輩が真剣な顔をしてぼくに言った。

ああ、きっとまたアホなこと言いく出すんだなあ。とぼくは思った。

「なんか失礼なこと思つてるよな？ お前？」

「そんなことはいいからなんですか、先輩」

しぶしぶ向き直る先輩。

余程、アホな大事な用らしい。

先輩は言った。

「バイク乗せて
駄目です」

思つたよりたいしたことじやなくて、拍子抜けした。これくらい予想の範囲内だ。いや、これくらいなら逆に範囲外か？

「そあ、駄目なんですか、」これはハミの指定席ですか

「……別に指定じやないよ」

「どうか、ハミは黙つてて欲しい。会話がややこしくなる。赤霧先輩は舌打ちした。

「仕方ねえな。じゃ、バイク貸して」

「なあさら嫌ですよ。それだと、ぼくどうせひつて帰るんですか」

「歩けばいいんじやね？」

「アンタが歩け！」

ついつい取り乱してしまつた。

「この人は本気で当たり前のようになつてゐることを言つてゐるからやだ。

「……と言つたか、走つて帰ればいいじゃないですか。走つてきたんだし」

「馬鹿か！ しぐじつたら死ぬんだぞ、金ももらえねえのに出来るか！」

「……じゃあ、魔術使わないで普通に走ればどうですか？」

「お前、ここから徒歩つてどんだけかかると思つてんだよ。うつかり帰るままでに日の出が見えるわ！」

「どう考へてもそこまで時間がかかるないよ、……たぶん。

「じゃあ、もうわかつたよーなら、……バイクちょうどいい」

「悪化してますよ、それ」

ぼくは極めて冷静に突つ込んだ。

「なら、最初は歩いて、途中からタクシー乗ればいいじゃないですか。結界も消えて車も通り始めるだらうし。それに元はと言えば先輩のせいですから、きつちり責任とつて帰つて下さい」

赤霧先輩は不服そうな目でコッチを見る。どうあっても、バイクに乗つて帰りたいらしい。

ぼくはため息をついた。

「じゃあ、先輩。聞きますけど、バイクの免許あるんですか？」

「は？ お前、なに言つてんの？ 知らないの？」

「え？」

ぼくは考え込む。

そんな堂々と言われても、先輩がバイクの免許を持っている、と話した記憶はない。

「ああ、知らねえんだ」

「……免許、持つてるんですか」

「は？ 違げえよ。免許、持つてなくてもバイクは走れんだよ？」

ああ、なるほど。

ぼくはヘルメットを被り始めた。

「いや、ちょっと待てって。俺の話を聞けって」

「歩いて帰つてください」

「な、あれだろ。お前、俺の腕前知らねえんだろ？」

「……腕前ですか」

「お前そんなに運転上手くないじゃん、二人乗りなんだから危ないぞ？ 運動神経いい俺の方が安全だつて

「余計なお世話です」

ぼくが断固折れようとしないのを感じたのか、今度はハミを目標に説得する赤霧先輩。

「なあ、ハミ。俺の運転の方がいいだろ？ 遠野じゃ不安じゃね？」「ん~、でもお、サクさん。運転荒そうだよ？ 確かにトオくんも、たまにけつこうわりと頻繁に危なっかしいところあるけど」

ハミ、文句言つなら下りて欲しい。と言つかいつそ遠まわしに言わないで、はつきりと下手だと言え。

「わかつてねえな。俺の運転が荒い？ 今まで一度も事故を起こし

たことがないのが自慢なんだぜ」

「へえ～、じゃあ～、基本、安全運転なんですねえ」

「当たり前だ」

いばる赤霧先輩。

それに感心しているハミを無視して、ぼくは先輩に聞いた。

「……ちなみに、バイクに乗り始めてどれくらいですか？」

「は？ お前ばっかじゃね？ 免許ない奴は運転しちゃいけねえだ

る？」

「……のたれ死ね！」

ぼくはハミを乗せてバイクを走らせた。

日常の裏地（後書き）

意見・感想・誤字・質問などがあればお願ひします。
一応言いますが、あくまで主人公は遠野くんですよ?
ちなみに銀の弾丸なんてない、つてのは一応自分で考えたんですが、
検索してみるとコンピュータ関連の用語で存在するようですね。意
味合いとしては、最高最善の解決手段なんてありえない、つてこと
らしひです。

いつも始まりは日常から（前書き）

戦闘シーンはあまりあつません、基本的に会話シーンばかりです。なぜかつていうと、主人公は戦わないのです。

いつも始まりは日常から

朝のいつもの風景。

駅に向かい、田を刺す朝の光に苛立ちを覚えながら。
歩く。

そこにあるのは日常。

その日常の中で、ゆっくりと腐るのを待つよつよつ。
それでいて、足早に、生き急ぐよつよつとして過ぎていく人々。
その中の一部となつて、時間とともに進む。
ダイアルを見れば、乗るはずの電車はとうに過ぎ去り。
遅刻だな、とわざわざ確認した。

いつもどおりの朝だった。

そう、その日はいつものように始まった。

設置されているベンチに腰掛け、なにを見るでもなくただ前方へ
と視線が向く。

その視線は線路を挟んだ向かい側のホームを通り、特になにに
意識が向くわけでもない。

ただ、前を見ているだけ。

そのまま眺めていると。

気を抜いたわけないのに、ため息が出た。

疲れているということだろうか。

時間を待つだけで、疲れるのか。

人の中を過ごすだけで、疲れるのか。

別にどちらでもいい話だ。

あまりになにもないと、自然に視線はなにかに注目しそうとする。なにもなくとも、それが日常の景色でしかなくとも、何か注視できるものを無意識のうちに探そうとする。

田に留まつたのは、偶然向かいのホームにいた男。年は自分と同じくらいだろう、どこかの学校、おそらくは高校の制服を着ている。

特に、制服というものに思い入れはなかつたので、そのまま田線を外した。

……この時間なら、あそこにはヤツももしかしたら遅刻なかもしれない。

それも、どうでもいい話だ。

『まもなく電車が入つてきます、足下の黄色い線より……』

そう女性のアナウンスが聞こえた。

自分の乗る方面の電車ではないので、興味はなかつた。

……なかつた。

なかつたはずだったのだが、向かい側の男がまたなんとなく気になつてしまつた。

別になにがと言つわけでもない。

なんとなくだつた。

どこからどう見ても、日常の風景の一部。

それが気になつた。

いや、見てみれば、何が気になるとこりのでもない。

どこにでもいるような学生だ。

そこに妙な部分があるとすれば、男の顔に浮かんでいるのは笑顔

以外のなにものでもないところ」とぐらべりこだらへ。

朝からこりこりこと、と言つ形容詞のつゝよつた表情をしてこるなんて珍しい、ところだけだ。

それだけだ。

ホームに電車が入つてくる。

男はこつちを見て。

確かにこつちを見て。

何か口を動かした。

……聞き取れない。

瞬間。

……。

形容しがたい音。ないかが潰れるのとも違ひ、殴られるのとも違う、現実の光景事態を形容するしかないよつな音。

そのまま、電車が田の前を流れる。

ブレーキの音が響く。

それに悲鳴が追従する。

それはちょっととしたオーケストラの前奏のようだつた。これからなにか、派手で壮大な曲が演奏されるかのよつな、そんな予感をさせるよつな。

そんなことを感じながら、ふと、頬を拳でこすると、真つ赤な何かが付着している。

それを見て、俺の口からなにかがこみあげる。

口に手を当てるも、それはもはや自分自身に押されきれるものではなく。

そして……。

.....。

あぐびが出た。

ため息混じりの、あぐびだった。

*

ぼく達の世界はひゞくちぢゅうちぢゅうしているらしく、肌や人種の問題よりも隔絶した生き物同士の関係つていうのがあるらしい。ぼくはどちらかと言えば現実主義者な人間で、神様も悪魔も天使も鬼も妖怪も幽霊も宇宙人も……その辺の存在は一切信じていなかつた。いや、今でもそんなに信じていない。

強いて言えば、UFOは本来の意味として、『未確認の飛行物体』つてことなんだから、宇宙人の乗り物じやない意味でなら、そりやありえるだろうな、と思うぐらいだ。

それも日常的にたくさん『確認』できるだろう。未確認の飛行物体なんて、ぼくらにとつてはたくさんある。ただ確認してみたら実は人工衛星だつた、とか言うだけで。

でも、考えてほしい。そんなものを信じるとか、信じないとか言うのはおかしくないだろうか？

例えば、もし誰かから「科学の存在を信じる？」とか「猫の存在を信じる？」などと質問されたら、違和感を覚えるはず。

実際にあるものに、信じるも信じないもない。

仮にないものなら……やっぱり信じるも信じないもない。

現実問題として実際にあるものはあるし、いる。

科学や猫、人間だつてこの世に存在する。信じるとか信じないとかの問題じやないのだ。

まあ、人間や猫は存在を認められても、信じるには値しない

存在と言わればそうかもしないけど。

だから、ぼくがこんなことをしているのは、正直、自分でも信じられないことだ。

例にならうなら、ぼくは「現実を信じるか？」って感じだ。

もちろん、その答えはNOである。

まあ、それでも間違いなく、こんなバイトをぼくはしている。それは現実だ。

さて、肝心な話そんなぼくのバイトがどんなバイトなのか、それは言葉にするのは難しい。

それでも、ない知恵を絞ってわかりやすく言えば、そう、その隔絶した生き物同士の関係の……いざこざや問題を解決・処理すること。

わかりにくければ、そう、あれと同じだ。

スズメバチの駆除。人里に下りてきた猿を山に返す。人を噛んだ犬を保健所に送る。熊を射殺する。人の社会に、人間に害を為したもの、人間の都合のいいように処理する。

実際には、彼らの方に保護団体みたいなものとかがあって、その権利がどうとか、命がどうとか……時には権力と言う力関係が関わつて複雑な様相を見せているけど、それはぼくには関係ない。

ただバイトそのものは今言ったように剣呑なものであるけど、ぼく個人の業務内容は、基本的にはただの雑用にしか過ぎない。

バイトの事務所でゴミ捨てたり、掃除したりと地味なものだ。他には、死体の処理とかを業者に連絡したり、ハミを現場にバイクで送つたり、現場の報告係とか……その他諸々、地味なものだ。その他諸々の方が頻度が多くて、説明に困るほど雑多ではあるけど、とにかく地味なのだ。

時間帯は基本的には夕方から。ただし、これは学校へ行っているからという都合上のもので、休日なんかは朝から働くこともある。時間だけなら、そこまで長くないし（昨日はいつもよりずっと長くてだいたい8時間の労働だったけど）別に毎日バイトをしているわけじゃない。まあ、その密度は半端じゃないけど。

外で行う仕事は、基本的に今回のよつよ狩りよりも、その獲物を調査したり、探し出して追い立てる作業が多い。といえば聞こえがいいけど、ぼくがするのはバイクの運転と聞き込みのようなものだ。あと、そうだな、地図とにらめっこしたりする。

戦闘以外の支援、情報から雑処理その他すべて、ぼくが出来る限りすることになっている。

忙しい時には忙しいが、暇な時はとことん暇なのがぼくのバイトだ。給料は狩り1回につき、1万5千円～2万円ぐらい。事務所の雑用だと、時間給で最低賃金になる。

……もっともこれは、ぼくの場合だけで、実際に戦う先輩とハミはもつと金額が上だね。

個人的な観点で悪いけど、同じ年の同級生、しかも女の子よりも低金額（この点には実は文句はない、年齢とか性別とかは気にならない）その低い収入も月によつて幅が広く、全然安定したバイト先とは言えない。

それでもあえて金額を平均するなら、コンビニのアルバイトをみつちりやつた時の金額を倍にしたくらいになるだろうか。

ただそれも、きちんと仕事が入ればだ。実際、いつ仕事があるかわからないので、とりあえず毎日事務所には行かなくてはならなかつたりする。連絡だけして行かないでもいいけど、行動が遅いと急な仕事に出れない時があるから、お金と仕事が欲しいなら、顔だけは出しておかないといけない。

……あとなんだろ？

あ、その上、たまに怪我をする。もしかしたら、ちょっと死んじゅうこともあるかもしれないという可能性もないわけではない。

……冷静に考えたら厄介な職場だ。

それでも、特にバイトに不満があるわけでもないのだ。

ここまで、言っておいてまたなんだけど、ね？

どこの不満があるかはそのうちおいおいわかるだろうから、割愛しておぐ。

バイトにおけるそれ以外の問題と言えば、うちの学校は表向きバイトは禁止なので、ちょっと骨折とかなんとかなつたりしたら、まづかつたりする。

そりや、いくらでもいい訳はきくのかかもしれないんだけど、そんな頻繁に怪我なんてことになつたら、言い訳することにつらさを感じる。

実際のところバイトぐらい、先生方も普通は見てみぬフリしてくれるけど。

……さすがにこんなヤクザな商売、学生がやつてたら問題だと思う。

常識を疑われる内容もあるしね。

よつするにその程度の理由と、常識的判断というので、ぼくは人にこのバイトを言えないはず、それがぼくにとってバイトの問題と言える。

まあ、言つ相手なんてほとんどいないんだけども。

その数少ない相手、これは言つ必要のない相手でもあるのだが、よくバイトで組むことになるハリはぼくにとって、友人と呼ぶのにも近しい相手だった。

休み時間や授業中にしゃべるくらい。

授業中に一緒にいるとしゃべる、と言つのは、なかなかの親しさを判断する一つの基準にある。とぼくはそう考えている。これは日常の中で周囲の様子が目に入る中で、得た結論の一つだ。

本来、私語が禁じられている時間なのにも関わらず、しゃべりたくなる相手、というのは希少なものだと思つ。

ここで一つ、私語が禁じられていると本人が感じているか、知つているかは重要な点だ、もしもそういうことを知らない、感じていないのなら、死んだ方がいい。社会的に。

それが、誰か教えてあげるべきだろう。友達が。それが出来ないのなら、友達ではない。

ただ、ここまで言つておいてなんだが、あえてこのぼくの人間関係における友達の判断基準が周囲を観察して得た結論ではないことは言つておきたい。

なにかを観察するぼくはそこまで暇でも悪趣味でもない、ぼくはそれが悪いことだとは言わないが、悪食と同じであまりいい印象を与えないものだと判断している。

そう、悪食と同じだ。

悪食……と話に出ればハリのことを紹介しなければならない。

ハリといえば、悪食と暴食。

悪食と暴食、と言えばハリ。

……それぐらいの存在なのだ。

まあ、そこまで言つておきながらハリは女の子だ。見た目には悪食も暴食も彼女には相応しくないよう思つだらう。むしろ美麗で可憐、が相応しいくらいだ。ごめん、それはいい過ぎだ。

よくいるくらいには美少女だ、に留めておけ。テレビでよく見る程度の美少女だと。

そんなハミはぼくの同僚だ。それも、初めてぼくが会った非日常。現実に存在する非現実だ。彼女を夢で見たらそれは悪夢だと断定できるほどの。

まあ、単純にハミが非常識なまでに常識に欠けた人間性の持ち主だから、って言うのもあるけど。

ハミを紹介するとしたら、ぼくは一言こうこうだらう。

ハミはそれはもう、悪食だ。と。

それがなんであろうが食べてしまうほどだ。

いや、むしろ悪食と評する以上は、なんでも食べる」と自体がどうとどうよりは、美味しそうだと判断する基準が人並み外れていふことが、逸脱していることが悪食と判断される所以なのだろう。まあ、あれでも本人曰く、なんでも美味しい訳ではなく、きちんと好みがあるそうなのだが。

ああ、確かにハミは好き嫌いは多い。

……と言つたが、あんだけ食べておいて好き嫌いを言えば作った人にも、食べられる食材にも怒られると思うんだけど、それは別にいい。

好き嫌いは食べるものを選別してる、と見れば食べたものがある意味で評価してるってことだらうし、物事に評価を下すことは無関心よりも好ましく、生産的だ。また、そもそも今回は彼女の話ではないからそこにこだわるべきでもない。

今回の話は……誰、と言つべきか、なに、と言つべきか。とにかく別のモノの話、なのだ。
なんだろう、あえて言えば。

なんの話だつたのか、誰の話だつたのか。
むしろ、本当はいつたいなにをしたいのか、と聞ひよつた。
……やつ言つたモノ、いやコトのお話だ。

日常とを離中合わせに別つモノ

1.

「こんな生き方でいいのかなあ」

ぼくはやつ啖いた。

よく考えたら、いや、考えなくとも病的なセリフ出た。
でも、自分でもそんなセリフだとは自覚していたので、それを気
を遣つた上での小声だつたのだが、レタスハムサンドを食べていた
ハミは耳ざとく反応してしまつた。

「もお、トオくんは気にしこだなあ。もつと、大らかに生きた方が
いいよう？」

「……なんだよ、その気にしつて」

ちなみに、ぼくは学校で今は昼休み、ではなく、普通に午前の授
業中である。

つまり、ぼく達は不真面目なことに授業中におしゃべりなんかし
ているのであつた。

ハミがなんでサンドイッチ食つてるかって？

ぼくが知るか。たぶん、お腹空いてるからじゃない？

先生は怒らないのか？ もちろん、見て見ぬフリだよ？

つちは校則はゆるくないけど、先生と生徒 자체がゆるかつたので
ある。ゆるいと言つたくせに、他にこんなふざけたことをしている

奴は誰一人としていないことは突つ込んでいいけない。

……あー、単純にハミがすることに、関わりたがる人物が存在しない。と、まあ、そういう説があることも否定できないんだけど。

ぼくは少し周りに気を遣つて、小声で話す。

「実際で、不健康な生活には違いないとは思つんだよ。バイトもヤクザ的だしさ」

将来性はないし、明日さえ訪れるかわからなし。まあ、それで一生生きていくつもりはないけど。

「ん~、もう言われてもなあ、ハミ、食事ついでにお金貰つてるだけだしぃ」

「……確かに食事の予定がない仕事はしないね。ハミは「^ま」
「^まはん食べなかつたら死んじゃうでしょ？ 危険があつてもしないとじやないかな~」

「そう考えたら生きるために働いてることになるね」

「フツ~に^まはん食べててるだけじゃ、ハミ、やつてけないしさあ

「ああ、お前の場合は普通じゃないモノも食べないと、だしな。そつか、ハミはある意味、きちんと目的とか必要性があつて仕事してるんだな」

「そうだねえ、ハミ、^まはんのためにがんばってるんだよ~、わいつまお」

そう言つて、ハミは新しくカツサンドの袋を開け始めた。

ハミの頭の中には食べ物のことしかないのだろうか？

その姿には、せめて隠して食べようかな、とか、今授業中なんだよなあ、とか言つた気持ちは少なくともなさそうだ。もしかしたら、授業というものがなにかわかつていないのでかもしれない。

「しても、……よく食べるな。

「あのね」

「なに?」

「さつきから思つてたんだけど」

「だから、なに?」

「そんな、今、食べててさ。お腹膨れない?」

「え?」

ハミの目線が左右に動く。

「あ、ダイエットのこと? いいんだよ別に、ハミ、結構動いてるしい。それに、人間の行動の中で最もエネルギーを消費するのは、食事と消化なんだよ」

「うん、そんなことは聞いてないよね?」

「じゃあ、なに?」

「例えば、今日、夜、食事あるかもしれないだろ?」

「そうだねえ」

「食べられなくなったりするかもしれないでしょ? 大丈夫なの?」

「……あのねえ、女の子には別腹と言つ、もつ一つの消化器官があるんだよお? これくらい平氣だつてばあ

真面目な顔で語られた。

ぼくはそんな器官があるとは、不勉強のため知らなかつたので。

「へえ、そつか

と、頷くだけにしておいた。

……ああ、なんてアホな会話なんだろ?!

正直、こつものことなのでどうでもここ、と嘆息せりふもいのかかもしれない。だけど、なかなかどうして、「まつ、いいか」と割り切れないのが、ぼくという人間なのだ。

これは、ぼくの根が眞面目といふことなのだらうか？

「あへ、ここのカツ、筋があるなあ……もう買わなにことにしてよ。よし、次は……フルーツサンドだあ」

……いや、あまりにも、ハミが皿田ママにやつすぎてるから、ぼくの中にある、なけなしの常識といつものが拒絶反応をおこしていゐんだらう。

決して、ぼくが眞面目なわけではない、と思ひ。

「今日もトオくんはあ、バイト行くのあ？」

「行くけど？」

「ふへん、まあ、それはあちよつびここかもねえ」

「なにがさ？」

「いやあ、べつにこ。買い出しこともあ、あるじこ……わあ？」

「まあ、そろそろ事務所の冷蔵庫も空だらうしな」

事務所の食料管理はぼくに一任されてゐる。寝泊まりする人も少

なくないので、結構こまめに見ておかないといけない

……たまに、冷蔵庫の中に誰が持ち込んだのかわからぬ、正体不明のなにかとか、あきらかに食べれる期間を超過した物体Xとかがあるからね。

「うそうそ、やつぱりねえ、じめに買つておこしてくれないとわあ困るよお」

「別にぼくはお前のために買つてゐわけじやないけどな」

「シンデレラ？」

「違ひ」

確かに食料の減る大半の要因はお前が食いつからで、これから新しく買つ分もお前がほとんど空にするのだね。だが、そもそも事務所の食料はお前のものではない。……そろそろ真面目にノートをとろつかと黒板が目に入るたびに思うが、無駄とこつ結論に至る。たぶん、無意味だね。ぼくの場合。

「ハミはじつするんだ? バイト行くのか
「行かないよお、だつてのはんないもん」
「ああ、冷蔵庫は空だけどな」
「それだけじゃなくて、お食事自体がないからあ

「」のハミのお食事は特別な食事、つまりは化け物を食いつす定をしていく。

「確かに今のところは連絡ないけど、やつとは限らないんじゃない
か」
「そりだよお、やつに決まつてるもん」
「くえ」

「」のハミの勘はだいたい当たる。

おそらく狩猟動物の勘と言つべきか、その異様に高い命中率の理由はそんなところだね。餌がないところには、赴く理由はない、とこつことだ。野生の勘でも、女の勘でもないといふことは留意していただきたい。

「もしもトオくんが来てつて言つなら、ハミ、行つてもいいんだ
けどお」

「別にいいよ、来なくとも」

「まあ、トオくんに付き合つたら、帰り遅くなつちやうもんねえ」

「人聞きの悪いこと言つな」

「夜遅くなるもんねえ」

「おい」

「そのままあ、『山中に置いていくぞ』なんて言つされたらあ……従
うしかないもんねえ」

「……」

無視しよう、無視。

そう言つて脅したことがないわけではないが、それはハミがふざ
けたからであつて、他意はない。人から後ろ指さされるとまし
てないのだ。

と言つた遅くなるのは、お前がはしゃぎまわるからだろ？が。

などとアホな会話で、午前中の授業は終わった。

授業は終わつたが、受けてはいない。

こんなんで大丈夫なんだろうか、ぼくの人生は。

*

お皿のチャイムが鳴ると、その途端に。

「んや、行つてくるよお」

ハミはそつなんとも発音しがたい挨拶をして、はりきつて購買へ
と走つていつた。

……まだ食べるんかい、とはなるべく突つ込まないでおいつ。ま

た、知性の欠片のない会話になるから。

ぼくは自分で弁当を持参しているので、それを机の上に広げる。
……と言つても、中身はチャーハンだけなんだけど。俗に黄金チ
ヤーハンっていうらしい、でも、ようするに具はタマゴだけってこ
とだつたり。

出来るなら肉ぐらい入れたいなあ、最近野菜は高いし。
んー、『じ飯があるだけいいのかなあ、同じスーパーでも違うレジ
を何度も回り繰り返ければ、卵だけはなんとかなるし。なんとかして卵、
冷凍できないかな。いや、いつそ米を食うのをやめるか？ 意外と
高くつくしな。

などと、自分の昼食について未来のない検討していると。

「……遠野くん」

と、突然、誰かが話しかけてきた。

それに反応して、お弁当（と呼べるかは疑問）から顔をあげると
女の子が立つていた……その黒髪は肩できつちり切り揃えてられて
おり、また顔立ちは整つていて一般に可愛いと言われる容貌だろう、
ただその目はややきつと鋭い。

おそらくは、「一応、可愛いんだけどねえ」と言わせてあまり男
子受けしないタイプだろう。と、そんな余計なことを考えた。そう
考へている間も、その目はやはり鋭く、ぼくを見つめ続ける。だが、
その目は鋭くとも冷たくはなかつた。

それでもそう言つた目で見られると、特に何もしていなければ
に、なにか悪いことでもしたかと不安になる。

ぼくは小心者だった。

とにかく思い出そうとする。この娘は同じ中学でもあつた……確

か、そう。

「大神さん……だよね？ なにかな？」

クラスメートの大神アスカ……だつた。

彼女とはあまり話した記憶がない。ふとしたときに会話ぐらいはするけど、それだけだ。

ぼくはあまり話したことのない人に話しかけられると、なんといふか、どう対応をしたらいいのかわからなくて困ってしまう。

ぼくが彼女に対して知っているのは、家がお金持ちだとか、ぼくよりもよっぽど真面目だとか、そういうことくらいだ。

大神さんは、ふんつ、という感じで鼻を鳴らす。

「なにかな、じゃないと思うけど、授業中すゞしつるをこくて、勉強に集中できなくて困ってるんだけど」

「……え、うん。……ごめん」

言われたのは思ひがけず、正当なクレームだつた。

「だいたいなにをしに学校に来てるの？ 毎日毎日おしゃべりして、授業はおしゃべりの時間じゃないんだけど」

「……うん、そうだね」

「別に真面目に授業を受ける、って言つてるわけじゃない。それはあなたの勝手だしね。寝てもなにしてもいいから、授業に出てる以上は、邪魔にならないようにだけしてくれる？」

「ああ、……うん、これから気をつけるよつとするよ」

ぼくはそう返す。

……確かに迷惑だよな。

大神さんは少々ばつが悪そうな態度になつた。

「……まあ、わかつてくれれば別にいいんだけど」

どうしたんだろう？

……ぼくがあまりにもすんなり話を聞き入れたから、拍子抜けした。といった所だろうか？

んー、普通はやつぱり反発するのかなあ。
でも、大神さんが正しい、と思つたし。

なぜか、居心地が悪そうに大神さんはまだ、ぼくの前に居る。未だにそこから立ち去ろうとはしない。
ぼくは大神さんに声をかけた。

「大神さん」

「ん？」

「その、わざわざ、ありがとね？」

一瞬、大神さんは驚いたような顔をして、それから、ますます顔をしかめた。

うーん、言わぬ方がよかつたろうか？
でも、こういう時、なんて言つたらいいのかわからないんだよな。

「あの」

大神さんが、言いづらそうに一言。
彼女はわりと、はつきり言つイメージなんだが。

「どうかした？」

「もう一つだけ、いい？」

「うやうやしく、まだなにかあるらしく。

どちらかと言えば、これが本題なのだらうか？

「なにかな」

「ちょっと場所変えたいんだけど」

「……ここで言えばいいんじゃなし？」

「いいから」

強引に廊下の奥に連れて行かれる。

強引に、と言つても手を引っ張られた訳ではない。彼女が勝手に歩いて行くので、仕方なく、と言つた空気に飲まれついて行ってしまったのだ。

強引な雰囲気というか、なんというか。

ぼくが押しに弱いだけ、とも言つ。

「こきなつこんな話をして、悪いとは思つんだけど」

「うん、……なにかな」

「正直、自分でもこれはおせつかいだと思つから、聞きたくなれば聞かなくていいから。でも、話しだけさせて」

「……うん」

そう、ぼくは返事をした。

だけど大神さんにはどうやら、まだなにかためらいがあるらしく。

そこから、一息、一息おいて、さらに数秒時間をかけて、そこから語り始めて話し始めた。

「あの、あなたが誰と付き合ひながら、それは勝手だと思つたが、あまり軋轢とは関わらない方がいいと思つ

「きしの？」

「……軋呑ハミの」と

「ああ、ハミね」

名前で呼ばないものだから、すっかりフルネームを忘れてたよ。

「軋呑には色々とよくない噂があるのは知ってる?」

「……んー」

ハミが他の人に距離をとられてるのは知ってるけど、そういう理由があるのか?

てっきり、大喰らいとか、しゃべり方とか、そういう奇行が目立つてのことかと思っていたけど。……彼女を遠巻きに見ながら、小声で囁きあう生徒はショッちゅついたし。

うん、ぼくも、出来ることならそうしたかったね。

それはともかくとして、まあ、実際のところ、別に噂を聞いたことはない。

「知らないな」

「……そう。遠野くん、そういうの嫌いそうだしね」

「いや、そんな……嫌いってことはないと思うよ」

「そう? 意外ね」

別に他人の噂ぐらうしてもいいと、ぼくは思っている。そんなぼくがその噂を知らないことに、もし理由があるとすれば。

「あの、ほら。だいたいぼくはさ……」

「なに?」

「あまり人と会話らしい会話しないから」

「…………」

「考えてみれば、噂をする友達もいないしね」

「…………」

ハミが居なかつたら、ぼくは石像みたいなものだ。
学校にいる間丸一日、食事以外に口を開くことはないかもしけない。

つて言つか、中学の頃、実際に基本そうだつたし。
ん……あれ、なぜか大神さんが黙つちゃつたぞ？ ていうか、固
まつてない？

……おーい。
動かない。

「大神さん……その、どうかした？」

「え？」

ようやく大神さんが動き出す。

「…………あの、…………なんて言つが、…………軋呑が援助交際してるとか、
あまりよくない人たちと関わつてるとか、…………そういう噂があるに
はある…………のね？」

なんか、今、話の内容とは別の意味で氣を遣われた氣がする。
ぼくなんかまずいこと言つたか？

「夜に一人で歩いてるところを見かけられることも少なくないらし
いし、柄の悪い男の人のバイクと一緒に乗つてたとかっていう話も
あるし」

ああ、それ、たぶん、バイト。つて言つか、後半部分のバイクの
くだけりは、半分ぼくだな。それが柄の悪い人になつてるのは……赤
霧先輩のせいだな、たぶん。

「それひ、あくまで噂だよね？」

「うん。証拠がある訳じやないし、適当に誰かが言つただけのテーマ
セセもあると思つ。でも、…… セツキの会話とか」

「セツキの会話？」

「あの、セツキそれっぽいことってたでしょ？…… 反付いて
ると思つナビ、クラス中それで噂してたし」

「それっぽいこと……」

そんなこと、まるで気付かなかつた。といづか、どんな会話した
つけ？ セツキ。

ん~、セツキの会話の内容。

(セツキ言われてもなあ、ハミ、食事つこでこお金貰つてるだけだし
い)

あ？

(「はん食べなかつたら死んじやうでしょ？ 危険があつてもする
もんじやないかなあ~）

おお。

確かに、援助交際の内容とかに聞こえなくもない。
さらに言えば、授業中ぼくは声を小さくしてゐるから周りには聞こ
えづらいだるナビ、ハミはいつも普段の声でしゃべつてゐるから、
ハミの声だけはきちんとみんなに聞こえてるだり。

だとしたら、こんなふうに会話が毎日聞こえてこるわけだ。

そりや、噂もするよなあ……。

なにも知らない人から見たら、ハミはそういうことしかねない人

に見えるだらう。

ぼく自身は、援助交際程度じゃハミには普通すぎて、逆にありえないなんて思つてしまつけど。

つていうか、あんなのと交際したら、比喩じゃなくて逆にバリバリと食べられると思つてしまつ。それも頭から生きたまま。

「あ、あれは……」

「実際がどうかは重要ぢやない。問題は彼女がそう思われていて、遠野くん、あなたが親しげってこと」

「ぼぐが？」

「あなたは、他のクラスメイトと交流が少ないのでしょう？」

「まあ、確かにね」

親しいぢうか、ほほ旨無だ。

「学校つて、そういう人が田立つ人と一緒にいると、なおさら噂の対象になるものだから。会話の内容も内容だし、あなたがそういうことと直接関わりあるとも思われている。……みたい」

そつ、そこまで言つて、彼女は言葉を濁した。

……なるほど。

確かに、必然的によくは思われないよなあ。

とりあえず、話はわかつたけど……。

「大神さん……でもさへ。」

「でも？」

「うん、大神さんの話はわかつた。……でも、ぢうじてそれをぼくに？」

「…………」

「その、ね。別にぼくがどう思われても、大神さんはなんともない

……よね

ぼくが大神さんだつたら、普通にほつつておく……と思う。自分には関係ないし、大神さんがこうしてぼくと話す行動 자체を、悪く思う人も少なくないかも知れない。

そういう可能性がわからない人には、ぼくには思えないけど。

「それは……」

「それは？」

一瞬、目を泳がせて、大神さんは言った。

「危ない、と思つたから」

危ない？
どういうことだらう。

「実は……前に失踪事件があつたのは知つてゐる？」

「……ああ

それは知つてゐるどころの話ぢやない。

この街で起きた大量失踪事件。

その人数は計30人を超える。失踪者に特に共通点はないと言わ
れている。

ただ、失踪者の衣類が現場に残されていた、という一点を除いて。

まあ、失踪と言うよりは、消失の方がまだ近いか。

なぜか、まともにニュースにこそほとんどならなかつたが、人間の関係つて言うものはどこかで必ず繋がつてゐるものだ。30人以上の人が消えれば、知り合いの誰かが面識しているぐらいは普通

にある。いくらまともに口常的に話し相手の、いや、まともな話し相手もいないぼくでも、知らないはずのない事件だった。
……しかし。

「でも、それがなんの関係があるの？」

「その時の事件の一つに、10人くらい人の服とかが、まとめて廃ビルに残されてたことがあつたでしょ？」「うう？」

「……ああ、あつたね」

「その時のビルでね、見たの」

「……なにを？」

「軋呑を」

もちろん報道される前に、ね。と大神さんは続けた。

ああ……それは、衝撃的だつたろう。

つまり、大神さんよれば、偶然、その廃ビルの前を通つた時に、ビルから外を見下ろすハミを目撃した。その時は不審に思ったもの、別にわざわざビルに入つてまで注意する気もなく、そのまま通り過ぎた。しかし、ニュースを知つた後から気付いたのだ。あの自分の目撃したビルで事件が起つたのだと。

そう、あの廃ビル集団喪失の件だけは、ある雑誌に取り上げられたのだ。ただし、眉唾と言う意味でまともじゃないタイプの雑誌な訳だけど。

ただそれでも、……驚くにも恐れるにも値する。

「それはビックリしたんだろうね」

「だからって彼女が事件に関係あると決まつたわけじゃない。でも、その頃彼女は」

「ああ、確かに……事件のあつた時期、ハミは登校してこなかつたね」

少なくとも、それは間違いない事実だ。

それはハミを警戒してもおかしくない。

考えてみれば、大神さんの性格なら、授業中いつの間にかハミにその場で直接注意してもおかしくないくらいだ。

いや、後から注意するにしても、小声で聞こえないよう話をしているぼくよりも、普通におしゃべりして食事までしかしてくるハミのほうがよっぽど一言言つてやりたい相手だらう。

でも、それよりも大神さんは、……ぼくが、そのことと関係しているのかどうか知りたかった、のだろうか。だからこそ、ハミの居ない時にぼくに声をかけた。

それなら、なんとなく辻褄が合つよつた気がする……かな。

「……まあ、なるほどね、だね」

「だから、なにがあつたかは知らないけど、遠野くんが軋呑と関わるようになったのは最近でしょう？ それなら、手遅れになる前に

……

「もしかしたら、たぶんもう手遅れかもね」

「え？」

大神さんはぼくの顔を凝視した。

ぼくはとりあえず笑つて、言つ。

「なんか心配してくれたみたいで、……えと、その、どうもありが
と？……でも、どうでもいいんだ。そういうのは

「どうでもいい？」

「そう。ハミはさ、もうぼくが知つてることで、すべてなんだよ。
えーと、なんて言つたらいいいかな。難しいな、説明するのは……ま
あ、そういうことを別にしてもね。これからどんなことが発覚して
も、もうそんなの関係ないんだよ

「」

「とにかく、もう二回りとなんだ」

卷之三

גַּם־

大神さんはため息をついた。

「なら、わたしに言つ」とはないから。悪かつたわね、余計なこと

۱۱۱

「いや、心配して言ってくれたんでしょう？」

大神さんは首を左右に振つてから歩いていった。

量後は、そこのがなと小さく呟いたのが聞こえた

かのようないつの印象だけを残し、大神さんは去っていく。

ぼくはそれを見送つて、教室に戻りチャーハンを食べ始める。

そういえば、大神さんは教室でごはん、食べないんだな。

する事のだと想つたけれど。

まあ、いいか。他のクラスで食べるのかもしないし。
ぼくには関係ないからね。

「トオくん」

「どうか嬉しそうにハミが教室に入ってきた。

「だいぶ時間がかかったもんだね」

「まあねえ、……ちょっと混んでたからかなあ」

そう言つて、正面の机を動かして、ぼくの机とくつつける。

「だいぶ買つたね」

「うん。もしかしたらあ、放課後にも食べるかもしれないしね」

机の上にハミが並べていぐのは、一口ロネ、チヨローナツ、シユガードーナツ、クリームサンデ、プリンパン、……。

「甘い物だらけだね」

見てて、だいぶ気持ち悪くなつた。

「それはそうだよお、頭使つたらお腹すべし」

いや、きみ、授業中、おしゃべりしてただけだから。ノートすらとつてなかつたから。

「ところでえ、トオくん」

「パンならいらぬよ」

「そうじやなくてえ、ハミ、だいぶ時間がかかったと思つんだけどお

「まあ、そうだね」

「一分どこのじやないかもしれない。」

お休みは1時間あるわけだけど、おしゃべりでもなんでもしてたら、すぐに終ってしまう程度の長さだ。

「なんなら早く食べ始めた方がいいと思つよ。お休みの時間がもつたらないし」

「うん、食べるよ。トオくんも、早く食べた方がいいんじゃない? だつてえ、全然、チャーハン減つてないよ?」

それはもちろん、大神さんと話していたからだ。

「ああ、そうだね、ちょっと急いで食べようかな」

「せうだねえ、ちょっと早く食べた方がいいかも。いつもなら、食べ終わってる量なのに」

「……少しぼおつとしてたのがよくなかつたかな。ちょっと眠くてや」

「ああ、確かに、授業中眠そつたねえ。……でも、食べ遅れたのはその理由なの?」

……なるほど、やつきからそれが気になつてゐるわけか。

「見てたね?」

「へら、ヒハミは表情を崩す。

「……うん。まあねえ」

「さつさとやつ言つてくれたら話が早かつたのに」

「それはこつちのセリフでもあるよ?」

「やう言われてもちよつと言つらつて話題だったからね」

「どなあ?」

「言こづらこから、言わない」

「言こづらこ」とつてなに？」

「ハミの話でもあるよ、でも内容は言わない。……大神さんのことでもあるしね」

やうなるとぼくだけの問題じゃないから、とぼくはハミに言つた。
それを聞いて、ハミは口を開いたまま動きが数秒止まった。

「はつかり、言ひね？」

「まあ、ね」

むう、とハミがうなる。

「トホくんはそういうひとひるはここと思つんだが。むう少し、
じつハミに気を遣つと言ひかあ、そういうのはあ？」

「……気を遣う、ねえ」

氣を遣つた結果これなんだけど。

隠したり、嘘を吐くのは誠実じゃない。公正でもない。

……狡賢いことは出来るならぼくは極力したくない。

「ぼくは隠しじ」とは嫌いだけど、嘘も嫌いなんだ。『めんね？』

「うーん、でもさあ、嘘ついて追求されて、もつとお、隠してひねつて、こいつ、わつきからなんだ？ とか、なんでそんなことを知つてゐ？とか疑つたり困惑つたりしてくれてもいいと思つんだあ」

なんだ、それ。

なにが言いたいのかわからぬが、刑事ドラマの見過ぎか？

「……こよ、めんじゅせこ。そなつたら、なにかいじとあ

るの？」

「イラついて、追い込まれていて、疑心暗鬼に取り付かれたあげく、日常的に凶器を持って路上を歩いてくる。……そんなトオくん見ていく楽しみが生まれる？」

「いらっしゃよ！ そんな薄暗いサスペンス！」

最終的にホラーな結末を迎える自分が容易に想像できるよ。」のメンツなら。

疑心暗鬼になつて正常な判断が出来なくなり、自暴自棄で金属バットかなにかを持って暴れまわつた拳句、赤霧先輩に斬り殺されるか、ハミに喰い殺される自分がよ！

……もしくは病院の一室で「助けてくれえ！」と叫んで謎の死を遂げる自分の最期が容易に想像できます。

「んー、トオくんなら、いい感じで周囲と孤立してゐるからちよびにちよびにいいのかは聞かない。断固として聞かない。いいんだけどなあ」

なににちよびにいいのかは聞かない。断固として聞かない。

「トオくんの鳴く頃に？」

「なんだ、その縁起の悪そうなフレーズはー？」

「ぼくをどうしたいんだ、お前は？」

それはそれとして、置いといて、とハミは言葉を続ける。いや、置くなよ。捨てろよ、無くせよ

「……でもおさあ。なにを大神さんと話してたの？」

「内容はもう知ってるだろ？ 無駄なこと聞くなよ」

「うせ、聞き耳立ててたんだろ！」。

耳、とは限らないのがハミだけビ、や。

「最初から最後までじゃないもん」

「……最後を聞けば十分だよ」

ふつん、トイチゴオレを飲み始めるハミ。

「そんなに氣になるのか？」

「気になるよお？ そりやああ」

「氣にするなよ。今さらなにがあつたつて、変わらないから」

「それは……ん~……それとお、これとあ、べつだから?」

「そうですか。」

そう言われても、ぼくはしゃべる氣は最初からないので、なんと
言われても他人との会話の内容について聞かれて答える氣はない。
口が堅いつもりはないけど、軽いつもりもない。他の人と話した
内容は、基本的に雑談であつても、個人的なことに關しては話さな
いつもりだ。

今回の内容は、その点では当たるよつて思ひ。

「いいじやん、もう聞かれてるんだしね」

「……それとこれとは、別だから」

「ちょっとお、パクんないでよお」

むつと膨れるハミをみて、なんとなく言い直す。

「ハ~、間延びした感じで。

「……それとお、これとあ、べつだからあ
「ハミ、そんな言い方してないしー。」

いや、してるよね。

ふーん、だ。と、ハミはそっぽを向いた。

「べつにいいもーん。じゃあ、ハミの方もちゃんと言つてあげないからあ」

「……え？ なにがあつたつけ？」

「あれえ、聞いてなかつたのぉ？」

ハミは薄く形ばかりの笑みを浮かべる。

「ちょっと早く食べた方がいいかも、つてハミ、言つたよね？」

その時、窓に一瞬だけ影がさし。鈍い音がして……。

「え？」

しばらくして悲鳴が上がった。

窓から覗くと、血だまりの中に女の子が一人。足と腕がありえない方向に曲げて倒れていた。

なんとなくその女の子が。

大神アスカに見えた。

こつも始まつば日常かり（後書き）

こんな感じでゆつたりと話は進んでこせまゆ、じづか長くおせまゆ
いくだれい。
つて、読んでくれる方にいるんだろうか？

いつも行くのはバイト先

2 .

ぼくは事務所へと急ぐ。

バイト先である事務所は、わりと町から外れている場所にある。ぼくの暮らしている町 자체地方なので、その場所にあるのは住宅街と個人商店くらいだ。その中でも周囲の建物に紛れに紛れ込み、一見なんなのかその外見からは判断がつかないような地味な2階建て建物が事務所だ。

巫月個別調査事務所。

ハンター
狩人などまるで関係ないようなその名称の上に、看板などの自己主張は全くないその事務所は、何も知らない客が訪ねてくることはまずない。

ここは一階はまるまる車庫兼物置に使われており、事務所自体へは外に付いている階段から一階へ登らねば行くことができない。その階段と言うのが、今にも崩れ落ちそうなもので、これがより客を遠ざける原因になつてていると思う。

ぼくは鎧びた階段を、ギシギシ鳴らしながら駆け上がつた。
不意にその階段は揺れて、ぼくは足を止める。胸がドクンドクンとその鼓動を伝えてくる。

……ぼくは小心者なのだった。

そうして、なんとかぼくは扉の前まで来た。

……ふと、扉を目の前にし、なんとなく落ち着いてから、静かに

開けた方がよさそうだ。と判断。ゆつくりとノブに手をかける。

先月、鍵をドア」と変えたばかりの扉はすんなりと開いた。

「あ、おはよー」やこます、所長」

おはよーとも、時間は毎週まだ。

巫月所長はなにやら帳簿のよつなものをつけていたが、ぼくの挨拶に顔を上げた。

所長、と言つても、その見た目はかなり若い。20代、だろうか。ぼくよりも、すこしだけ、年上。少なくとも、ぼくに似つかう見える。

「ああ、遠野か。おはよー、今日はこつもよつはやこね」

巫月所長は持つていた帳簿を閉じる。

「……ん？ ハミはびつた？」

「……ああ、ハミは今日は食事にあつつけなさそうだから、やめておくぞうです」

「相変わらず、いい勘してる奴だ」

「じゃあ、今日は狩りはないんですか？」

「ああ、ない」

見てみると、赤霧先輩がソファーにquetteをかぶり寝ていいのよつ

だつた。

眠つてこらかどつかは、じからに顔が向いていないので知りようがない。

「一応、仕事はあるのだが」

「なんですか？」

なんとなく、その仕事がお金にならない気がした。もしくは、かなり面倒な仕事なんだろう。

赤霧先輩はお金が入るならなんでもするが、基本がめんどくさがりなので、それなりに労働に対し、収入が見込めないなら仕事はない。

この人が今寝てるつてことは、夜に狩りがあるか、もしくはそういうことだ。

赤霧先輩は仕事は嫌いだけど、狩りは楽しみでもあるから、狩りには必ず参加する。終わるたびに「こんな仕事はやめたい」と言つてはいるけどね。

「……いや、そういうわけじゃなくてね。ただ、今は動けないと言うだけで」

「動けない……ですか？」

「状況の把握に時間がかかる。そのためキミに動いてもらつてもいいんだけどね」

どうもぼく程度の頭じゃよくわからない事情があるらしい。

「なにか問題でもあるんですか？」

「すこし。問題といつて方には状況と視点によるだらうけど」

そう言つて、所長は新しく別の帳簿を取り出し、めくつ始めた。

「とりあえず、『コーヒー』でも淹れてもうえむ？」

「わかりました」

流し台は部屋についているので、そこににある『コーヒーメイカー』を

使って、いつものように淹れ始める。

お茶やコーヒーを入れるのは、ここではぼくの仕事で、いつもみんな（みんなと言うのはその時、たまたま事務所にいた人）の分のコーヒーを準備する。それは人によつては紅茶を用意することもあるし、緑茶、コーラの時もある。

その時々で、ぼくは用意するものを人に合わせて別々に準備する。のが、ここでの雑用の一つだ。

ちなみにハミは「コーヒーと炭酸が飲めないと」ということになつていいので、オレンジジュースを用意したりする。ただし、果汁100%のジュース以外のものでないとキレられるので注意しておかないといけない。

「あ、所長、豆切れでますね」

「なら仕方ない、紅茶にしてくれ。インスタントなんて飲めたものじゃないから」

「そうしてくれると助かる」

そうそう、買出しもまくの仕事だった。

所長は自分で日常品の買い物をしない。ネットオークションや通販なんかで買い物をすることもあるが、ネットで注文したものを直接、業者にここに運ばせることはまずないし、許可もしない。

ので、誰かが直接買出しに行かないものがなくなる。そうなるとたまに誰かが、空腹のあまりに暴れだすので日頃から気をつけないといけない。

もむりん、ハミのことだ。ハミのことだけじゃないのが残念だけ
ど。

「所長、やつにえれば昨日の非生命体。^{／＼}あれ以降、情報は掴めました？」

狩つても狩つても出てくれるやうで、昨日まぼくが駆り出されたけど、いつもは毎夜赤霧先輩だけで行つてゐるらしい。最近よくそのことで先輩がぼやくのでうるさい。

ちなみに、殺せない非生命体をどう始末しているかと云つと、先輩が狩つてなんとかして持つてきたのを、後からハミが食べて片付けている。

……事務所で。ぼくの目の前で、だ。

所長はため息をついた。

「出所は最初からわかつてゐるのだけど、ね

「そう、なんですか？」

「ああ、あんな悪趣味なものを作るのは……元はと言えば奴しかいないだろ？。いや、最終的には、とこづべきか

「悪趣味ですか？」

「ああ、あんな人間じみた非生命体はね」^{／＼}

……よくわからぬ言い回しだ。

でも、奴と言つことは犯人はわかつてゐるのだろう。

「それなら話は早いじゃないですか」

「残念だが、その出所がどこにいるのかがわからないんだ

「……そうですか？」

その出所とやらの居場所がわかれば、ハミももつと食事にあつりけるんだろうけどな。

ハミ、食事がないと怒りつぽくなるから。今日も機嫌がいいとは

言いがたかったけど。

はたから見ている分には、一見機嫌は常によそやつに見えるのがハミという人物だけど、結構わかりやすいぐらうに今日はイライラしていた。

さて、話も一つ置いたし……そろそろ本題に入るか。

「あの、所長。……もう知っているとは思いますが」

「なんだ？」

「うちの高校でちょっとした事件があつたんですよ」

「事件？」

「ええ、女の子が一人飛び降りたんです」

「へえ」

所長はいったんその手を止めた。

「それは事故か？」

「あれ、知らなかつたんですか？」

「今日のことだからな、と言つのあるが学校というのは、外部からではその中のことは見えづらいものなんだ。知りたかつたら、直接に情報の糸を紡ぐしかない」

「……へえ。ああ、もしかしてだからぼくを雇つてるんですか？」

所長はクスクスと笑つた。

「キミ達はその点で言えば、全く向いてないだう。もともとうちには連中は全員、他人に興味^{センサー}を向けて生活してゐるような奴らじやないからな。そういうことは最初から、期待していないよ。まあ、キミは……相手によるんだうけど」

別に言葉を返す理由が見あたらなかつたので、所長には沈黙で答

えておいた。

……紅茶を淹れるのは、少なくともぼくの場合は時間がかかるない。

トレーに淹れた紅茶を載せて運ぶ。

「どうぞ」

「ああ、ありがとうございます」

所長はカップを手に取る。

香りをかいでの満足そうに微笑んだ。

「むしろ、こちらの方がまだ雇つ理由になるだらう。他の連中には任せられないからな」

「そんなに他の人と違わないと思いませんけど」

紅茶やコーヒーの淹れ方はここに来てから知つたもので、特別、ぼくが技術を持っていることはない。

「なら、咲斗やハミにやらせてみるか？」

「いえ、それは結構です」

咲斗は前に説明したとおり、赤霧先輩のことだ。あの二人なんて、見なくともどうなるかわかる。

「前はそんなにこだわらなかつたんだが、知人にこういうのが得意な奴がいてね。それ以来、少しばかり良いものでないと飲めなくなつてしまつた」

「少しばかりですか」

「ああ。確かに、キミの淹れるものに不満がないわけでもない。正直美味しいとも言い難いが、それでもこれはこれで味わいはあるも

のだよ」

「……誰が淹れても茶葉は同じですかうね？」

所長は肩をすくめる。

もう一つ淹れた紅茶を見て、赤霧先輩にあげようかと思つたけど、前回淹れたら「は？ 紅茶？ そんなもん飲めるかー」とか言われたので、やめておく。

香りは嫌いじゃないらしいけど、その甘そうな香りのイメージが苦みのある味と合わないと言つのが気に入らないらしい。わりと神経質だ。って言つた、変だ。それが偏だ。……意味は適当だ。

ぼくはとりあえずその辺にあつた椅子（やけに高そうな）に座り、トレーを膝の上に乗せて、紅茶を飲み始めた。

「とにかく、さつきの話の続きをばどひなつたのかな」「続き……ですか？」「飛び降りの話だよ」「……ああ」

自分から話を振つておいて忘れる所だつた。

「飛び降りたのは、樋口力ナ。ぼくと同じ一年生です。自殺か事故までかはわかりません」

そう、大神アスカではなかつた。

ただ、なんとなく似ていたように見えたので見間違えただけだ。あの距離からなら髪型も近いように見えたし、身長や体型にもそれほど差はないだろう。

ただ……それよりも。

「で、どこから飛び降りたんだ？」

「……学校の4階から、だそうです」

「4階の窓から？」

「ええ、そうらしいです」

「4階のどこから、かな」

「そこが問題なんですよねえ……実はよくわからないんです」

「……それはどうじゅう、こやその前に窓の鍵はどうなつているんだ？」

「普通の学校の窓と同じですよ、レバー式って言つんですか？ 簡単に内側から開けられます。もつとも他の学校の鍵をしつかりとは見たことないですけど」

「目撃者はいないわけだな？」

「ええ、彼女が飛び降りた瞬間や、窓を開けた瞬間を見た人はいませんでした」

「誰一人として？」

「はい……ただ落ちていく瞬間は見えたかもしません」

「誰がだね」

「ぼくです」

と、断言した後、ぼくは自信なもんに、たぶん、と付け加えた。
本当に自信はない。

「どうこうことだ？」

「ハミと食事している時にですね。と言つても普通の食事ですよ？」

その時に影が落ちていく瞬間を見たような気がします」

「曖昧だね。いったい、キミはどうこにいたんだ

「そう、そこが問題なのだ。

「飛び降りがあつた校舎の、そこにある一年生の教室です。4階で

すよ」

「それはおかしい。同じ4階から飛び降りた人間の影をどうして、見ることが出来る?」

そう、実はぼくのいた教室の隣で飛び降りがあつたのでは、とのことだつた。

同じ階から飛び降りた人間の落ちる瞬間を見れるはずがない、でも、ぼくは確かにその影を見た……ような気がする。

「……曖昧な物言いだな」

「すみません」

「他にその影を見た人物は?」

「んー、うちの教室で残つていた人間で4分の1ぐらいですか。全員が見たわけではないようですが、一人ひとり詳しく話を聞いたわけではないですが」

クラスではその後、見ただと見てないとかで大騒ぎになつた。おかげでぼくの食事は中断。ハミはその後も我関せずで食べてたけど。

もつともこの件は、客観的にありえないことだったので、入ってきた教員が鳥の影か、もしくは日の錯覚と云つことでまとめた。いや、實際にはうやむやになつたと言うところだろうか、納得いかなくとも納得するしかないのが現実だ。

「屋上から飛び降りたのでは?」

「……樋口力ナは自分の教室に居たんだそうです、もちろん学年が同じなので4階ですね。これは樋口力ナと同じクラスにいた全員が証言していますね」

「言つていることが辻褄が合わないぞ、同じ場所にいた居た全員が居たと言つているのに、飛び降り自体は目撃していないことになる

「ええ、やつとつ見計りつけてやつたのか。それとも屋上で行われたのか」

「それとも、そのクラスの連中が全員嘘を吐いているか」

「普通に考えればそうなりますけどね、その場に偶然教員が居たそうです。担任の教員ではないんですけど……ちょっと考えづらいかな」

「……その教師が嘘を吐いている可能性は？」

「その場にいた方が責任を問われるんじゃないでしょうか。クラスに居たと嘘を吐くぐらいなら、正直に見ていないこと言つた方がいいと思います」

「そうだな、得はしない、か。では、屋上の鍵はどうなつているんだ？」

「……もちろんいつも掛かつてますけど、特別な鍵ではないし。たぶん、慣れてればヘアピンで開けるんじゃないですかね」

「そつは言つものの試してはいない。」

憶測中の憶測だ。実際はピッキングの道具がいるのかもしない。それくらいなら、合い鍵を用意した方が早いだらうけど。

「事件の後、屋上の鍵はどうなつていた？」

「……わかりません。屋上から飛び降りたものだと持つてたので、あとから情報を確認して驚いたんですよ。わかつてたらすぐに確かめに行つたんですけど」

「いまいち様相がつかめないな」

「その通りだつた。」

「そんな話聞かされて、わかる方がおかしい。ぼく自身、理解できない。」

「そう言えばハミはその飛び降りた女子を見たのか？」

「……ハミの角度からだと見えないんですよ」

向かい合わせにぼくらは座っていた。

当然、ぼくから見えるもので、ハミからは基本的に見えづらくなる

「ハミはそのことにっこつなにか言つていたか？」

「そりや、なにかは言つてましたか？」

「なんと言つていた？」

「ハミに聞いてください……ぼくの口から言へません」

ぼくがそうこうと、所長は宙に視線を遊ばせた。
カップを机の上において、おかわり、と一言。
ぼくはポットに淹れておいた分を、注ぎて所長の机に向かつ。

「遠野」

「なんです」

「なにか他に知つてるな？」

「……別に知つてるつて訳じや」

「なら、なにを気にしている？その情報を私から貰つ氣だつたんだ

わづ~」

「……やつこつわけじやないですよ。なにもないなら、それでいいです」

そう言つて、ぼくは机にお弁当を広げる。

もちろん、それは今日残つたチャーハンだ。

あんなことがあつたせいで、食べるタイミングを逃してしまつたのだった。

いやいや、おなか空いたおなか空いた。

「ヤハリ血身はギリギリ思つていいんだ」

事件について。

それがわかるなら、ぼくも迷つたりはしてない。

「……記憶に自信はないですが、飛び降りの影を見たのはぼくだけじゃないです」

「そりゃらしいな」

「となると、見間違いであれなんであれ、そういう風に見えるモノがあつたのは事実でしょ？　ね。なにかはわかりませんけど」

「それで？」

「実際に落ししたのは樋口カナだとすると、隣のクラスの証言は嘘になります。嘘だとするとなんならありえるのか。教師までがそう証言する理由はなんにか」

それはおそりや。

「いじめ、か、殺人か。そのクラスにいた者全員が、その場にいた教師も含めて行つたというのだったら、納得できますね」

先生も殺人者よりは、不監督で責任を追及された方がマシと思うかもしねれない。

いじめの結果、樋口カナは屋上から飛び降りた。

集団リンチによる結果の殺人でもいい。

全員がそれを隠そうとした。

これならどうだろ？

「ダメだな」

「ダメ、ですか？」

「いじめを隠すのはわかるが、屋上から飛び降りたからのを隠して

どうなるんだ」「

あ……そりゃ、あまり関係ないな。

屋上での事実を隠して、教室で飛び降りがあつたと証言せているわけだから。

「教室から飛び降りたことを、ないしは、教室から落としたのを隠すのだつたらまだありそりだがな。それでも、何もしてないのに勝手に飛び降りたと証言すればいいと私は思つが」

「そりゃ、ですよね」

さらに言えば、現場が教室となれば、むしろ、なおさら何の問題があつたと思われかねない。

そりゃあ何のメリットはないのだ。

「……屋上からの飛び降りを隠す理由ですか」

思いつかない。
殺人だつたら?

……なんで、屋上にいた犯人だけをかばうんだよ。意味わからん。
自殺だつたら?

……だから、屋上から飛び降りたからのを隠してどうなるんだ?
理屈の通らない、普通ならあり得ない事態。
所長はわずかに目を細め言つた。

「もしかしたら、我々の出番かもな

おお、もしかして。

「仕事ですか?」

「まあ、無料ではやらないけどな」

じゃあ、一生調べませんねきっと。

やつても誰もお金なんか払ってくれないだろ？」「だいたいこんなところにお金を持つたまともな人が依頼なんかしないだろ？」「ぼくはすっかり固くなつたチャーハンを食べることにした。

「それは、今田のキミの廻食かな」

「そうですよ」

「前は、焼きそばだけ、だつたね」

「ですね」

「それも、具なし焼きそばだつたね。のつているのは青のりだけと言つ」

「よく憶えてますね」

「……いつも個性的なお弁当だね、キミは？」

余計なお世話だ。

「あんまり準備に手間を掛けたくないんですよ」

「……へえ、自分で用意してたのか」

「まあ、独り暮らしですからね」

高校生にしては珍しいらしいけど、ぼくにとつてはそれが標準だ。人から独りで寂しくないかと時々聞かれるが、ぼくにとつてはそれが当たり前であり、日常だ。さらに言えば周囲の家族と一緒に暮らしている人の話を聞くと、むしろ自分が恵まれているようにすら感じてしかたがないように思つ。

そもそも、なんでも自分で始めるのは早いほうが多いと思うんだけどな。独り暮らしは一般的に見て最終的にする人も少なくないも

のだろうし。

……アパートの家賃は親持ちなのが情けないけど。

「キミは洗濯や掃除も出来るみたいだし、それでいいんだろうな」「誰でも出来ますよ、それくらいは」

面倒そうだとか、すこいとか思うのはやったことがないからか、やり方を知らないからだと思うな。たぶん。

確かになにに関してでも、全く才能を持てない分野がある人はいるけども。へタながらでも、その才能が零に近くても、なにも出来ないと言つことはないと思う。

失敗なら失敗と言う結果は出せるように、その失敗にも差はあるように、まったくにも出来ないということはないと思うのだ。

「やり方を知らない、か。知ることが出来るのが才能という考え方もあるが」

「ああ、そういうのとは違いますよ。あと好きになれたこと自体が才能だと、そういう人もいますけど、それは才能で苦労したことのない人のセリフです

好きでも知識として知つていても、上手くなれないことはありますよね。逆に嫌いで今まで知識として知らなくて、なんとなく上手くやれてしまう人もいます。結局、人がどれだけうまくできるかって言うのは全部才能なんですよ。

でも、そんな些細なことよりぼくが言いたいのは、上手いとまでいかなくともへタなりに出来るものもあるってだけです」

「それがキミにとつての家事だと？」

「才能がないものでも、普通の人間レベルにはなれる。

そちらのほうがより重要な事実だ。

「それがキミにとつての家事だと？」

「まあ、ほんまに思ってますナビ」

もしくは、日頃からのする必要なことの予定を立ててることが重要、とも思つ。それが出来れば、何一つ家事で苦労はしない。出来ないことは、出来るよつになるための情報を集めたり、時間をとればいい。

でも、それはなんでもうだらつて、たまごチャーハン食つてゐる奴が偉そうに言つセコツつともない。

「キミはそれでこゝで、自分が……」「

「はー?」

「いや、なんでもなことよ」

なんだ?

そんな風にやめられると思ふんじやないか。

「ただ、キミは嫌味な人間だと思われるんだらつと思つて、ね」「……それは

どうだらうか。

ほんはよくわからなこね。

「所長もやつてこりとこひまつてこ勝負じやないですか?」

そうほくが言つて、所長はぞいが寂しげに笑つた。
身に覚えはあるひしご。
だからこそ、ほんまにやつたのだらうナビ。

いつも行くのはバイト先（後書き）

ようやくバイト先の上司、巫月所長が登場。でも、この人物が事件に直接関わることはほとんどないんです。

こつも買玉こむべへ

結局、仕事らしい仕事は事務所にはなく、ぼくは近所に買い物に行くことにした。

「コーヒー豆以外は、その辺のコンビニやデリラッグストアでなんとかなるのだが、豆の銘柄やらなにやらに所長はこだわる。

それはたいていの場合、きちんとした場所にしか本来ないようなブランドなのだが、幸い、今ではとある喫茶店のマスターと知り合いになつたおかげで、その方から豆を分けてもらつ（当然、お金は払つ）ことが出来るよになつた。

今日の買い物はそれほど苦労はなさそうになりだ。

……時々、とんでもないものをお使いさせられるから困るんだけどね。

買い物にはバイクに乗りたいものの、所長はお使いに関してガソリン代は出してくれない。いや、言えば出してくれんだろうけど、言こづらい。

……ので節約して徒歩か、自転車でがんばるのが基本だった。

まあ、広くても基本的に町内だしね。
あくまで基本的には、ね。

……。
……頑張るわ。

出来る限り。

まあ、あれだよ、頑張れば頑張るほどにお給料になつていいくと思
えば。

時間給だけど！

その、時間計算もかなりアバウトだけど！

……とりあえず、荷物の軽いコーヒー豆調達の方から先に済ませ
ておいたので、その近くにあつたスーパーで買い物をすることにし
た。

入つてまず、店内を見回す。

「えーと、なに買つんだっけ？」

メモは基本的ことらないので、自分の脳内からいろいろ記憶を探
ることにしている。

確かに、買つものはまずは適当に食料、それに先輩用にそれこそ適
当な飲み物。

先輩の場合、ぼくがなにを用意しても文句言つからな。もう、コ
ーラでもなんでも渡しておけばいいだろう。あと、お菓子とか、か
な。滅多に来ないけど来客用のと、あとみんなで食べる分でもあれ
ば。ああ、洗剤が安かつたら買い足しておくれ。それと、それと、
うん、お醤油とみそ……も今度安かつた時にまとめ買いするとして、
今日は魚が安いから買つて行つて、作ったやつを家に持つて帰つて
おかげにしようかな。あと、歯磨き粉と新しい歯ブラシだろ、いや、
使い捨てでいいか？ 先輩用に塩入の奴を買ひ置きして……それに
……。

「なにをブツブツ独りで言つてゐるの？」

「え？」

あれ。

あんまり友達のいないぼくに話しかけるなんて誰だ？
って。

またしても、大神アスカだつた。

今日はよく、縁のある日だ。

「えーと、どうかした？ なにか用？」

「なにか用、とは冷たいんじゃないの？」

そう、大神さんは言つてほほえむ。

違和感。

どこか、不自然に明るいんだけど、なにかが暗く重たい。
そんなほほえみ。

「大神さんつて」

「なに？」

「そんな表情する人だけ」

え？

そう、大神さんは聞き返す。

それは普通に考えれば自然だけど、やはりぼくはそれすらも不自然な気がしてならない。

「それってつまり、わたしが笑つてるとおかしいってこと？」
「いや、そういうことではなく」

なにかおかしい、のか。

改めてみて見ると間違いなく、その顔はぼくの知る大神アスカに
違いない。

むしろ、前に話した時よりも生き生きとしていて愛嬌があるというか、素直に可愛いとも思う。

だけど。

いや、でも。

「……うん、おかしくはないよ。そういう表情の方がいい、と思つ」「そう?」

「ああ、大神さんだったらその方がもてると思つ」

「本当に? ……良かった」

会話していく感じは、ざらざらした感触が常に口の中にいるような、異物感。異質な感じ。でも、ぼくは彼女のことをあまり知らない。だから、ぼくが知らない面があつても仕方がない。それに違和感を感じるのもおかしな話だ。

「遠野は、買い物?」

大神さんは柔らかく話す。

「ああ、うん」「家の手伝い?」

「いや、バイト。それに今、一人暮らしてるので、ついでに自分のも」

「一人暮らし? ……へー、そうなんだ。いつから?」

「昨年の冬にね、他の家族は新しく出来た家に引っ越しちゃつてさ、ぼくだけ古いアパートにいるんだ」

「昨年つて……そつか、中学の頃からだつたんだ」

「そう、その頃からだいたい……」

やっぱり、違う。

これは、この人は違う。

人間がこんなに違う表情をするはずがない。

同じ人間なら、ここまで。

仕草だけじゃない、雰囲気だけでもない。

目が違う。

だけど、それでも。

クラスメートがクラスメートでない、なんてことがあっていいはずがない。

そうは思つても疑問は口をつく。

「君は、本当に大神さんのかな」

「……それはどういう意味？」

同じ姿形をしているだけの、別のモノに見えるのは。
気のせいであるべきだ。

たまたま、そう、大神さんの気分がいい、とかそういうものであるべきだ。

「わたしは、大神アスカ。それ以外の誰でもないと思つけど

「……まあ、そうだよね」

「そう、わたしは大神アスカ。他の誰かに見える？」

「見えないよ、ただいつもと感じが違う気がしたから」

「……いつもと違う、ね」

大神さんはわざとらしく首を傾げ、笑う。

その仕草はハミによく似ていた。

「遠野はいつもの方がいいの？」

「いや、別にそういうわけじゃ……」

「だよね、いやでしょ？ あんな」

「目つきも口も悪い女なんて。

「 っ！」

そいつは……。

にこやかに、それがなんでもない当たり前のようにな
そう言つた。

「いつたい、君はだれなんだ。なぜ、大神さんの姿をしている」

「大神アスカが大神アスカの姿をして、いつたいなんの問題がある
つているの」

「君が大神アスカだつて？」

「そう」

「……ぼくは嘘は嫌いだ」

「嘘じやないよ、じやあ遠野はわたしの……」

彼女の目はぼくの目を射貫く。

「あなたが大神アスカの何を知つていて、つていうの？」

「それも、真つ直ぐに」

「……それは」

「そう、知らないよね。遠野はわたしに興味ないしね」

「そんなことは……」

「そんなことはない、とでも？ 遠野、自分で嘘は嫌いだつて言つ
たのに、それなのに自分で言つるのはフェアじゃないと思つんだけど」

彼女は、その言葉の内容とはうらはらに、その雰囲気にキツさを
かもしだすことはない。

あくまで、優しい落ち着いた声のトーン。

それは彼女のイメージとはかけ離れたものだが、その言葉の内容
はまさにその通りだつた。

ぼくは彼女から、目をそらす。

「ああ、…………ごめん」

「遠野にとつて、しょせんわたしは、ただのクラスメイト。へたを
すれば知人未満の関係」

そう、俺にとつてクラスメイトと言つのは、知つてすらいない、
いてもいなくともどうでもいい存在。

「…………否定はしないよ」

「…………それなのにわたしを理解できるはずないでしょ」

「ああ、確かにそうだ」

「それでも…………別にわたしを理解しろ、つて言つてるわけじゃない
けどね。それはあなたの勝手だし、ね。とにかく知つたような口は
叩かないでくれる?」

ぼくは頷くことでそれに同意した。

同意せざるをえなかつた。

それは言いくるめられたわけでも、気圧されたわけでも、まして
や身に危険を感じたからではない。彼女の正体が、大神アスカであ
ると信じたわけですらない。彼女に対する違和感、それどころか、
本人ではありえないという、その確信と実感はなくなりはしない。
それでも、ぼくがそれに同意してしまわざるを得ないのは、彼女
の言つことに事実だつたから、というだけではなく。

彼女が本気でそれを言つていたからだ。

「あなたが大神アスカのなにを知つている

それは間違いないく、本気だつた。

ぼくは嘘は嫌い、だ。

だからこそ、ぼくは嘘を知る。違う、嘘を知るからこそ、ぼくはそれを嫌悪する。

その中で間違いないく感じたのだ。

「この言葉は間違いないく、この田の前の存在（もの）の—眞実であり、この彼女自身の本気だらう、と。

そして、それは本当に大神アスカの本音ですらあるのかも知れなかつた。

本気であるからこそ、嘘がないからこそ、ぼくも偽りのない同意を返すしかない。

言いたくない言葉を言わず、それでいて言葉を濁さず、ぼくが嘘をつかずにあるには、無言で最期に頷くしかぼくにはなかつた。

「わかつてくれれば、別にいいから。あまり気にしないでくれる？」

「ああ、わかつた」

言いたいことはわかつた。

「でも、遠野も忙しそうだしね。わたし、そろそろ邪魔だらうから行くね」

「……帰るの？」

「まあ、そんなところ。遠野もバイトもいいけど、さつさと帰つた

方がいいんじゃないの?」

「…………やつしたいんだけどね」

それは心の底から同意だ。

働くのは、そこまで好きではない。

この場合は特に。…………やりがいもないし。

まあ、自分のための買物もしていいなんだけビ。

「それじゃあ、またそのうび」

「ああ」

そのうび、ね。

本当に、また明日、だうび。

学校の授業が中止にならなければだけビ。

彼女はスーパーの出口へと歩き出す。

が、その足は数歩歩いたところで止まつた。

「そうそう、忘れてた」

なにかを思いだしたかのうび、やつ。

彼女は言った。

「軋轢ハミ、には近づかないで」

彼女がまるでどうでもここまでのよひ、ハロハロすると同時に

その田に、ドロリと薄黒いものが揺れた。
気がした。

背筋に寒気が走る。

……つまり。

「君はそれを言つて来たの？」

ぼくがそう聞く、と。

彼女は、やあ、どうかな、といやべつぶやいて。

再び歩き出したのだった。

その、彼女を見送る視界の端に。

黒い影が蠢いた見えたようだと思つたのは。

おそらく、気のせい。

……そう思つ方が精神衛生上にはいいのだろう。

そんなことよりも、今は。

ぼくは携帯を取り出す。

かける先は……。

「……ああ、ハミか？」

*

「えつとお、つまりい？」

「最近、周囲で変わつたことはないかって聞いてるんだよ

ぼくはその後すぐにハミに電話した。

携帯電話は可能な限り持ち歩きたくないが、いつこう時に必要に

なるから離せない。

「べつに、って言つかあ、最近はいつも夜一緒にやん。変った
ことがあつたら、気付くでしょー」

「それは確かだねつだけど……」

昼間の飛び降り直前とか、マイシの発言の意味あつげなことを言つて
ついていたこともあるし。

なにかぼくの気付いていないことを感じてるのかな、とか普通は
思うだろ。う。

……それに、いや、その前に。

「あのや、いろんな堂々とこつも夜一緒に人聞きの悪いことを素で
話すなよ」

「なんでえ？ つて言つか、ビーチがあ
「ビーチがつて、そりゃ小学生じゃないんだからわ。ナツコの関係だ
と思われるだろ」

「ナツコの関係つてどんな関係？」

「……お前、わかつてわざとぼくに聞いてるな」

「えへへ……」

えへへ、じゃねえよ。

なにをぼくに言わせたいんだよ、お前は。

……だから、変な噂されるんだわ。

「ナツコ言われてもお、ハミ、気にならなこじい」

「お前は気にならなくてもな」

「じゃあ、なこ」……

「遠野は気にしてるの？」

…………。

あー。

やつ普通に言われるべ、なあ。
えー、こや別に。

「……正直、気にならないかな」

所詮は噂だし、相手はハリだ。今さら迷惑もない。と言つ
が、今さら迷惑しかないから、それが十や百や千増えたといつて微
小な数字でしかない。

……別に噂をすることと血体が悪いとは思わないしな。
やつ言つと、電話器の向こう側から笑い声が聞こえた。

「だよねえ~」

んふら、と笑うこいつのくらべられた声。
いや、なに楽しんでるんだよ。

だぞ」

「ハリはあ、周りの人間なんか、どうでもいいからねえ」
「お前はよくてもな、ぼくはやつはいかないんだよ」
「……だから、遠野は気にするの？ 周囲の評価なんじ」
「あらむ」

そう言つと、驚きと失望の入り混じつたような表情でハミがぼくを見た。

……よつた気がした。あくまで、気がしただ。

実際に田の前にい人の間の表情なんてわからない。
いや、それでも、なんて顔してんのだ。とぼくが見た時に思つよ
うな表情をハミがしたのだとそう思った。

……ぼくに呆れたのだろうか。

でも、そんなもの、気にする決まつてるだろ。
だつてさ。

「なんで、お前が悪く言わないとならないんだ？ おかしいだろ」

「お前、悪い」としてないだろ

そうだ、ハミが実際になにをしたつて訳でもないのに、なんでな
にも知らないような奴らに、いい加減にいよいよ言わないとい
けないんだ。

そりや、気にするに決まつてる。

「…………」

ハミの返事がない。

「おこ、ハミ!」

「どうしたんだ？」

「なんか、変なことでも言つたか。

「もしかして、遠野や」

「あ?」

「ハミの」と心配してゐるの?」

心配?

ぼくが。

そんなわけないだる。

「なんだ、ぼくがお前の心配なんかするんだよ
「そうだよねえ……」

なにを言い出すかと思えば。

別に、心配……ではない。

そもそも、そこまで余裕のある生活は送つてないわ。

人を気にしたり、心配が出来るぼくは。

とりあえず、と言つた風にハミは「まあ、憶えておなくて」と、
返答した。

ああ、ぜひそうしてくれ。

「で、ただそれだけなの?」

「いや、で、と言われても、

別に周囲に異変がないなら、どうしようもないこと言つか。
ぼくがハミに言へるのは。

「せいぜい、身の回りに注意してくれとしか言えないな
「身の回り?」

「そり、気をつけてくれればそれでいい、かな

ハミならなにかあつても、そつそつ危険はなこと思つたが。
それも、どうなるかわからないしな。

ただ、ハミは周囲の獲物や天敵に対する感覚だけは半端じゃない。から、日頃から気をつけてもらえばわかる、と思いつかない。ぼくがいても足手まといだしね。

「ふうん」

「……なんだ、どうかしたか?」

「やっぱり、トオくん心配してねんじやん」

ハミのぼくへの呼び方がトオくんに戻る。ふやけた、ぐだけた呼び方。

「……ひるせいな、用件はそれだけだよ」

ハミのからかう声が聞こえそつな気がして、ぼくは一方的に電話を切った。

後でうるせく言われそつだが、どうせもう今日は会わない相手だ。明日、キレられるぐらいは別にいい。今はそれよりも。

「所長に、話した方がよそいつ……なのかなあ」

なんて、話した方がいいかはわからないけど。

とにかくぼくは、事務所に行こう。

……とはあえてせず、買い物をしつかりと済ませることにした。ぼくの晩ご飯のおかずも密かにかかるわけだしな。

買い物せずに帰つたら、バイトの時間計算に下方修正がかかりそうだし。

なによりもぼくは、まず、日常を大切にする人間だった。

いつもコーヒーを淹れるぼく

5.

以前のこと。

つい、先日にも、赤霧先輩がその刀の鍛にした、というよりは炭にした非生命体。

それが、そのほぼ人間と見分けのつかないほどの精巧さを活かしてか、一般人とすり替えられていたことがあった。

ある日、突然、すこしづつ、隣人が人から人でないモノへと変つていいく。

そんなことが実際に起きていたのだ。

その件での、非生命体は少なくともこの町ではほとんど撲滅されたものだつたのだが、思い返してみると、すり替えられた人物の周囲は誰もそのことに気付かず、それが本人だと思い込むと言う、おそろしい事態が発生していた。

その人物の家族や恋人ですら、本人だと思っていた。

人が変つたように。

そう思われた場合がなかつたわけではない。偽物は所詮は偽物だ、本物とは違う。その差異に気付く人間、奇妙に思う人間は皆無ではなかつた。

だが、誰もすり替わつた非生命体を偽物だとは思わなかつたのだ。そう、隣人がすり替えられた、と思う人間なんて常識的にありえない。もしそんなことを言えば、頭がおかしいと思われるだけだろう。

当然ながら、人が変つたように、はあくまで、ように、であつて実際に変つてることを意味しないのだから。

それが『常識』である。

多少、様子がいつもとは違うようには思つても、調子が悪いだとか、気分が悪いのだろう、とか、もともとそういうものだと、だからなに？と無関心でいられたりとか……結局、周囲の人々は日常の中で生き続ける。

もちろん、ばれにくい対象。家族とは疎遠気味の人間、独り暮らしの人間、周囲とは孤立しがちの人間、社会の枠からはみ出た人間など、そういう対象から優先的にすり替えが行われたことが、よりばれにくさを作つたのだ、と言われば反論する気はない。

それでも、だ。

気付かないものである。

友達が友達でないぐらい、恋人が恋人でないぐらい、息子が息子でないぐらい、娘が娘でないぐらい、父親が父親でないぐらい、母親が母親でないぐらい、兄弟が兄弟でないぐらい、祖父母が祖父母でないぐらいでは、人間はまったくその異質さに無関心でいられるのだ。

なぜなら、日常の方が現実的で、退屈で、普遍で、安心出来るが故に魅力的であるから。なにせ、同じことを繰り返すだけで生きていけるのだ。成長しなくていい。努力しなくていい。日常ではレベルの上に乗るまでが努力の賜なのだ。他にそれ以上になにを望むのだろう。

神話にある天国や楽園とは、つまり、そういうものだ。
争いも変化も、なにごともなく単調で、それが幸せ。

異常事態や新しい毎日など人間は望まないし、そのためになら、

周囲の人間の異変などいくらでも忙殺できるのだろう。

見て見ぬフリではなく、見て見ていなくできるのだ。

現実という、退屈な樂園に人間は住んでいたいから。他人を犠牲にして無関心でいられる。

とまあ、色々言つたけど、つまり、ぼくが言いたいのは「こうである。

また、再び、入れ替わりが行われているのではないか、と呟つことだ。

大神アスカだけでなく、ひそかに何人ものすり替えが、再び。

「なるほど、その可能性はないわけじゃないな」

そう、巫月所長がコーヒーを飲みながら言つた。

もちろんそれは、ぼくが買つてきた豆で淹れたものだ。
ではその豆でコーヒーを誰が淹れたのか?
もちろんぼくだ。

ちなみに、所長は猫舌で甘党なので、それとなくひつそり適温にしたものを用意し、こつそりと砂糖を多めにスプーンで四杯ほど入れた。クリームはお好みでないそうなので、もちろん付けてはいいない。

ここで機嫌をそこねると困つたことになるからな。かなり、気を遣うのである。

「確かに、ハミと先輩の活躍でだいぶ一掃されましたけどね。出所がなくなつたわけではないんでしょう?」

「ああ、否定はしない。現実問題として連日狩りを行つてゐるしな。

全く、居なくなつたわけではないんだが」「うう

「だったら、考えられないこともないと思ひますよ

だつたら、あれは大神アスカの偽物だ。と言つ結論が容易に出来せる。

その方がぼくはすつきりしていいな。
だが、しかし所長は。

「……その可能性は低いな」

そう言つた。

顔が苦々しそうなのは、本当に苦いからかどうかはわからない。

「なぜですか？」

「まず、もし非生命体なんて餌が目の前にあつたら、まずハミが黙つてはいないうちに」

「まあ、確かに毎回の「ひかじかひそひまでじょひなび」

あまり、食欲を制限できないのがハミなのである。
食えたライオンが餌の臭いをがき分けられないことなんて、ありえない。

「なら、下校後にすり替えられたんだつたらどうでしよう？」

「仮にそうだとして、キミに接触させてなんの得があるんだ。襲うわけでもなく、な」

「……それはそうですね」

確かに事務所の中でも、普通の人間にしか過ぎないぼくはある意味狙い目には違いない。

だが、かといって、狙つてもどうしようもない。

ぼくを殺しても、事務所にはダメージはない。だつて普通の人間だし。

ぼくと入れ替わるつもりだつたとしても、入れ替わつたところで、ハミや赤霧先輩、ましてや所長は騙せないし、人質としてもそんな価値はない、だろう。そんなものに惑わされ面子でもないし。

「だいたい、その偽物らしきものとは話したんだろう？」

「ええ、だいぶ違和感はありましたけど」

「その内容を聞くと、より一層可能性は低いと思うがな。別に本人と直接面識があるわけではないが、偽物にしてはずいぶん本人らしいじゃないか」

「どこがです？」

「持ち出す会話の内容が、だよ」

「確かに、本人しか知り得ない情報があるのは間違いなさそうですけど。でも、不完全ながらでも記憶の複製でもすれば、大して本人を知りもしないぼくには……」

「そこじゃない」

ぼくは首をかしげる。

いや、ぼく自身は相手が、演技でなく本気で話している感触は受けたのは間違いないけど。

……本人でない感触も間違いなくあつたわけで。

ぼくがそう言つても、所長は首を振つた。

「いいか、そんな感情の混じつた会話を本人以外にすると思うか。むしろ、キミになぜその話をするか、と考えたら本人以外にあり得ないだろ？」

「……どういう意味です？」

「偽物が本人となりきるためにそんな会話を選ぶ必要はないと言うことだ。その感情も異性に向ける感情、同性に向ける感情。怒りと羨望……さらにそれに加わるモノ。非常にわかりやすい」

「……意味がわかりませんよ」

確かに、不自然に感情的ではあつたけど。

なにか、堅いものを無理矢理押しつぶしたかのよつな。
あえて、黒をより黒いモノで塗りつぶすようにして隠してくるよ
うな。

間違いなく、そういう感じはあつたけど。

「そこまでわかつていて、なぜわからないなんてキミが書つのか。
私にはさつぱりわからないな」

なぜだらう、なんか馬鹿にされている気がする。
とにかく、この人が言いたいのは。

「つまり、要約すると偽物がぼくにわからない話を選ぶ時点で偽物
としての役割をはたしていないつて言いたいわけですか」

偽物がぼくを騙すなら、ぼくを騙すためにぼくに理解しやすい話
をして引き込むだらう。

そう言いたいのだらう、と頭をぎりぎりまで回転させて考えた。

「まあ、おおよそそういうな」

「……納得できませんけど」

「そう言われても私は困るだけだ、それよりもお茶つけになにか用
意してくれないか」

「あつ、俺も俺も」

そう言いながら、赤霧先輩がソファーから起きた。
まだ寝てたんだ、アンタ。

「なんだよ、その目は」

「別に。働いてほしーなあ、と思つて」

「……仕事なんかねえよ」

「なり事務所の掃除でもすればいいじゃないですか」

「はあ？ なんで俺が」

「バイトって言つのは、自分の仕事を自分で見つかるのも、その料金のうちに含まれてるんですよ」

「うむせえな、黙つて茶菓子用意しとけや」

今にでも刀を振り回しそうな殺意のその寸前辺りの眼で、赤霧先輩はぼくを見た。

ああ、絶対にぼくの言つことは聞かないだろ？ とは思つてたよ。仕方なく、先輩を職業欄が「一ートの男」……の父親、でも見るよくな目つきで一瞥してから、お菓子を用意することにした。飲み物は……ああ、さつき置つたコーラでいいよね。

その視線からなにかを感じたのか、先輩はぼくに向かつて口を開いた。

「お前、いい加減、俺のこと言めてるだる。キレるだ、しまーにや」「舐めてませんよ」

そう言つて、まずはコーラをグラスに入れて差し出した。中に入っている氷が、音を立てて鳴る。

……ぼくは先輩をどうかと言えば言めてるんじゃなくて、フツーに呆れてるんですよ。

赤霧先輩のことだから、こんなことを言えばキレる、と言つか本気で斬らんばかりにブチキレるんだろ？ けど、そんなことでいちいち怖がつてたら相手なんか出来ない。

なんで、バイト先でいちいちビクビクしてなきやいけないんだよ。せいぜい、まあキレられても瞬殺されるぐらいだろ？ じ。

グラスを受け取った先輩は、「コーラをなんの文句も言わずに飲んで、その眉間にしわを寄せた。

で、結局いつものように口を開く。

「なんだこれ、ダイエットコーラだろ」「ええ、そうですけど」

なにか問題でも？

信じられないものでも発見したかのように先輩はぼくに言った。

「は？ ダイエットコーラなんてコーラじゃねえぞ、お前

「……安かつたんですよ」

「ば、お前、馬鹿だろ。全然、味違うだらうが。こんな物買つ奴どこにいるんだよ」

「たいして味なんて変りませんよ、コーラはコーラですから」

なにを飲んでも、文句のうるさい人だな。

自分で買って来いよ、お金だって出してないんだし。

「あー、もうありえねえ、ホントにありえねえ」

そういうつも飲む赤霧先輩。

差し出された物には、必ず手を付け。手を付けた物にはきちんと最後まで食すのが赤霧咲斗といつ人間だった。

良く言えば、律儀。

悪く言えば、意地汚い。

……個人的には残すよりよっぽどいい気もするけど、うん、素直にそう褒めたくないな。

そんな感じで赤霧先輩を適当に相手をしながら、お茶うけにお菓子を用意する。

それを見て、所長はぼくに言った。

「最近はだいぶキミも慣れて来たな」

それは、先輩の扱いに的な意味ですか。

「この場にハミが居ても、キミなり同時に対応出来るだらう。」

「勘弁してくださー」

可能だけど、したくない。

出来るからー」や、どれだけの面倒くさいかわかつてしまつ。

「ぼくだって、出来ればまともな人間の相手だけしてたいんですよ
「そりや、どうこう意味だー」

後ろのソファーから聞こえてきた声は無視した。

意味なんか自分で気づけよ、わざわざアホな会話にぼくを参加させるな阿呆め。

「いい加減、お前も失礼を通り越して、無礼つてるよな？ おい？
「なにも言つてないですよ、ぼく」

考へてるだけだ。

態度にそれが出てても仕方がないだろ？、ぼくは嘘も隠しじ」とも嫌いだ。可能ならなるべくオープンに生きていきたい。

……出来れば死なない程度に。

お茶うけをテーブルに置くと、所長が先輩と対面するようにしてソファー座りだした。

本格的に休憩するらしい。

「それはそれだが、一つ話をしたい」

「……どれがどれなんですか」

ぼくのセリフを無視して、所長は続けた。

「今日、飛び降りがあつた話をしたじゃないか」

「……ええ、まあ」

確かにそんな話はした、今は頭の中もそれどころじゃないけど。正直、大神さんとハミの方が気になる。

「その件なんだが、少し気になることがある」

「気になることですか？」

「自殺が連續して起きているんだよ」

……連續？

自殺なんて、どこにでもあるじゃないか。

本当によくある話だし、年間何人の人間が自殺で死んでると思うてるんだ？

「どの辺で連續しているんですか。連續って言ひ以上は共通性があるんでしよう」

「……ああ、その通り。もちろん共通性はある、この連續自殺は同じ中学校を卒業した生徒で起きているんだ。それも連鎖するようですね」

連續自殺って、そんな連續殺人みたいな語呂で言われてもな。

「だいたいそうは言つても、自殺なんて他からの影響で起きるものだと思いますけど」

有名な歌手が、あるビルで飛び降りて死んでから、同じビルで相次いで飛び降りがあった。なんて言うのも、聞いたことがある。それが、怪談のように語られることがあるが、おそらくその人はちはその歌手のファンだったのだろう。近しく思う人間か、親しく思う人間が死ねば人間は自然と死に近くなる、ひいては自ら死を選びやすくなるものだ。

乱暴に言えば根本的に、人間は死にたがりで、死にたくて死にたくて仕方がないと言える。少しのきつかけがあれば、隙あらば自殺しようとするもの。

そのことを防ぐ意味合いで、葬式を遺族が執り行う風習は出来た、という心理的見方も出来る。葬式を執り行うと言う役割を与えて死から気を逸らし、かつ、お坊さんや他の親族が様子を見に来るきっかけを作り監視する。昔からそう対処が巧妙に考えられ、システム化されるほど、なんらかのきつかけで人が自殺をするなんてのは当たり前だった。

特に、日本では人前で涙を流し、悲しみを表現することを避ける傾向にある。それは見ようによつては美德ではなく愚かと言つてもいいことだろう。

人間は泣くことで感情を発散する。ほら、泣いたらすつきりした、と言つ言葉を聞かないだろうか？

泣くことはそのものは、実際ストレスを発散させる行為だ。よつて、むしろ本人の立ち直りを早くし、その悲しみという感情を発散させ、忘れる。

だが、それをしない人が多い。それが出来ないために、集団よりも個人として動くことの多い現代では特に、いつたん死に近しく関

心を持つた人間は、なんらかのきっかけで死を選ぶ確率は少くないのかもしれない。

あらかじめ、死にたい、と心のどこかで思っていた人間が、偶然知り合いが死んだことでその引き金となつた、となつても別に不思議なことではないのだ。

「キミは相変わらずなんとも言えない見方をするんだな」

「そうですか、間違つてますかね」

「それはずるい言い方だ、とも思うがな。人間の死への願望の存在、即ちタナトスと言つ見方もあるしな。人間は死にたがり、と言つ見解は間違いではないよ。だが、私が連鎖していると言つたのは、キミのような意味で言つているわけではないんだ」

ぼくの言つた意味とは違う？

当然ながら、ぼくは疑問を持つた。

「それはどういふことです？」

……そう聞きそつになるのをまずは抑える。
まだ、聴くには早い。

ぼくはあごに手を添える。

……ぼくの言つた意味。

それは他の影響を受け、きっかけとなつただけの複数の人間の自殺。

そういう意味合い。

一方、所長が言つたのは連鎖的に起つる連續自殺。
この間に他の意味が成立するとしたら……。

「さすがに話は早そうだな」

所長はぼくの手を見てそう言った。

赤霧先輩はまるで自分は関係ないかのようにひたすら「一いつ」とお菓子に手を付けていたが、その視線はぼくの視線と交差する形でぼくに向かっている。

ぼくは一人に頷いて、口を開いた。

「つまり、所長が言つた連續自殺と言つた言葉の裏には、連續殺人のように、この現象が能動的な原因によつて連續している、関連しているモノである。その証拠ないし、そう見いだしうる共通項があつた……ということを示している訳ですね。そう、例えば……犯人がいる、とか」

「事件ではなく、私の意図の方を読むか……あまり褒められないが、その能力は評価したいな」

「あまり褒めんなよ、巫月。この場合は褒めても視点のひねくれ方が増すだけだつて」

所長を呼び捨てにし、余計な言葉を付ける、赤霧先輩。

つるさいな、ほつとけ。

所長はぼくらの顔を見比べて表情を崩した。

「二人とも、人のことはよく見えるんだな」

「余計なお世話だ（です）！」

ふふつ、と所長はさらに笑いを重ねた。

その上で、「コーヒーを口に含ませその喉を濡らし、すっとぼくらへと向き直る。

その途端、霧困気がだらけたぬるま湯ような空氣から、凍るよう

な冷水へと引き締まる。

赤霧先輩の目にも、真剣さが多少は加味された。

仕事の前の、狩人の日、その一歩手前と言つたところだろうか。所長はぼくらに話をし始めた。

「とにかく、キミの言つとおりだよ……この件には共通項がある」

キミの学校の女子生徒と関係あるかは知らないが、ヒー言前置きました。

そう、実はこの事件そのものの始まりは一ヶ月前に遡る。

6.

この事件は川岸淳という、男子生徒から始まった。

彼の死が全ての、きっかけだった。

それを除けばある意味で、遠野の見解も所長の言にも間違いはない。

彼の死から全ては始まり、全ては終わった。死という名の終わりで。

始まりは、混沌と言う始まりだった。

今まで、発生しなかつた始まりが、今まで発生するものへと変つてしまつた。

現実から、非現実へと。

日常から、非常へと。

それは、意志を持たない影……だった。

俺にとって、それはなんの意味も持たない。

刀を通して伝わる物こそ、刃を透して見える物こそが全てだ。

だが、しかし。

熱の伝わらない幻と。

肉眼にすら透さない想いに。

意味を見いだす人間も世にはいるのだろう。

人はそれを、幻想と。

もしくは幻の影、幻影と呼ぶ。

夢い、人の夢だ。

……樋口力ナは死にたいと思った

7.

樋口力ナは死にたい、と思つた。

それは樋口力ナには好きな人がいて。
その彼が自殺したからだつた。
わかりやすい、理由だつた。

自分でも、ばかばかしいと思つた。

男一人、死んだからつて自分も死ぬなんて、所詮は自己満足。
時の感情、恋愛という名前の動物のような本能に従つだけだ。
そう理屈つぽく自嘲しながらも。

……それでもいいと樋口力ナは思つた。

……樋口力ナが、ようするに私が、こんな風に死を望むのは。
彼を見てしまつたからだつた。

目の前で、包丁で胸を引き裂いた彼を。
彼は笑つていた。

その、後ろの彼も笑つていた。

「もうすぐオレは死ぬんだってさ」

そう、笑つていた。

彼から呼び出されて、学校をサボつてその自宅に行つた私が見た

のは。

……そんな光景だつた。

好きな人が逆手で包丁を持って、自分自身に向け、高らかに笑う。悪夢のような光景だつた。

「ほら、見えるか力ナ。オレ、包丁で裂かれて死ぬんだぜ？ 笑っちゃうよな？

力ナは小学校の頃に話したことないか、苦しい死に方だけはしたくないつてな、冗談交じりでさ。交通事故で死ぬぐらいは想像したけどさ、こんな笑える死に方するとは思わなかつたわ」

「冗談でしょ？」

私はそう言つた。

ばかばかしい、そうじやないのなんてわかりきつてゐるのに。彼に死ぬ理由はあるんだから。

「そうだよ、オレは死にたかつたんだ。なあ、力ナ、なんでオレだけ生きてるんだよ？」

オレだけ。

オレだけ、だつてさ。

まるでこの世に自分しかいないみたいに。私も傍に、こんなに近くにいるのに。

「オレは、オレは汚れてるんだ。そんなオレを……必要と言つてくれてたのに、あいつは死んじまつたんだ」

あいつ。

憎くて仕方がない。

あいつ……はもう死んでいる。

なのに、未だに彼の心をわじびかみにして、そのまま連れ去ってしまった。

彼の傷は私じゃ癒すどいのか、触れることすら許されなかつた。

憎い。

不条理で。

不平等だ。

私にもチャンスがあつてもいいじゃない。

なんで、アイツだけ？

でも、もうそのアイツも死んでいる。

どうしようもない。憎んでも、殺せない。アイツは殺せない。

彼は止められない。殺しても、彼は私のものにはならない。

……ばかばかしいでしょ、死んでも彼は好きなんだつて。

違うか。

……その人が死んだら、もう自分には価値がないんだつて。生きていっても、意味がないんだつて。

そんなことをさんざん私にノロケて、そのあげく、彼は……。

「オレは汚れてるんだ、この血も、中身も、腐ってるんだ。臭いんだよ、生臭い、どひどひして、気持ちが悪い。どこまでも、這い回つてるんだよ。」この血が

彼は自分自身を呪つてた。
自分の血さえ、嫌つてた。
それから逃れるために。

彼はその胸を……。
引き裂いた。

辺りに塗れる赤い色を憎んで、その色の中に倒れ込んだ。
それが身体の中から這い出していくことを喜んで、その色にその身
を染めた。

その後ろに彼は、立っていた。

その倒れる自分の姿を見下ろして……。
自分の傍らに立つて。
こう呟いた。

「ああ、これがオレの望みか」

嬉しそうに、でも寂しそうに彼は言った。
同じように、胸から血を吹き出して。
ようやく、彼は私を見て。
すまなそうな顔で、倒れていった。

倒れた彼の口だけが動いて。

「ぐめんな

と、呟いたように見えた。
樋口力ナは生きていても仕方がないと思った。
好きな人が死んだのに、自分が生きていても仕方がない。
そう思つた。

いつもと少し違ういつもの学校

8 .

所長がある見解述べて、ぼく達にあつたのは沈黙だった。

それを五分ほど長引かせて、赤霧先輩は思い出したように呟つ。

「ああ、そういうや、うちの学校にも死んだ奴いたなあ」

今更だった。

実は赤霧先輩は先輩と呼んではいるものの、実際は他の学校の生徒である。ともかく他校の情報が手に入るならそれもいい。なので、一応聞いておく。

「誰ですか、それ？」

「知らねえよ、そんなの。興味ねえよ」

……だと思った。

この人はそうだろうな。

「……でも、自分の学校のことですよね」

「そうだ、つまりまたま同じ学校に通つてただけの他人の話だ。他人に興味はねえよ、その末路にも噂にもな」

本当に情報収集には不適切で不適当な人間ばかり揃つてゐるんだなあ。

「で、巫月。この件にはどうこう対応で行くんだ。金にはならねえ

だろ?」

「そうだな、一銭にもならないな」

「俺は刀で斬れないモノには興味ないし、な」

……刀で斬れないモノね。まあ、ハミは食べられない話なら、興味は持てないだろう。

他のメンバーを探しても、おそれらへは似たようなものだ。所長は頷いた。

「私はこの件には関わらない、あとは個人の自由だよ」

「……そうですか」

ぼくはそれを聞いてから、とりあえず魚の煮付けでも作ることにした。

所長の晩ご飯のおかずと、密かにぼくの晩ご飯のおかずになるようだ。

*

翌日、学校じゃ全校集会が開かれて、その後普通に授業があった。

意外に早く葬儀は開かれることになり、今日の放課後に樋口カナと同じクラスは代表者が出席し、あとは親しい人間のみの出席となつた。遺族への迷惑を考慮し、全員が行くと言つことはないらしい。

それでも、同学年全体の中でも、それぞれ面識のあるヤツは出るつもりらしく、うちのクラスからも、耳に入る限り結構な人数が出ることになつたようだ。

それとは別に、どこかのクラスでもショックだとかで寝込んでいる生徒は少なくないようだ。

なんとも細い神経をしているものだ、とそつ思つ。自分より、神経の細い人間がいることには驚きを禁じ得なかつた。

学校の授業の合間にすら、その雰囲気は教室を支配し続ける。同級生が、……人が死ぬつて高校生にとつてこんなに重いことだつたのか。

相変わらず、サンドイッチやらなにやらを食べているハリにぼくは話しかけた。

「あのさ、樋口力ナつて」

「んー」

「結構、友達が多かつたんだな」

葬儀に対する参加者だけでなく、学校全体、と言つより学年全体に包まれた雰囲気を指していった。おそらく、他の学年だともう少し明るく授業をしているのだろう。……ひじく言えば、娯楽の一種になつてゐるだろつ。この学年ではありとあらゆるクラスでここで通夜でも行われているかと言う様相だつた。

「……多いからあ、友達つてこうんだと思つよお?」

「は?」

「だつてえ、ダチ。だもーん」

「……そうですか」

友達はまあ、確かに複数形の意味だらうけどさ。たぶん。

……そんなことを聞いたかつたんじやないんだけどな、ぼくは。

と思つと、珍しく小声でハリは言つた。

「でもさ、中身が伴つていいかは別だよ」

「なにが」

「別に。葬儀に行く連中でどれだけの人間が、樋口カナがなにに苦しんでいたかを理解しているのかな、と思つてさ」

「そりやどういう意味だよ」

「所詮、友達なんてそんなもんつてこと。数え切れないほどいるからこそ、友達、複数形。

だとしたら、友達なんて数え切れないほどの人間のうちの一人つてことにしかならない。それを理解して付き合える人間がどれだけいるのかな、つて」

「人間にとつて、友達なんて全員がその他大勢つてことか？」

「そうだよ。その証拠にほら、一人くらいなくとも生きていける。だいたいさ、本当に相手のことを理解して助けようつて言うのが友達なら、この世の自殺する人間は全員友達がいなつてことになるじゃないの？」

でも、実際に彼女は死んだ。自称友達はいっぱいいるけど」

「……大切に思つてくれてる友達がいても自殺するかも、だろ？」
「そうだね、相手を大切に思つてると本人は思つてるだけで、相手のことを理解はしない自称友達なんて腐るほどいるしね」

「……お前」

「人が死のうとしてるのに、その苦しみを理解も出来ない、助けることもない。それが友達なんだよ。たまたま一番近くにいた赤の他人」

「……」

「そうじやなくてもさ、本当に樋口カナがかけがえのない友達なら、自分も後を追つて死ねばいいんだよ。かけがえのない、ならね。でも実際は換えが聞くでしょ？」

かけがえのない存在なら、いなくなれば生きてはいけないだろ？

ハミはそう言つ。

ぼくはその言葉に答えられず、それから逃げるよつに言ひつ。

「……お前、とことん人間不信なんだな」

「違うよ、知つてるだけ。百人の人間に百人分の愛情と友情与えられる人間なんていないつてことをさ。人間一人が持てるのはその人一人分の友情と愛情だけ。万人を愛せる人なんてだからいない。人間だけじゃなくカミサマにも」

「……そうかもな」

それはずいぶん寂しい話だとは思つけど。

「……でも、たぶん事実なんだろう。常に友達同士で助け合いつていうのが行われてるなら、皆無つてことはなくともそつそつ死人なんてでないだろ？、今回みたく。

その真相が殺人だろ？が自殺だろ？が、だ。

「でも、私は思うんだ。本当に大事なモノは護るもんだつて」

「……確かにそつあるべきだな、人ひとり護るなんて難しいにもほどがあるけど」

「それはそつだよ、だいたい二人も三人も救えたらスーパー・マンでしょ。少なくとも私には無理」

まあ、ぼくにも無理だ。

「だから私は……たつた一つがあればいい、そつ思つ

だち、と言う複数ではなく。

たつた一つの護りたいもの。かけがえのないもの。

そんなものはほぐにまないから、ほぐにまわのハリの皿葉と真剣なその眼差しがまぶしかった。

「……へえ、お前って意外と情熱的だったんだな」

「ほぐがそう茶化して言つとハリは一ヤツと笑つて、こつもアーヴンで言つた。

「ハリは、田の食べ物に、田の愛情と食欲を引かれるからねえ」

「やつぱ食べ物の話かよ」

「……まあ、そんな感じの話だったよねえ？」

そんな話した記憶はねえよ、って言つたが、本当に朝からよく食つヤツだよな。

……なんか見ると幸せそうで、たまに羨ましくなるな。

「つて、そういうや、あれからなんか変つたことあつた？」

「あれからあ？変つたことある？」

「いや、電話したじやん」

「……あー、まだ言つてたんだあ」

「おこ、昨日の今日だぞ？」

もし、それでほぐが忘れてるとか、もつじつでもこいなんて風に意見が変わつてたらいい加減にもほどがあるだらつが。

「なんにもないよお、あつたら話してるつてえ」

「……それに関しては信用してないから」

なんかあつても一人で黙々と食べて終わるそつなんだよ。

ハミがわざとらしく泣きそつた顔をする。

「うー、信用されてないんだあ、ハミ。ちよつと傷つくなあ

「傷ついてないで反省してろよ」

ぼくにじやなくて、この場合本人に問題があるだろう。

……ハミと話すよりは、大神さんに真意を問い合わせばいいんだろうけど、その本人が今日はいないし。

もう、なぜか今日は大神さんは学校を休んでいた。

……樋口力ナの件なのか、純粹に体調を崩してなにかはわからな

いけど。

ハミは会話の内容に関してはそつそつ本音を話していくことって多くないから、なんか信用できないんだよな、てか、さっきまであんなやりとりをしておいて、次の瞬間にはなんか普通に食つてるし。

でもまあ、それは別にいいか。

話は変わるけどぼくは、人が生きていく上でなにか執着できるモノがあると言つことは、とても素晴らしいことなんじゃないか、とは思つている。

それはおそらく生きているこの世界への執着になる。

それは言つてみれば、充実した生活への繋り、生きる上での活力、原動力になるんじゃないだろうか。

で……まあこのように言つまでもなく、ハミは食べることにすこく執着しているわけで。

だけど、それで全部キャラになるわけではないと言つが、ハミの場合その欲求を優先にして、全てをないがしろにしそうなイメージがあるのが問題だよな。食欲を理由に、会話の中で嘘を吐く理由にすらなり得るくらいだし。

……でも、もしモノへの執着が生への欲求になるとすれば。
もしかしたら、自殺（？）した彼女には、樋口カナにはそれがな
かつたということなんだろうか。

いや、なにか違うような気もする。

もしかしたら、ハミと同じように全てをないがしろにしてしまつ
ような、欲求、衝動があつたのかもしれない。

まあ……確証がある訳じゃないけど。

それでも、なにか、ぼくの見えていないモノが、まだどこかにあ
る。そんな気がするのだ。

なにが起きたのかわかつても、それがなぜ起きたのかわからなけ
れば理解したと言えない。

ぼくは探偵じゃない、事件の犯人がわかつたから追い詰めて終わ
り。と言つ「」ことが目的なんじゃない。

「なあに？」

突然、ハミがぼく尋ねる。

……なんだ？

「いやまあ、さつきからトオくん、ハミの「」と見てるからあ
「……見てたかな」

ぼくは意識はしていなかつたけど。

「見てた」

そう、ハミが断言する以上はそののだろう。

「ほくは仕方なく、場をしのぐために先ほぞまで考えていた」との一部をハミに話しかける。

「こや、ハミさん、やうやうて食べ物を食べてる時つて幸せなの?」

「……なに、いきなり」

「こや、なんとなくだけや」

「んー、たぶん。幸せだと感ひよ、満たわねり感じまする…

…よお

そう、か。

まあ、ぼくだって美味しいものを食べてこる時はやうかもしけな
いけど。

「それつてどう、幸せなことなのかな? ここじとだけ?」

「なんかあ、変な質問するねえ」

「うん、ちよつと妙な考え方」とこはまつててセ

「楽しいの? それえ。すこしめんどくせうつだなびよ。まあい
いかあ……ハミとこひせわあ、じりうかと並べよくないのかなつ
て思う」

「へえ……? ……そつなんだ」

これは意外だ。

ハミも授業中とかに食事をしててよくない、みたいな考えがあ
つたつてことだらうか。

「たぶん、トオくんが考えてるのはあ、また……別のじとだよお
「別のじと?」

「うん、ハミはあ、食べると幸せ……だけや。それもちよつと
の間でさあ……すぐお腹が空いちゃうんだあ
「その食欲は本気で謎に値するな」

栄養はどうこに行つてゐるんだ?

頭と身体の発育には供給されないと想つたが

「でも、結局さあ、食べても完全には満たされないわけでしょお? 延々と満たそとすんだけど、また満たされなくなる。なんか意味はないことを延々とやつてゐる氣がするんだよね」

「でも、人間が生きてるなんてそんなもんだろ」

「まあねえ、でもさあ、もっと満たされる方法があるのかなあ、とは思うよお」

「なに、それ?」

「……それは内緒だねえ」

そうですか。

手がかりになりそうな、ならなそつな。

……まあ、ならないな。

普通の人とハミを比較するのが間違つてゐるのかもなあ。なんとか情報を集めるのだとしても、その方向性がわからないとどうしようもない。

現場百回……にしても、日中に普通に立ち入つたところだなあ。

……いや、現場か。

その方がてつとり早いかな。

「あのね、ハミ」

「んー? なあにい?」

「ハミに探して欲しいモノがあるんだけど」

「……なにを?」

「なにをつて言つか……あつてはならぬこのもの」

あよと云ふとしたようにハミは首を傾げる。

まずはこれで、とかかりは出来るだらけ……など。
ぼくはそのこと 자체にはどうでもいいと思ってて。
世の中の大半の問題は問題そのものを発見するよりも、どうそれ
と接していくかの方がよほど問題なわけで。

どうしたものかなあ。

ぼくが人と関わることを避けていることの理由の一つが、その人
と関わる以上、その人間を理解できなければ意味がない、と思って
いるからでもあった。

でも、まったく持つてそんなことは面倒くさいわけで。

本当にどうしたらいいんだろうか。

……私は私を殺したいと思つた

樋口カナはびりびりよくなつて、ただその場にいた。

あらゆるじとじ無関心だつた。

だれが田の前にこようど。

だれが田の前にいようと。

だれがなにを言おうと。

だれが なにを思おうと。

びりでもよかつた。

彼のいな世界に興味はなかつた。

ただ、樋口カナはそこにいた。

必死にだれかがずっと話かけていたようだつたけど、びりでもよかつた。

うつとうしくはなかつた。

話を聞こうとか、聞きたくないとかそんなことすら思わなかつたから。

いようがいまいがどうでもいい。

……彼以外は。

そうして、彼の葬式を終えた頃、樋口カナにはあるうつすらとある人物が見え始めていた。

どこかで見たことあるような顔の、いつも日常的に見ていたよ

な顔の女。

悲しそうで寂しそうで、自分はまるで孤独だと言わんばかりのそ

の顔が。

樋口力ナはなぜか気に入らなかつた。
まるで自分が被害者で、この世で一番不幸な存在だと思い込んで
いるようなその顔が。

それは自分だつた。

もう一人の自分がそこにいた。

なにを言つでもなく。
なにかを伝えようとする意志もなく。
樋口力ナは樋口力ナを見ていた。

「アイツ……」

気に入らない。

あれはいつたい何様なんだ。
なんのつもりでここにいるんだ？

だれにも興味はなかつたけど、それだけには憎悪をもてた。
私は私を殺したいと思つた。

そして、きつと。

そいつもそう思つてゐるんだろうと思つた。

私も私を殺したいんだろうと思つた。

彼と同じだ。

私もそなうなるんだうつと思つた。

……俺がここで寝る理由

9 .

俺は事務所に入るなり、速攻でソファーに寝そべった。

頭から「コードをかぶり、安っぽい蛍光灯の光が当たらぬようする。

こここの事務所のソファーは、金を掛けているのかやけにふかふかしていて寝心地がよかつた。

「……赤霧、お前はここに寝に来ているのか？」

巫月が特に興味もなさそうな声で言つた。

俺はより深くコードをかぶる。

「……んだよ、悪いかよ」

「いや、問題はない。ただ自分の家があるだろ？と思つただけだ」「最近、つるさくて眠れねえんだよ」

「つるさって」

……俺は巫月の言葉を無視する。

自分の部屋が安らぎからほど遠い場所になつてるのは正直、俺からすれば笑えない話だった。

落ち着けるのはこここここの間ぐらいいだ。……今のつるさっておくれない。

なのに、巫月は関係なく俺に話しかける。

「うるさい……ね。誰か来ているのか」

無視する。

頼むから……寝かせてくれ。

「お前のマンションは防音設備もよかつたからな、隣人の騒音ではないだろ?」

引き続き無視する。

「環境に問題でもあつたか?」

「…………」

「…………プライベートの話なら突っ込みはしないが

「…………」

「…………確かにお前は凹鏡とは仲がよかつたはずだが、あれはうるさいところ……」

「うるせえよ! むしろ、アンタがうるせえよ! つか、俺は凹鏡とは仲良くない!」

つい起き上がりつて巫用を怒鳴りつけてしまった自分に気が付く。

……なんでこんなにくだらないことを気にするんだ、コイツは。

「別に……お前に関係ないだろ」

「まあ、な。ただ体調を崩す要因があるんだつたら放つてはおけないだろ?」

「……アンタは俺の母親か?」

「……一応の保護者には違ひないが?」

……その通りだった。

俺がこうしてある程度の自由が保証されているのも、巫月が保証者としていてくれているからだ。……獵犬を扱う狩人として。

「いいのか悪いのか、年齢もさほど離れていないしな。相談ぐらいならのれるだろ?」

「余計な気い回してんじゃねえよ」

そう言つて、俺はコートをかぶり直して横になる。

俺は金さえあれば、一人でも生きていけるつもりだ。

その自由が保証されていれば、と言つ誇れない前提が必要になるのが情けないことこの上ないが。

「……赤霧」

「なんだよ」

「自由になりたいか?」

なにを言ひ出すんだ、コイツ。

「……そりや……そうだろ」

「……そのためにはある程度の実績がなければならない。協会に対し貢献すること、相応の期間を過ぎて、自身を社会の中で安全に生活出来る存在だと示す必要が」

「わかつてゐよ、何度目の説明だ?」

「ここに来る前にも、来たときにも説明された。

いつかは自由になれる、巫月がそう言つたから俺はここにいる。そうでなきや、どうに死ぬ氣、いや……殺されてやる気だった。

「……私は」

ひどくつらうつた、切れの悪い調子で巫月は続けようとする。

「もし、お前が……」

セレオまで言ひ終わって巫月は……。

「……いや、余計なことを言つたとこつ自覚はある。忘れてくれ

そうして言葉を切つた。

「イツ、またろくでもないことを考えてやがるな。

俺はその様子からそう感じ取る。

「……巫月

「……なんだ？」

「恨んでねえし、後悔もしてねえよ」

そのまま言葉は途切れる。

パタン、と本かなにかを置くような音がし。

「……どうか」と、そう小さな声で返答があった。

俺はコートをより一層深くかぶり直し、顔を隠す。

アホだ、こいつ。

もし、俺がそんな風に思つてゐるんだつたら。

……事務所を寝床になんてしてねえだらうが。

誰も彼も、気を遣い過ぎなんだよ。

……」

「ねえ、今日も事務所に行くの?」

ハミがさう聞いてきた。
ぱくは頷く。

「ああ、行くつもりはあるよ」

「……真面目だねえ」

「ひみそこな」

……昨日と変わらなくとも。

それでもやれる」とはいつおきたい。

「ハミ」

「なあに?」

「昨日の件はや、今までの事件と関係あると感つか?」

「……ど、だろねえ、関係なくもないかもしれないけど、でも、せもしそこまで深い繋がりがあるなら、昨日のひみそかに浮かび出しかかってるんじゃないかなあ?」

……巫円さんだつてバカじやなこじხ「あ

「まあ、確かに」

「ど、せ、たいしたことなこと感ひよ? ハミとじては、また食事が出来ればいいけどねえ」

「……ハミはそういうの」

「うそ、だいたいハミは困らなこよ、今わいなこが起ひのうじよ

……」

そこまでハミは言ひて、ぼくの手元を覗き込む。

ハミは新しいカレーパンを開けながら言った。

「で、ねえ、さあからあ、いったいなにを読んでるの?」

「なにって……」

ぼくは自分の手元を返してみせる。

その表紙がよく見えるよ。」

「……別に、詩集だよ」

「……詩い?」

「……詩」

なんか、今ひどい顔してみられたような気がする。

「なんかあ、大量に本が机に載つてるけど、これはあ?」

ジャンルと言ひ視点で見ると、内容はバラバラに積み込まれていた。

『近代の超常現象』の解説や、世界各地の古い伝承を集めたもの。『すぐに使えるわかりやすい心理学』や心霊現象などの怪談特集もの。

有名な著作者の小説も何冊か混じっていた。

「……これから読むんだよ」

「全部?」

「まあね」

「……本読むの、趣味だったけ?」

「3分以上活字を読むと正直吐き気がする」

「うわあ、……なんでそれで読んでるのかあ、ハニ、わかんないよ
お」

「ほくも本氣でよくわかんないよ。
じうこいつ気分でこれ書いたんだ、作者。

恥ずかしくないのか？後世の人間にそれも何万程度じゃきかない
人数に読まれるんだぞ？」

息子どじりか、自作の詩を孫の孫にすら読まれるんだぞ。……理
解できん。

ほくだつたら自分の子供にすら読ませたくないな。じうこののは。
とにかく、あらゆる意味ですごい神経の持ち主だったに違いない。

その割に、……じうでもここ」とで悩んでるよな。なにこいつら、
今朝の夢の内容ぐらいでいちゃう一喜一憂しているんだ？

「読んでて……楽しー？」

「……その質問に答えるよりはおもじりこよ。」

「うわあ……ひどい」

いや、その質問する神経の方がひどいから。
つて言つた、楽しいかわかんないから読むんじやないのか、普通
は？

「ほくは違うけど。」

慣れない作業に諦めずに読み進めるが、ピント来るものはないにも
出て来ない。

「お皿(い)飯食べないのよ？ 曜休み終わっちゃうよ？」

「……昨日、食べたからいー」

「意味わかんないよ！」

今それどこかにない。

「……なんかあ、今日のこつもよりトオくん変だよお？ すここ意
味わかんないし、いつも意味わかんないけどお」

……ひどこことを言われたが、今はそれどこかじゃない。と自分
に言い聞かせる。

「わういえばあ、わつきの……トオくんの頼みだけどお
「……うん
「田中は無理かも。他の人の気配が多くあるし」
「……放課後なら？」
「……それは出来るけどお、たぶん、場所も変つてこないだりつ
い
「頼むよ」

「まへがそう言つてもハマは納得してこないようだった。

「あのれあ、今更そんなの見つけてビツクさんのお？」
「……どうあるつて
「たぶん、もう保たないよお。あれからもひつぱうじー田舎ざるわ
けだし」
「……なら、今日がまつぱうじーとか

急がないと、な。

まへがまへがまへと、脣間にじわをハマは寄せた。

「だからまあ、どうすんのお？ 助ける気なのお？」
「……別にまつぱうじー……」

「もしさうならさあ、そんなの意味ないから。もつも遅れだしぃ」「わかつてゐよ、だから今出来ることをするんだ」「……なにも出来ないよ」

そんなことを言われる筋合はない。

ぼくはノートを広げて、なにかを書き下す。

書き下しては書き換えて、書き消して、また書き下す。

……最悪、授業中にもやればいいか。

おしゃべりしてるのはこへりか有意義だらう。

「だから、なにしてるのさあ？」

「……悪あがき」

「意味わかんないけど」

「ぼくは初デー^トの時は、プランをきつと練るタイプだわ」

「……えつ、したことあるの？」

「一度もない」

「……そこまで思いつきり断言する人も、なかなかいないと思つよお~」

好きな子の手を握るだけいか、話したこともない。と書いても過言ではない。

……格好悪いから、言わないけど。

ふと思いついて話す。

「ハハはは」

「……なにさあ」

「どんな状況なら自殺する?」

「そもそもしない」

……ですよね。

ハミはしないよね。

「強いて言つならあ、食べるものなくなつたらするかなあ？」

「それ、必然的に死ぬしね」

参考にはならなかつた。

突然、ハミはぼくの耳元に顔を寄せた。

「え？ あ？ ……な、なんだよ」

「……いや、ijiでキスするつもりはないけど」

「そんな期待はしない！」

つて言つたが、ijiでつてなんだ。ijiでつて。

「そういうのが好みなら考えるけど？」

「そういうのがなにを指すかはわからないが、ぼくに妙な性癖はない！」

たぶん。

……今のところ。

ハミは耳元で小さな声で語る。

「遠野、死ぬ理由なんて人それぞれだよ」

耳が息に当たつて、じゃなく、耳に息が当たつてくすぐつたい。

「そんなものに絶対的な答えなんかない」

「えへ、うん……まあ、正論だな」

なぜかな。なんか、頭が回らないんだけど。
やけに息が当たってるや、おい。つか、わざと当たらない? ね
え?

うわ、なんかカレーの臭いがする! それとなんかいじと混
じってるよ! そこは統一してよ!?

「……遠野がなにを考えてるのか、私は知らないけどや」

「……ああ」

本当に?

本当に、今現在お見通し気がするんだけ?!

「冷静になりなよ、……遠野」

「……ぼくは今現在進行形で冷静です」

「ふうん?」

「……本当に!」

「まあ、こいけどやあ、いい? 遠野」

「……」

「本人に聞くしかない」とを考えるなんて、時間の無駄だよ

本人に聞くしかない。

それは……。

「そう、だな」

「でしょ?」

「ぱく?」

「……」

ハミは元のよつて椅子に座り直し、コーヒー牛乳を飲み始めた。

「ぱく?」

「つむ、おい、今になにー!？」

なにかに今、耳を挟まれたぞ。なんか……暖かいなにかにー?」

「……なにつて……なんだろ、味見?」

「するな! 無断で、こんなところで、しかもいきなり!」

「時と場所を選べばしていいの?」

「じゃなくて!」

「する前に会図は必要ってこと? ……案外、乙女だよね、遠野つ

て

「違うー。」

「そうなんだけど、違う!」

違うとなんか言い切れないので、違う!

「でも、……なんかあ、そういうところが逆に悪くなになつていうか
あ……」

「くそつ、もういこよー。」

なんか……未だにドキドキするんですが。

……こんなんだから変な噂されるんだ!

ぼくが悪いのか? ぼくの「ティフォンスが悪いのか?
でも、まあ、実際の所。

「……ハ!!の意味!」とも一理あるんだよな

「人前でのプレイに関して?」

「お前はさつきまでぼくにどんな話してたんだよー?」

そんな「ティープな話はしてない! 少なくともぼくは!」

「……セイジやなくて、実際に死んだ理由なんて本人に聞くしかない
い……んだよな」

生きてる人間がなに言つたって、それは予測でしかない。

「わうだよお、だいたいたあ……」

ハミは言つ。

本当の意味での自殺なんて、理由なんかないんだから。
わう、何でもない」とのようだに、ハミは言つた。

「……そつや、どつこつ意味だよ」

「……わあ、ねえ」

いやいやとした顔で、ハミはぼくを見た。

……。

……ハミ。

わうやつて意味ありげな科白で、意味もなくぼくを惑わすのは、
いい加減やめてくれ。

……私は私に殺されるに違いない

11.

私は学校に通うよくなつた。

どうせ、そのうち死ぬのだ。

いつもつきまとつてゐるそいつは、いつか私を殺すだらう。
私の望みを叶えてくれるだらう。

彼を彼が殺したよ。

私も私に殺されるに違いない。

それはすこしだけ、嬉しさと誇りしさがあつた。

私は学校に行つた。

なにも変らない日々がそこにあつた。

彼を失つても、続いていく世界があつた。

私は世界を憎悪した。

それでも、私は学校に行つた。

世界はひどくうるさく。

耳障りで。

目障りで。

世界に対する意識を取り戻せば、取り戻すほどに。

認識を持てば持つほどに。

酔くて、鈍感で、無関心で。

そのくせ、小つねやへて、咲やとへて、余計なことばかりしてくる。

もう邪魔はしないで。
私に構わないで。

「こんな世界なくなればいい」

……私はそれでも学校に行つた。
その背後に私自身を引き連れて。

いつも同じことを想つ

12.

ぼくは教室に足を踏み入れる。
慎重にゆっくりと。

まるで、水面に波が立たないようにするよう。ぼくは物音も立でずに一步、一步と進んだ。

時間は放課後。

校舎からはほとんど他の生徒の気配はしない。
残つてこるのは、ぼくと……。

次第に元通り田の前に現れる気配。

それはまずは影として、次第に形が見えるようになり、田をじらしていくうちにそれは女の子だとわかった。いや、もともとわかつてはいた。

ハミに調べてもらい、その存在がまだいることを確認し、他の余計な気配がないこの時間を見計らってぼくは来た。

彼女に会うために、彼女の気配を他の気配が隠してしまわないように。

ぼくとハミの隣の教室、つまり、彼女自身のクラスで。

「やつぱり、まだ残つてたんだね」

ぼくは彼女に話しかける。

「うして話すのはおそらく初めてだろ？ うか。

「……遠野くん、ね」

それは、ぼくが大神アスカと見間違えた人物。 そう、ぼくは樋口カナと会いにここに来た。

「……ぼくのこと知つてたの？」

「まあ、ね。うして話すのはたぶん初めてだけど」

「う、だよね」

あまり顔は広くないつもりなんだけど。
なんかまざい噂広まってるのかな、やつぱり。

「で、その遠野くんが私になんの用？」

「いやね、なんでこんな時間になつてまで残つているのかなつて」

ほら、とぼくは窓へ目線を促す。

真つ赤な光が窓から差し込む光景がそこにあつた。

「もう、放課後だよ」

「……うね」

彼女の瞳をのぞき込む。

そこには光はなく。

その目は夕暮れの赤い光を映すことはない。
死者の目……といふものなのだろうか。

「なんかこの教室に用事でもあるの？……樋口さん」

「…………」

ぼくは彼女に笑いかける。

「……ねえ、いつこう話があるんだけど、知ってる？」

彼女の瞳はぼくを見た。

その瞳にぼくは映らない。

だが、言葉は聞こえている。

きつと、ぼくには彼女を本当の意味では理解できないだろう。
だから、ぼくは……。

静かな声で紡ぎ始めた。

「誰もが眠る静かな夜、私の恋人はかつて此処に住んでいた」

彼女はぼくをいつたい何事か、と。

そんな顔で見る。

ぼくはもう一度、笑いかける。

「あの人ももうこの街にはいないけど、この家はまだ此処に残つて
いる」

彼女の瞳はぼくを映さない。

だけど、彼女のその目は大きく見開かれる。

「私はここからその家を見上げる」

彼女は痛みを知っている。

「こ」の手が大きく震えて、鈍く重い痛みが私を襲う
「その姿を見て私の心臓は激しく鳴つた」

それはぼくの知らない痛み。

僕の知らない 傷。

「私の家の中に住まう影」

「月が照らすその影はいつかの私」

「私を見下ろす私の姿」

「ああ 貴方はもう一人の私 その青ざめた顔」

「そう 貴方は去りし日の私」

「一度とは戻れない日の私」

「幾夜 此処に悩み佇んでいたのだろう」

「私は幾度となく同じことを繰り返す」

「そして……同じことを想つだら」

彼女はいつかしか、自身の痛みをその詩に重ね合わせていた。
痛みや傷を持つ人は、それに触れるたびに思わずにはいられなくなる。
たぶん、それが人間の弱さだ。

ぼくは 。

「永久にそこで悩み続けるのも美しいのかもね？」

そう彼女に語りかける。

もうその影を見上げてくれる人はいなくなつたけど。
彼女の場合は見下ろした、いや、見限つたわけだけど。

彼女ははつとしたよつこぼくを見、口を開いた。

「……やうでもない、よ」

「やう……やうだね。いい」とばかりじゃない、かもね」

樋口さんがやうにやうなのだろう。

想い続けることは美しい。

残留する想いは不变かもしれない。

だが、変らない想いを抱き続けるのは、

治りない傷を持ち続けるのは、きっと、とても。

……つらいことなのだ、とやう思つ。

「女の子つてや」

「……うん?」

「やつさと終わつたことはアルバム燃やして忘れて、ああ、自分のいい経験になつた……そう一方的に勝手なこと言つて忘れるもんだ」と……ぼく、思つてたんだ

「……それ、たぶん大正解

「やうかな」

ぼくは樋口さん見てたらわからなくなつたよ。

樋口さんは笑いながら話す。儂げな笑顔。

「女つてさ、基本忘れるんだよ、たぶん。自分が生きてくのに都合

が悪い」とは」

「……うん、それはなんとなくぼくも思つてた
「それを女子に面と向かつて言つ? でも、ま、実際なんだかんだ
女友達でおしゃべりして、昔の暴露話なんかの格好のネタになつて。
あつと最後には楽しくやれりやつんだ」

「う、ううううに話すから。

ぼくは思つた。

「それが許せなかつたの?」

「……」

彼女から返答はない。

その代わり、彼女は問いを返した。

「わ、わの……わ」

「……うん」

「さつきのは……なに? 遠野くんが考えたの?」

「いや、違うよ」

ぼくは詩人じゃない。

そうだとしても、自作の詩を人前で発表できるほど厚顔な人間じ
やない。

「ハインリヒ・ハイネって言うドイツの詩人がいてさ、その詩をぼ
くなりに解釈して、まあ、訳してみた」

「へえ、そんなことが出来るんだ」

「いや、あれですよ。ぼくはドイツ語なんて読めないですよ?」

「……わかってる、苦手教科は英語なんですよ」

「誰がそんなことを!?」

「なんだ違つの？」

いや、事実だけど。
つか、事実だからこそ広めるなよ！」

「でも、あれだね。男子ってみんなそういうの知つてるの？」
「……いや、そういうわけじゃないと思つよ。ぼくなんか、昨日今
日に知つただけだし」

詩なんて普段読みません。

同年代の男子代表で赤霧先輩もアウトだろ。あの人気が詩とかなんとか読んでたら、正直鼻で笑つてしまつ。うん、笑つた挙げ句、思いつきり見下してしまつ。

「ふうん……そういうものなの？」

「うん、詩なんて興味ない人が大半じゃないのかな」

「そう……なんだ」

どこか深く、地面の下を覗き込むように床を見下ろした後、彼女は言つた。

「私の好きな人はさ、そういうの書いてた」
「へえ、変つてるね」
「そう？」
「うん、ぼくには無理だな」

そういうのつて、成人してから見たら悶絶しそうだ。
若いうちの恥を搔くつていうのはいい経験だとしても、可能なら
形には残したくない。

「……なんていうのかな、楽器とか演奏する人でさ」

「へえ、格好いいね」

「うん、バカみたいだけど、まあ、格好よかつた」

「ぼくは、……そういうの出来ないから羨ましい、かな」

「あー……でも、うん。ウジウジしたヤツでさ。なんかもうソイツ見るたびに、苛ついて苛ついて、もう気持ち悪いたらなくて。すつごく前のことを常に後悔してんの」

「へえー……」

「なんだろう、なぜかぼくが責められてくるような気分になるんだけど。

「えーと、それはもう済んじやつてどうしようもない」とばかり?「そう、そんなんで生きるだの死ぬだの、幸せだの不幸だのって騒いでんの。どう思つ?」

「どう思つて……」

たぶんその人とぼく、同類だと思つ。
ぼくは女らしい人間だった。

「……そういう人つて、周りのこと見えてなかつたりするかもね」

「え?」

彼女の表情に理解の一文字が浮かんでなさそうなので、ぼくはもう少し、言葉を付け足す。

「いや、周りを見る余裕がなさそうつてこと

あれ? だからぼく、他人に興味が持てないのか?

自分で言つていて、納得しちつになつた。

「……んー、まあそりこいつはあつたかもね」

「ああ、やつぱり?」

「うん、周りの想いとか全部ないがしろにしてや。騒ぐだけ騒いで迷惑掛けっぱなし」

……じゃあ、ぼくもやつなんだうつな。あつと。

「うん、みんなごめん。

「……そんなんで、たぶん私の気持ちなんか気付かなかつたと思つよ」

「え?」

「アイツ、私といふ時、ずっと自分の好きな女の話してたから」

「あ、ああ、そんなんだ」

……ひどい話だ。

てか、付き合つてゐる訳じやなかつたんだ。

「でも、好きだつたんだ」

「うん、今となつてはなんとか、わかんないけどね」

「今は好きじゃないの?」

「……たぶん好きだよ。でも、アイツと付き合つても幸せにはならなかつたと思つ」

「……うん」

「誰かと付き合つて幸せになるつてさ。一人でもそれなりに幸せに生きて行けそうなヤツを選ばないと無理だと思つんだよね、自分もそれぐらい強くなきや無理と思つしさ」

「どういつこと?」

「……誰かと付き合つても、ホントは人間一人ぼっちつてこと」

……なんか難しい」と呟つた。

「なに、遠野は誰かと付き合つたことないの？」

「……ないけど」

「……へえ、そっか」

「なんですか」

「いや、ちょっと意外。もうやつてう相手いるのかなと思つて」

「そう言つ相手？」

「うん、婚約者的な」

「いつの時代だよ！」

いやいや、そりこいつじやなくして。と樋口やんが焦つたよひこ
言つ。

……本気の科白だったのか。

「なんか、そりこいつ霧岡氣だからわ」

「霧岡氣？」

「話してから思つたんだけどね、私は、男女間で友情はない、と思つてんの」

……いきなりなんだ。

「彼はさ、私のこと親友だとほざいてたけど、そんなのバカみたいな話です。実際、私はそう思つてなかつたし」

「……うん、まあ、そうだよね」

「でも、アンタはさ、向こいつがどう思つてよつがそりこの真つ先に無視できるんだろうな、って思つて」

無視する？ ……相手の想いを？

んー、そういうことは今まで考えたこともない話だつた。
どうだらうか、……そう言われたらそんな気もするけど。よくわ
からない。

「……でも、それと婚約者どどういう関係が？」

「もう、最初からそう言つ相手が決まつてゐんなら、そういう人も
ありえるのかなあつて思つて。男つて基本、手を出せる相手には出
すもんだと思うからさ。出さないのなんて、他の女に完全に目が行
つてゐるか、相当魅力がない時ぐらいでしょ？」

「……それに関しては否定しないけど。でも、残念ながらぼくには
好きな相手はいないよ」

本当に残念なことに今も昔も。
だから、好きな人の手を握つたこともなければ、いつさい話した
こともない。

もし、そういう相手がいたら今より多少人生楽しくなるのだろう
か。好きな人がいる人を見て、そだとはまったく思えないのだけ
ど。

「……そつか、じゃあ　」

「うん」

「ま、もうこの話は私には関係ないけど」

「なんだそれ」

ひどい話の切り方だつた。

女の子って、みんなこうなのだろうか。
ハミもこんな感じの一方的な切り方する気がする。

「それはともかくさ、彼もアンタみたいな感じだつたら良かつたの
かな。それとも、今よりキツかつたのかな？」

まあ、どうちこじろ死んじゃつてたと黙りなが。

そう、彼女は冗談めかす。
死ぬほど笑えない冗談だ。

「もしかしたらだけども、恋が上手く行く相手だったら好きにならなかつたかもね」

ぼくはなんとなくそう思つた。
上手くいかない相手だから、恋しくなる。

「……かもね」

彼女もなんとなくなのか、頷いた。

「……結局似たもの同士だつたなのかな」

「なにが？」

「彼さ、好きな女が死んだらしいのよね。私はその女と直接会つたことは……まああるにはあるけど、話したことは何度かしかなかつたから、いまこひアレだけど」

「へえ……」

「それは、何とも言い難い話だな。
本当に、何とも言い難い。」

「彼ひどく落ち込んでき、元気なくつて。私、これでも必死になつて彼の所通つたんだよ？でも、まるで効果なくて」

「……うん」

「しばらへやつしたら、勝手にふつられたって言つて学校通い始めて」

「学校に？」

「うん、で、私も複雑な心境ながら、一応安心してたんだけじこきなり電話来てさ、家に来てくれないかって」

そしたら……。

そこまで話していた彼女の顔が一気に歪む。

「死んじやつた」

「死んだ？」

「うん、自殺」

痛そうに彼女は胸を押さえる。

まるでそこになにかが刺さつているかのように顔を歪ませ、胸にその爪痕が残るんじゃないかといいつぼどに抑え付けている。

……彼女はもしかしたら覚えているのかもしない。

人でなく、残留する記憶として、消えることのない記録として、決して色あせずにその時の想いを持つているのかもしない。

だとしたら。

「ぼくはなんて残酷なことをしているんだ？」

「ねえ、私、後追い自殺つてことになるの？」

「さあ、どうだろ？」「

そういう話をぼくは聞いていなかった。
だから、ぼくは正直に言った。

「……君とは仲良くなかったしね、わからないよ。正直な話興味もなかったし」

嘘は嫌いだし、『まかしも嫌だ。出来るなら吐きたくはない。彼女は複雑な顔をして見せた。

「まあ、そう……だよね」

意外にも納得する彼女。気分を害した様子はなさそうだったが、何とも言えない表情で言葉を続けた。

「……私は、なんかさ。もし、後追い自殺だと思われてるんだったら嫌かな」「嫌?」

「私は、彼のために死ぬんじゃないの。私は私が嫌になつたから死んだの」

「そつか……ならぼくがそれを伝えておくよ」

「……誰に?」

「一番わかつてくれそうな人に」

「……んー、まあ、じゃあ……それでいいや

彼女の姿がどこか薄くなつたように感じる。もう日も落ち、あたりは暗くなり始めていた。ぼくは彼女に出来るだけ、優しく語りかける。

「そろそろ、帰らないといけないね」

「え……ああ、そうだ。もうこんな時間」

「うん、そう。実はもうこんな時間なんだ」

「なんだろう、最近さ、時間の感覚がなくつて

「ぼくは、よく曜日感覚を失う」

「……なにそれ

呆れたような、でも、楽しそうな笑い声。

その存在は限りなく遠くなり、もはや田の前にいるのかどうかも定かではない。

「そういえば、さつきの詩や」

「うん?」

「題名、なんて書つの?」

「題名……そんなのが気になる?」

「彼がや、そういうの好きだったからさ」

なるほどね、そうぼくは頷いて。

言葉を続けた。

「詩の題名はね、『影法師』……またの名を」

ドッペルゲンガー。

「ドッペル……ゲンガー?」

「そう、その意味を『二重に出歩く者』。つまり、もう一人の私

「もう一人の私……」

「君は見たことある?」

「私……は?」

僅かに見える樋口さんの顔は、なにかを見よとすむように田を細めていた。

それは近くもあり遠くもある記憶。それを……。

「あ……る」

掴んだ。

「……あるよ」

「本当に?」

「うん、見てた」

「見てた?」

「ずっと、見てた。ああそうだ。私は……」

「君は?」

「私がもう一人の私だった」

「え?」

ぼくは彼女を見る。

彼女は笑った。

「ホント、駄目だな。私の周りの人ってみんなお節介だ、余計なことを気付かせてくれる」

「……そりや悪かったよ」

正直、余計なことしてるとよつた自覚はあった。

「ううん、私もたぶんそつだつたんだ。でも、ごめん。ああ、遠野くんに言つてるわけじゃなくて……そつ謝つとして欲しいの」「誰に?」

「あのね、でも……ううん、それよりも苦しんると悪い」「だからなにが?」

「私が私自身を見るようになったのはね、彼のを見たからなの」「見た?」

彼女は頷く。

その声は最後に耳元で囁かれたような、いや耳の奥から響いたような気がした。

ドッペルゲンガー……と。

いつも臆病なのはぼく

13.

「この事件の自殺者はその以前にぼく全員がこいつ証言している」

「コーヒーを飲み、一息おくようにして所長は言った。

「もう一人の自分を見た、と」

「それはつまり……ドッペルゲンガーですか」

「ドッペルゲンガー？ なんだそれ」

赤霧先輩は眉にしわを寄せて聞いた。その仕草は凄んでいるように見えなくもない。
ぼくはいつものように呆れる。

「……先輩、魔術師なのにそんなことも知らないんですね」

「俺はまともに魔術を修めている訳じゃねえんだよ……それに、今回のはあんまり魔術の領分ではなさそうだし、な」

そう言つて、コーラを一気のみする先輩。

空のグラスをぼくに向けて先輩が差し出したのを確認するが、ぼくは先輩の目の前にボトルを置くことで対応する。……わざと大きく音を立てて置いてやつた。

それぐらい自分でつげ。

巫月所長はその様子を見て苦笑しながら、赤霧先輩の科白に同意

を示した。

「…… そうだな、赤霧の言うとおり魔術の領分から外れている部分もあるかもしない。私は魔術の専門家ではないのでなんとも言えんがな」

「じゃあ、所長の専門ってなんなんですか。」

とは、聞けずに話は進む。聞いたら話が横道に逸れかねないし。

「ドッペルゲンガー」というのは、ありえない状態で目撃されるもう一人の自分のことだよ。言葉そのものを直訳すれば『一重に出歩く者』と言つのが一般的な解釈だろうか。

特にドッペルの言葉の意味には悪しき存在を意味する部分があつてね、悪靈的なものだと考えることも出来る

「悪靈？ もう一人の悪い自分と言つことですか？」

「その『悪い』は人間から見た定義だろうがな、今いる自分と言う人間にとつては都合の悪い自分、人が切り捨てられたもう一つの可能性なのかもしれない」

「可能性……」

「そう、人間の靈的な部分は陰と陽、光と影、善と惡、と言つた複数の一つ以上の概念に分かれるといった解釈がよくなされている」

「ああ、そういうのはなんとなくわかる。」

あれだろ？ 天使の自分と惡魔の自分が語りかけてくるみたいな図がよく漫画かなにかであつたりする。ああいつた感覚なのだろう。

「そうなると人間の惡の部分がドッペルゲンガー、だと？」

「そう解釈出来ると言つだけだ。そもそも、このドッペルゲンガーと言つ言葉 자체はドイツ語なのだが、こいついたモノの記録や伝承は実は世界各地にある。」

それも最近の目撃例すらあるほどだ。……この現象の定義は「一つ
だ、一つ目がもう一人の自分自身を自分が目撃してしまうこと。
もしくは第三者がもう一人の自分を目撃することを指す。この時、
自分自身を見た者は死ぬ、と言つ話も付属することがある。

よく勘違いされるのだが、この時目撃されるもう一人の自分は必
ずしも自分と同じ姿形をしているモノとは限らない。自分よりも老
いていたり、逆に幼い場合もある。それどころか、自分とはまるで
かけ離れた姿であることも少なくない。それでも、人は見たときに
確信するそうだ。

これは自分自身だ、とね。

その本人の認識そのものには善も惡もない。ただ自分自身だと言
う実感のみがある。その現象に恐怖を覚える例がないわけでもない
がね」

自分と同じ顔すらしてない相手を自分と思う。
なんとも奇妙な話に思つけど。

でも実際、自分自身を鏡で見たとき、こんな顔してたつてと思つ
ことなんかざらだもんな。精神的に疲れている時なんか特に。
……よく鏡の前で自分を見失います。

「一般にこの現象はオカルトだと解釈されるが、これは医学では自
己像幻視と言われる現象でね、なんでも脳の側頭葉と頭頂葉の境界
領域に異常があると、自分の身体の外に自己が存在すると錯覚する
場合があるらしい」

「自分の身体の外に自分が？」

「そう、自分の身体が自分でないような錯覚を覚えたことはないか？」

それがあるように、さらに進んで自分の身体でない場所が身体の
ように思うことがある。と言うことだ」

「……なんかイメージしがたいんですけど」

「私が彼なのか、彼が私なのか。私はどれなのか、どうしているのか
……遠野は蝴蝶の夢を知らないのか？」

「……蝴蝶の夢？ 電気羊の夢を見るか、ですか？」

なんか思いついた単語を言つただけで、馬鹿を見るような顔で見られた。

「まあ、それはいいとしよう。とにかくその脳の異常に由つてドッペルゲンガーを見た者は死ぬ、と考えれば科学的にこの現象に一応の説明は付けられるかな。

病氣だからドッペルゲンガーを見、病氣だから死ぬ、とね。また精神的な病を原因とすると言つ説もある。

この現象の後によくみられるのが、原因不明の病、もしくは事故自殺と言つた形での死。いずれも、今のような医学的な裏付けがあれば簡単に納得できる程度のモノだよ。

……と言つても、ドッペルゲンガーは第三者からの観測も可能な場合もあるから、これだけでは説明は付かない。

私が思うに、いくつかそれぞれことなる現象をまとめてドッペルゲンガーにしてしまっているんだろう。だからこそ混乱が生まれているのではないか。

自己のドッペルゲンガーを目撃した人物は、そうだな、有名な人物だとゲーテ、日本だと芥川龍之介がそうだと言われる。またドッペルゲンガーと言う存在 자체が文学や詩の題材として、古くから使われているものもある。哲学や芸術と言つた部分には意外と縁深いものなんだよ」

「えーと、……それってつまりどういふことですか」「詳しく述べよくわからない」と言つことだ

……ここまで話しておいてそれですか。

ぶつちやけ、話し長すぎて途中から聞いてなかつたよ。

「……なんだよ、巫月らしくねえな。そんな話で終わりかよ」

「一応、他の解釈としては、『魂や精神体の分離現象』などの観点も考えられるが、どうにもすつきりしなくてね。結局、幽体離脱の延長線上のようなモノと言つことになる。

ただし、本人が覚醒している状態での幽体離脱はあまり現実的でない。それも、本人の肉体が別の活動しているという状態でね。そんなことを出来る人間は見たことがないし、それがなら特別な訓練も行つていない人間がそんなことをするなんて言つのもおかしい。そんなものが外部からの要因なく自然発生するとは考えられない」「いや、だからお前自身はどう思つてんだよ」

「……まず、自己の分身を作るといつのは術者ひとつはよくある話だろ?」「ああ、まあ、魔術師の使い魔なんかまさにそれだよな」

所長の言葉を肯定する赤霧先輩。

なんだよ、それ。まずぼくにその言葉の意味を説明してください。

「……ぼくはそういうの正直よくわかりませんけど、そうなると赤霧先輩が言ったこととは違つて、本当は魔術関係あることになるんじゃないですか?」

「そんなもん、ドッペルゲンガーとは別だろ?が。使い魔は主人と命や魂、もしくはその一部を共有する。陰陽道における式もまた役割としては近いモノだが、この場合ただの人間の話だろ」

……ただの人間。まあ一般人の話と言えばそれはそうだけじゃ。

「でも、所長は関係があると思ってるんですね?」

「ああ、一般人にそんなことはありえない。ならば、そうでないな話は別だろ?」

似て非なる分身、使いこなせなければ牙をむく従者。リスクと共に使役されるモノ。ドッペルゲンガーを表出させた事例の中に、予言者によるものがある。なんでも同時に複数の場所で説法を始めたらしい。アレがそういうた存在なのだとすれば……」

「はつ、誰がそんな面倒なことを。いちいち素人にそんなことを施すつて、どんな重いリスクを背負えばこなせるのか検討もつかねえよ。つか、ありとあらゆる術はその秘匿性が重要だらうが、公然と人前で使うための術なんてありえねえよ。集団催眠ならわかるがな」

「……そこで私が考えたのは先の話だ」

「先の？」

「人間の今生きている中で、切り捨てた不要だと判断し封印した部分を表出させる。あつてはならないもつ一つの可能性、自分」

「……シャドウか」

あの、なんか、ぼく話から置いて行かれているよつな。

なんなんだよ、シャドウって。普通に直訳すれば影……だよな？
ぼくは赤霧先輩に聞いた。

「ああ？……ようするによ、お前、もしも今の今までずっと子供の頃から自分がきちんと勉強してきてたら、もっと頭よくなつたんじゃないか、とか思わねえか？」

「そりや、まあ、思いますけど」

「でも、お前は別の道を歩んできた」

「……そうですね」

「歩まれなかつた道、なることのなかつた自分、それがシャドウ。
お前的人生の影の部分だよ」

……つまり、パラレルワールドの自分みたいなものだらうか。

「……自分の自分と言つ」と、もしもあの時自分がああしていたなら。

ところへ

確かに、そこにはもう一人の自分がいるのかもしれない。もつと上手く人生生きていたのかもしれない自分、と言う人間が。

「……まあ、単純に抑圧されてきた自分の欲望や願いを指すこともあるがな」

「自分の欲望をシャドウって言うんですか？」

「ああ、欲望に限つたことじやねえけどそれも可能性の一つだろ。もしも、その欲望が満たせたなら……つーな」

「……それも魔術用語なんですか？」

「いや、心理学かなんかだつたんじやないか？」

なんで先輩がそんなの知つてるんだよ。

ぼくの視線に気付いたのか赤霧先輩は面倒そうに話を続ける。

「……魔術つてのは学問であるのと同時に、己の内面と常に向き合うモノもあるんだ。

魔術は行使する、つまり火を出して燃やしたりなんて言つこと 자체は、本来どうでもいいことなんだよ。己自身を高め、真理に近づき到達するために研究を死ぬまで続ける、求道者のような、いや、殉教者達のためにあるみたいな世界つった方が正しいか

へえ、なんか赤霧先輩とは対極にある世界の話だな。
宗教的というか、お坊さんのする修行みたいだ。

「つむせえな、おー」

「……ほく、なにも言つてませんよ」

「田がうぜえんだよー」

ひどい言われようだ。

「じゃあ、あれですか。先輩もその真理への到達つていつのを田指していいるんですか?」

「いや、俺には無理だからな。ありや生まれで決まるんだ。それでも田指すかどうかは自由だけどな、俺は無駄はしない主義だ」

「……へえ」

無駄に自信あつづな先輩が無理だなんて、どんな過酷な田標なんだ?

要するに世の中、才能が全てつてことなのか。

「で、巫月はその可能性の表出と、魔術などによる外部からの影響の双方を原因として考えてるわけだな」「あくまで私個人がその可能性があると思つてているだけだ、根拠はない」

所長はどうも自分の持論にすりしつくり来ていいようだ。
ぼくは所長に尋ねる。

「それって可能なんですかね? ぼくからしたら、どうしちゃうあり得ない事態に思つんですけど」

「あ……可能かどうかと言われば、普通は無理だつうな。普通と言つ概念が通じる事態かは不明だが。とにかく確かなのはズペッテム。」
ルゲンガーと呼ばれる現象が確かに発生していると言つことだ」

「確たる証拠もなく目撃証言だけ、ですけどね」

「話を聞いていなかつたのか?」この現象は目撃がある」とを言つ
んだよ」

「……なるほど」

ぼくは自分の分のコーヒーを飲み干す。

所長の分と一緒に淹れたものの、タイミングがなくそのまま放っていたのだ。

かなり温くなっていたそれは、一気飲みする分には悪くなかった。

もう一人の自分。
ドッペルゲンガー。

それは、ぼくが所長に相談したことの全てのことに対する答えになっていた。

複数の問い合わせに対する、たった一つ解。

本人は関係あるかわからないなどと嘯いていたが、おそらく所長はそのつもりでこの話を始めたに違いない。

でも、だとすると……。

これから続く沈黙の中で、「ぼくはつまらない」とばかり考えていた。

それはたぶん、迷い　　といつものだらう。

できること、やれることはわかってる。

それなのに実行するのに、考えるための時間と未来への保証を望むのはそれは要するに。

……ぼくが臆病者ということなのだろう。

いつもなぜいつもだったのか

13.

樋口カナがどこかへ……おそらくは『別に天国でもないところへと帰つて行くのを見送つていて』廊下から、誰かが入ってきた。

そして、第一声。

「ハミはあ、ただの邪魔だつたかなあ」

「……そんなことはないよ」

……うん、正直存在を忘れてた、とは本人には言えない。

「いる意味なかつたよね？」

「まあ、……確かに出番はなかつたけど」

「ただのデバガメ？ハミ、デバガメ？」

デバガメ？

出歯のカメ？

……なにそれ。

「いや、ハミの言つてる意味がよくわからないんだけど

「なんか、異様に仲良さげだつたし」

「いや、初対面だから」

ふうん、とハミは何度も頷く。

「……じゃあ初対面の相手に詩を朗読したの？」

「悪かったな！」

ぼくだって恥ずかしかったんだよ、ホントはー。

……とまあ、実はもしもの時のために、ハミにいたりついて待機してもらっていたのだつた。

危険かもしれない相手の前へ、丸腰、無防備で行くほどぼくもお人好しではない。

……それも悲しい話だけビ。

「でもお、あれはなんだつたの？ 結局う、樋口カナの幽霊つてことお？」

「あれを発見したのはハミの方だつたろ？ が」

「……いるのは始めからわかつてたけど、なにかは知らないよ」

うん、だよね。

君は他人に興味持てない人ナンバーワンだもんね。

「そういうたつて、ハミはこの事件の真相には気付いてるだらう？」「どこから飛び降りがあつたかあ、つてことある？」

「そう」

「そりやねえ、この校内においてえ。ハミが知らないことなんてそういうそうないよお」

ただし、それも知るうと思えば、の話らしい。

コイツ、その気になれば不可能犯罪をいくらでも量産できる能力の持ち主だからな。

……ある意味で既にしているけど。

「トオくんがあ、大神アスカとの会話についてえ。……ゼーんぶ話してくれたら、私も話していいけど?」

「後半、素に戻つてる」

「いいじゃん、二人きりなんだし」

「……なにがあつても、言わないものは言わない。これは人と関わる上でのマナーだよ」

「変なとこ真面目なんだから」

真面目って言つな。

誠実といえ、誠実と。

「でも、遠野。わかつちゃつたんでしょ、いつたいあの日なにが起きていたのか」

「そんな大層な話でもないけどね」

人ひとり死んだのに大層な話でもない。

そう、口走つた自分に嫌悪感を感じたが、事実、大層な話ではないとそう思つていた。

「ハミはさ、大事な人が死んだらどうする?」

「……なに、それ?」

「死にたいと思う?」

「だからそれ、関係あんの?」

ハミの言葉には怒りが混じる。

ハミにとつてはばかばかしい質問なのか、それともそれだけ大事な質問なのか。
ぼくにはわからない。

ただぼくは正直に「うそ、ある」とだけ、答えた。

「…………」

「今回のはやう思ひ事件」

「…………やうこいつの、よくわかんないけど。やう思ひかも…………しなない」

「そつか、正直、ぼくもよくわかんないんだ。やう思ひのかつてだけじゃなくて、大事な人が死ぬつてこと自体がさ?..」

ハミの表情からはなぜか、感情が読み取れなかつた。
声だけが怒りを示す。

「で、それとなにが…………」

「うん。でさ、死にたいと思つたとするじやない?」

「…………」

「その後、なにかの間違いでそれがなくなつたらどうする?..」

「…………は?」

「なくなつたになくならない、それが可能性なんだよね」

選ばなかつた可能性が影として残るよひ、ぼくの中と外には何かが残る。

たぶん、それを記憶つて言つて、それを見て出でてくるモノが気持ちなんだろう。

「…………あのさ、私がなに質問したか憶えてる?..」
「わかつてゐよ、要するにさ樋口カナは」

そう、樋口カナは。

屋上から飛び降りた。

そういうことだった。

*

学校に通つていて。

そのうち、気付くようになつた。

一人だけ、違つた。

他の同級生はおそれおそれ話しかけてきて、へんな距離があるの

」。

気持ちの悪い気遣いをしてくるのに。

この娘だけは、ずっと最初からいつも傍にいて。いつも当たり前のよう話しかけてきた。

私は訊いた。

「なんで、いつもいるの？」

「え？」

「なんで傍にいるの？」

その娘は当たり前のよう言つた。

「カナが電話してくれたんじゃない

「なにが？」

「……一番最初に」

そうだ。

思い出した。

私は、だれかに。

彼が死んだのを見ながらも。

呆然としながらも。

ケータイで連絡していた。

でも、だれに？

「私を呼んでくれたでしょう」

私が。

私が？

そんなはずはない。

「それ元さ

そんなことがあっていいはずがない。

「そんなことがなかつたとしても

私は他のだれもがビリでもよくて。

そんな、私は世界を憎んでいたはずだ。

「そばにいたよ」

だから。

それはあつてはいけないんだ。

「だつて、私たち」

もつ。

「私たち、友達だから」

……ああ。

やつぱり、そうなんだ。

そのときに、気付いてしまったのだ。

私の視界の端で佇む、私は。
にじんで、目の前が歪んでいるその先にいる私は。
すぐそこにいる私は。
きつと……。

完全に、そうなんだ、と。
私は自覚してしまった。

*

「樋口カナはさ、気付いたんだよ」

「なにを？」

「好きな人が死んだら自分も死にたいって思う。ぼくはよくわから
ないけど、それが自然なこと。でもさ、もしもそれだけじゃなくな
つたら？」

「……私にわかるように言つてくれる？」

「うん、ハミは好きな人が死んだら、自分も死にたいって思うんだ
よね」

「まあ、ね。多分だけど、ね」

「でもさ、死のう死のうって思つてゐるつちに、もしも傍にすくく
優しくしてくれる人がいて、それが自分をとてもわかつてくれる人
だつたとしたら、こう思つてしまふかもしれないよね」

そう、それはひどい話だつた。
あつてはならないこと、だつた。

「……生きていきたいって

「…………」

「全では可能性だったんだよ、不变の感情なんてこの世にない。少なくとも、生きている限りは。彼女は生きていたからそう思つてしまつた」

「……なにそれ？」

「生きていたい、とはちょっと違うかもしない。学校にいたって思ったのかかもしれないし、卒業まで一緒に過ごしたいって思ったのかもしねない。

少しでもここにいたいって思つたのかも。とにかく、彼女はここに未練を作つてしまつた

「だから、幽霊に？」

「まあ、そういうようなことかな」

「……なにそれ、好きな人が死んだくせになに言つてんの。意味わからんない！」

「……ハミ」

「好きなんでしょう、好きだったんでしょ。それが本当の気持ちだつたんなら、さつさと死ねばよかつたじやない、なに？未練つておかしいでしょ？ 本当に好きなら……」

「……だから、彼女は死を選んだんだ」

人間の感情は気持ちは不变じゃない。

恋愛感情なんて、結局は一時のものでしかない。
でも、彼女はそれが許せなかつた。

「……好きだった気持ちを嘘にする自分が許せなかつたんだよ」

彼女は、他の自殺者と同様に、もう一人の自分が見えていた。ドッペルゲンガー、つまり悪霊たる二重身が見えていた。

「二重身の存在は、それを見た人間に死をもたらす。彼女の話と総合して推測は確信となつた。

彼女はそのことを、自分の好きだった相手の死の時に学んだんだ。

「だから、嬉しかつたろうね。死ねるつてさ」

「……だから、トオくんの言つてる意味がわからんないつて」

「それで彼女は自分が死ぬのを待つことになつたんだ、とても楽しみにね。でも、なぜか彼女の二重身はすぐには彼女を殺さなかつた」

「……」

「それがなぜかはぼくはわからない、何かが他の人とは違つたのかもしれない。とにかく二重身は彼女を殺さなかつた。それが意図せず死までの猶予期間になつたんだ」

その猶予期間が悲劇を招いた。

死を見つめながら、過ごしていく穏やかな日常。

周囲に奇異の目に晒されることもあつたろう、けど、彼女の言を借りれば、お節介な人間が彼女の周りにいた。

「その人物は、彼女を、彼女の気持ちを変えてしまつたんだよ」

その人が誰かは知らない。

けど、その人はきっと優しくて暖かくて。でも、鈍感な人間だったんだろう。

「ハミはさ、ずっと一緒に過ごしたい人つている? 暖かさをくれる

人」

「……よくわからぬ」

「ぼくも。なんかそういうのもよくわからない、でも、そういうものがあつたら幸せな気持ちになれるのかもとは思う」

「……」

彼女も、そう思つたんだろう。
そう思つてしまつたんだろう。
だから、彼女は飛び降りた。

人と触ると暖かい。人のぬくもりはそれを教えてくれる。
でも、教えた当の本人は知らないだろう。
そのぬくもりを知つたときから、触れられない部分の冷たさがよ
り際立つことに。暖かさから離れたときの、凍えるような寒ささえ
も。

たぶん、肌のぬくもりは伝えられるけど、感じている寒さは伝え
られないから。どれだけ言葉を重ねれば、自分が寒い思いをしてい
るって、人は伝えられるつて言うんだろう。

そんなのは無理な話だ、だから人は凍える。それに耐える。
……中には凍え死ぬ人さえいる。

「……じゃあさ、隣のクラスの田撃情報はなに？」
「ハミはさつきの彼女を幽霊だと言つたね、でも違つんだ」「
どういうこと？」
「さつきの彼女は、本人が死ぬ前からいた。ハミも言つていたよね、
いたのは事件が起きた時点から……最初から知つていたって」「
「まあね、美味しそうじゃなかつたから放つておいたけど……つて、
あれが幽霊じやないなら答えは……」

そうつまり彼女は。
一重身の方の彼女。

「教室でクラスメートと教員に田撃されていたのは、一重身の彼女
だつたんだよ。本物の樋口力ナよりも気薄なもう一人の彼女」

だから、辻棲の合わない証言が発生した。

本人が教室にいたのに、屋上から飛び降りた影が映った理由。

それは、本人がもう一人いたと言うだけのことだった。

「たぶんきっとね、樋口カナが自殺を決意したのはそれだったと思うよ」

「……なにがさ？」

「自分の二重身がさ、毎日教室に行って授業と一緒に受けている。自分が屋上に行って、死ぬチャンスを『えてもやうし』る」

だから、彼女は知った。

自分で死ぬしかないんだって。

だから、彼女は決意した。

自分の存在はとても許せるものじゃない、殺さなきや、と。

本当は死にたいだけじゃないんだって、自分には生きていきたい気持ちもあるんだって、不幸なことにそう気付いてしまったから。

「人間が生きていられるのはね、ハミ。自分がどれだけ恥知らずで、好き勝手に気分で物事を口口口口都合良く解釈しているような生き物なのか、それを知らずにいられるからなんだよ、それに気付けば死ぬしかない。殺すしかない。だってそんな生き物、存在するつてだけで気分が悪いだろ？」

自分が友達や恋人が死んでも、当たり前のように生きていける。

人間はそんな自分に気付きたくないから、助けてやれたんじゃないかって悔やむ。悔やんでいると言つて」ことを言い訳にして、自分を許してやる。

ああ、ぼくはすごく悲しんでる。平気なんかじゃないんだ。別に平然と生きてるわけじゃないんだ。つて。

こんなに悲しんでいるんだから、自分は最低な人間なんかじゃない。

だから、生きていいんだって。傲慢にもそう思つ。

「以上が、樋口カナの飛び降りにおける大層でもなんでもないことの真相……だよ」

死にたいなら死ねばいい。

生きたいなら生きればいい。

そう言う人はいる。

でも、そう考えること自体許されない人もいる。許さない人もいる。

死にたくても、生きていくしかない人もいる。

生きたいけど、死ぬしかない人もいる。

彼女が、樋口カナが間違っていたのかどうかは、ぼくにはどうしようもなくわからない。

とりあえずわかるのは、彼女にとつての生きたいと言つ気持ちと死にたいと言つ気持ちはイコールで繋がつていたと言う事実と……彼女が生きていてくれたら、今のぼくは嬉しかつたろうと言つ、そんな矛盾した答えだけだった。

いつも終わりは非日常か

14.

この事件は川岸淳という、男子生徒から始まった。
それは嘘ではない。

彼の死が全ての、きっかけだった。

それを除けばある意味で、遠野の見解も所長の言にも間違はない。

彼の死から全ては始まり、全ては終わった。
それは死という名の終わりで。

始まりは、混沌と言ひ名の始まりだった。

だが、問題は誰が川岸淳という男子生徒の死の始まりへと選んだのか。

これを仕組んだのが誰なのか、と言つことだ。

俺にとって、形のないものはなんの意味も持たない。
刀を通して伝わる物こそ、刃を透して見える物こそが全てだからだ。

人の心にはそんな確かさなどない。

すぐに揺れ動き、また不变などありえず、劣化し色褪せる。

ならば、いつそ刹那に価値を求めればいい。

一瞬の手応え、喜び、満たされているという実感。

生に対する飢えを満たすモノ、それも結局は永久でないのは間違

いない。

……だが、それでも。

俺はそれを求めずにはいられないし、それがそういうモノだと知つてゐる。

結局の所、人は他者にありもしない永遠を求めるか、自己の生に零の瞬間と言う欲望を見いだすしか出来ないのだから。

ならば、俺は後者の生き方を望む。

他者に期待し裏切られ、また他者に相対する自分に期待し裏切られる。それを繰り返すよりは余程、高きへと望めるモノだと思つた。

だ。

熱の伝わらない幻と。

肉眼にすら透さない想いに。

意味を見いだす人間は世になにを求めるのだろう。

人はそれを、幻想と。

もしくは幻の影、幻影と呼ぶ。

儚い、人の夢だ。

そうわかっているくせに、人はいつたまにをしているのだろう。裏切られるとわかっているから儚いんだろうに。

人間は自分達で儚いとそう名付けている癖に、諦めようとしない。

俺はそれを横目で見るよう歩く。

だが、視界に入れどそんなことは関係ない。

もう、そんなことは関係なく俺の次の獲物は決まっているからだ。

それはこれを始めた何者か。

ソイツなら……もう少し、この乾きを癒してくれるのかもしねない。

ただそれまでは、惰眠を貪つてこよう。

獵犬として、獣として狩に出るまでの日まで。
いつか、野に解き放たれるその日まで。

15.

ぼくらは学校を出て、校門の前で立ち止まつた。
ハミがぼくに聞く。

「で、今日も事務所寄るの？」

「うん……新しい情報も手に入つたしね」

「へえ、伝えに行くの？」

「うん」

「意味ないよ、そんなの。どうせどこからも依頼もないし、だいたいお金入らないんだから誰も動かないよ」

それは確かにその通りだ、昨日もそうだったし。

「……だけど、それでも行くよ。知つた以上は言つのが義務だからさ」

「義務つて言い訳を使うの？自分から知つた癖に今さら義務もなんもないよね」

「まあ、それは確かにそうなんだけど、放つてはおけないじゃない」

「……遠野はや」

「ん？」

「嘘は嫌いだとか、隠し事は嫌いだとか、誤魔化はしたくないとか言う癖に、嘘つきだし本音は隠すし言い訳して誤魔化してばかりだよね」

ハミはそう呟くように言つ。

それが不満なのではなく、ただ事実を述べただけと言つたかのように。

確かに、ぼくはずつと嘘をついたり誤魔化したりばかりしている。それはもちろん今回だけに限つたものではないんだけど。ぼくはそれから真正面から答えない。

「……そうじやない人間はあまりいないよ、ハミ。だいたいの人間は大方そんなものだろ?」

そうじやない人間も世の中には残念ながらいる。

全く嘘をつかない人間なんていない、なんて言つのは嘘だ。誤魔化さない人間はいない、なんて言つのはそれ 자체が誤魔化しだ。

人間はそんなことをしなくとも生きていける、ひどく残酷なことに。

でも、ぼくは……。

「ぼくは普通の人間なんだよ、ハミ。有難いことにね。普通人間は弱いし嘘をつくし誤魔化すし、言い訳するんだよ。しかも、普通の人間はそれが普通だと思っているんだ。だからぼくは普通の人間なんだよ」

だから、嘘をついていい、とまで言わない。普通の人間にはそれが許されるとは言わない。

「それでも、ぼくは嘘が嫌いだ。憎んですらいる。だから言つよ、
眞実、ぼくはこのままにはしておきたくないんだ。……この幸福な
結末なんてありえない戯けた悲喜劇を」

「意味わかんないよ、馬鹿」

「じめん、ぼくもよくわかんないで言つてる」

「……このお節介」

「知つてるよ、ついでに鈍感で無神経なんだろ」

「……胸張つて言つな、自己中。いつそ死んじゃえ」

ひどい」と言つた、と思つたけどその通りだからなにも言つ返せなかつた。

鈍感さと無神経さは生きしていくのに必要な能力だらうけど、それを恥じる程度の神経は残しておきたい。

ハミにこんな窮屈でみじめな想いをさせてるのは、完全にぼくの自己中心的な行動によるものだから。

「……私は行かないから」

「うん、わかってるよ」

ハミは自分から事務所には行きたがらない。

「だからぼくが行く」

だから、ハミに仕事があるときはぼくが伝える、ぼくが連れて行く、ぼくが一緒に行く。

ぼくが事務所にいるのはたぶん、結局の所、その程度の理由なんだと思つ。

ハミがいるから、ぼくが事務所との仲介をする。

ぼくの存在意義はその程度のものなんだろう。ぼくが不満なのは、ぼくの存在意義がその程度のものだからだ。
ハミはぼくを見る、ひどく冷めた目で。

「わ、じゃあ勝手にすれば」

そうハミは言い放ち、歩いて行った。

ぼくはその背中に「また明日」と声をかける。

……なんか随分とハミ機嫌悪いな。

今日は特に悪いけど、最近基本的に機嫌悪いことが多いかな。
心当たり……は一応ないんだけど。

単純にぼくのことが嫌いなかもしない。ほら、行動がいちいち気に入らないとか、なんかなよなよしててムカツクとか。
……さすがにさうだったら傷つくなあ。

でも、そんなことを気にしていても仕方ないので。
とりあえず、ぼくは。まあ、ハミは放つておいて事務所に向かうこととした。

心配じゃなかつたわけじゃない。
気にしていなかつたわけでもない。
でも、ぼくはハミを放つておくことにした。
それがぼくのハミへの付き合の方というものだつたから。

*

遠くから一人を見る影。

背後に手を回して、後ろで手を組み、ソレは一人を見ていた。その口元は笑みを形作るも、緩めていると言つよつは歪んでいる、そんな印象だった。

……歪んだ笑み。

笑みを浮かべる口元とは裏腹に、目には喜びよりも、深い闇色の憎しみと刃のような狂気が宿っていた。

「駄目だなあ、遠野は。せっかくわたしが一回も忠告したのに……」

より深く、笑みを形づくる。

より深く、歪ませる。

「軋呑ハミに近づくなんて」

なのにその姿はどこか希薄だった。

本当に田の前に存在するのかと、田撃者がいればそう田を凝らしだろう。

ヘタをすれば田に入つても、気が付く」とすらないかもしれない。だが、間違になくなソレはそこにいた。

「これはちょっと、罰を与えないと駄目かな。だって、わたしのことは無視しきだもん。遠野は、さ

手をゆっくりと前に出す。

次第にその手は変貌し、ゆっくりと……。

「ああ、もちろん。あの女も生かしてはおかないけど」

かぎ爪のよつに長く鋭い爪と。

獸のよつに毛深く、じつじつした腕へと。

その……姿を変えた。

「駄目だよ、軋呑。遠野はわたしがずっと……」

手の先を、その鋭い爪の切つ先をそつと舌で舐める。

自然と舌の肉はつっすらと裂け、その傷口からは血液が滴る。真つ赤なソレは爪へ、手の甲と伝わりその獸の腕に染みていく。

「皿を付けていたんだから

その舌は爪に付着した血を拭い、喉はそれを味わうよつに飲み込んだ。

舌が傷ついても、どれだけ深い傷を作つても、ソレは爪をなめ回す。

獲物の血を味わうまでの、僅かな一時の慰みとして。

いつも終わりは非常からり（後書き）

『幸福な結末なんてない』と言つのは、『銀の弾丸なんてない』と
私にとってほぼ同義な類義語です。同時にこの物語、悲喜劇のよう
なもののテーマでもあります。
だから、なに？なんですけどね。

……私は私の願いを叶え(てい)た

16 .

「あなたがいなければ、気が付かなかつたのに」

「そしたら、私はずっと気が付かず」。

この日常を憎んで、それでもここで生きていたのに。
でも、私は気が付いてしまつたのだ。

私は死にたくない。

友達と笑つていていし。

両親とは喧嘩しても、暮らしていいたいし。

まだ、やりたいことも夢もあるし。

なによつむ。

この娘と一緒に居たいんだつて。

あれは私だつた。

私の望みを叶える。

私の望みを実行する。

私自身に間違いはなかつた。

きつと今頃私は、昼休みを自分の教室で過ごしていくに違いない。
楽しく過ごしていくに違いない。

その望みを叶えてくれてるに違いない。

そう、あたしは彼のそばに行くことじやなくて、同じじよつに逝く

「」とじやなくて。

当たり前の日常の方を望んでいた、そこで生きていたかった。

私なんか死んでしまえ。

私の幸せを願う私なんか、死んでしまえ。

「私はアンタを許さない」

私は向き直り。

町を見下ろす。

私が生きたかった、町。
行きたかった、日常。

背後から聞こえる、彼女の声。
叫ぶように、制止する声。

私は振り向いて、最後に言った。

「アスカ」

彼女のその姿はなぜか、一生懸念で。

……なぜか、にじんでいて。
どこかで見たことがあって。

でも、決定的に間違つていて。
懐かしかつたけど。

「ありがとね」

なによりも嬉しかつた。

彼もこんな気分だったのだろうか。
私は世界に背中を向けて。

そう、今まで自分が在った『日常』とこの世界に背を向けて。
その作り物の舞台から、飛び降りた。

プロローグ

彼女は呟いた。

……まるで凍えているかのよつたな、寂しそうな目で。

「あなたがいなれば、気が付かなかつたのに」

それがどういう意味なのか、私にはわからない。
ねえ、それはなに？

つまり、私のせいでこうなつてゐることなの？
私のせいであなたは死のうとしているの？

私はあなたにいつたい何をしたの？

私を恨んでいる、そういうことなの？

……ねえ、私がいなればよかつたの？

……ねえ、私は傍にいなればよかつたの？

……ねえ、本当は私のことずっと邪魔だと思つてたの？

たくさん疑惑が頭を巡る。

たくさん後悔が世界を揺らす。

そう、私はこの結末を知つてゐる。

私はこのあと、何が起ころか、それを知つてゐる。

私は彼女に向けて、一步を踏み出そうとする。

でも、足が動かない。

あの時、私は動かせなかつたから。

だから、どんなに頑張つても足は動かない。

彼女は言つ、一切の虚構を含まない声で。

「私はアンタを許さない」

そうして私に決別するかのよつに背を向ける。

おそらくその目が見つめるのは、自分がずっと暮らしてきたこの町。

ただその目が、どんな風にこの町を映し、どんな想いを抱いてそこに立っているのか、私にはわかりよつもない。

それでも、私は。

……なにか、彼女に声をかけよつとして、私は口を開く。
だけど、声が出ない。

喉は震えたまま、なにも意味のある音を出せずにいる。
なにを言つたらいいかわからない。

どうしたら、声が出せるのかもわからない。
伸ばそうとした指先が震える。

呼吸が出来ない。

息苦しい。

それでも、なにかを言おうとして。

ヒュ……と小さな音が喉の奥から聞こえ、また呼吸がままならなくなる。

（なにか言わなきや）

その気持ちだけが、私の中で反響し続ける。

なにを言つたらいいのか、その言つべき言葉は私の中からは出でこなかつた。

その理由は今ならわかる。だつて、私は……。

結局、私が考えていたのは……。

その時、一步を踏み込もうと僅かに彼女の重心が傾いた。

それに気付いて、頭の中が真っ白になつた私は『何か』を叫ぶ。

反射的に『何か』を叫ぶ。

それに気付いたのか、彼女はゆっくりと振り向いた。

「アスカ」

涙目で彼女は私へ振り返る。

その表情には決意と、笑顔。

溢れんばかりの感謝と喜び。

私が今までで見た中で、最高の笑顔がそこにあった。
きつと彼女の、本当の笑顔がそこにあった。

止められない。

止められはしない。

私は手を伸ばせない、だつてそんな顔をされたら。
まるで、私が……。

彼女は謳う。

「ありがとね」

そう、どこか嬉しそうに。

まるで、自ら心の底から望んでそうするかのように。

力強く一步を踏み出し、そのままの笑顔でゆっくり崩れ落ちてい
く。

そして彼女は、 樋口力ナは学校という舞台から。

世界という、現実という、日常という、小さな小さな舞台から。
奈落の底へと、飛び降りた。

私は思わず、飛び起きた。

そこは私の部屋、ベッドの上、見慣れた世界。
夢なのはずっと気が付いている。

繰り返し繰り返し、あの瞬間を見ていた覚えている。
もうそれが何回目がなんてわからない。

数えることに意味なんか無い。

だって、私は同じことを同じように繰り返しているんだから。
あの時に何度も戻つても、私は彼女を止めることなんか出来ない。

何度も、チャンスを貰つたつて私は何も出来ない。
あれは紛れもなく現実で、間違いなく夢。そして、ビリジョウもないぐらいに真実。

何度も、何度も私は私の罪深さを知る。
自分の浅ましさを、愚かさ知る。

もし、私があとほんの少し優しくて、ほんの少し誠実で、ほんの少し思いやりがあつて、ほんの少し自分に對して厳しくあれたなら、きっと何かが違つたはずなのに。

そう、なにかがほんの少し違つただけで、彼女に声が届いたはずなのに。

何度も繰り返しても、同じ結果になるのは……。
そんな結果になるのは……。

きっと、それが私の罪深なんだ。

私は決して、彼女に許されることはない。

それはきっとくだらないもの。

世界には、何もかもを解決してくれるものなんてないから。
世界には、みんなを困らせる殺して褒められるような都合のいい
怪物や、悪党以外のみんなを救ってくれる正義の英雄とか、ありと
あらゆる闇を打ち破つてくれる光の剣、誰もを恐怖に落とす醜く恐
ろしい化け物を殺す銀の弾丸、そんなものなんてないから。

好きな人も、嫌いな人も、親友も、見知らぬ人も、みんなが幸せ
なってくれる。

そんな都合のいい結末はないから。

みんな何かを願い、苦しむ。

何一つ叶わなくて、叶つたといひで世界は何一つ変わらなくて。

だから、みんな悩む、考える。
どうやつたら幸せになれるのか。

だから、みんな放棄する、閉じこもる。
なんでこんなにも自分は不幸なのか。

ぼくは思う。

どんなに悩みも、もしもその悩みでしまつ理由、原因といつもの
を言葉にしてしまうことが出来てしまつたら。
それは誰もが認めるよつた、きっとくだらないもの。
でも、ぼくはきっとそれを笑えないのだ。

その理由はきっと。

それはきっと、くだらないもの。

事態はまだその全貌どこるか、爪の先すらも見せていない。

手を伸ばせと叫ぶモノ

1.

「それでキミはいつたい私にどうしろと?」

巫月所長はぼくにそう聞いた。

ぼくは困った顔で首を左右に振る。

「いえ、ただ報告しただけですよ」

樋口カナの事件の真相と、結末。

そして、この事件の行き先がどんなものになるのか、それを考える材料を所長に提供しただけだ。

ぼくにとってはそれ以上でもなければそれ以下でもないし、それ以上の効果があるとまでは期待していない。

「なぜ、連續自殺が起るのか。……その要因はおそらく二重身にあるんでしよう」

一重身が自殺者の共通点になっている」と、今回の件の真相からしてそう判断できる。

あれはなんらかの形で、本人に死をもたらすモノだ。

「……事件の共通項に原因を求めるのは、わかりやすい思考の帰結だが少々危険でもあるな。自身の一重身を目撃した者が自殺すると?」

「……さらばと言えば、自分の一重身を目撃した人間は、自分以外の

「一重身をその前に見ていてます」

つまり、他の人間の一重身を見ることが、一重身発生の条件ではないか、ぼくはそう考えたわけだ。

ただの目撃者でしかなかつた人間が、次の瞬間自身もその事件の中心人物となる。自分と同じうり一つの一重身を出現させる形で。……それは見るだけで感染していく超常現象、自分で考えておいておいて「まるでウイルスみたいだな」という他人事のような感想を持つてしまった。

所長がぼくの言葉を聞いて、どうでもよさそうに言つ。

「……そんなホラー映画があつたな、元は小説だつたが」「ええ、ぼくは好きじゃなかつたですけど」

ぼくからすると、まずたかが見た人間が死ぬ程度のことは怖さに値しないし、あの程度の規模の事件なら個人でどうにか出来る範囲だ。

……多少の犠牲はあるだろうけど、それは重要じゃない。

ちなみに原作はぼくは読んでない、所長は後のシリーズ全部読んでただけど、ぼくからすればあれはホラーにはならない。

「だが、君の意見は樋口力ナに關してはそうだつたと言つことにしかならない。だが、他の人はどうだらうか?」

「……それは」

「さらに言わせて貰うと、今回の場合の目撃者は相当な数になる。少なくとも樋口力ナのクラスメートはほぼ全員だらう。全校生徒の中にも数多くいるのかもしない。その全員が自殺すると?..」「……可能性はないわけではないでしょ?..」

「その通り、可能性は零ではない。まあ、それ以前に君なんか直接会つて会話までしてるんだ。その場合、君自身がただでは済まないだろうけどな」

「ぞっとしませんね」

ぼくは言葉の上でだけ、そう呟いた。

ぼくが犠牲になる、それはその程度の問題でたいしたことではない。問題はさらに感染が広がる可能性だ。

なんらかの手を打たないと、多くの被害が出る可能性がある。

「よく考えろ、目撃した人間全てに感染するとなると被害者が少なすぎる」

「どういう意味です？」

「そもそも今回多くの第三者が一重身を目撃したわけだが、今までにそんなことがなかつたとなぜ言えるんだ？」

「何を言つてるんですか、今回が初めてでしょ。もしそんなこと今までにあつたら一重身を見たと今頃大勢の人間が大騒ぎしますよ」

「いや、ならない

「なぜですか？」

「今回がそつだらう、騒ぎになつてない」

何を言つてるんだ、この人は今まで話を聞いていなかつたのか？

「騒ぎにならなつてますよ、学校中ね」

「ああ、そうだな。だが、目撃者は一重身を本物だと思つてゐる。一重身を見たと言う騒ぎにはならない。ただ、何時自殺したのかわからないと言わわれているだけだ」

「…………」

確かに、その通りだ。

異形の化け物が現れた訳ではないのだ、同じ容貌の人間が動き回

つていてるだけで何の騒ぎになるつているんだろう。

人間とまったく別の存在である非生命体^{ノーライフ}が入れ替わつても、誰も事実に気づかないんだぞ。ほとんど本人に近い一重身が出たからつてどうなる？

「……なら感染する要因に適性が存在する、とかはどうでしょう。特定の素質がある人間しかかからない」

「それはありえるな、そもそも一重身自体が特殊な事例だ。世界各地で見られるものの、そう簡単に起こることじやない。古来より、靈的 existence に触れた者はその影響を受けるものとされてる」

それはつまり……。

「呪い、とかですかね？」

「それが一番わかりやすいか？接触と言つなら、触れるだけで病や怪我を治す地蔵や泉とかもあるんだが。……現れ方が違うだけで呪いには違ひないか」

病を治すのが呪い、よくわからない考え方だ。

ぼくの表情から何を読み取つたのか、所長は言つ。

「……いいか、遠野。魔術や靈には善も悪もない、あるとすれば意思と意図だけだ。それがなにかに害をもたらそうが利益をもたらそうが、それはそれを受けるものの立場から見た意見でしかないんだよ」

相変わらず、所長の話はつかみ所がない。普通の人からすれば訳がわからないだろう。

だが、うわべだけでも読み取つてみれば、所長の言つてることはぼくからすればそれはどちらでもいい話のようだと思つ。

確かに害や利益。つまり、損得というものはその人の勝手な価値観で判断されるものだ。だから事象に善も悪も存在しない、というのならそうなのだろう。

台風が人間の文化にどんな被害をもたらすが、台風が悪と言つ事実には必ずしもなり得ない。それはあくまで人間の一方的、都合見解でしかないからだ。

それが、ミサイルに変わつてもミサイル自体に善も悪もない。使う人間に悪意があるだけだ。もしくは、自分の国を護りたいと言つ善意があるだけなのかもしない。

それは理屈としてはわかる、でも実際に被害を受ける方としてはどっちでもいい話だ。どっちにしろ納得いかないのだから。

「ぼくにとつて、いや、普通の人間にとつてはそんなことどうでもいいんですよ。生活していく上で何の意味もないことですから」

「普通の人間？ キミが？」

「当たり前です」

ぼくはあくまで、普通の人間の範疇だ。

所長は訝然としない様子だつたが、すぐに思い直したのか、

「ああ、もつとわかりやすい例があるな。吸血鬼の血の接吻を受けたものは吸血鬼になる、あれこそそのものだろう。あとは、身近な例で言えばそれこそウイルスだよ、感染病なんて呪いの性質そのままだしな。いや、逆か？ 病や毒が呪いの原型の場合すらあるからな」

所長の話を聞いて思う、この話は長くなりそうだ、と。

なんとか、話の修正を試みてみる。ぼくは別にわかりやすい例を

聞きたいわけでない。

「それよりも感染の仕方が一重身の田撃なら、可能性はもう一つありますよ」

「なんだ？」

「潜伏感染の存在です。これなら個人差があつてもおかしくないでしょう？」

そう、この事態をウイルスのようなもの、とそう考えた時自然とその考えはこの答えへと繋がっていく。

潜伏期間という、身体に潜むウイルスが表立つての活動をしない時期。

「潜伏期間ね、確かに効果が現れるまで時間のかかる魔術はあるがな。それはともかく、感染効率から言えば一重身の出現は早ければ早いほど感染が広がるのでは？」

「いえ、それは違いますよ。他の一重身との接触から感染するんだったら、その本人が生きているうちは非効率的です。いずれ死ぬんですから」

「つまり、感染させた方の人間が死ぬまでの潜伏期間であつて、その感染させた方の人間が死んでから発症すると？」

「ええ、長めに時期をとつている可能性はありますから、潜伏期間はおおよそ一週間ぐらいでしょうか。それで、発症から一週間以内で死ねる、とか？」

「その数字予測はかなり根拠が気薄だな」

「まあ、根が適当ですから」

そもそもぼくはオカルトに関して、専門家でもなんでもない。はずれていても恥じる必要も、責任を感じる言われもないのだ。

「潜伏期間という考え方はともかく、確かに発現まで時間がかかる可能性は低くない。魔術としても現象としてもかなり大がかりなものだしな。何者かがこの事態を魔術によつて引き起しにしているとしたら、一応の説明にならないこともない。ただ……」

「ただ？」

「発想が飛躍しすぎだ」

「まあ、そうですね」

「さらに被害者が今後多くなるとこいつことど、キミが危険だと言う可能性を補強するものであると言つて理解しての発言にしては軽すぎる」

「……ですね」

自覚がないわけではない、が気にしてない。それがぼくだ。所長は呆れたように、しかしどこか楽しそうに口を開いた。

「遠野、キミはずいぶんと私をこの事件に関わらせたいらしいな」

「別にそつ言つ訳じや……」

「……私は基本的に誰かの依頼でない限り動かない。なんの対価もなしに動かない。なぜだかわかるか？」

「なぜ、つて」

金にならないのなら、動かないのが普通じゃないだろうか。

人はなんらかの形で対価が無ければ動かない。ボランティアなんて、感謝と自己満足と言つ対価のために働いているようなものだ。まあ、ぼくからすれば金と時間に余裕のある奴の贅沢な遊びに見えるけど。

「……またなんとも言い難いよつなことを考えているんだろうな、キミは」

「別に普通のことだと思ひますけど？」

「それはともかく

ともかくってなんだ。

「キミがなにを考えているか知らないが、私が動かない理由はたつた一つだ」

所長の目に若干の寂しさが宿るのをぼくは見た。

「制約だ」

……少なくともぼくはそう感じた。だが、ぼくはその言葉の意味を知らない。

言葉そのものの語意は知っていたとしても、それがどんな重みを持つのか、それは知りようのないことだ。

ぼくは所長に聞き返す。

「制約ですか？」

「ああ、強すぎる力は対象に必要以上の影響を及ぼす。私がへたに関われば、本来は助かつたはずの人間を消したり、成長するはずだった経験をなくし、個々の結末を最悪なものにしかねない」

「……はあ？」

「病に薬を与える時、その症状にあつたものにするべきだ。意味もなく強すぎる薬を与えると、痛んでもいい臓器を摘出する必要はない。私の力は人間一人ひとりの物語に関わるには少し強力すぎる」「ぼくはなんにしても解決は早いほうがいいと思いますけど？ 腐りが完全に全身に回る前に病んだ患部は切り落とすべきでしょう。そう言って様子を見ている間にどんなひどいことになるかわかりませんよ？」

「……少々過激で身勝手な発言だ。と言いたいところだが、キミの場合自分自身がその切り落とされる腕の側だったとしても同じことを顔色変えずに言つんだろうな」

「当たり前のことを言わないで下さい」

誰だつて最悪の事態になる前に手をつちたいと思うだろ？

それが普通だ、とぼくは思う。

だいたい自分が他の何かを犠牲にしてまで生き延びる価値があると思っている人間がどれだけいるっていうんだろう。

……見る限り、そうそう自信過剰な人間はいないように見えるけど。

まあ、普通はそれでも自分が犠牲になるのは嫌がるんだろうけどね、自分にそれほどの価値がないと思っているくせに。

「一応、聞いておきたいんだがキミは『他人を傷つけるなら、まず自分が傷つけられる覚悟を持って』と考えているか？」

「いいえ、それは馬鹿の科白ですよ」

「……ならないんだが」

それは自分の都合や理屈を他人に押しつけているに過ぎない、それは愚かな幼い子供のすることだろう。他人に都合や理屈を押しつけるのは根本的に甘えだ。

どれだけ規模を変えて考へても、それは同じ。

罵倒される覚悟があるなら、人を罵倒していいはずがない。

殺される覚悟があるなら、人を殺していいはずがない。

「なるほど、規模をどれだけ変えても根本は同じか」

「ぼくはそう思いますね」

「……物理学的な話になるとそろはいかないんだけどね、人間程度の力なら関係のない話か。小さすぎる力と大きすぎる力は同一には働かない、だが私達が遭遇する程度なら同じようなものだ」

……人間程度つてアンタ。

「キミにわかりやすく話そうか、キミは西遊記を知っているかな」

「そりや、まあ」

三蔵法師が三人（？）の供を連れ、天竺までお経の書かれた経文を取りに行く話だ。中国に仏教が伝わるまでの話を、ファンタジー仕立てで描かれた物語と言い換えてもいい。

道中、三蔵法師一行は妖怪退治などをして人々を救い、多くの試練を乗り越えて長い旅の末、経文を持ち帰る。このストーリーは今あるマンガや小説などの様々な物語の原型として今なお存在している。ドラマなどとしての放送も何度もあつたくらいにメジャーな話だ。

「ちなみに三蔵法師は実在の人物なのだが……まあ、それくらいは知っているね」

「ええ、たぶん常識と言つてもいいじゃないですか」

「さらに話すと中国ではこちらの話は比較すると人気がないそうだ」

「……比較すると、ですか？」

「ああ、本場では後半の物語である三蔵法師一行が旅をする話よりも、前半での斬天大聖の反抗の物語の方が有名らしい」

「前半？」

「登場人物で言えば斬天大聖よりも、それを名乗る際に戦う**ナタタ**太^{イシ}子の方が人気が高いように思う。私見だが」

すみません、それなんの話ですか。

「とりあえず、その西遊記を例に出してみよう。彼らの物語は壮大で冒険心をくすぐられるものだが悲劇がなかつたわけではない、そもそも彼らが通りかかる前に妖怪に食われてしまつた多くの犠牲者

とも言える人々が物語の裏には常にいたわけだ」

「それはそうだろう、でなければ三蔵一行が戦う必要もない。

「悪事を妖怪が働くからこそ、妖怪退治が正義として行えるのだから。

「ならその妖怪を供、実質配下に付けている三蔵はいったいなんなんだ、とは思わなくもない。

「まあ、退治を頼まれた妖怪でも猪八戒は例外だが。あれは別に悪事を働いていた訳ではない、人間の勝手な都合で始末されそうになつたと言い換えてもいいくらいだからな」

「……よくわからないんですけど西遊記好きなんですね」

「さて、ではここでもし三蔵一行を超える存在がいたらどうなつていたか」

「……はあ？」

「それはどんな妖怪すらも消し飛ばし、ありとあらゆる困難を物理的に排除し、ありとあらゆる悲劇をも破壊し尽くし、この世に存在する残酷な矛盾だらけの出来事すら飲み込み解決出来るような存在。……そんな怪物がもし物語にいたとしたらどうなる？」

「そんなもの決まっているじゃないですか」

「考えるまでもなく物語が成り立たない。

「誰も犠牲にならず、戦いも起きず、試練など存在せず、何事もない旅路を三蔵一行は行くことになる。

「成長することも、徳を積むこともなく、人々の歓迎と笑顔を見て回るのだ。」

「でも、現実にそんなことがあるとしたら、その方がいいとは思わないか。悲劇などない方がいい。困難な試練などない方がいい、と」

「……それは」

ぼくはその言葉に頷けない。

悲劇などない方がいい、普通はそう思う。

仮に悲劇がない方がいいのだとして、本当にそうなのだとして、誰も死がない、誰も悲しまない、みんなが笑顔で生きられる世界があつたとして。

「さて、話を戻そう。その物語を現実の人の人生に置き換えよう。現実に起きる事件とは全て、人間の人生の一片にしか過ぎないわけだから」

「人生にですか」

「そう、想像するといい。これから今後起きる全ての怪事件は全てなくなる、被害者も加害者もその想いも。背負つてきた理不尽な境遇すら、存在丸ごと全てだ」

「 つ！？」

鳥肌が立つた。

全身が拒否をした。

完全なる、不幸がない世界。

それに対し、想像するだけでぼくの全身が拒否反応を示した。

そんなもの、あつてはいけない。それはこの世にあつてはいけない。

「そういうことなんだよ、強すぎる力は全てを破壊する。破壊したと言つ事実 자체を誰にも知らせないほどに。つまり、破壊したと言う事実すら破壊するわけだ」

悲劇など初めからないことになる。

だが、悲劇というのは今突然現れる訳じやない、その前にその原因と成るような環境や過去、人物がいて初めて成り立つ。

では、成功や幸福といつものはどうだらう。

同じだ、何一つ変わらない。どれも人生における出来事に過ぎず、それを主観的な価値観で呼び方を変えているだけだ。どれか一つでも欠けたら、それはその人の人生でも何でもなくなってしまう。

……物語が物語でなくなってしまう。

「物事が解決するにはね、要因が必要なんだよ。人間は原因があるから結果がある、と認識している生き物だ。故にそこに至るまでの不幸な出来事すらを含めた道筋が不可欠なんだ。それを無くせば、事件は解決ではなく消失することになる」

それでも、ぼくは思う。

それでもいいから、人間は悲劇を回避したいと思うのだろう。例え、全てが壊れてしまつてもいいから。

自分の一番大事なものがその悲劇でなくなるくらいなら、その方がいいと思えるんだろう。

「確かに救える被害者を救わずにいることになる」と言つ考え方には一理ある。だが、それは常識の範疇での話だ、これから起きてしまう殺人事件があつたとしてね、それを事前にことが起きる前に無くすのなら、なにに原因があるにしろ、その原因が犯人の思考にしろ、被害者の振る舞いにしろ、環境そのものにしろ、全てを作り替えてしまうか、なくしてしまつのが最も簡単で早くして確実で絶対なんだよ」

「いや、これはあくまで例えだ。私の力はそこまで反則でも理不この人はそれが自分に可能なんだと、いいたいのか。

そんなそれこそ、カミサマみたいなこと。

「いや、これはあくまで例えだ。私の力はそこまで反則でも理不

尽くでないよ、ただキミが言つたとおりなら規模が多少変わつても本質は変わらない、そういうことだ

「だからこそ、の制約ですか」

「そうだ、求められたとき、求められた分の最低限の力を持つて働く。その分の対価を要求することで調整を図る」

「なんだか、上手く誤魔化されている気分なんですけど

「そうか？」

「ええ、なんかスケールのでかすぎる御伽話を聞いているような…」

…

もしくは詭弁そのものを聞いている気分だ。

「気持ちはわからなくもないよ、私もそうだった」

懐かしむように所長は言つ。

「でも、今はこう思つ。全てを解決してくれるものなんてありはないが、あるとしたら間違いなくない方がいいのだと。無償でしてしまえば、誰もがそれを頼る。頼らなくてもいざとなれば無償で頼れるものが在ると知つてしまつだけでその人間に影響を及ぼす」「その理屈はわかりますけどね」

さつき言われたことよりはよっぽどね。

強すぎる力どうこうよりは、必要以上に頼られないように自らは動かないとか、報酬を要求するとか言つたほうが、ぼくにとってはわかりやすい。

人間は便利だと思えば、何にだつて頼るものだから。

ただし、都合のいい間だけのことだけ。

ヤン・トーレンヤン・トーレンの小説のトーマです。
いや、嘘です。いや、嘘でもないんですけど。

2.

軋呑ハミは自らの背後に立つモノ（・・）に話しかけた。

「ハミになんのよつかなあ、『すとーかー』さん?」

それは氣配も足音もなく、ただそこに立っていた。
突然、そこに現れたかのように。

「へえ、気づいていたんだ」

その声に驚きの色はない、あるのは侮蔑と怒り。さらに添えられるのは重々しい何か

それは大神アスカだった。どう見てもそれ以外の何者でもなかつた。

いつも校内で見るような姿、とは言い難い。だがソレは大神アスカだった。

例え、その愉しそうに歪めた口の端から、真っ赤な液体を一筋垂れ流していたとしても。

例え、その右腕が獣のような毛深い「ゴツゴツ」した異形となり、その爪が剣のように鋭い凶器となろうとも。

例え、その瞳がドロドロとした漆黒なにかに比喩ではなく、現実に染まっていたとしても。

ソレは見る者全て（・・）にとって、間違いなく大神アスカだった。

軋呑ハミはその目を射抜くように見る、それは皿とこいつもまるでただの黒い二つ穴のようだった。

「気づかないわけないよお。ハミの身近に起ひるあつとあらゆる」とでえ、ハミにわからない」となんてほとんどないんだからさあ」

「……へえ、たいした自信ね」

「まあでもお、誰だつて気づくと思つよお、」こんなに犬臭いんだもんねえ」

「犬、ね。……なら、わたしが何を言いたいかも理解してるんでしよう?」

「そりやねえ……『すとーかー』さんの一言したことなんてそういうはないよねえ」

その言葉を聞いた大神アスカは眉間にしわを寄せ、軋呑ハミを睨みつける。殺意と憎しみを叩きつけるかのよつて。

「これは最後の警告よ、遠野に近づくのをやめなさい」

「まあ、……そんなことだらうねえ」

「貴女がいるせいで、彼は周囲からもよく思われず立場を悪くしている。……彼は孤立はしていても誰かから疎まれたり、中傷されるような対象では決してなかつたのに!」

「だらうねえ、それはハミも自覚してるよお」

「彼自身も迷惑しているわ、絶対に!」

「うん、確実に……そうだねえ」

軋呑ハミは穏やかに笑う。

余裕を見せつけるかのように、あるいは溢れんばかりの自信と優越感。

大神アスカの形をした何かは、それに苛立ちを隠さない。

「だつたら、さつとと彼から離れなさい！ 彼は……」

「それはあ、トオくんに直接言つたらあ？」

「つ！」

そこで、初めて大神アスカの形をした何かは口を噤んだ。言葉を返し、摑なつた。

「ああ。言つたんだもんね、それも2回も。ふふつ、それも無視されちゃつてえ、2回目なんか忠告してすぐその相手に電話なんかしてるんだからあ、ムカツクよねえ？」

「……くつ

「トオくんが迷惑に思つてるのは知つてるよお？ でもお、じゃあ、なんでトオくんは自分からハミから離れないんだろうねえ」

「……それは彼が！」

「優しいからあ？ そんなこと本氣で思つてるう？」

「……」

「彼は冷たくて残酷だよお、どうでもいい人間は『別に死んでもいい』くらいにどうでもいいし、それ以外の人間でもお、自分に関係ない事柄に関してなら『別に殺されていい』くらいにどうでもいい

い」

それは軋呑ハミにとつて、本氣の言葉だつた。

軋呑ハミから視た、遠野と言つ人物像そのものだつた。

「まるで彼を最低の人間みたいに言つのね、貴方は」「いいやあ、彼はフツーの人間だよお

軋呑ハミは当然のこととを当然のよつて言つ。

「フツーにこだわる彼はあ、どこまでもフツーの人間だよお？フツーの人間はフツーであるということに拘わらない、って言う本質的な事実に気付いていない天然さんだけお、まあハミ的には、ソレは魅力なんだけどねえ」

普通の人間は自らを、ありとあらゆる意味で特別にしたがる。他とは違う人生を歩んでいる人間である、他とは違う才能がある、自分は誰から特別な一人だと思われている、そんな思いを現実にしたい欲求がある。

もしそうでないのなら、普通の人間でいたい、なりたいと言う人間がいるとすれば、それは単純に潜在的に自らを普通でないとと思っているからに他ならない。

「でもねえ、『人と違うのがイヤ』だと『フツーでありたい』なんて少數派マイノリティではあるけど、結局はまともな人間の発想なんだよねえ。そう考えていくと、ちょっと度が外れているだけで、彼はフツーの人間だよお。

他者に無関心で活動には無気力な彼、自立精神旺盛に見えるのは他者から干渉されたくないからに過ぎないし。人と関わりたがらないのは責任と言う重みに耐え切れないからだし。活動に無気力なのは敗北や失敗を知りたくないからだし。本音をあまり言わないのは人に自分を知られるのが怖いからだし？

どれもお、フツーの人間なら誰しも持つてる弱さだよねえ、その度合いは別にしてだけどさあ

「……まるで、自分が一番彼を知ってるかのように言うのね」

「そうだよお、ハミはトオくんを一番よく知ってる。……誰よりも

それを聞いて大神アスカである何かは、歯を強く噛み締めた。
だが、気付かない。

ハミの雰囲気が徐々に変わりつつあることに。

「だから、遠野は本当は私を恐れてる。いや、遠野は自分を知りうる人間全てを恐れてる。彼は纖細すぎる、もうすぎる。だからもう傷つきたくない。責任の重みを知っているのは彼が責任感が強すぎるから。彼は虚言を嫌うけどそれは彼自身が嘘や偽りに傷つけられたから」

「なにを知ったような口を！」

「彼は人間つてものにだいぶ絶望してて、人間を人間としてまともに視ることさえままなつてないけど」

軋呑ハミはその口の内側だけで呴ぐ。

人外を人外として認識することすらままならないけど、と。

それを無言の間として、言葉を紡ぎ出す。

「それでも彼がこの世界にいるのは、……世界に未練があるから。それでも彼が私といってくれるのは私に、私自身に……」

その続きを彼女が紡ごうとした時、大神アスカは飛び掛った。瞬く間にその距離を詰め、獣のような腕を振るい、剣のようなその爪の切つ先で軋呑ハミを切り裂こうとした。だが、それは叶わない。

大神アスカである何かは腕を振るおうとしたその刹那に気づいた。それは人間的な判断力ではなく、その性質ゆえの獣のようなその本能で知った。

目の前にいるのはヒトではなく、獣と呼ぶことすらおこがましい化け物、いやそれすらをも蹂躪し一方的にその命を略奪できる絶対的な捕食者である、と。

彼女は知性ではなく、獣としての本能にてそれを知った。

故に、彼女は生き延びる。

その右腕を代償として。

「 つ！？」

それは影。

それに属する存在であるはずの彼女自身が恐れた、影。

当然ならば自らの延長線上、同類であるはずのソレは、今、恐れるべき天敵でしかなかつた。

そう、軋呑ハミの影はその身体を伸ばすかのようにして、大神アスカの身体へと凄まじい速度で伸びていく。

そして、自らの後ろ飛びのこうと身体を反らした大神アスカの獣のよじな右腕を、その肩の肉ごと貪り？ぎ取つていつた。

「 くはっ」

鮮血を辺りに撒き散らしながらも、大神アスカは地面に着地する。とつさに左腕で、食われた右腕のその断面を抑えるがその出血はその勢いを落とすことはない。全身が血に染まつていく。

「ふうん、生まれたばかりにしてはいい動きするんだねえ。『すとーかー』如きのくせに」

軋呑ハミはその笑顔を崩さない。

自らの圧倒的優位を知つてゐるからこそ。

「ああ、安心してくれていいよお、アンタなんか食べる氣ないからさあ。今のはただの味見い。いいでしょ、すこしくらい」

「……貴女、何者なの？」

大神アスカは自らの身体の震えを抑えつつ、軋呑ハミに問う。いつでもその場から逃げられるように、いつ……軋呑ハミの周囲に表出した蛇のような影達に襲われても、すぐに動き出せるように。

「なにって、ただの女の子だよお？」

くすくすくす、と無邪気に悪意の欠片もなく軋呑ハミは笑う。大神アスカは知る、目の前にいる存在は悪意なく、害意も決意すらもなく、ただの戯れでいつでも自分を殺せるのだ、と。

「ハミはあ、トオくんと違つてあなたがどうなるが『知ったことじゃない』の。例え、知つてしまつたとしても『知つたことじゃない』のね？むしろ、彼が気にしてるのが腹立たしいくらい。だから、その点では私はあなたの同じだよ？」

「貴女は……」

「だから死んで？ いいでしょ、それぐらいなら」

食べる内には入らないし。

次の瞬間、大神アスカの全身を寒気が駆け抜けた。

軋呑ハミの影は分化して、大神アスカへと迫る。迫り来る影は8本。それは槍のよう、大神アスカを貫こうとその切つ先を向け、空を駆け抜けれる。

……このままでは逃げ切れない。

そう判断した大神アスカは自らの傷口に指を突き刺し、奥深くを探る。

「……おいで」

辺りの獣の臭いが強さを増す。

軋呑ハミはその変化を探知した。

その腕の傷口から次から次へ生まれ出る、鮮血を身に纏い生まれるのは犬。無数の犬の群がほんの僅かの間に何十匹と生み出され、大神アスカの周囲を埋めていく。その全てが軋呑ハミをかみ殺そと牙を剥いた。

「へえ、かなり人間離れしてるじゃない！」

軋呑ハミは8本の槍はさらに細かく枝分かれさせ、確実に群を仕留めていく。

圧倒的なまでにその力は相手が何であろうと、相手がどれだけいようと覆されることはない。

ありとあらゆる怪物の天敵、絶対の捕食者である『軋呑ハミ』にとつて力の大きさなどたいした意味を持たない。戦いとは同じ次元に存在するモノ同士で成り立つものだから。

次々と生み出された犬が討たれていく中、大神アスカは群に言葉に出さずに命じる。

それと同時に、1力所に集まっていた犬達が散開し始めた。

「ふうん、バラバラに撒いて注意を分散させようって？無駄だと思うけど」

あくまで軋呑ハミは大神アスカを狙う。頭を潰せば残りの犬に脅威などない。

なにより、軋呑ハミが死んでほしいのは大神アスカだけなのだから。

一定の距離をとつて家屋の屋根へと飛び移り続け、逃げ回る大神

アスカを影で追撃する。

「私はね、トオくんと違つて『どうでもよくない』の。死んでくれないなら『殺したい』程度に『どうでもよくない』の、よ

殺すと決めた以上は、確実に殺したい。

だが、広く散開した犬達は1カ所に固まらずに、多方向から軋呑ハミを襲い始めた。

「ああ、なるほどね。あくまでそういうつもりなんだ。……だよねえ、気持ちはわかるよ、私にも」

私があなたに死んでほしいように、あなたも私を殺したいんだもんね。

軋呑ハミは自らの獲物に妙な共感と喜びを覚えていた。

彼女にとって殺したい、と思つことはその程度のことだった。彼女にとって、『殺す』と言つことは、殺すまでのその過程に楽しみや好奇心、そんな不要な感情を抱ける程度のことだった。

子供や猫が、虫を遊びながら殺すように。

だから彼女は気付かない、あることに。

軋呑ハミは同時に多方から襲い来る犬達を、影を操りいともたやすく討つ。その軋呑ハミ自身の動きはあくまで素人を超えるものではない、彼女はあくまで一介の女子高生に過ぎず、そこには鍛え抜かれた技や経験などは一切存在しない。

だが、それは相手も同じ。敵は獣にしか過ぎない。鍛え抜かれた技や経験などは存在しない、本能のまま牙を突き立てるだけの獣。

ならば、同じく本能のまま獲物を喰らい破るモノが喰らい合えば、そこにあるのは力の差のみ。否、次元の差のみ。蟻の群が象を仕留

めることなどあつえない。

糸を繰るかのように影を操り、舞うかのように獣を貫く。

その影と影との間を縫うようにして、大神アスカは現れた。

軋呑ハミが自らの周囲の犬に意識を向けている間に、大神アスカの姿をしたモノは現れた。

「調子に乗るなつ、化け物！」

失つた右腕の代わりに、左腕を獣の姿に変え再び軋呑ハミへと爪を振るつ。

それは吸い込まれるように、軋呑ハミへの首筋へと……。

「調子に乗る？ ……違つよ」

その腕は一ミリの隙間もなく、しかし、軋呑ハミの首に触れることもなく止まつた。

「あなたに噛みつかれたぐらいしたことじゃない、せいぜい痛くて泣き喚くくらいなの。わかる？」

大神アスカの姿をしたモノはまったく身動きがとれなかつた。なぜならその全身には、10を超える影が地面とを縫い止めるかのように突き刺さつていたのだから。軋呑ハミはその姿を舐めるかのように見る、自ら仕留めた獲物を鑑賞するように。

「結構、良い足してるね。ちょっと羨ましいかな」

その左足にはその靴を貫くようにして一本、その太股を貫くように2本突き刺さつていた。影を伝い流れ出る血。

「綺麗な足に血つて映えるもんだねえ」

それを見て、軋呑ハミは綺麗ね、と微笑む。
その目には忌々しげな表情をした獲物が映つていた。

「……やつぱり貴女が」

「ん？」

「廃ビルの大量失踪事件、貴女がやつたのね？」

「そうだよ」

軋呑ハミは当然のよつて言つた、なにを今さら言つているのか、
とでも言つよつて。
当たり前でしょ、と言つよつて。

「気付いていたんでしょ？ 怪しいと思うだけじゃなくて、実際
私がやつたんだと思つてたんでしょ？ それともじゃないのに、ト
オくんにあんなこと言つたの？」

ん？ と軋呑ハミは不思議そつに尋ねる。

返答はない。

「まあ、いいか。いいよね、もひどいのも」

軋呑ハミは玩具に飽きたと言わんばかり、つまらなそつて呟いた。

「いいよ、死んでも」

大神アスカを庇うかのように飛び出す、4匹の犬。

軋呑ハミは呆れたような、同時に、微笑ましいものを見たかのよ

うな表情を浮かべる。

「無駄だつて」

さりに表出してきた影は、底つよつ飛び出したときの犬達」と實いて、獲物にとどめを刺した。

それと同時に痙攣する身体。

それを機嫌良さそうに、眺める軋呑ハ!!。

……その表情が一気に困惑するよつと囂る。

「……ん?」

違和感。

やつ、これはあえて言葉にするのなら。

「空っぽ……中身が、ない?」

貫いていた、獲物が全て消えていく。
跡形もなく、血の跡すら消えていく。

残るのは、最初に腕をもぎ取ったときの血の跡。

その後を視線が追う。どこまでも、遠くへと向かっていく血の跡。

そして思い出す、先ほど戦った獲物は途中から、その右肩から出
血などしていなかつたことに。

「ああ、やつこう」と

軋呑ハ!!はよつやくへじで氣付いた。

自分が獲物を逃がしたらしい、と呟つゝだ。

*

一匹の犬が林の中へと現れる。

その犬には、前足が一本だけない。そう、右の前足が。

犬は全身を震わせるとその姿形をえていた、肉が盛り上がり、皮がその色を変え、骨格がその姿をえるためにバキバキと音を立てる。10秒と立たずに皮は服となり、その身体は完全に入へと形を変えた。

その人物 大神アスカ、はそのまま地面に倒れ込んだ。服が汚れても構わない、もう既に全身が血で汚れているのだから。

「なんなの、アレは……」

化け物、だつた。

間違いなく、それ以外の形容など出来なかつた。どう考へても殺せる気がしない。

なぜあんなど、遠野が普通に一緒にいられるのかまったく理解が出来なかつた。

なぜあんのを、遠野が「迷惑な奴だ」と笑つて傍に置いているのかまったく理解出来なかつた。いや、理解したくなかった。

それ以上に理解できないのは、自分が感じてているのが軋呑ハミという化け物に対する恐怖よりも、自分が遠野の隣にいないということ、アレがその位置いると言つことの怒りだつた。

アレが狂つてゐるのなら。

私もたいがい狂っている。

大神アスカはそう思う。

そんなことを言っている場合でも、考へている場合でもないと、
そう理解できるのにそのことを考へずにはいられない。

なぜ、あんな奴が遠野の隣にいるんだ、と。

もはや、それ以外に自分を支配しているモノは存在しなかつた。
アレをなんとかしなければならない。

幸いにも、アレにもつけ込む手はある。

自分に知らぬことは何もないなどと嘯いていたが、実際、あの場
で思いついただけのつまらぬ手に引っかかった。

どんな手を使っているのかは知らないが、確かにアレは周囲で起
こつていることを把握する能力があるらしい。

だが、その肝心な注意力は常に周囲全域に向いているわけではな
い。

そんな能力があつても、あくまで使うのは一個人にしか過ぎない。
簡単な誘導にも引っかかるし、いくらその能力の範囲内でも注意が
向いていないのならこうして、逃げることも出来る。

大神アスカは犬を生み出すときに自らをその中に紛れ込ませ、そ
して犬達を散開させたときにそのまま逃走したただそれだけのこと
だつた。だが、囮としてダミーとしての自分と犬の大半を戦わせ、
さらに散開する際に他にも逃げ出すよう一部の犬に命じてもあつた。
例え、逃げたのがばれたとしても、逃げた他の犬のうちどれが自
分なのか、相手が気付いた頃には把握しようはない。

何より、アレ自身には機動力などさしてないようだつた。

臭いからアレがたいしてあの場から動いていないことはわかる。

今後、アレに自分から近づき距離をとれば、足の速い分対応は出来る。

大神アスカは再び、自らの傷口に左手を突っ込む。

「うつ……くつ……」

何かを探るかのように、指を動かし……。掴む。

「 ああつ！」

そして、なにか引き抜いた。

引っ張り上げるようにして、傷口から生えてくるのは新たな右腕。

「はあ、はあ、はあ……」

左手で触るようにして、右腕の状態を確かめる。手を開き、握る。その動作を繰り返し、反応の遅れと自らの命じた動きとの差異を確認する。

許容範囲、だ。違和感はあるが、時間が必要な事柄だろう。動かしながら、すこしづつ最適化していくしかない。

ただ、どちらにしても。

「全力で動くには時間が必要かな、少しまた力を集めなきや」

でも、それもたいした時間は必要ないだろつ、そう大神アスカである何かは考える。

今は昔と違つて人間も多い。ひどいくらいに、だ。

そのくせ、念は強く重い。表に出せぬ、思いのなんて多いことか。

その上、この街はなぜか思いの一つ一つが強い。現実に力を持ち、

形になるほどに。

恐らくは何者かの意思と意図がそこにある、そつ考ふざるを得ない。

それほどにこの街の思いに『えられた力は、強い。
思い、が形になる街。

「奇妙ではあるけど、わたしには関係ないね」

でも、不思議だ。

なぜ、わたしはこんなにも遠野を思うのだろう。

確かに大神アスカは遠野を思つてはいた、だけどここまで狂おしいほどに慕つていたわけではない。自分は確かに大神アスカから生まれ、自分は確かに大神アスカであるわけだけど、なぜこの気持ちは強く自分を支配するのだろう。

もしかしたら、この思いは。

わたしだけの、ものなのかもしれない。

「そうだつたらいいのに」

憎しみでしか動けないはずの、わたしの……。

思いだつたら、いいのに。

そう思いながらも、大神アスカは犬達を解き放つ。
自らの望みを叶えるために。

作者の中では、カーバリズム^{カーバリズム}とこののは一いつのカトリ^{カトリ}ーなんですが、どうなんじょい・ヤント^{ヤント}とは違つんですよ、ヤント^{ヤント}レとは。

3.

なんとなく、ぼくは呟いた。

「どうも最近、最後の一線、きつ、きついで生きてこらぬがあるなあ

所長は少し考えるそぶりを見せて、ぼくの独り言にわざわざ返答してくれる。

「……特に、一円、キミが最前線に直接立っていた記憶はないが？」

「ええ、まあ、そうなんですね」

あくまで雑用、ないしは後方支援要員としてしか狩りの時には動いていない。もしもぼくが直接戦うような時があるとすれば、それはもういちが負けていることだ。

まあ、ぼくの場合戦うつて言つて、逃げるか黙つて食われてやるくらいしか出来ないんだけど。

ああ、割合、危ない連中との交渉やら取引には頻繁に矢面に出てるか。今のところ、怪我一つ負つたことはないけど。

でもなぜかな、あちこちで死亡と言つ不吉な響きの言葉から始まるにかを、順調に立ててこる気がするのさ。

……気のせここしておる。

「所長。わんわん、ぼく帰らひつかと黙つてですけど

「ああ、いいぞ。」「」苦勞だつたな

「「」苦勞つて、掃除と買出しぐらいしかしてませんけどね

調理は自分の晩飯にもなつてるので、ぼくの中ではノーカウントだ。

ぼくは上着を羽織ながら、事務所内を見渡す。

つい少し前に、赤霧先輩がなぜか唐突に黙つたまま出て行つたので、あとはぼくと所長しかない。ぼくが帰れば所長は一人。

「……本当に大丈夫です？」

「当たり前だ、子供じゃないんだぞ」

「お米は研がなきやいけないんですよ、水を入れなきやならないんですよ？」

「……キミは私をなんだと思っているんだ？」

機械オント、もしくは世間知らず。

炊飯器を一日田で壊したことをぼくは忘れていない、個人的には通販とネットオークションを所長が利用出来ていることが驚きだ。

「キミは忘れているのか、キミが来る前にも私はきちんと生活していたことを」

きちんと、ね。「」の地区的「」だしの曜日も知らなかつたくせに。

「じゃあ聞きますけど、お茶とコーヒー淹れられます？」

「出来ないはずあるかつ！」

「あ、ティーパックはなしですよ？」

「私の評価はそこまで低いのかー？」

オープン機能が付いた電子レンジを二回で壊したこととぼくは忘れない。壊すぐらいならぼくくれればよかつたのに。

あれ、専用の容器を使えば煮物だって作れるんだよ？ 炊飯器だって、パンや飲茶が作れる優れものだったのに！

「……なにを怒っているのかは知らないが、ここにあるものは私の私的な財源で買ったものだからな。あくまで、事務所ではなく私個人のものだ。そもそも事務所自体……」

「いやまあ、所長が通販好きなのは知っていますけど」

「誰もそんな話はしてない」

通販番組の商品紹介でなにを見ても、「それは得だな」しか言わないんだもんな。珍しく買った家電製品もそういう理由で買ったものだと思われる。

所長が事務所になぜか直接届けさせない主義なので、ぼくの家に搬送さればぐが事務所まで運び込むと言ひ、疲れる経緯を経たのだが。

「でもいいですよ、べつに。メーカー保障で無料修理・交換だったのに『壊れるからもう置かない』と言つたことも、べつにいいですよ」

「怒つてるよな？ なにに怒つてるのかはわからないんだが？」

「怒つてませんよ、調理器具使つのは所長じゃなくてぼくなのに、なんて思つてませんから。使う気ないなら最初から買つなよ、期待させんな。とか思つてませんから」

「嘘は嫌いだと言つていたその口でなにを言つてるんだね、キミは！？」

「嘘じやないですから……怒つてるんじやなくて、怨んでるだけですから」

「それはどう違うんだ！」

「字が違いますよ。それはそつと怒と怨つて微妙に字が似ていますよね？」

「微妙に会話にならない！？」

会話にならないのはこっちだよ、まったく。

さすがに捨てるより言つた時には我慢できずに、修理と交換するようメーカー側に即座に連絡し、事務所に置くようになつぱりと心を込めて説得したけども。本当にこの人は物の大切さを判つていな

い。

ああ、他に不満と言えば……。

「個人的にはもうちよいキツチンを広くして欲しかったのですが」「会話にならないかと思えば、いきなり改築要求か」

「あと、欲を言えれば蒸氣で汚れを落とすワイパーが欲しいですね。」

「つまびど」

「確実に一つは自宅に置く気だね？」

「やつぱりぼくがお米を研いで、タイマーセットしておきますから」「話の変わり身が早すぎる！？」

「」飯はちゃんと食べてくださいよ、『ああ忘れてた』なんて言わなこよつて

「……善処しよう

この間、丸々、作ったおかずと炊いたご飯が残つてたときは本氣で切れかけたからな。炊かれたご飯が保温のせいで悲しいくらいに、固くなつていた光景は涙なしでは語れないよ？

世の中には食べたくても食べられない人がいるんだから、食べ物は粗末にしないで頂きたいですね。

具体的には目の前に、ぼく言つ人がいるんだから。

「あー、あとですね。味噌汁なんですけど、インスタントのを買つ

ておきました」

不満そうに「えー」と呟やく、巫月所長。

「袋が三種類入つていまして、具と味噌が分かれています。具はネギとワカメですね」

「……ネギはどうすればいい」

「とつて置いてください、たぶん誰かが使いますから。余った場合、ぼくが戻してチャーハンの具にでも使います」

そう、実は巫月所長。ネギが嫌いでした。

なので、きちんと分けて食べられる味噌汁の素を買ってきました訳で。つて言つた、意外と子供みたいな好みと言つた、嫌いな野菜がかつたりする。代表例はピーマンとシメジ。キノコ汁はアウトです、食べません。

「となると実はワカメのみになるわけか
「それは仕方ないでしょ」

汁物に入れる具のことを、所長は『実』と呼ぶ。まあ、不満があるのなら好き嫌いを直せばいい。少なくともネギとお麸くらいは増やせる。

「いつぞ、キミが毎朝作りにきてくれればいいと思つんだが?」「ぼくは所長の嫁なんかですか」

学校に行く前に朝食を作つて食べてから行けど。どうこう高校生活だよ、なぜかすごく不健全な気がする。ついでに昼食の分でも作らされるのか、いやお弁当を作つて欲しいといわれる気がする。……単純にぼくが所長の母親っぽい気がしてきた。

「……キミが私の嫁か。…………じゃ、それでいいから作ってくれないか」

「すこいく妥協された感があるんですが」

めちゃくちや失礼だ。

その苦渋の選択みたいな顔をやめて欲しい。

「キミの作った味噌汁が毎日飲みたい」

「センスの古いプロポーズ見たくなっていますが」

「正直、あまり美味しくはないんだが」

「本気で妥協された！？」

「いや、やはり毎日は勘弁して欲しい」

「しかも、一方的にキャンセルされた！？」

次の瞬間には楽しそうに笑い出した所長を見て、自分がからかわ
れていたことを知る。

……さすが所長、攻撃を受けてから反撃に移るまでの間隔が短い
な。

と、変な感心の仕方をしてしまった。

「まあ、でもあれですよね。その案を本気で採用する場合、ぼくは
泊まつた方が早そうですね」

「……確かに、だが珍しいことでもないだろ？」

「そなんですけどね」

泊まりがけで仕事をすることも実際ある。

夜間に動くことが多いわけだし、頻繁ではないけど少くはない
のだ。

「とにかく、そもそもわざわざここで夕食を作つて持つて帰るよりはここで食べたほうが早くないか」

「やうなんですね」

でも、それをすると完全に自分がここで住み始める気がする。夕飯食べて片付けた後、帰ること面倒なこと面倒なこと。

いや、別に泊まりでいいぢやこいんだけどね、家賃や光熱費と言う生活上の一番の問題点が消えるし。

だが、なぜかな。それすると生存上の一番の問題点が悪化する気がする。

「つて言つたそれ、二十四時間臨戦態勢ですよね、勤務時間二十四時間ですか？」

常に職場にいる生活つて……。

いや、泊り込みの仕事だつて世の中には数多くあるわけだけど。

「まあ、手当、べらりと出せると思つたが？」

「とてもものすごくかなり惹かれますね」

でも、止めておこう。その方がいとぼくの本能が言つていい。たぶん、今以上に死亡から始まる立てかけないなにかを、乱立する羽田になる。特にハミがそれでいい顔するとは思えない。必ず面倒なことになると断言できる。

……やめておひや。少なくとも、今は。

今後はわからぬいけども。

「んじや、ああ、ぼく帰るんで。戸締り気をつけてくださいね」

「なにもここには入つてこないよ、でも、ありがと。……キミも

「氣をつけてな」

「ええ、じゃまた」

そう返答して、ぼくは事務所を出る。

氣をつけて、たつてなにがいると囁つわけでもあるまいし。

最近、この辺も前と比べれば平和なものだつて、確かに色々あるけど。

……こちら側にも、向こ側にもきちんと元締めみたいのがいるわけだしな。そうそうトラブルなんて、突如として舞い込んで来るわけがない。

なんてぼくはこの時、思つていたわけで。

自分が今、対面しているトラブルでさえ現実を侵食する怪異だと言つても、所詮はただのドッペルゲンガー。見た人間を殺すだけのものにしか過ぎない、そう考えていたわけで。

少なくとも、もう一人の自分、一重身を見ることになるまでは危険なんてそういう訪れることはない、とそう根拠もなく確信していた。そんな保証は誰もしてくれなかつたのに。

ぼくはそんなことを考えるよりも、薄暗い中、軋むぼろぼろの階段を降りていくのに必死だつた。

*

自分は今のところ安全だ。

例え、その線の上ぎりぎりだつたとしても、自分は安全ラインの内側にいる。

その考えが間違いだと知るのに、たいして時間は要らなかつた。事務所から離れて、五分も必要としなかつた。

なにかを見たわけでも、聞いたわけでもない。なにかに襲われた

わけでもない。

街中に充满する獣の臭い、唐突にぼくはそれを感じた。
どこまで歩いてもまとわり付いてくる、その臭い。

異臭からぼくは異常を知った。

ただ、どこにいても獣の臭いがする。ただそれだけのことではぼくは自分が日常から切り離された状況にあるとなぜか実感してしまった。

ぼくは夜の道を歩く。

あちこちに街灯があるといつても、影が、なにかが潜むことの出来る闇が消えてなくなるわけではない。

「」箱の影、止めてある車の影、建物と建物の隙間、むしろ、明かりがあるが故に、その影は強調される。その存在感が明確となる。

影は影でしかないはずなのに、影の本体である物体そのものよりも、光があるが故に強調される。

影は光があるが故に、闇であるのにもかかわらず明確となる。
影と言つ、物体としてありもしないものがその存在を主張し始める。

ぼくが感じ始めたのはまずはそこからだった。

あくまで、そこが先だった。
気が付くといつまにか いた。

荒い息遣い。

今か今かと、急き立てる双眸。

その牙を突きたて、肉を食み生き血を啜らんとする獣。
そこらじゅうの影と言つ影に奴らは潜んでいた。

それは……犬。

何の変哲もない、日常見ることがなんら不可思議でない存在。それが、自分の行く先々、潜むことの出来る隙間、あらゆる至る所の影と言つ影に、ぼくが向かおうとする場所に先んじて現れていった。

「おいおいおい」

ありえないわけではない。

一つ一つを見れば、野犬が街の中で見かけることは多くはないが、ありえないことではない。影に隠れるかのよつてることも、稀にはそう、あるのだろう。

だが、この数はなんだ。

日常の中にある見えそうな出来事が、数を重ねるだけで異常になる。そりや、怪談にはありがちだけどね。実際、なつてみるとろくなもんじやない。

犬、はそれ自体が凶器だ。その辺の人間にナイフを持たせるよりも、十分すぎるほど脅威になりえる。

常に凶器のその切つ先を、背中に向けられている。

そんな感覚。

抵抗？ ばかばかしい。

ぼくと言つ人間は、ぼくと言つ個人は、たかだか犬畜生が一匹二匹いるだけで殺せる程度の命だ。十数匹いれば、過剰すぎるほどに戦力だ。

こいつらが襲い掛かってくれば、ぼくはいつでも死ねる。

実際にぼくのような状況で、こうして住宅街の中にある公園に差し掛かれば、「そんな馬鹿な死に様はありえない」などと、そんな日常と言つた想にしがみつける余裕は消し飛ぶ。昼間は子供達が無邪気に遊んでいるようなその空間で、ブランコや象の造形をしたすべり台などの遊具に並ぶかのように、辺り一面に奴らがいた。

十、二十、三十、無数に存在する影。

その四足にて這つ影すべてが、光る一つの田を獲物である自分に向かっている。

唸るでもなく、威嚇するでもなく。

その荒い息遣いのまま、ただ自分を見つめる。その視線を感じながら、歩き続ける。

可能なら、すぐにでも走り出したい。叫びながら逃げ出したい。だが、そんなことは愚の骨頂だ。獣相手に走つて逃げ出すなんて、追いかけてくれと叫ぶようなものだらう。足はどう考へても向こうのほうが早い。

だが、ぼくはそんな状況でも恐怖心に捕らわれ、その心のままに叫びだす……なんてことはない。

理由は簡単なことだ、恐怖心に捕らわれることが怖いからだ。

闇を恐れること、死を恐れること、そんな恐怖よりもそれに捕らわれてしまい身動きできずにいることのほうが怖い。叫びだしてそのまま逃げ出してしまはうほうが怖い。

そう、ぼくは臆病な人間なのだつた。

だからこそ、ぼくは勇気を振り絞るのではなく、恐怖心で恐怖心を振り切る。

想像して欲しい、自分が恐怖心に捕らわれ、その心のままに行動してしまつ姿を。

「世にあるなによつも、恐ろしいとは思わないだらうか。

それに比べれば、生きたまま犬の群れに食い殺される」となどた
いした恐怖じゃない。

より強い恐怖を知ることで、それに満たないものに対して耐性を得る。人間は、最悪を知つていれば、「こんな目にあうくらいなら」と痛みを伴う死を恐れずに生きることが出来る。

この世で一番の恐怖は、恐怖に捕らわれてしまつことだ。あとはたいしたことはない。

ただ死ぬか、狂うか、取り返しが付かないだけだ。

結果を知るところには事実上、死んでいる。別にたいしたことではない。

だから、今、ぼくの背後にぴたりとついてくる獣がいたとしても。それはただ命を脅かしてくるだけ、怖いだけだ。決して、抗えない恐怖ではない。

その数が増えようが、同じ。

刃物を向けられていたのが、拳銃に、機関銃に、大砲に、ミサイルに、順に変わったところで結果は同じだ。

刃物でぼくは十分死ねる、それが拳銃に変わろうがなにに変わろうが、同じ死ぬならその恐怖は大して変わらない。

刃物より拳銃のほうが恐ろしい?
機関銃や大砲のほうが怖い?

なにを馬鹿なことを、人間は素手で殴られる程度で死ねるんだ。打ち所が悪かつたなんて、馬鹿な理由で。

そうは言つてもぼくは、臆病なので。

後ろに今、どれだけの犬がぴたりと背後を付いてきているのかなどと、確かめることは出来なかつた。

背後になににがいるか確認するのはそれは恐怖心ではなく、魔晄や好奇心などと言つたぼくには不要な成分の領分なのだから。なんとなく、ぼくは呟いた。

「どうも最近、最後の一線をきつついで生きっこる気があるなあ

返答はない。

そりやそうだ、これは独り言なんだかい。
ぼくに出来るのは、音を立てなこと、転ばなこと、慎重に静かに歩みを止めることだけだった。

送り犬といつねの送り狼（前書き）

なんだか、遠野くんが巫月所長ルートを確立しつつあるようだな？
せひ一層、ドロドロします。

送り犬という名の送り狼

4 .

毎日のように母は父を罵つた。

気が付くと、それがわたしの家の日常風景だった。

「またあの女の所でしょう、わたしにはわかつてゐんですからねつ

！」
「違うと言つてゐるだらつ！……きみはなぜ僕が信じられないんだ」

父は仕事が生き甲斐だ、というような人物でとても真面目な人だつた。それでいて、人当たりがよくとても気遣いの出来る人で、上司だけでなく部下をも立てるこの出来る人物として、多くの人に信頼されていた。

少なくとも、わたしの目にはそう映つた。

家にはたくさん的人が来た、仕事に関わる人が大半だつたが、そのほとんどが父を友人として慕つてゐたようだ。年齢や所属、と言つた立場に関わらず。上司に当たる人ですら、部下というよりは幾分年の離れた友人のように接していた。

それは今考えてみればすごいことだな、とそう思える。でも、当時のわたしにはそれが当たり前だつた。

でもそれが問題だつた。たくさん的人が來ていた、その中には男の人もいれば、女の人もいた。それはわたしにとつて当たり前のことがつたが、母にとつてはそうではなかつた。

……母はその中の一人と、父が浮氣をしているのだと思つていた。

そう思つようになつたきつかけはわからない。

その女性は父の部下であり、大学の恩師の娘にも当たる人で、仕事の面では父の優秀な補佐を務めていた。同時に、女であるわたしから見ても綺麗な人だつた。

父は色々な人から相談を受けるような人柄であつたので、当然、その女性からも相談を受けていた。

この時、彼女が父をどう思つていたのかは子供過ぎたわたしにはわからない。

少なくとも、父にはそんなつもりはなかつた。

……なかつた。

母が一方的な嫉妬をするが故に、父は彼女の相談を母がいない場所で受けるようになつた。

わたしは知つていた、父は嫉妬深い母といふことが大きな負担に、苦しみになつっていたことを。

わたしは……それがなにを意味するかを理解していなかつた、ただなにも感じずにそれを見ていた。それがどんな未来を生むのかわたしには想像なんてできなかつた。

だつて、それはわたしにとつて日常だつた。だれもそれが問題だなんて言わなかつたから。

未来なんて想像できるはずもない、未来を想像するのは未来があると経験から知つてゐるから出来ること。過去が存在しない、幼い子供には出来るはずもない。

なによりも、わたしにとつてそんな家庭が当たり前だつたんだから。

なにも壊れるものなんてないと、そう思つてた。
なにかが壊れた過去なんて……なかつたんだから。

「それは『送り犬』だね、間違いない」

携帯の向こう側から聞こえてきたのは、そんな自信満々な巫月所長の声。

ぼくはその声を聞いて、どこか安心していた。

「……送り犬ですか」

脱力しそうになる自分を抑えて、なんとか声を絞り出す。ぼくは自分のアパートに帰つてからも、未だその周囲を犬達が囲んでいるような気配を

感じていた、それらにどう対応するべきか、巫月所長に伺いを立てるためにこうして連絡したのだった。

送り犬、まったく聞いたことがないな。妖怪か、なにかだろうか。

「聞き覚えがない、ね。まあそつだらつな、なら『送り狼』はどうかな」

「ああ、それならわかりますよ。女の子を親切そうに家まで送り届けておきながら、ちょっとと口では言えないような企みをしてる人のことですよね?」

「……もうすこしどんだ。……他の言い回しはなかつたのかね?」「なにか変なところでも?」

「いや、いい。さらにその言葉にはもつ一つ意味があつて、主には山道などで食らひ隙を伺いながら付けねりう狼のことを見つた」

なるほど、山中ではないにしろ、アレはそつこつものだらう。ぼくが出てくると、いや、今なお監視している獣の群れは。

「でも、あれですよ。送り『犬』であつて狼じゃないですか？」

「まあ、聞け。送り犬 자체、地方によつては単純に狼とも呼ばれる。時には山犬と呼ばれることもあつた」

「山犬ですか、それって確かに野生化したペットの犬ですよね？ もしくは野犬全般をそう呼ぶ……んじゃなかつたですか？」

「元は違つ、それは後の人間の解釈だよ。元は別のものを指す」

「つまり、実在する犬の種類だつてことですか」

「いや、もういない、既に滅びているよ。山犬とは、本来は日本狼を指すものだからね。本当は別物だとする説もあるんだが、今回はややこしくなるからはぶかせてもらおつ」

「それ、よつするに自分に都合よく情報を編集しようとしてませんか？」

「失礼だな、そうでない可能性を示唆する材料を並べる時間が惜しいだけだ。どうしても気になるなら自分で調べるといい」

「……気が向いたらそうします」

永久に気が向かない自信がぼくにはある。

いいじやん、日常使わないよ？ そんな知識。

「日本狼が既に絶滅したことは当然知つてゐるね？ そのせいで生態系が崩れてしまつたんだがそれはまあいい。重要なのはその習性だよ」

「習性？」

「ああ、日本狼には自分のテリトリーに入つたものを監視する習性がある。また、特に自分より確実に弱い子供や女性、老人を襲う。家畜を襲う際にも、当然ながら弱つた対象を狙つ。これは、日本狼に限つたことではないけどね」

「襲う隙があるものを襲うのは、狩猟を行う動物にとつて当然のことだと？」

「そう、要するに送り犬の性質は日本狼そのままなんだよ。原型に

なつて いる どころじや ない。他には、旅人を護つ てくれるとか、家まで見送られた後に草鞋を片方投げてよこすと山に帰ると言われるが……」

「あつ、それ。……スニーカーでいいですかね？」

「後から付けられたこじ付けだろつ、と私は思つ」

「……」

「自分の身に着けていたものを、身代わりとして使うのはありがちな話だね。効果はあるよ、素養のある人間がきちんと作法にのつとれば。才能皆無のキミには無理だけど。ちなみに草履だけじゃなく、塩や食べ物の場合もある。

動物が塩を舐めることは珍しくないし、塩は魔除けの意味もあるから付け加えられた流れはわかるね。それがわかるだけに、ただのこじつけ感が一層強い。あと、食べ物で氣をそらすのはわかるが、逆効果だろうな。どう考へても餌がもらえると癖になるだろつ？

人間に對する狼の恐怖心もなくなり舐められる、一層被害は最終的に増すことが予測される

「ぼくにどうしろと！」

「……使い込んだ私物でもくれてやれ、多少はマシになるんじゃな

いか？ 帰らないだろし、味を占めること間違いなしだが

「所長はぼくをどうしたいんだ！？」

もしかして、ぼくを殺したいんじゃないだろつか。……なんかし
たかな、身に覚えはないと思う、思いたい、思おう、思わずにはい
られない。

「つべ、まるでストーカーにでも悩まされているみたいですよ。まさか、ぼくがこんな目に遭うなんて」

「『ストーカー』ね、言い得て妙だな。一重に出来くもの、との符
号を考えると一重身も、自分自身と言つ名のストーカーのようなも
のだと考えられるじやないか。自分自身から人は決して逃げられな

いわけだが……なんだか笑えるね？」

「笑えねえよ！」

「つまり、キミはあれかな。『ストーカー』に『スニーカー』をく
れてやるうとしたのか。……ずいぶんと身体を張つてゐるなキミは
「相手を喜ばせようとした訳じゃない！」

「この人、ぼくを徹底的になぶるつもりなのか？」

「ぼくもかなり性格が悪いことを自負しているけれど、サディスト
じやないことだけは胸を張りたい。心の底から。

「ん、でも、所長。所長の言からすると、送り犬の正体は日本狼つ
てことですよね？」

「ああ、そうだ」

「でも、今現実に妖怪だかなんだか知りませんが、こうしてぼくの
住んでいるアパートを包囲してますよ。間違いなく存在している
んです」

「現実に、ね。おそらく、キミ以外の人間には一切脅威はないだこ
ろか、認識することすら一部を除いて不可能だろうがな。それを現
実に存在する、と言つていいものかな？ あくまで今のところは、
になつてしまふのが問題なのだけど、ね」

「それって……どういうことです？」

「そうだな、おんぶお化けの正体は知つているか」

「……山に捨てられた小判でしたっけ？」

「絵本で読んだのか？ 微笑ましい限りだが、オバリヨン、おいが
かり、その正体は時に狐やら狸やら神の試しになるわけだけどね。
あれは科学的に説明するとなにならんんだろうね？」

「科学的に……今そういう事態ですか？」

今はどう考へても科学的に現実的にも、説明の利くような状況
じゃない。

だが、ぼくの言葉を巫月所長は無視し、話を続けた。

「いいか。考えるんだ、その現象だけを切り離して考える、突然身体がなにかが重く圧し掛かったかのように重くなり、身体に力が入らなくなり動けなくなる。ひどい時にはその重みに耐え切れなくなり、徐々に呼吸が出来なくなり、死んでいく。これはなんだ？」

「……なんだ、って言われても」

とりあえず、ぼくは所長に付き合つてみる。現状、差し迫つた危機はなさそうなのは間違いないのだ。外にいる連中がドアや窓を破ろうとしない限りは。

とにかく、そういう状況で考えられるのは……。

「病気とか、なにかの発作ですかね？」

「そうだな、それもある。そして怪異の舞台となることの多い山の中でなら、ガスが考えられる」

「ガス？」

「そう、ガスだよ。手足のしびれ、全身の重さ、呼吸困難、死。ちよつとしたくぼみがあれば日本各地ありえる話だ。なにせ、火山の上に国があるようなものだしね。

病気やらなにやら、そんな目に見えないようなもの、当時の人間がどう感じたか、説明の付かない事態を自分にどう納得させるか。理解するのはそう難しくないだろう?」

確かにありえない話ではないだらうけれど。

「それが今とどう繋がるんです？」

「結局ね、怪異なんてものはその大半が存在しないんだ。だつてそうだらう、元になつたものはもう滅びてすらいる。キミだけが見て感じているだけなのかもしれない」

「でも、実際にいますし。ぼくらはそれらと何度も戦つてきています」

「そうだね、我々は怪物や怪異と対峙する立場にある。だけど、覚えていてほしい。元々はそんなものはいなかつた、人間が作り出してしまつたという可能性があることをね」

「……それはいつたい?」

「キミが対峙したことがあるのは、そうだな。『非生命体』『食屍鬼』『喰人鬼』『二重身』『悪霊』。あとは異能者に魔術師、……他うちの所員ぐらいいかな」

「そうですかね」

「自信はないがだいたいはそんなものだらう、細かく言い出せばきりがないけど」

「で、それに入れんが関わっていないものは?」

「……ないです」

「例外があるとすれば、最初から人間じゃない異種族と呼ぶべき存在くらいだ。それも戦つたことなど今のところない」

「そう、根本的にそうなんだよ。断言してもいい、人間さえいなければこの世の大半の怪異や妖怪は存在しない。存在しないものに力はない。後に残るのは自然現象と異種族、一部の神くらいだ。元々が人間から始まっているんだよ」

「……つまり今のこの状況は人為的なモノだと?」

「その通りだ、人間が作った器によって起きてている事態だ。送り犬など、この世に存在し得ないのだからな」

根本的な解決にはならないけど、状況は把握した。

そして、おおよその事態の予測も出来た。自分がだいぶ落ち着い

たのを感じる。

身を守るくらいなら、どうにか出来る程度の事態だと、そう冷静に認識できる。隙さえ見せなければ、十分に生き残ることが出来る。恐怖に飲み込まれずにはいられる。

現状を把握するというだけで、人間はだいぶ理性的になれるのだ。

「……にしても所長は頼りになりますね、有難いですよ」

もし、所長に連絡が繋がらなかつたら、朝までガタガタ震えながらお祈りしてゐるくらいしか出来なかつたかもしない。ああ、夕飯を食べるくらいは出来たか。

「まあ、そこまで言つてくれるなら、もつとし夕飯のおかずはマシなものにしてくれないか？ 今日の煮付けは美味しい不味い以前に味が薄すぎる」

「いきなり駄目だし！？」

「あと、『携帯電話が嫌いだ、可能なら解約したい』と常々キミは言つていたが、失くすと死ぬことになるということを自覚したほうがいい」

「そりに駄目だし！？」

……おかげまだ食べてないのに、美味しいことが判明した。味見したときはそこそこ大丈夫だったのにな、味見したときと味が違うのはなんだろう、タイミングが悪いのかな。

でも、まあ、携帯電話が嫌いなのは仕方がないだろう、とぼくは思う。四六時中不特定多数の人間に拘束されている気分になるのだ。いつ誰から連絡が来るのかわからない状況、つて言つのはどうもリラックスできない。

「つて言つて、携帯ないとぼく死ぬんですか？」

「キミが外部との連絡なしに生延びる」とは不可能だと思え、キミ自身はなんら特別な力も戦闘・生存技術も持たないただの人なのだから

から

それは自覚していたことだ。

ぼくのいる場所はぼくにとつて危険すぎる。ぼくが関わるものも、普通の人間であるぼくには分不相応なぐらいで強烈な出来事ばかりだ。

「……それは仕方ないですよね。まあ、このバイトを続けている間は、ですかね」

ずっとこの仕事で生きていいくわけじゃない。
そのうえ、どつかに進学でも就職でもするだらう。

「いや、もう辞めたところで手遅れだろ。キミは」ちら側に関わりすぎた、キミが何をしようとした事態に巻き込まれ続けることになる

「……聞いてませんよ、それ」

「『怪物と戦う者は、その戦いで自らも怪物になる』ことのようになきをつけなくてはならない。キミが深淵を覗く時、深淵もまたキミを覗いているのだ』だよ？」

「一チエを知らないのかね、キミは。一度でも非日常に触れてしまえば、それに触れたものも非日常の一部となる。既にキミはそれ以外の人間からしてみれば、十分に非日常であり非現実だよ。キミがそこに存在しているといつ時点で、周囲を危険にさらしていると、ということを自覚したまえ」

「このタイミングでそれですか？」

そういう重要な話は、もつといこタイミングがあると思つた

だが。

「これ、かなり衝撃的な話だよ？ 自分も怪物となんら変わりない、つて言われるのさ。」

「私とて好きで言つていいんじゃない、ただキリは自分がどんな場所に立つていいのかと言つて自覚が足りなさ過ぎる。キリはいつも死んでもおかしくないんだ」

「自覚はありませんけど、覚悟はしますよ。初めていいから側に踏み込もうとしたその瞬間からね」

「そんなつまらない覚悟はするなー。」

「……自分が死ぬ気はないですよ、やつならなにようにと所長が努力して下さっていることは知っています。……本気で感謝してるんですけどからね？」

臆病者のぼくがこの街を平然と歩けるのそのためだ。

無防備のまま所長はぼくをお使いに出している訳じゃない、だからぼくがやつそう死ぬことはない。それだけの用意はされている。

問題はぼく自身に生存力と戦闘力が皆無と言つて一點くらいだ。

「それに言つてるでしょう、ぼくは普通の人間なんだって。ぼくは自分が普通の人間であるためにならどんな努力も惜しみませんよ、その覚悟です」

逆に言えば、そのためなら自らが死ぬことも厭わないとこを所長は理解している。

だからこそ、所長は怒つているわけなのだが。

「……最悪の場合はまた連絡しろ」

「連絡つてその時には手遅れでは？ 声ぐらいしか届きませんよ？」

「それで十分だ、たいていはな」

声をえ届けば、距離など容易に無視できると心のこころのだらつか?
どんな反則だよ、この人。

「でも、あれじゃないですか？」「うううのうて怪奇現象に巻き込まれている間、電話がなぜか掛からないうつてパターンじゃないですか？」

「そのときはあれだな」

「……あれですか？」

「潔く、行いが悪かつたと諦めろ」

「いきなりそれですか！？」

いやいやいや、今までのことをすべく心配していた風味だつたじ
やないですか！？

「もうすこしおりつてものを……」

ふと、窓を見た。

その正体の糸口に触れて、犬の群れに気が向いたこと。完全に安心しきつて、自分が安全ラインの内側に入ったと確信したからこそ、現在の状況を再び把握しようとしたから。心理的にはそういうことなんだらば。

だからぼくは、気がついた。

なぜか、ぼくは今まで気がついていなかつた、とにかくこ。

「うわ！」

「どうした！遠野、なにがあった！？」

「……いえ、なんでもありません」

「いいから言え。なにがあつた？」

「……窓に張り付いていただけですよ」

「なにがだ？」

「……女の子が」

ある学校の制服を着た女の子だった。

ただ人間じゃないことはわかる。眼球のあるはずの部分がただのくぼみであるかのように、深い闇に覆われているから。伽藍どこの一つの穴がなんの感情も訴えることなく、ぼくを見つめるようにして窓に張り付いていたのだ。

「『女の子が窓に張り付いていただけ』ね、それが『なんでもない』と。意外に余裕があるんじゃないのか？」

「口だけですよ」

「今もいるのか？」

「いますね」

まるでぼくの声が聞こえていないかのようだ、じつして田の前で自分のことを話されているはずなのに、なんら反応がない。

ピクリとも動きはしない。

瞬き、をするはずもない。田などなくただ穴が空いているだけなのだかう。

「まつたく動かないんで、まるでそういう作り物のオブジェがあるだけみたいな気分ですよ。良い気分ではないんですけどね」

「本当に余裕があるものだ」

「口だけですって」

「まつたく、あちこちで女に声をかけているからそんな田に遭うんだ。今度はどこの女だ？」

「やめて下さい！ まるでぼくがそういうことを、こいつもしている

みたいじゃないですか！」

「違うとでも？」

違うよ、違う。断じて違う。

確かに今日もほぼ初対面の女の子に声をかけたけど、実質死人だから！

「死んでいようが生きていまいが女には違いないだろ？？」

「それはそうですね、じゃなくて、いつもいつも声をかけてる訳じゃないということが言いたいのであって……」

その次の瞬間だった、冷水のよつた声で目を覚めさせられたのは。

「……それで？」

所長は問うたのだった、今までにないほど強い口調で。
ぼくはその問いの意味を……既に知っている。

「それで、とは？」

「なぜ最初から言おうとしなかった、もし強く触れられないのなら隠そう、そう思つたからか？ 出来れば言いたくなかったと？」

「所長、ぼくは……」

見透かされているビビリじゃない、この人。最初から全てを知つ
ている。

「わかつてゐるが、遠野。その女、いやその『女の子』は誰だ？」

「……所長、ぼくはどうしたらいいんですか？」

「一切、この事件に関わるな。その家から出るな、送り犬は家に侵入していくことは基本的にはない、だが怪異の中には家人に招かれ

る」とで侵入を果たすモノもいる。絶対にソレを自分から入れるな

「……自分から入れるなんて」

ありえない、そう続けようとする言葉を遮り所長は言葉を連ねる。

「いいか、遠野。他人の住んでいる家というのは、それ 자체が結界だ。人間であるキミとて、他者の家には入りづらいだろう？ 本来、結界とはそういうものだ。文化的、社会的礼儀、習慣、しきたりから発生したモノだ。それを最大限に活かせ」

「はあ、結界って言つたつて……」

「いいから気を抜くな！ いいか。不用意に電話にも出るな。電話はありとあらゆる魔術を通しうる最大級の媒体だ。これは空間と空間を繋ぐ『魔法』だ、魔術なんて目じやない。どんなに強固な結界を作り上げようが、術者は対象と電話が繋がれば十分に呪殺し侵入を果たせる。悪霊や式神、使い魔を容易に送れるんだぞ？ これは現存するいかなる魔術よりも、簡単で強力だ」

「……電話つてそこまで凄いんですか」

逆に言えば、電話さえ繋がれば巫月所長は力を發揮できると言つことか。

なるほど、自信満々に声さえ届けばどうにでもなると言つわけだ。例え、ぼくが外部から閉じ込められた場所にいたとしても、巫月所長に電話さえ繋がればたやすく状況を打破できるわけだ。

「これはいいことを聞きました」

「つ遠野！？」

「これはちょっと状況を上方修正ですね、ありがとうございます。所長、お陰でだいぶ動ける目処が立ちました」

「ふざけるな、そんなつもりで言つたんじや……」

「では、所長。また明日」

「なつ……」

ぼくは通話を切り、マナーモードへと変える。

電源を落としてもいいけど、それだとござつて言つ時に繋がらないからな。

所長も甘いよな、電話が繋がることの効果を、その意味をあえてぼくに言わなかつたのはこゝなることを予測したからだろうに。あの人、結構正確に相手のことを把握してゐるからな。

でも、言わずにいられなかつた。

ぼくが所長以外の誰かからの電話に出てしまつ可能性どじろか、誰かに電話をかけてしまつ可能性すらあると察知してしまつたから。

本当に頭の回転が速い、だけど、ぼくの危険性を天秤にかけたときには冷静な判断力を失つてしまつた。ぼくは魔術やオカルトにはほどんど知識を持たないけれど、その知識が自分の安全のために利用できるものだと言つ程度には把握してゐるし、応用も出来る程度には理解もある。

現実に起つてゐるならそれを現実とし、たやすく常識を捨てられる。それが現実主義者だ。フツーの人間の順応性だ。ソレが出来ないのは極端な常識主義者だろう。

「でも、どちらにしたつて……」

夜に動くのは危険過ぎるな。どうあっても、向こつ側の支配域だ。とりあえず、朝までがたがた震えますかね。夕飯でも食べなが

ら。

たいして長い時間でもない。巫月所長の様子からして家の中にさえいれば、眠つても問題なさそうだしね。

ぼくは臆病者だ、でも安全性を保証されてまで怖がるのは臆病者でなく、現実をみていいだけだらう。
ぼくはぼくを見つめる、その女の子を見る。

「なるべく早く行かないと拙そうだしね

朝まで体力を温存しておひ、ぼくはそう心に決めた。
その右腕が血で真っ赤に染まっていたから。
真っ赤な手跡の付いた窓を、その血が滴り落ちるその光景を見て、
状況が確実に悪化していることをぼくは知ったのだから。

獵犬といつ名の狩人（前書き）

登場人物を増やすタイミングって悩みます。

5.

力ナに会つたのは、中学生にあがつてから。

当時のわたしはレンズの分厚い眼鏡をかけ、今ほどあまり外見には気を遣つてなかつた。最低限の身だしなみは一般的な礼儀として行つていただけ。人に不快感を与えず、かつ、規則を守れているなら問題はないとそう思つていた。

少なくとも、わたし自身はそう思つていた。

友達はそれほど多くはなかつた、男子からは生意氣だと思われていたようだし、女子からはとつつきにくそうにされていた。

小学校のころからそんな感じだつたので、客観的に見てかなり変わり者だつたるうつと思う。

少なくとも、年齢にあつた性格ではなかつた。

それでも、なぜかわたしと交友を持とうとする幾ばくかの寛大な人たちが存在したことは幸いだつたと言える。例えそれが、どんな理由でわたしと一緒にいたんだとしても。

中学にあがつて、すぐの頃にはクラスに友達と言えるような人はいなかつた。残念なことに、小学校からの友達が同じクラスに振り分けられることはなかつたのだ。

わたしは基本的に自分から、用事もなく誰かに声をかける性格ではなかつた。とはいっても、孤立したいわけではなかつた。ただ仲良く話したいということが、わたしにとつてきちんとした用事にな

りえなかつたのだ。少なくとも、この時には。

……今でも、なんの用事もなしに人に話しかけるのは苦手であるけれど。

そういう自分を振り返り、少し孤立し気味だつたわたしに話しかけたカナは、とても変わり者だったと思つ。端的に言えばお節介だつたろう。

「アンタさ、お堅い格好してるよね」

教室で一人でいたら突然そう声を掛けられた。

今、考へても変と言つかお節介と言つか、実質初対面の相手にしては失礼だと思つ。

その言葉に戸惑つたわたしは、平静を保とうとして少しきつめに返した。それはわたしの癖のようなものだった。

「別に貴女に関係ないと思つけど? それに誰にも迷惑掛けてるわけじゃないしね」

「ま、それはそななんだけど。もつたいないなつて思つて」

それに対して、平然となんでもないよう返すカナにわたしは画然とする。

「……もつたいない?」

「そ、ほら、アンタそこそこ可愛いだからね」

「そ、そ、そ、こ、……」

「なに、不満なの? でも、自分が絶世の美女だと思つたら勘違いにもほどがあると思うよ?」

「……それは思つてないけど」

「なら努力してみる? 絶世とはいからくとも、人生に絶望しない

程度には、そうね、素直に可愛いつて言われるくらいにはなれると思つよ。なんかお堅いオーラが出てるからみんな近寄りがたいんだよね、たぶん。人間、性格は変えようないんだから、最低でも見た目だけでも何とかしないとわ」

「はあ……」

わたしは自分が結構、物言いがキツイ人間だと思つていた。気に入らないことがあれば、はつきり言いたくなる性格なのだが、面倒なことにそのくせ思つたことを人に言つのが苦手なのだ。気負いすぎて、気合を必要以上に入れないと口が回らない。

言おうとする必要以上に、言葉がキツクなつてしまつ。

でも、カナはそれ以前に……素直にズケズケ言い過ぎだと思つ。気負いなんてまつたくなさそうだつた。悪意が全くないことも伝わるのが救いと言つか、たちが悪いと言つかなんといつか。

「なにより田つき悪いのが、近寄りがたさを強調してゐるよな……メガネの度あつてないんじやないの？ ちようどいいからコンタクトに変えたら？ みんな、メガネかけてる相手の顔つてよくわからないみたいでさ、眉毛整えてるのも、顔が整つてゐるのもわからないみたいで。ま、田が馬鹿なんだと思うんだけど」

「いや、その、田つきが悪いのは元からだから」

「あ、今はそうでもないか。なに、人と話そうとするとき、緊張するほう？ 緊張すると相手を睨んじゃうとかそういうこと？ そ、ふうん、話をすると、つて言つより意識すると田がきつくなつちやうんだ」

「え……」

「ん？ あ、今きつくなつた。つあ、やつぱり。……なんだ、可愛いといつてあるじやん」

「…………その」

カナはわたしと違つて、とても友達の多い娘だった。それこそ男女関係なく。

父とはまったくちがつたタイプの性格なのに、どこか父と同じものをわたしは感じていた。誰にでも分け隔てなく相手の気持ちを大事にして、それなのに自分の心を一方的に犠牲にすることがない。わたしにはそう見えていた。

父とカナ。

父はわたしにとつて当たり前の姿だったけど、それであると同時に幼かつた頃のわたしにとつては、いざれ自分がなる姿であり、この頃のわたしにとつては自分が本来あるべきと思っていた姿だった。もちろん、それは実現できなかつたわけだけど。

カナを父に重ね合せていた、と言つのは正確ではないのかもしれない。わたしは父やカナになりたかった。父のようになつたわたし、をカナの中に見ていた。カナをわたしのように見ていた。おそらくはそういうことだったのかもしれない。わたしにとつて、カナは理想で完璧な生き方だった。

……完璧なんてそんな人はいるはずがないのに。

今考えてみれば、わたしはカナにとつて重荷だったんじゃないだろうか。

母が父にとつて、そうなつていたように。

*

西の空が明るくなり始めたのを確認したぼくは、ようやく行動を始めたことにした。

正直、どこか眠気と疲れが残つていて、万全であるとは言い難いが仕方がないことだらう。

いくら家の中での安全を保証されたと言つても（よく考えたらされてない）、そこで本当に爆睡できるほどほんの神経は太くなつたので、だいぶ眠りは浅く、何度も目を覚ましては、気味の悪いオブジヨのようなものに眺められる自分を再確認していた。そんな状況で、万全さを自らに求めるのは酷だ。

気味の悪いオブジヨつて女子に使う科白じゃないけど、そこは勘弁して欲しい。まいりにとなきぼくの本音なのだから。一いつつ状況になつて、文句の一つでも言わないほうがおかしい。

見るたびに奇妙に感じたのは、少しでも視線をはずすとその途端に、彼女がどこにいるのかがわからなくなつてしまつことだつた。一瞬前まで見ていた動かない対象を見失うと言つ、ありえないはずの体験。

なんとこゝのだらうか、目の前になつきつこるはずなのに、その存在感がどこか希薄なのだ。見ているときですら、それが本当に目の前にあるのかを疑うときすらある。

それなのに、その本来の原型とはかけ離れかけているソレを、ぼくは間違ひなく、彼女だと確信してしまう。

どう考へても、それはぼくらが一重身と呼んできたモノに間違いなかつた。

どんなに姿がかけ離れていても、それを本人だと思つ。と言ひ、その原則に従えば、それは間違ひなく、その人物の一重身だと言えた。

ただ、なんだろうか。

どこかでなにかを決定的なまでに、致命的なまでに、絶対的なま

でに。

ぼくはなにかを間違えている。勘違いしてしまつていて、そんな気がする。

ぼくが勘違いして生きているのは、今に始まつたことではないんだけど。

それでも眠りが浅かつたことが完全にマイナスだったわけではない。お陰で、日が昇るに連れて、一重身がその姿を消していく光景を見ることが出来た。一重身にも活動しやすい時間と言つるものがあるのかもしねなかつた。

単純に考えれば、日暮れ、つまり逢ヶ魔時から力を増し始め、夜明けともに力を失う。と言つたところだろうか。それが一番、怪異としては標準的^{スタンダード}なところだろう。

決めつてしまつのはよくないが、否定する理由はないよつて思う。

振り返つてみると、樋口力ナの一重身はその存在 자체が消えかけでいて、他の気配によつて打ち消されることすらあるほど^{ほど}の状態だつた。まともに話も出来るか疑わしいほどに。

ぼくとしても本人に話を聞けるかどうかは賭けだつたのだが、周囲に余計な気配がないと言うだけでなく、夕暮れ時を迎えて一重身としての力を僅かに取り戻せた、と言つ側面が実はあつたのかもしれない。

花火が最後の一瞬だけ激しく光るような、そんな切ないものではあつたけど。

対して、夜明けの光は基本的に、人外の怪物にとつては忌避の対象とされている。実際、夜明けとともに、急速に送り犬の気配が消えていった。この時間帯を狙い怪物達に勝負を挑むことは『狩人』でも少なくないらしい。

ただし、夜明けのその寸前が最も、闇が濃くなる刻であるとも言われる、と巫月所長からレクチャーを受けたことがあるので、一概に夜明けを待つて勝負を挑むと言つわけにも行かない場合もあるようだ。

まあ、ぼくの場合、そこまでぎりぎりの戦いがしたいわけではない。目的が達成出来ればいいのであって、命を賭けた死闘に心を躍らせる阿呆ではないのだ。可能なら十分に日が昇つてから行動したいくらいだ。

いや、その選択も不可能ではない。むしろ、そちらが最善手だろう、とは思う。

それでもぼくは、時間が遅かつたがために彼女を、大神アスカを助けられなかつたと言つ結末を迎えたくはない。一刻も早く、彼女を助けたい。

そう思い、ぼくは自分の家の扉を開け、飛び出せつと。

「やつほー、……おつはー」

……開けられてしまつた。

しかも、いきなり挨拶されてしまつた。緊張感なく。

「つて言つた、あなたが来るんですか」

カジュアルな動きやすい服装に身を包んだ彼女は、いつものようにその上から白衣を羽織り、いつものようにどびつきりの笑顔で、いつものようにその鋭く輝くほどに白い犬歯を見せ、魅せるようにして……ぼくの目の前に現れた。

「当たり前だよー、車持つてるので、実質『獵犬』じゃうつぐらいのもんだからねつ」

そう言つて、彼女はぼくの肩をバシバシと叩く。

「いやー、久しぶりだね。遠野つち。2週間ぶりかな?」「たつた2週間ですよ、キツキさん。前は『遠野つち』じゃなくて『とーの様』呼ばわりだったと思いましたけど」

彼女は名を有卦キツキ。
ゆうか

うちの事務所の最後の戦闘要員だ。彼女は自らを『獵人』ではなく『獵犬』と呼ぶ。

自身を『獵人』と自称する赤霧先輩も、そして、ぼくの最もパートナーとして組むことが多い捕食者である軋呑ハミも、本来は『獵人』ではなく『獵犬』と呼ばれる立場にあるらしい。だが、他称ではなく、自らを堂々と『獵犬』と言い切るのは彼女以外に他に知らない。

自らが、狩人に使われる犬である、と言い切るのは彼女をあいて他にない。

そう、実際にはうちの事務所にいる狩人は、正式には二人のみ、巫月所長とぼくだけなのだ。言つまでもなく、ぼくの方は形ばかりの狩人であるわけだけど。

「にしても、なぜキツキさんがここに?」

どうやつて鍵を? なんて今さらなことは聞かない。彼女には、そんなもの一切通用しないのだ。一度、侵入を許してしまえば、いつでも中に入ることが出来るその性質故に。

「いやさつ、うちつてば本当は別のバイトだったんだけど、いきなり電話で『しおちょー』に頼まれてさ。仕方なーく、しぶしぶ泣く

泣く無断欠勤なのさつ 「

「そこは連絡して休んでください」

キツキさんは、事務所の仕事中は巫月所長を、しょひょーと呼し
い発音で呼ぶ。仕事の時間外だと、下の名前でけやんづけにする。
公私をきつちり分けて働いていると言えるのがどうかは、それぞれ
の判断に任せたい。

「かつたいなあー、遠野つちは。そんなんだから彼女ができないん
だぞつ」

「余計なお世話ですよ、連絡を入れるのは社会常識です」
「かつたるいなあー、社会つてのは。しょひょーの事務所ぐらいの
テンションでいけよー、『働きたい』ときにおこで』ぐらいの器量の
深さを見せよづぜ

「それじゃ色々と生活が成り立たなくなりますから。従業員の気分
であちこちの店が閉店してたらいやでしょう、……特にガソリンス
タンド、が

「かつらいなあー、遠野つち。どう考えても[冗談だよ、つちが本気
でそんなこというわけないでしょ?」

「もしかして、無駄に最初の一言田の田舎、あわせよつとしてませ
ん?」

「……かつ……思いつかないや。そんなことばざつだつてこいんだ
よー 遠野つちー」

いきなり切れだした、キツキさん。
もつ、うざつたいなあー！

「しょひょー、言つてたぜ。遠野つち。すげー焦つた感じでいきな
り、開口一番、『遠野が危ない、頼むキツキ。助けに行つてくれ!』
だつてや。愛されてるねー、遠野つち

「……いくらぼくでも夜に行動する愚は侵さないですよ」

「またまたー。必要ならするでしょ、絶対にそれが必要だつて判断すればさつ」

「さすがに成功する確率にもよりますけどね」

信用もなんもあつたもんじやないな、いや、あの電話の切り方だと仕方ないのか。あれから何度も電話来てたっぽいしな。完全に無視をしたけど。

絶対に後で怒られるな、それはもう確実に、だ。

「それにしたつてキツキさんもよくそれを了承しましたね、……いつもなら断るでしょうに」

「本来ならそうなんだけどねつ。遠野つちの危機つて聞いたからね、行きたくないのはやまやまだけど、まあ、なかなかそこそこできぱき即座に大急ぎで来たわけだよつ」

「それは有難いんですけど、キツキさんもあれですよね。……迷いはなかつたんですか?」

「まーね、うちつてば義理堅いからさつ。ヒトが好いつて奴かもねつ」

「……言つのは無料ただですか、止めませんし突つ込みませんけどね「むむむつ、なに気に遠野つちは毒舌だねつ。つてよくよくしみじみ考えるといつもかなつ?」

有卦キツキは事務所でもかなり例外的な存在だ。

うちが事務所で保有している所員、ぼく以外はほぼすべて獵犬と呼ばれる立場にあるが、その中で実は熱心にうちの事務所で働く人材はほとんどいない。正確には働く人材がいないのが正しい。

うちの事務所で働くことの出来る人材は、社会に適応できることが多いので、わざわざ危険を犯してまでうちで働くことは出来る限

りしない。あくまで最低限の義務を果たすためだ。

赤霧先輩は他のことができない、ハミはしなければ飢え死にする、そういうた特別な理由があるからこそ、頻繁に仕事を請け負っている。

中には、社会復帰までのリハビリ混じりで仕事をする人もいるんだけど、それは短期間での話。誰も可能ならうちの事務所で働きたくない、そう思っている。人間の社会で普通に生きていきたい、そう願っている。

その辺の事情はおいおいわかつてくるだらうから、今は詳しくは述べることはないけども、有卦キツキはの中でも例外的だ。彼女は本来、人間の社会で生きていけるような存在ではない。それでも、出来る限り人間の社会で詰あつて留まろうとしている

それも一時の仮宿だけねつ、なんて明るく言つところがキツキさんらしいのだけど、その上でつちで働きたくない、と堂々と公言していながら、こつして時々気まぐれのように現れるようなそんな掴み所がないヒトなのだ。

まあ、こうして現れる理由が、本当に単に義理堅いだの、おヒト好し的な理由なのかもしれないけれど。

……ん、までよ。

「そうなるとキツキさん、ぼくの家に来るの遅くないですか？」

ざつと6時間ちょいほど……もしぼくが所長に電話して、あの後そのまま行動していたら普通にもう手遅れだろ。

「ん？ なにを言つてるんだ、遠野つち。つちはずつとこにいたよ？」

「はあ？」

「だから、連絡を受けてからおべるに来て。せつとの時間へりい、ずっと待機したよ？」

「……なんだつて？ よつあるあれか、一晩中寝ずの番をしていたと？」

「寝ずの番……ねむかしこかなつ、うち、本来夜寝なこいし。今はじつうちとまつりに合わせてるからアレだけ。アレでアレだけびつー！」

「阿呆かつ！」

ぼくがそう怒鳴ると、キシキさんは「ひあつ」と可愛らじに悲鳴を上げた。ひよつとドキッとしたのは、なぜか感じた背徳感と共になかつたことにしておぐ。

「……なに？ びつくつしたじやん？」

もう不満そりこ、ヒツキシキさん。まるで自分に問題はなこといいたそつだ。

「びつくつしたのはこつちですよ。こきなつ、セクハラされた女の子みたいな声を出しだー！」

……じゃなく、一晩中じこにいたつて、なんでもぼくに声をかけないんですかー？」

「えー、そこはしょぢょーの指示。家に歸るよー、つてメールしてく。じや、家を出ようとしてたら止めてくれって言われて」

「それどこるじやなこでしょつー、びつー、ぼくこ歸つて家に避難しなかつたんですかー！」

「避難？ なにから？」

「なに、って……」

なんだろう、明らかに。

あり得ないほどの認識の差がある。

まるで、なに一つ、昨晩危険などなかつたかのよひ。

「ああ。送り犬、って奴？ うちが来た頃には、なにもいなかつたからさ。そういう感じで、しょちょーには報告したけど？」

「……6時間待機させられたことにせ、不満どころか疑問も疲労もないわけですね」

「いやあ、ほんとは。もう寝る時間なんだけどね。って言つたが、

『本来は』みたいな？」

「ああ、もう夜明けですからね」

つまりなにか、所長の言つたとおり、ぼく以外にはまつたく認識されてなかつたって言つのか……あの異常事態が。

「それでキツキさんはこれからどうするんです？」

「そうだねつ、遠野つちを止めるつて役目は果たしたけど、これで帰つたら意味ないからねつ。遠野つちを車に連れ込んで拉致つて、しょちょの前に引きずつて、思いつきりしょちょーに、やりたいことをぶちまけでもらおつかなーつて

「ぼくはなにをされるんだ！？」

そんなわけはないはずなのに、これからすくへりどいことをされそうな気分にさせられたよ。これも一種の才能つて言えるんだろうが。

「ま、これは決定事項つてことで。遠野つちには逃がす氣は一切……」

「どうぞ」

「どうぞ、つて言われても、連れてくからねー。」

「いや、だから。いいですよ、、連れてつてトセー」

「……え」

「車に乗ればいいんですか?」

「そうだけど……えー、なんか、な

半端じゃなくくらい不満そうにされた。

いいじやん、思い通りにいつたんだから。

「ただ一力所寄つて貰いたい場所があるんですね」

不思議そうな顔で首をぐぐぐ……と傾けるキツキさん。

「なにー、『ンビニー?』

「じゃなくてですね、……頼み、お願いに近いですけど」

「うん、言つてみなよ。言つだけはただよつ?」

「……ならお言葉に甘えて」

さて、どうなるか。

断られたら、どんな手を使つても逃げ出してみせん。そう決めて。

ぼくは許されたとおり、言つてみることにした。

「女の子を一人、その安全を確保したい。……出来れば事務所に保護したいんですよ」

どうなるかは、巫月所長に会わせてからですけど。と最後に添えて。

ぼくは言つた。

返答は如何に？ とぼくはそれを待とつと。

「いいよ」

「え？」

「いいよ」

待つまでもなく、返答が来た。

即断、と言うよりは、ぼくが科白を言い終わる前から返答を決めていたかのようだ。キツキさんは口を開くタイミングを測っていたようだった。

「女の子を護りたい、ね。いいんじゃないの？ ……ちょっとリスクだけどつ」

キツキさんはそう、犬歯をむき出しにして笑った。
まったく、野性味を感じない明るいぼのぼのとした表情で。

獵犬という名の狩人（後書き）

現在、巫月事務所の最後の戦闘要員です。他にまともに戦える人はいません。

彼女の詳細に聞してはおいおい……まあ、説明するまでもなさそうなんですけど。

龍馬とこのおのれの存在感（前書き）

基本的にだらだら話すだけ、つてのが遠野くんなんです。
……どんなときでも。

はじめはただの背景だった。

興味や関心がなかつた、意識してなかつた。そんな言葉じや彼といふ人物を表現できない、その存在を表記できない。そう、背景と言つのは彼にぴつたりな言葉だろう。

決して彼はその他大勢じやなかつた。それなのに、中央で照明を浴びる 主役でもなかつた。

誰もが彼を認識するのに、それが意識まで昇らない。

孤立していることは間違いないのに、その事実が一切優越感や劣等感、嫌悪感と関わりがない。

日常、班での活動や掃除、体育の体操や試合、行われる様々な行事、学校生活の中で誰かと関らないことはありえない、その中で人はなんらかの印象を持たざるを得ない。自分と合う性格でないのなら、関わりたくないそう思つものだ。少しでも気になれば、少なからず仲良くなってしまうものだ。

彼にはそれがない。

彼は、遠野という人物はそんなありえない存在だった。

出会いそのものは中学あがつてすぐあつたが、それは出会いと言うほどのものでもなく、 すれ違いですらなく、彼を背景とした舞台へと偶然わたしがいただけと言つのが正しいのだろう。

いや、もしくはそれ以前なのかもしれない。彼を背景とした舞台を眺める機会があつたというだけなのが、わたしいう存在だったのかもしれない。

一年生の頃は同じクラスでなかつたために、わたしも彼を認識は出来ても、関わらうとするどころか意識することすら出来なかつた。わたしは彼が一年近くもの間、なにをしていたのかろくに知らない。

それでも、わかる。見るまでもなく、わたしには理解できる。

遠野は一年もの間、なにもしていなかつたのだと。誰とも最低限の会話しかせず、なにひとつ問題を起しきりず、誰からも褒められることなく、誰にも注目されず活躍せず、その上できちんとクラスメイトとしての義務を果たし、それを楽にも苦にもせず、それを普通として生きてきたのだろう。

それでも、同じクラスになる前に、一年にあがるつとする前に、わたしは彼を意識した。それはカナをきっかけにして、彼と同じクラスの女の子と友達になつたからだつた。

彼を意識した理由はたいしたものじゃなく、それなのに驚くべきことだつた。言つてゐる意味がわからぬだらうか、いや、聞けば彼を知つてゐる誰もが驚く、彼を認識している誰もが耳を疑つ。

その女の子は、彼を、なんと遠野を……好きだと言つたのだから。

彼女自身がそれを他の誰にも言えない、カナと共に居たわたしたちだけに、相談をしたことがことのきつかけだつた。なにが問題と言えば、なにもかも、だらう。

彼女は彼と必死になつて接点をもとつとしたのだけ、それがまったく出来なかつた。

話しかける勇気がなかつたわけではない、彼女はとても活発な女の子で男子や女子関係なく話すことが出来た。カナほどではないけど。

「ことあるごとに話をかけ、同じ班や係などの接点をえたのにもかかわらず、なにも……その関係は変わらなかつたのだ。彼女の性格

や容姿に問題があつた訳じゃない、それは自信を持って断言できる、同じように遠野にも問題はない。それ以外の全てが問題だった。

彼は彼女を認識はしても意識しなかった。なんというのか、遠野は人間一人ひとりがなにをしたとしても記憶には残しても、印象に残さない。そう言えばいいのだろうか。

だけど、それはわたしたちも同じだった。わたしたちその他大勢にとつて彼が背景であつたように、彼にとつてもわたしたちはそれ以上にもいかにもなり得なかつた。記憶には残つても、印象には彼は残らない。

力ナですら、どうすることも出来なかつた。わたしはなにを言つていゝのかわからなかつた。だつて、あんな存在をどうして愛せるのか、好きになれるのか、恋が出来るのかまったくわからなかつた。

……今ならすこしはわかる、すこしだけ。彼女自身なぜ自分がそうなのか、ほとんどよくわかつていないようだつたけど。

ああ、じついう言い方も出来るのかもしね。彼は誰の意識にものぼらないのではなく、むしろ彼が誰もを自らの意識にあげていな。あげてもそれは僅かな一瞬でしかない。遠野は印象が残らない存在なのではなく、印象を残さない存在なのだ、と。

印象という印象をなんらかの手段で刈り取つてしまつよう、存在なのだと。

わたしはこの相談を受けて初めて、思つた。彼はいつたいどんなひとなのか、と。

不運にもなにかの間違いで印象を残されてしまった女の子を、そのどうしようもない恋をわたしが知つて、彼を意識にあげた頃に、印象を残してしまつた頃にわたしは一年生になつた。そして、わたしは……。

ぼくは助手席でキツキさんの車に揺られていた。

時折、ぼくはバックミラーへと視線を移し、なんとなく妙な気分で狭い車内でキツキさんとどうでもいい話で談笑する。すこしでも気を紛らわすために。

ぼくはあまり車には乗る機会がないだけではなく、そもそも車があまり好きではないのだ。

でも、キツキさんは車を運転するのが好きらしい、移動の時はいつも車だ。その能力からいけばまるで必要ないものなのだけど、いろいろなバイクで必死に頑張って溜めたお金で、わざわざ買ったこの中古車をキツキさんはとても大事にしている。そう言つた意味でも、キツキさんはかなり変わっている例外的な存在だと思つ。

ちなみに免許はある、それも偽造ではない、本物である……ただしきちゃんと法的な手続き手順をとつていらない本物の免許、と言つややこしい注釈がつくる。

「で、遠野つち。なんか護身用の武器は持つてきたの？」

「いいえ、特に」

いくつかの防護用の呪具は常に所持しているが、武器らしい武器は一切持つていない。これはいつでもそうだ。

「せつあまでひどい目にあつてたつて言つたの？」

ぼくが送り犬にずっと包囲されていたことを説明したとき、キツキさんはぴんと来ていよいようだったが、一応は納得してくれた。

「ほくにしか認識できなかつたことに関しては、それが事実ならば、
と言つ仮定の上で「遠野つち、そりや、ほとんど取り憑かれてるよ
うなもんだよ?」とそう不吉な言葉を残してくれた。

「フツーさ、怖い目にあつたら武器を持つて安心感を得よつとすん
じやないのかなつ。ま、うちはならないけど」

「武器と言われてもなにを使おうが、ぼくには扱いきれませんから。
銃器はぼくライセンス持つてないんで、規定違反ですしね」

狩人はライセンスさえあれば、狩りを目的とした上でなら規定さ
れた銃の携帯・使用が許可される。

ただし、堂々と目に見えるように身につければ銃刀法違反で捕ま
つてしまつ。すぐに使える状態で所持していると言つことは、剥き
身の刃物を手に持つたまま歩いているのと変わらない、と判断され
るからだ。

有事以外で所持する場合には、とつさには使えない状態で持ち歩
く必要がある。

さらに所持している銃器には監督義務があり、他者に使用させな
い、厳重な保管をせねばならない。などの規定が数多く存在する。
違反、事故、盗難があつた場合の罰はかなり重い。不用意に事件を
起こした場合は、狩人全体の信用問題になるため、同じ狩人から殺
される危険すら発生する。

完全に規則に則るのなら、銃を使用するたびに許可書を提出し、
使用後はどの弾丸をどこでどのようにどれくらい使用したのか、と
言う事後報告書を書かなければならない。

現実的にはそういう規則を守つていては仕事にならないため、
どこの事務所も少なからず違反をしている。それが表沙汰にならぬ
ようにと言つのが暗黙の了解だった。現実に即した適度な緩さと厳

しゃを併せ持つのが、裏で生きる人間の法といつものなのだらう。

まあ、社会で働く上ではそれがどこでも当たり前だらう、規則はある程度は破られる。清濁併せ持つて、飲み下すように生きるしかない。一般社会との唯一の違いは、せいぜい罰則が死と言つだけの話にしか過ぎない。

それはぼくだって理解している、でもそれ以前にぼくは凶器を持つこと 자체が不満だつた。

「あまり好かないんですよ、ああいうものは、性に合わないんでしょ、うね、たぶん」

「性にねー、遠野つちらしーちゃん、まつ、らしーけど」

「……甘いと思ひます?」

「いや、全然つ。手を汚すのが嫌つて言つわけでもないみたいだし、ねつ。手より大事なものを平然と汚してゐるし、覚悟があるならいいよ、別につ」

「手より大事なもの?」

言つていることがよくつかない、手はそもそも大事じやないだろうし、僕に關して言えれば特別大事なものなんて特にない。

それに手や身体が汚れたなら洗えばいい、衣服が汚れたら取り替えればいい、ただそれだけの話だらう。大騒ぎするようなことじやないはずだ。

「世の中、殺しはしてもいいけど、自分が善人だの悪党だのはつきりしてなくちや嫌つていう人多いからさつ。どうもそういう言つの駄目だね、うちはつ。手を汚さないつて決めた時点で悪党なのになつ」

「……はあ?」

「そつだつ、武器つてものが嫌ならいくつか、しょちょーが遠野つちでも使用できる呪具を用意してなかつたけ?」

「武器が嫌なんぢゃないですかね、使うときもありますし。呪具なら防護用のなら使つてますよ、前もつて準備をしておけば有事に自動的に発動する奴はだいたい」

「他のは？」

「能動的に発動させる奴は駄目ですね、あの名前がわからないんですけど、櫛みたいな奴ですか？ みんなわかつてないみたいですが、櫛も戦いのための道具、武器ですよ。間接的に相手を殺すための道具ですから」

自分の剣が相手に届くまでの時間を稼ぐための武器、弾幕と同じだ。

まあ、本当に巫月所長からもうつた防護用の呪具には、相手を消し飛ばすほどのものも存在するので、あそこまでいくと武器以外のなものでもないと思つ。

「ふうん。あ、じゃあれは？」

「あれ、ですか」

「そう、ほらあの小刀……『生太刀』だつけ？ あれの複製品は？」

「キツキさん、ぼくに刀が扱えるとでも思つてるんですか？ 果物ナイフですら危ういですよ」

生太刀……使い手の『生存確率そのもの』を引き上げると言つ能力を持つ、殺すためではなく生かすための刀。殺戮のための凶器でしかない、刃を持つ殺人器具を生存と言つて一点に特化させた護身具にして護神具。

それと同じ素材で作られ、同じ形状を模した複製品をぼくは巫月所長から、一振り預けられている。本体より性能は数段劣るが、それでも複製対象である本体自体の能力が高かつたために、かなり強力な一品に仕上がっている。とは巫月所長の談。

巫月所長から預けられた呪具の中でも、最も強力な呪具の一つだ。

最も……という言葉を複数の呪具に使わざるを得ないのは、言葉の上では矛盾してしまって、それぞれの方向性が違うから仕方がない。とりあえず、巫月所長の話に聞く限りでは、強力だと判断した。

判断したのだ。

そう、ぼくはその生太刀を一度も使用したことがない。
自ら抜いたことすら、ない。

「ふうん、まつ、いいけどさつ。通り犬ぐらいなら、うちと勝負にならないだろうし。遠野つち一人くらいなら余裕で護れちゃうよーだ」

「ぼくが言うのもなんですが、まあいい、で済ませるキツキさんは大物だとは思いますよ」

仲間がろくに戦わないと言つ意思を表明した上で、自分が護るなんてどんだけ心が広いんだと言つ話だ。

単純に自らの力を信じていて、と判断することも出来なくはない。

しかし、それは言つが、キツキさんは日中はその能力を制限される。キツキさんは強い、それは間違いないのではあるが、あまりに日中と夜との戦力差は大きすぎる。今なら、いくつかの手を打てば、ぼくが呪具を扱つただけでも十分にキツキさんを殺してしまえるだろう。

対して、敵は圧倒的なまでに複数。相手も日中は能力を制限されるとしても不利であることは間違い……いや、までよ。

送り犬は山犬、二ホンオオカミに近い性質を持つとされる。狼は夜行性か？ いや、その面は強いのかもしれないが、昼間に動くことがないと言い切れるのか？

もしかしたら、ぼくが思つてゐるほどには能力が制限されていな
い可能性もあるわけだ。キツキさんは夜とは比較することが馬鹿馬
鹿しいほどに、能力に差が出るタイプだ。逆に、あまり影響を受け
ないタイプの怪異があつてもおかしくはない。

不利なんてレベルで済むのだろうか。

「大丈夫だよ、遠野つち。そんなに不安そうな顔しないの。敵の本
拠地に行くんだつて言うんだつたら、そこそこあれこれうちも考え
るけどさつ。今回は女の子を保護するだけでしょ？」

「ええ、まあ。……確かにそうですけど」

「相手はただの犬」口だし。百いても勝てるどころか一方的になぶ

り殺しにできる自信があるよ」

「……さすがにそれはやめて欲しいですね」

「画的にあまり情操教育によろしくないのは間違いない。

そんな光景みたら、絶対に夢でうなされる自信が僕にはある。そ
う、ぼくは結構纖細なのだつた。

「それに勝てないならさつ、戦わなきゃいいじゃん！……いざと
なれば逃げればいいんだつて、ねつ？」

「……それはそう、ですね」

確かに戦つて勝つことが目的ではない。そもそも戦いに勝つだけ
でなにかが解決するのなら、ぼくらは必要ない。巫月所長一人いれ
ば全部済んでしまうことだ。

どこかの映画のように、悪党を殺すだけでハッピーエンドになる
のなら、この世に不幸な人間なんていない。

悪事を行うのは、多くは名もなき一般市民。善意で人を傷つける
考えなしの善人達が世の中にははびこり、悪意と嘘で人々を騙そ

とする悪魔は、実に間抜けな手口で利益を出さうとする無能者しか過ぎない。

「ぼくらことって、本当に敵と為る、憎むべき相手は、仕事であることを抜いたとしてもそういう者達ばかりだ。彼らのせいで、ぼくらは怪物を怪物呼ばわりし、あまつさえ殺さねばならない。

無知が罪とまではぼくは言わない、ただ人を他人から『えられた価値観や常識を疑わないことは悪いことだ、と断言してしまいたくなるくらいに周囲の大切な人達を傷つける。

詐欺という悪事で言うのなら、自分が騙されることで、どれだけの人の迷惑になるか、そのだまし取られたお金でどんな悪事が行われるか、騙された結果誰が犠牲になるのか、『罪がない』人々はあまりにも無責任だ。

「ぼくに出来ることは、憎むしかない悪党を裁くことでも憎むべき善人なんかを助けることでもない。

逃げ出してよいのだ、ぼくは相手を殺すためにここにいるんじゃない。

「にしても送り犬って奇妙だねつ。こんな所に出てくるなんて、おかしいなんて言うレベルじゃないねつ。まー、遠野つちの話を聞く限りでは、そう言う疑問以前なのかもだけど、本来はそういうものではないはずだからねつ」

「……ああ、対象以外に認知されない。つて、部分ですか」

「そう。あれはそういう妖怪ではないはずだからねつ、明らかに別の何かが混在して成り立っているよねつ」

「確かに……狼としての習性や本能を元にしたもの、と考えると、最終的にはぼくを喰らうことが目的、となるわけですが改めてそう言われば不思議ですね」

隙をうかがつ、と詰つがほくなど隙だらけの存在だ。隙しかないと言つてもいい。

「知らないかもしないんですけど、ほくは小学生にすら喧嘩で負けたことがあるんですよ」

「……生きてて恥ずかしくないの？」

若干引いた雰囲気すらあるキツキさんにはほくは二つものよつじ言葉元のみのせつひう。

「まつたく、全然、何一つ、恥ずかしくないです。むしろ、これで恥ずかしいと思つ気持ちがあるならそれこそ恥ずかしいくらいです」

「一瞬、良い言葉に聞こえなくもないけどそれひとつで使つ言葉かなつ！？」

なにを騒いでいるんだろう。キツキさんは。

「まー、いいや。送り犬自体の解釈的にはおかしくないんだし」「解釈ですか？」

「送り犬は、そもそも道行く者の守り神という側面もあるしねつ。一概に決めつけられないんだよね、逆に遠野つちが護られていたのかもつて言つね？ あつ、でもでもやっぱ監視する存在と言つ面もより強いんだけど」

「まあ、わからないこともないです。監視と保護は紙一重ですからね、監護つて言つんですか？ でも、あくまで元になつていてるのは、狼や野生の犬の話でしょ。護るなんて現実的じゃないですよ」

「そう言つけど、実際狼がいたら他の動物は近寄りがたいからね？」

それはそうだろうけど納得はいかない。あの何十とこいつ田から發

せられる半端じやない暗い感情……念。

確かにあれは害意ではなかつた。ただ害意でもなければ、敵意でもなく、獲物を狙う目ですらなかつた。

あれが保護欲から来るものだとすれば、おぞましいにも程があるといつものだ。

「でも、そうだねつ。送り犬が憑き物だつて言つのは、おもしろい
解釈だねつ」

「解釈ねえ」

「うん、あー、遠野つちは違和感在るだろうねー。しょちょーとうちじや、考え方が全然違うからねー。魂の存在とか、魔術と魔法の違い、妖怪や怪異の成り立ちとか……ね」

「へえ、そういうのは専門家の中で一致した唯一無二の真実があるんだと思つてましたよ」

「はははは、ないよ。そんなの。マンガじや在るまいし、そもそもうちは専門家じやないし。どんな分野でも一致した唯一無二の真実はないんだよつ、遠野つち。

あるのはこいついうものにはこいついう名前を付けましょうつて言つ定義。それとあるかどうかわからない事実といつ名の記録があるだけ。どちらも、勝手に本人がそういうてるだけで確かなものじやない。定義なんかそれぞれの専門家や派閥で違うしね。その時々にあつた定義や考えを引用して、周囲と自分を納得させてるに過ぎないんだよつ。

人間はね、遠野つち、誰もが魔術と魔法を使つてる。名前を付けると言う手法で魔術を使い、現実といつ名前で魔法を使つてるんだよ。それが正しいなんて証拠は一切存在しないのに、誰もがそれを信じて疑わない。そんなどんな魔術でも、単体では再現不可能な魔法をねつ。

……例外は数学くらいかな、あれ自体が一つの世界だからね。唯一無二の真実があるのは閉鎖された小さな箱庭の中にだけあるもん

だからねつ。机上の空論なんて、無能な魔術師はそう呼ぶけれど

「随分と小難しい話ですね、専門外のぼくにはなんとも」

「魔術や現実を専門にしてる人なんていないよ、遠野つむ。まあ、

「これはうちの考え方だけねつ。ああ、そう言えば最低最悪の魔法、
幻実げんじつつて知つてる?」

「興味ないですね、あまり」

「えー、おもしろいのにつ」

「あんまり変な伏線引かないで下さいよ。あるじゃないですか、そういう言つ話をしたら、実際に使う敵が現れるみたいなの」

「遠野つちはないとと思うけどな、幻実に關しては」

「なら、その話しなくてもいいじゃないですか」

知らなくていいことは知りたくない。

ぼくは普通出来る限りに生きていきたいのだ。

「ふーん。まー、いいや。うー、どうでもいいしつ」

「……なら言つなよ、つて言つのは野暮なんでしょうね、たぶん

「わかつてん『なら言つなよ』、遠野つむ」

「思いがけないくらいに綺麗な切り返しだ!？」

キツキさんにしては、だけ。

「……で、遠野つむ。大神アスカちゃんだけ。こっちの方向であつてんの?」

「ええ、もうすぐのはずです」

「ふうん、よく家知つてたねつ。もしかして友達なの?」

「いえ、違います。ただ同じ学校つてだけです

「……同級生なんじやないの?」

「ええ、そうですね。それがなにか?」

同じ学校でも同級生でも、クラスメイトでもあまり変わらないと思ひけど。

どれも、全部同じだ。たいして関わりなどない。

「いや……なんでもないよ、遠野つち。そういうえば、そんな人だつたね。遠野つちは」

「は？」

「なんでドッペルゲンガー、自分の家に……いや、自分の田の前に来てるんだと思ってるの？」遠野つち

「さあ、たぶん、ぼくになにか言いたい」ともあるんでしょうね

「……そうだね、遠野つち。きっと、そうだね」

キツキさんが珍しい位に口調に軽やかさがないことに違和感を持つたが、ぼくは特に気にしないことにした。
たいした問題ではないだつ。

「……遠野つち」

「なんです」

「……前言撤回してもいい？」

「はあ、どれに関してですか？」

「一力所」

キツキさんは大神さんの家に近づくにつれ、なにかを感じているかのようでその雰囲[氣]が変化している。

ただぼくからすれば、それは少々遅い。

「一つは互[相]手でもなぶり殺しにできるから余裕、みたいに言ったこと。あれ、ちょっと厳しいかなつて……」

「なぜですか？」

「あれ、犬なんてレベルじゃなくなつてきてるし」

ああ、見えてるよ。わっさから。

朝日で出来た、濃い影に潜む獣たち。

狼には違いない、だけど……狼ってどこのからどこまでか狼なんだわ。何十匹の群が影ひとつに凝縮されている姿。いつたいとたつて、の文字通り一体となつて存在するその形態。

「あれ、何回なんて叫じやないよね」

それが影という影すべてに存在しているのだ。

百？　ああ、そんな数に収まらないのは最初から、ぼくは承知している。

「ああ、そうですね。で、もう一つは？」

「敵の本拠地に行くわけじゃあるまいし……って部分」

「へえ……」

「だんだんがんがん強くなつてるんだよね、気配が「キッキさん、もう一つ訂正したわ」

「……なに」

「ぼくを護る余裕なんてない、ってね。そしたら、勝てるでしょう？」少なくとも、対抗は容易なはずです

「そう簡単にはいかないけどね、一理ある。でも、それは言えないよ」

「いや、大丈夫です。間違ないです。ぼくは襲われませんよ」

気付くべきだった。

所長は気付いていたんだろう、いや、たぶんぼくが気付いていると思ってたんだろう。ぼくがこの事態を把握していると勝手に思つたんだろう。

だから、ぼくの安全のためにキッキさんを派遣した。ぼくが絶対

に大神さんに連絡をとるとそう思つて。大神さんに必ず会こに行くと判断して。

「所長は案外馬鹿ですね、そ�だと知つてたらもう少し慎重に対応しましたつて」

あの人自分が頭良いと思つてないから、自分と周りが同じくらい察しがいいとか認識してるみたいだからな。あえて、わかりきつてると思つて言わなかつたな。

「この事件、今の中中心地は大神家ですね」

「みたいだねー、どうする遠野つけ。引く?」

「キツキさん」いや、ぼくをやつぱ所長の所に連れてくつて言わないとですか?」

「いやー、さすがに、ね。今さらかな……つて? それに断つたら、この車から飛び降りるでしょ?」

「ええ、そうですね」

それも時間稼ぎにキツキさんに一撃嘘ました挙げ句ですね、間違いない。

「わかんないなー、たいして興味もない相手のためにどうしてそこまでするかなー」

「どうしてつて……」

「死ぬかもよ?」

「たかだか死ぬつてだけじゃ脅しにもなりませんよ、命賭けるだけなら小学生にも、いや、三歳の子供にだつて出来ます。まあ、もし理由があるとすれば

ずっと、車に乗つてから見え始めていた彼女へとぼくは田線を映

す。

バツクミラーに映る、存在感のない彼女を見て。
その存在感を取り戻しつつある彼女を見て。

右腕に巻いた包帯を血に染めた彼女を見て、ぼくは言った。

「女の子だからですかね」

ぼくしか見ていない、もう一人の虚ろな大神アスカを見て。
ぼくしか見えていない、二重身である大神アスカを見て。
ぼくは言った。

「助けるかどうかは置いといて、放つてはおかないでしょ？」

それと、もし他に理由があるとすれば、状況を読み間違えた時点で自分が引き返さないことに意味があるのだとしたら、それはたいした理由ではなく。

ずっと、背後に立っていたのに。ぼくは気付かなかつた。
ここまで来て、ようやくぼくは気付いた。

「気付かれないのには慣れてるんですけど、気付かないのには慣れてないからですかね？」

たかだか、存在が薄れたって程度で気付けない。
すこし、自分が腹立たしいからだとそう思う。

「変わらずわつけわつかんないなあー、遠野つちはつ

ぼくは笑われた。

犬歯をむき出しにして、嬉しそうに笑われた。

「それに付いてくるキツキさんもたいがいですけどね

さて、田舎すはーつ。

今や下がる退路など、ぼくは知らない。

背景とこの本の存在感（後書き）

読み返してみると、なんとなく文章全体が見ずらい気がします。
……なにが悪いのかな。ににかいい方法があれば、全体を修正する
かもしれません。

「いじめやつもない物語」であり……。

7.

わたしにとつての当たり前の日常がいつも簡単に崩れ去った頃。わたしにとつての当たり前が、当たり前でなくなってしまった頃に、わたしは遠野を好きになつた。

それまではただの背景でしなかつた彼が、いつかのあの娘と同じように、どうしようもないくらいに思い焦がれる対象になつてしまつた。

なぜか、と聞かれれば困る。

きつかけはいくらでもあるんだらうし、ないと言えばまったくない。

誰に対しても分け隔てなく付き合えると言つ、わたしの理想によく似ているようで、その実、誰一人付き合えていない彼は、わたしにとつて好きになりようがないはずだった。

父やカナのような、誰もが羨む太陽のような人をわたしは好きになるのだと、そう思つていた。

それが、どこをどう間違えてあんな冷たい人を好きになつたんだろう。

太陽なんかとは全然違う、かといつて月のようでもない。雪のようでもなく、氷のようでもなく、身を切るような寒さでもなく……そう、言つなれば彼は温度がないと言つ意味で冷たい人間だった。

間近にある太陽の熱につながっている人間には心地良い、そんな冷やかさがそこにはあつた。それが好きになつた理由か、と言えばそれもまた違うわけなんだらうけど。

でも、きっとおそらくそんなものに理屈なんてないに違いない。自分に欠けているものを補う、自分と同じものを求めて、そんな理屈はいくらだって付けられる。でも、そんな理屈になんの意味もない。

わたしは彼が好きになつたのだ。

……いや、違う。

好きに なつてしまつたのだ。

わたしのこの想いがどうしようもなく叶わないものなのは知つていたから、それは仕方のないものとしてわたしは受け止めた。

同時にわたしは諦めようとしても絶対にできない自分に、そこそこ気が付いているほどには賢明であったので、せめてすこしでも彼の傍に居られるように振る舞つた。

一秒でもながく隣に。

一言でも多く言葉を。

一瞬でも早くその姿を。

出来るだけ、出来るだけこの田に映せるように。

友達には他の相手を探せと言われた、他の相手に恋をして忘れると。

わたしはまつたくそれを相手にしなかつた。

ほかの相手でなんとかなるなら、最初からなんとかしている。どうにもならないから、彼が好きなのだ。どうしようもない相手だとか、そんな理屈はいい。彼以外にはわたしはどうにもならないのだ。そこをほかの相手で誤魔化しても無駄だろう。仮に誤魔化せても一時のことだし、だいたい相手にも失礼だとわたしは思う。

そんなことをカナに言つたら、「相変わらず、お堅いね」って笑つてた。

……カナだけが、わたしを止めなかつた。
それはなぜかはわたしにはわからないのだけど。
どうしたつて、理解はできないのだけど。
少なくとも、わたしはそれが有り難かつた。
そもそもわたしは不幸だつたわけじゃない、遠野がわたしを好きにならぬのは理解していたけど、寂しくはなかつた。

寂しくはあつたけど、悲しいとは思わなかつた。
どちらかと言えば、幸せだつたかもしれない。
なぜ、と言わても困るんだけど。どちらかと言えば、わたしは幸せだつたのだ。
だつて少なくとも、遠野が他の誰かのものになるなんてことは絶対にありえなかつたんだから。

この時には、それがわたしにとつて新たな当たり前になつていて。
それは高校に上がつて早々に崩れることになる。
わたしにとつての一度目の当たり前は、随分と寿命が身近かつた。

軋呑ハミ……。

学校が始まつてしまらしくしてから、なぜか来なくなつた彼女は……
……変わつた。学校に再び通い始めてからその振る舞いを変えた始めた。まるで別人のように。
クラスで、いや校内でもかなり優秀な成績を持つ彼女は、それ以外の様々な意味で人の目を惹くような彼女が、今度は悪い意味で人の目を惹くようになった。

それだけなら、わたしは別によかった。

よくはないけど、彼女をただ注意したり、あるいは嫌いになるだけよかつた。

でも、そうはならなかつた。

彼女はいつも、遠野の隣にいたから。

絶対に人を寄せ付けないはずの彼に、人の目を惹くことのないはずの彼に、どうしようもなくくらいに思い焦がれるだけ、誰もがそううだと思ったのに。

わたしの幸せはこの日からなくなつた。

彼がそう言う人間だと、わたしが諦めていただけなんじゃないか、本当はあつたはずの可能性をわたし自身が勝手に決めつけて消してしまつたんじやないか。わたしはそんな考えに至つてしまつた。わたしにとつての一当たり前（足場）がまた崩れた。

相変わらず、わたしをろくに認識しない彼を毎日再確認し、軋呑にだけ笑いかけ話しかけ一緒に食事をし、共に連れ立つて歩く彼を毎日見て。

すこしでも、彼の傍にいたいわたしは一日に何度もそれを眺めて。なにもかもがどうしようもなくなりそうな中。

力ナだけがもう、わたしにとつての支えだった。

*

巫月は待つていた。

キツキが遠野を連れて、巫月個人調査事務所へと訪れるのを。

キツキから遠野は無事であるとの連絡を受けてはいたから、その安全については心配してはいない。その上、キツキは間違いなくその安全を確実なものとするために、ここまで遠野を連れてきてくれ

ると言つ、信頼もある。

とは言え、巫月はキツキに対して、ここに連れて来いと指示したわけではない。それでも、巫月はキツキが必ずそうすると確信していた。

キツキは狩りを行うことに関しては非協力的だ、キツキは人の都合で怪物とされたモノ達が狩られることを良しとしてはいない。かといって狩りを否定することもないが、常に狩人による一方的な殺戮となるそれを公正^{フェア}でない、とそう感じているようだ。

そう、たいていの場合、狩人は圧倒的なまでに有利だ。

怪物とされるモノ達は絶対的な少数派であり、数の暴力で単純に圧倒される。もし、狩人を撃退してもそれが昼夜問わず、二十四時間交代で毎日襲い掛かってくるのだ。どれだけ強くとも必ずどこかで限界が来る。

また、狩られるモノ達は必ずしも超人的な戦力を有しているわけでもない。むしろ、普通の人間と同等、もしくはそれ以下の力しか有していないのが大半だ。

そして、数少ない力を有するものは、力を有しているが故に勝ち目がない。この長い年月の間に人間は……狩人は自らを超える怪物を、確実に殺せるシステムを完全に確立している。

強ければ強いほどその強さ故に名は知れ渡り、世界にとどろくほど有名ともなれば、たつたその一つの個体を殺すためだけに、魔術や武器、戦術が創作され、それはすぐに最前線で戦える手練の狩人に、時には同じく狩られる立場にすらあつた『獵犬』へと渡される。

いまや人は神に對してですら、時間と手間さえ掛ければ一方的な暴虐が可能なのだ。

神殺したための狩りの手順は、紀元が刻まれる前に確立されたような、遠い昔の出来事なのだから。

そんな不平等な世界のなかで、キツキはなにに対しても公平だ。怪物とされるモノ達の立場を同じ目線で理解し、人間には人間の都合があることを知り、その双方の安全や生存を守ることに現実的な範囲で手を尽くす。

彼女にとつてはどちらも同じ……生物だからだ。そこで競争が発生するのは当然だと人ならざる視点で、等しく扱う。それに例外があるのは、彼女個人の好悪と言つ感情が入るときぐらいだ。

好きなものは好き、嫌いなものは嫌い。真に平等な主義であるからこそ、嫌いになることも好きになることにも呵責がない。

人間は可哀想だと言つて、生まれた姿境遇が一般と違う者を、まるで嫌つてはならないかのように、好きにならなければならないかのように扱う。もちろん、その逆もあるわけだが。

彼女にとつて、それは差別であり不自然だ。相手がなんであろうとその評価は等しく下される。

好きなものは好き、嫌いなものは嫌い。それがどんなに一般的に不幸で恵まれない状態にあろうとも、彼女は自分に嘘をつくことも、相手を可哀想だと哀れみ貶めることもない。

だから、確実なのだ、彼女はその評価を下す前にその命を見捨てはしない。その評価を下す前の存在を護るために彼女は信頼出来る。遠野や一般人を護ることに関しては熱心に働き、最善を尽くしてくれる、と。

……少なくとも嫌いになるまでは、だ。

それでも、万が一その瞬間が来てもその公正さで持つて、ある程度は安全に対応はしてくれるだろう。

そのためこの時、巫月はまつたく焦る」とはなかつた。

遠野の安全が確認された時点で、問題はないそう判断していた。

「……本来なら昨日の時点で、遠野を拘束しておるべきだったんだろうがな」

そう、巫月は呟いた。

むりん、それは独り言に過ぎない。

いや、過ぎな かつた。

「でもお、あの時点ではトオくんが傷つけられる可能性は低かつたんだしさあ、仕方ないんじやないの?」

「 つ!?

事務所の扉が開かれると同時に、放たれたのは間延びした声。

「気持ちはわかるけどねえ、トオくんは大丈夫だよ。……ヘタにあの『すとーかーども』を刺激しなければ、だけどお

「 ……ハミか」

田の前にいるのは、可憐と言つべき一人の少女だった。

どこにでもいる、と言つのはばかられるような容姿ではあった、巫月が知る限りハミほどに可愛い容姿の女の子はそう多くない。

だが、どうしようもなくそんな印象を抱いてしまつのだ。ビリにいても田を惹く、しかし矛盾するよつていいにしてもおかしくない少女。

言つなれば、テレビにあらゆるジャンルの番組に出演しても違和感がない、ありふれているようでもそれくはない、有象無象のメン

バーに埋もれてしまつよつた、特筆した個性のないアイドルのよつな可愛らしさ。

軋呑ハミはそんな雰囲気を持った少女だった。言い方を変えれば、どこか身近さを感じさせる華やかさがあるとも言える。人に距離をとらせない親しみやすい雰囲気だと。

見た目には何一つ、恐れる要素のないそんな少女だった。

だが、巫月は知つてゐる。それが、錯覚にしか過ぎないことを。ハミ自身が自らのその姿勢を完全に擬態として使いこなしてゐること。

そもそも、ハミが巫月にまつたく氣付かれずにここにいることと身体が異常なのだ。

この事務所は一階にあり、ここに来るまでの階段は必ず昇る際に軋む音を立てる。それだけでなく、本来ならここに近づいて来る時点で、巫月に気付かれるはずなのだ。

そのための仕掛けが、この事務所の周囲には張り巡らされている。ここは魔術を含めたあらゆる手法で仕掛けられた、警報による罠が備えられた事実上の小さな要塞だった。ここにある罠はその全てが存在することを不自然でない偽装がなされている。

いや、偽装という言い方が正しくないかもしない、なぜならその罠はその辺にあるものを、石ころ、空き缶などのゴミ、壁にされた落書き、などを利用して作られているからだ。

仮にこの周辺に罠があると知識があったモノが侵入しても、それを罠だと認識するどころか存在していることすら見逃しかねない。そして、それは命取りだ。

近辺の標的のその『現在位置』を正確に知るだけで殺せる、そんな手段があるのなら、いつでも単なる警報装置はいつでも死を^{デス}トランプ招く罠になりうるのだから。

だが 軋呑ハミはその一切を作動させずに現れた。

「……キミが一人でここに来るなんて、どうこう心境の変化だハミ？」

「ん~、別にい。たいしたことじゃなくてえ、さよに所長さんに聞きたことがねえ」

むろん、警報装置とて万能ではない。その全てを突破しうる特性を持つたモノも世界には存在するし、その罠全ても気が付いているのなら、避けることは容易だ。

しかし、絶対に偶然全てを避けて来てしまうことはありえない。あるとすれば、それはよく整備された回転式拳銃リボルバーに弾丸6発詰め込んで、博打ロシアンルーレットをし連続で6回引き金を引いて弾丸が放たれなかつた、と言つてくらいに馬鹿げた可能性だ。

そこまでいけば……強運なんてレベルではない。少なくとも、机上ではその可能性は零だ。

「とは言えそんな馬鹿げたありえない可能性を、平然と『偶然に』現実にしてしまうような大馬鹿が世の中にはいるんだがなあ」

「……ん~？ なんの話い？」

「こや、こいつのことだよ。それよりもキミが聞きたことじね~。」

巫月はへたに話をそちらに向けることなく、彼女の求める本題へと頭を切り替えた。

ハミがその間延びした口調とは相反して、やつ氣が長くないことを知っていたのだ。彼女は無駄なおしゃべりは嫌いではない、だが自分の言葉が無視されることはひどく嫌がる。

「こいつの一帯でキミが知るじが出来ないことなどないはあるま~、

「そのキミがわからないことなど想像つかないが？」

「まあ、ねえ。でも、世の中には知識がなければ理解できないことつてあるからねえ、仮にこの世にある書物すべてを読むことが出来る立場の人がいたとしてもお、読んで理解できるかどうかは別の話でしょお？」

「書物か、それは言い得て妙だな。言語の壁もあり、禁断の知識：魔術書に至つてはその殆どが暗号化されているからな」

「だいたいハミがわかるのは、今現在なにが起きているのがぐらいだしねえ。そこから今までなにがあつたのか推測は出来るけどお、推測は推測にしか過ぎないしい、なにが起きてるのかはわかつても、それがなんのかが理解できないからねえ」

「それだけ理解できれば十分すぎるだろ」

「まあねえ、お陰でいつどこに誰が何をしているのか、誰と一緒にいるのかすぐわかるよ？ 知りうつする限りはねえ」

「ほう」

要するにハミはいつ言いたいのだ。

遠野が今どこでなにをしているのか、誰といらののか、自分はいつだつて知つてているぞ、と。

「……なにも私に威圧を^{プレッシャー}与える必要もあるまい」

「なにか言つたあ？」

「いや」

なんだろうか、ハミはキツキを遠野の元へ送つたのが気に入らないのか？

巫月はそう疑問に思う。

確かにキツキは遠野に興味を持つていて、だがそれは同じようこハミにもだ。彼女は人間のその一個体に興味が限定されない。事実、ハミはキツキとはそれなりに打ち解けている、少なくとも

表面上はやつ見える。

「あ～、でも本当にハミも思ひよお、所長さんといつしょだよ」

「……なにがだ？」

「いや、さつき言つたじやん？ トオくんを昨日の時点で拘束しつければよかつたつて」

「……ん、ああ、確かに言つたな」

だが、あの時点では逆効果だ。

一度でもそういうことをすれば、その可能性を考慮して今後遠野が動くようになる。今回はよくとも、一度でも警戒させてしまえば次に遠野の安全を確保することが一層困難になるだろう。

それに、あの時点では遠野の危険は少なかつた。本当なら送り犬の出現程度、キツキが動くことでもなかつたのだ。

万が一の場合でも、遠野に渡した呪具が機能すれば送り犬の攻撃ならばある程度の時間があれば防げる。そして、稼ぐ時間は僅かでもあれば十分なのだから。

……余程のことがない限りは。

「それでも、そうしなかつたのは私の甘さなのだろうな」

結局のところ、私は誰一人、ここにいるメンバーを制御できていないのだ。……私自身も含めて。

「ま、仕方ないよ。トオくんの動きが読みにくいのはいつもだしい、今日は一重身が一重どころじゃないなんてこともあったからだ」

「……それは可能性として考えられたことだ」

「それでも、だよ。一重身がどう動くかは動いてみないとわからぬい、人が封じ込めた自分の可能性なんて、無数に存在するんだから

その「ひのびれ」が出現して、びり動くかなんて予測しようがないよ

それはその通りだ。

だけど、まさか……異なる複数の可能性が遠野に執着を見せるなんて。

「異なるって言つけど、結局は同じ人物の……だからねえ、ある意味当然つちや当然なんだけどねえ。まあ、絶対に予測できなかつた事態だ、と言えば嘘になるのかなあ」

「……だから」」や、私には遠野の安全を確保する義務があった

「だから拘束しておけばよかつたって？　まあ、そこは同意するんだけどねえ。トオくんたら無茶するからねえ、本當ならトオくんの両手両足切り落としてえ、大事に一十四時間保護したいくらいだよお」

「それはもはや拘束とは言わない」

「身動き出来ない状態のトオくんを想像するだけで樂しくなつちやうなあ、完全に独占状態だよねえ、誰の目にも触れさせないつてすゞく甘美な響き」

「誰にも姿を見させないのは共通しているが、明らかに私とは目的が違つよな？」

……よく遠野はこのハミを上手く扱えるものだ。

どう考へても、遠野の最期がありありと想像出来るような、そんな発言しか聞こえてこないようと思つ。これをどうこなしてるんだ、奴は。

「あ、もちろんアレだよお？　切り落とした手足は後でスタッフが美味しくいただきましたあ、みたいな？　……血の一滴たりとも無駄にはしないから安心してねえ、所長さん」

「……心配しているのは間違いない、が少なくともそひりの方では

ない」

いや、遠野は本当に上手く扱えているのか？。

巫月にとつて、もはや一人が日々どんなやりとりを繰り広げているのかは、理解の範疇をはるかに超えていた。

「ま、腕なんか取っちゃつたら手も繋げないし、抱きしめてもくれないし、足なかつたらお姫様だつこも出来ないしねえ」

「……と思つたらなんとなく見えてきた気がするな」

意外と柔軟に柔らかく対応しているらしい、もしかしたら軟派といつ意味で柔らかい対応なのかもしれない。とは言つても、実際に実行しているかどうかはまた別の話だろ？。

「それで、所長さん。話は戻して質問なんだけじねえ、ちょっと教えて欲しいんだけど」

「答えられる質問なら」

「あ、大丈夫。全然たいしたことじやないからあ」

たいしたことではない。

ハミはそう言つが、巫月はこつ見えてハミがかなりの知識を有していることを知つてゐる。その知識を有効に行かせるほどにその能力が高いことも。

そのハミが質問することなど限られてゐる。ハミの知識にないこ

と、巫月に聞かなければ、知りようのないこと。

それは……怪異か魔術に関することぐらいだ。

「あのねえ、大神アスカのことなんだけじねえ」

……やはりか。

「ああ、なにが聞きたい？」

巫月はその質問の内容をある程度想定しながら、その質問に耳を傾ける。

が。

「どうやつたら……………えるの？」

「…………なんだつて？」

「いや、だからあ、どうやつたら……………おせるの？」

別に聞こえなかつたわけではない、意味が理解できなかつたわけでもない。

聞こえたからいや、理解できたからこそ、巫月は聞き返したのだ。
「いやあさ、どうにも自信がなくてさあ、だんだん増えてくるし、いまいちね手応えがなくてえ。どうせやるなら確實にやつときたくてさあ。別に全部やつちやつてもいいんだけど、それでおつけるのかどうか確認をねえ」

「確認？」

「そう、所長さんに聞けば確実でしょ。だから教えて」

ハミは再び、言つた。

次に聞き返すことは巫月には出来ない。

「ねえ、どうやつたら大神アスカを殺せるの？」

軋呑ハミは巫月に頼んでいるのではない。

ハミは遠野のためならなんでもする。だからこそ、自分に拒否を許さうとしないのを巫月は知っていた。

戀されてるなあ、遠野。つて話。

血葉とこの艶の鏡の禪丸（前書き）

ようやくまた書を始められやうです。
かっこ良めに書いてみました。

わたしにとつての『カナ』と『カナ』の存在を言葉で説明することは。
それはとても難しことだ。

憧れ……まあ、そうだろう。

嫉妬……しなかつたわけじゃない。

恩人……そうであつて、そうじゃない。

親友や友達……間違いなくそうだけど、それだけじゃ間違いだ。

わたしにとつての『カナ』は、あるべきだったわたし自身だ。憎しみがなかつたと言えば嘘になる。どうして、あなたがそうなのか、と理不尽な怒りを覚えたこともある。

だれにでも好かれ、だれもが味方だった父。だれよりも頼られ、だれにとっても味方だった父。

性別も雰囲気も違うナビ、その父のよつに生きているカナ。父の娘のよつなカナ。

本当はわたしが持つていてるべきものを持つていて、いるべき場所に彼女はいた。事実はどうあれ、わたしはそう理屈なんか関係なく感じてしまったのは事実だったから。

でも、それ以上にわたしは『カナ』が大切だった。

もう手に入らないものを持っているカナは、なによりまぶしくて。その輝きの近くにあるだけで、わたしは暖かい気持ちになれた。

もしもどうしようもないくらいに憎んでいたとしても、負の感情

があつたとしても、人は太陽ひかりを求めずにはいられない。その暖かさを必要をせずにはいられない。

なによりもわたしはその輝きが失われてほしくないと、そう思つてしまつたから。

自分にとつて絶対に手に入らないからこそ、それがどんなに希少で異色とも言つべきほどにありえなく、奇跡的なまでに希有なものであるのか。

多くの人間がその生き方を渴望しているはずだ、現実とその理想がどれだけの距離があつたとしても、それが果てしなくどこまでも手が届かないと知つてもなお、死に物狂いでその手を伸ばしてしまふほどに。

わたしはそれを、そんなものだと知つてしまつてゐるから。

壊したいとか思う前に、羨んでしまつたから。嫉妬してしまつた、けどその前に憧れてしまつていたから。見ていたい、触れていたい、傍にいたいと思つてしまつたから。

本人達はそれを決して素晴らしいものとも、輝かしい生き方だとも、ましてやなんら特別なものだとは思つていないに違ひなかつたけど。

でも、それは当然のことかもしない。

そういう生き方をしている人には、その生き方なりの苦しみもあるんだろうし、ましてや現実に生きている以上、はたから見ていてどうだったとしても、綺麗なだけの考え方や心ではいられない。

自分の生き方が当たり前である以前に、どんな生き方をしている人にだつて、かなえられない願いやたくさんあるのだろう。わたしにはわからないだけで、誰にも言えないようなおぞましい部分があつてもおかしくない。

それは頭ではわたしもわかっている。

あくまで頭では、だけど。

……そんなカナにとつてわたしはどんな存在だったかはわからない。

きっと、ひどくくらべに重い足かせになっていたんだろう、とは思う。

そう思つていたけど、わたしは彼女から離れることはなかつた。

だつてカナは、わたしのとつて大切な『居場所』だつたから。生きていくためにカナが必要だつたんじやなく、カナが自身がわたしにとつての生きる場所、生活の……いや、生存の場のだつたんだから。

わたしはカナと言つ名前の世界に、すがつて生きているようなものだつた。

だから、嬉しかつた。

カナがわたしを選んでくれたことに喜びを感じずにはいられなかつた。

カナが好きだといつて、あの人が死んだとき。カナが初めてわたしに「たすけて」と言つたとき。

電話越しの、あの消えてしまいそうな儚さを感じてしまつ、切ない声を聞いたとき。

あの人が死んだのだと、カナがわたしに告げたとき。

わたしは間違ひなく、嬉しいと……。

数多くいる友達の中で、その他大勢の中で、自分が一カナ・ヒロインへに選ばれた。その事実に対してもわたしは……どこか心地よさをかんじてしまつていたのだ。

エキストラ

そう、わたしは嬉しかったんだ。

*

広々とした庭、車庫と小さな物置らしき建物すらある大神宅を目の前にして、ぼくはキツキさんに言われ、家から持ってきたカバンを抱えて車を降りた。

いや、って言うか。

「敷地内まで入ればいいじゃないですか、玄関の前まで車入れましょうよ」

保護するにしても、建物のすぐ目の前に車があつたほうがいいと思うし、なによりも早く安全だと思う。屋内に入るわけじゃないんだから、それはキツキさんにも可能なはずだけど。

「いやー、でもそれ、アレだよ。あの送り犬は影のある場所に依存してるのでしょ、その性質を考えると車の中すら安全じゃないしさつ。どっちにしたって車」と襲われたら動きようがないよ?」

「なるほど」

まあ、確かに今さつき襲われたら相手が有利だった……とは思つ。

「でも、送り犬って建物の中まで襲つてくる怪異じゃないですよ。車の中今まで、……当時は牛車か馬車になるんですか? とにかく、そこまで入つてくる記録もないわけですよね?」

「……そうだけど」

「じゃ、内部に問答無用で侵入つてことはない訳ですね」

おやぢへ自分の家は他者にとつてはある程度の結界を果たす、と

「言つ理屈は車の中でも通用するはず。

もうちろん強力な結界とはならないだろう、でも、なにかの術や呪具の補助があれば結界の影響を受けやすい悪霊ゴーストとかなら対応できる。

「車」と襲われたらひいて言こますナビ、そこそこキツキさんの能力なら対応できますよね?」

戦車には勝てなくとも、トライシクを轢き殺す、……なんて戯けた真似すら、この中古車でキツキさんは出来ると思つナビ。

「いや……そこまではちよつと」

「出来ますよね?」

「……まあ、送り犬が簡単には破壊できない程度には」

「ええ、でしううね。それで?」

「……それでつてなに?」

「いや、だから。本当の理由はつて聞いてるんですよ」

そんな田に見えてしょげたようにしなくともいいんだけど。
別に怒ってるわけじゃないし、車降りないって言つてるわけじゃないんだから。

……もう、既にこうして降つてるわけだし。

「あー、怒らない?」

「ぼくはそうそう怒つたりしないですよ」

たぶん。

自分で言つのもなんだが、今時の若者にしてはあまりキレイないタイプだと思つ。

そう、ぼくは心が広い人間だった、なんて。

「車傷ついて欲しくないんだよね」

「は？」

「車傷ついて欲しくないんだよね」

「は？」

「いや、だから。車傷ついて欲しくないんだよね」

「は？」

「……いや、ね」

今なんか聴こえた？

いや、聴こえてるんだけど。普通に全部聞き取れてるんだけどね。

と、思つてたら思つたり胸を膨らますかのよつこして、深くキツキさんガ息を吸い込んだ。

「だから、車傷ついて欲しくないんだよねっ！」

「つるさいわっ！ 大声で堂々となに吹かしてんだ！」

そんな大声で言わんでも聞こえるとるわ！

「えー、そう言われても」

「と言づか、なに4回もぼざこトんですか！」

「なんどと言われても！？」

「つて言づか、命と車どっちが大切なんですか？」

「んー、どっちって言われてもなあ」

「あのね、車はお金で買えますけど、命はお金じゃ買えないんですよ？」

一般論だけじね、もちろん。ぼくがそう思つてるかは別として。いや、自分の命のためならお金は惜しくないんだけどね。でも世

の中、お金ないと死ぬからね。

「でもさつ、死んだ人にはもう直らないからお金は要らないけど、死んだ車にはお金掛かるよね？」

「途端に生き生きと話し出さないでください！」

「それに初めてきちんと貯金して買った車だからさ、愛着もあるんだよつ。ぶっちゃけ、見知らぬ女の子よりは大事だよねつ」

「車なら同じの何台もあるじゃないですか！ 人と同じレベルで見ないでくださいよ！」

「なに言つてんの、うちの子だつてそつだよつ！ 唯一無二の存在だよつ、この広い世界にたつた一つだよつ、うちの愛しい愛しいアドリゲス！」

「アドリゲス！ なんですかソレ、もしかして車の名前！？」

「使い古された車と言えど、うちのたつた一台の愛車だからねつ。もつキミ以外愛せない！」

「テンション高つ！ 敵の巣かもつて言つ緊迫ムードぶち壊しだ！」

「……でもアレだねつ。中古車が愛車つて、擬人化するとすゞく口によねつ、やうしによねつ、ぐつとくるシチュエーションだよねつ！」

「同意を求めるなつ！」

「もう、アレだよ。うち、アドリゲスに一目惚れだつたんだけど、擬人化すると『駄目だよ、キツキ。だつてわたし……もう』つみたいなアレだよ。『つちはそれでも愛してるから』みたいなアレだよ！」

「あー、アレだよー あんたは十分アレだよつ！」

つて言つた、アドリゲスは女の子なのか？

いや、車の性別を問うのもどつかとは思つけど、どうこう視点で世界を見ているんだねつ。きっとぼくとは見えているものがまるで違うに違ひない。

「あー、まさかこんな展開になるなんて。擬人化には無限の可能性があるね？」

「本当にこんな展開とは思わなかつたですよ」

まさか、キツキさん来るたびにこんな会話しないといけないのか。いやだぞそれは、断じて嫌だ。

阿呆は存在していてもかまわないけど、そこから発生するアホ展開、アホ会話にぼくを混せるんじゃない。ぼくは断じてそちら側にはいかないからなつ！

でも、まあ、キツキさんがどんな風に世界を見ているにしろ、この会話から再確認できる」とはある。

キツキさんは嘘や冗談で「こんなことを言つているわけじゃない。実際、キツキさんにとっては車の方が見ず知らずの女の子より優先順位が高いのだ。

勘違いしてはいけない、キツキさんは正義の味方でもないし、ましてや人間に無条件の善意を抱いているわけでもない。

キツキさんはぼくを守ることに關しては、ぼくがキツキさんを完全に敵に回すようなことをしない限り、まずやり遂げられるだろつ。巫月所長との約束している以上、最後までそれは果たされる。

しかし、それはなによりも優先されるわけでもない。自分が死んでまで果たそうとするかは別だし、ぼくの安全を守ることを最優先にしているのなら、事務所になにがなんでも向かつていなければならぬはずだ。

自分の趣味や主義を可能な限り通すと言つ、よく言えば柔軟な、悪く言えばいい加減な、性格ゆえに成り立つてゐる状況。決して、女の子を守ることに正義を見出しているのではなく、たまたま自分

の興味を引いているから同行しているだけなのだ。

それでも矛盾するようだが、彼女にとつて約束と言つのは重いものには変わりない。なによりも最優先されることはなくとも、積極的に破られることはまずない。

なぜなら彼女はそういうモノだからだ。一定の規則に従つて存在する存在、そうである以上、約束すらも一時期的な規則として追加されるはずなのだ。より上位の規則を破ることにならない限り。

……それでも約束の穴をついて、ないがしろにすることはあるけど。

でも今回の……大神さんに関する件はまるで別問題だ。

キツキさんは、とある女の子の安全を確保する、ということに関しては認めてくれたけど、認めただけに過ぎない。一切、その女の子を守るということは言つていないし、その結果に約束もしてない。少なくとも、キツキさん自身が命を犠牲にしてまで、例えば身を挺して底うなんてことは絶対にない、とそう断言できる。

殺すしかない、と言う状況になれば、キツキさんがそう判断すれば迷わず大神アスカを殺すだろう。

ま、キツキさんの手助けなんて元々、ないものだと思つてたから別にいいんだけどね。

ぼくは気分を切り替えて、カバンを背中に担ぐようにして大神宅に向き直る。

「じゃ、行きますか」

車の件に関してはこれ以上なにか言つても無駄だろう。

それになによりも時間が惜しい。

「その割りにめちゃくちゃ雑談してたけどねっ」

「……誰がそこまで発展させたと思つてるんですか」

「話上手なうりのおかげっ」

……本当にうざりたいなあ。

ぼくはキツキさんを無視して、敷地内へと一步を踏み出した。

ぼくの反応を予測していたのだろう、見事にぴったりと合せるようにして同様にキツキさんも一步を踏み出す。

その途端に、田の前に現れる。

「なるほど、敷地内は相手の領土。よつて、支配権と優位性は向こうにあるつてことですね」

現れた、と言つしかない。

ぼくは間違いなく、大神宅をその田にまつすべに与へ、一步を踏み込んだ。玄関へとたどり着くまでの広い空間は全て、視界に入っている。

だが、そこになにかが現れる予兆など一切存在しなかつた。それなのにも関わらず、犬の集合体とも言つべき異形の群れが、敷地内を埋め尽くしてゐる。

まるで、粗悪な合成映像でも見ているようだつた。不自然極まりない、素人が作ったかのような何もない場所の画に、いきなり異形の群れをつぎはぎしたかのような一切のセンスが感じられない演出。

「B級映画のスタッフだつてもうちょい真面目ですよね

「ずいぶんと余裕だね……」

「いや、正直見たことないんですけど、もしかしてB級映画のスタッフはB級映画と言つジャンルで真面目に作つてるんですかね?」

「本当に余裕だよねっ!??」

余裕、とキツキさんは言つてくれているが、十分に見えているはずだ。

さつきから、足の震えが止まらない。

ぼくは自分自身が攻撃されない、そう考えてはいる。

だけど、そんな理屈など関係なく、本能に訴えかけてくる原始的な恐怖が田の前に存在する。

向こうがその気になれば、ぼくはゴミのよつなものだ。

逃げようもない、どこにぼくが向こうが精確に向こうはぼくを追跡できる。その上、ぼくは相手の攻撃を回避できる能力もない。

ぼくはカバンの持ち手を握り締めた、手のひらに汗をかいていることを自覚する。

「ぼくとは相性悪すぎですよ、送り犬つて言つのは」

「送り犬、なんて代物じゃなくなってるけどね。明らかに」

「ま、逃げる気はないんですけど。気をつけてください、キツキさん

ぼくたぶん、アレに襲われたら3回以上一撃で死ねる自信がある。
一撃必殺ワンボイントキルどこうじやない、普通に一過剰殺傷オーバーキルだ。

天国の向こう側まで見に行けるだろう。ちょっとした小旅行だ。帰つてこれないのが残念だね、本当にあるかどうか見てみたいのに。

「……天国の向こう側、か」

異形の群れの中から、声が聞こえた。

聞き覚えのあるその声は、どいか穏やかさら感じられる。

「遠野らじじこちや、らじこ言こ回し……かな

異形の一匹が前へと歩みだす。
その目には理性的な光。

「やあ、一度目かな。会うのは」

「それは違うよ、遠野。わたしはずっと前から、あなたの目の前にいたし見ていたし、話したいと思つてた。今はそれがこうして形になつているだけ」

「あくまで、大神アスカの一部と言いたいのかな？」

その異形はぼくの言葉に答えることなく、瞬く間にその姿を変貌させていく、巨大な身体を収縮させ獸の頭を内側へと取り込み、毛皮を全く別の日常的な私服へ、皮の下から現れるのは人間的な肌。皮を裂くようにして、伸びていく手足。

獸の姿を脱ぎ捨てるかのように、悪の魔女に掛けられた呪いを解いたお姫様のように、あるいは旅人を騙して喰らう魔物のように、彼女は姿を変える。

それはどこか艶かしく、色氣すら感じさせる情景。

異形が人間へと変貌していくその過程に、どこか心を動かされてしまつているぼくは異常なのだろうか。許されがたい背徳感すら感じたが、それを含めてぼくはその感情を切り捨てた。

「キミが犬だつたとは知らなかつたな」

ぼくはその現れた女の子に、なるべく軽い口調で話しかけた。
幸い、もう震えは止まつている。

ぼくの目の前に、遮るようにしてキツキさんが立つ。
大神アスカと瓜二つの、その女の子の間に。

「そう、知らなかつたの？　わたしは結構浅ましい女だよ、犬みた

いにね

浅ましい……ね、人間らしくないありさま、だっだけ。なるほど、確かに人間らしさは捨ててこる。獣に身を墮としているわけだからね。

それとも身を墮としたのではなく……？

「それでやこの女は誰？」

なぜか、前方からの威圧感が増す。なんだ？

「うちかいつ？ うひは……あー、まあ、遠野つちの護衛みたいなものかなつ」

「ふうん、護衛ね。とりあえず、あなた達ふたりはここから出て行つてもらえるかな。今忙しくて」

「つて、あのお嬢、あんなこと言つりますぜ？」遠野つちの田那つ

なぜぼくに話を振るかな、キツキさん。

「つて言つたが、だれが田那ですか。もちろん聞く気は零ですけど？」
「つて訳だから、『めんねつ』

そう言って、なぜかなれなれしくぼくの肩を抱くキツキさん。

いや、ますます威圧感が増してくるんですけど、肩を離すついでにその理由を説明してもらえませんか、キツキさん？
つて、にやにやしながら腰に手回すな！

いや、お願いだから首筋に顔を近づけないで！ 頼みますからやめてください、息当たつてますから、いやいや、そのままキスしようとしないで！ ホントマジでお願いしますー？

ぼくが必死に抵抗していると、漫画だつたら一、二本青筋立てそうな様子で、怒りに満ちた声が響いてきた。もちろん目の前の女の子からだ。

「なら、実力行使しかないよね。……残念ながら」

全然、残念そうにじゅなをそつなんですけど?
かなり望むところだ、つまくみえるんですけど!?

その声を合図に何十と言つ犬の混合物である異形の、その群れが襲い掛かる。

だが、キツキさんは。

楽しそうに華やかな表情で、犬歯を見せるように、魅せるようにして笑みを浮かべ。

襲い掛かるうとした怪物の田の前へと、トントンと軽く地面を蹴つて一足で距離を詰め。

その右腕を乱暴に薙ぎ払う形で、異形を引き破つた。

斬るのでもなく、殴るのでもなく。

一撃でその身体をもぎ取るように、千切るようにして、腕を振

るつたのだ。

ただ腕を振るつただけで、その異形をただの肉塊へと変えて見せた。

そして、それを見ているぼくらが表情を変える前に……今度は、左足だけで右から迫つていた異形へと距離を詰め、同じように解体していく。

それが終われば次の異形へと、次々に、その腕だけでバラバラに等分していく、一つの大きな塊が、三つ四つの小さな不揃いの肉の

塊へと、爆発するような勢いで血煙を撒き散らしながら、なにかが破裂するような音を奏で続ける。

その間一切の、身動きを犬の異形はとれていない。群れとして攻撃しようとした瞬間に、機先を制されたのだ。混乱し、一切の思考を停止している。

ただ自分の仲間が血飛沫と肉片を撒き散らすと言つ、盛大で悪趣味^{グロテ}な花火をあげていく、その光景を自分の番が来るまでただ見ている。

まるで、自分が処刑されるのを、屠殺されるのを待ち望んでいるかのように。

さらにもう一匹、地面へと異形が沈んでいく。

その目にとても上機嫌な笑みを浮かべた白衣の女性を最後に映し。なんら獰猛さも剣呑さもない、一切の真剣さの見られないその輝かしい無邪気な表情を焼き付けて。

真っ赤な花を裂かせ散らすようにして沈んでいく。

「アレは……なに？」

田の前の、肩まで髪を切り揃えた女の子が、呆然とそう呟く。

「『獵犬』だよ、うちの事務所でも最強のね」

今は力の大半……どころか殆どを制限されているけれど、彼女が本当に本気で戦えば、おそらく一人で戦争と言つ名のお祭りができる。実際に楽しそうに、やつて魅せるだろつ。

狩人と怪物、そして彼女との三つ巴^{キツキサン}でこの街を壊滅させてもなお、絶対に止まらない戦いを起こして魅せるだろつ。

それでも勝つのは人類だらうけど、……恐ろしいことだ。

そのぼくの声で正気を取り戻したのか、大神アスカと瓜一つの彼女は睡然していた顔を、引き締めキツキさんを睨み付ける。恐らく、全ての犬とその意思が繋がっているのだろう。解体作業を待つだけだった異形たちに変化が起きた。

彼らは異形の姿から分かれるようにして、元の犬の姿に戻り、その膨大な数と巨体では發揮しきれない高い敏捷性を使って、キツキさんを翻弄しようとした。

しようとした、だけだ。
腕の一振りで、一匹づつ殺されたのが、まとめて何匹か潰されるようになつただけだ。

いや、それでも何匹かは不意を打つようにして、その背後に回り……。

回し蹴りで同じように鮮血を撒き散らした。

よく見てみれば、キツキさんの白衣……真っ赤に血肉に塗れたそれは、袖を斧か鉈のように金属の硬度と光沢、鈍い叩き割るために使用できる程度の鋭利さを持つた凶器へと変えていた。

さらに幾ばくかの攻防の中、何十もの犬を囮とし、ようやく隙を突いて一匹の犬が腕に噛み付く、……それも違う。

キツキさんは腕でその襲撃を防いだ、その牙は全くその白衣に歯が立たない。その腕に犬を噛み付かせたまま、ほかの襲撃してきた犬の群れに叩きつけ、気がつけばそれもまた肉塊へと変わった。

さて、ぼくはこまま見学してもいいんだが、そうもいかない。こまま戦えば、一見優勢に見えていても最終的にはキツキさんがジリ貧だ。

強力な力を持つているが、残念ながらそのエネルギーを維持し続けることができるほどには、実はキツキさんには余裕がない。

「」の間に大神宅に侵入を試みることも出来るが、どうみてもそれが出来る様子もない。

そう、問題はまったく送り犬の数が減つていことなのだ。確実に倒してはいる、だけど、基本的に実体のない存在しないはずの怪異なのだ。単純に殴り叩き殺すだけでは、殺しきれない。消滅させられない。

……殲滅の可能性は低い。

なので、ぼくに出来うことをしてみることにする。ぼくに出来る援護を。

幸いなことに、送り犬を指揮しているのは会話が出来る相手だ。その上、向こうは「」があることを知らない。

さて、始めようか。そして撃とう。吐いて。

輝きはしない、錆びた鉛の弾丸を。

ぼくに出来る、最低の援護射撃を。

9

「……あまりいい光景じゃないな、そつは思わない？」

ぼくはいつものように話しかける。

いや、アレかいつもは話しかけないんだし。

話しかけられた女の子はぼくを驚いた表情で見る、うんだりうね、ぼくが誰かに自分から話しかけるなんて、あまり君は見たことがないだろうね。

本当はわりとしょっちゅうなんだけど。

「IJの光景を起こしたのはそっちだと思つけど?」

「ま、ね。ぼくが頼んだんだし。でも手を出したのはそっちが先だから」

彼女の視線はあくまでキシリさんへと向かっている。

不思議とあわだたしこの状況でも会話に困らないのは、彼女の性質と関係あるんだろうか。

「でも驚いたな、君が犬好きだったなんて。いつもこんな感じで連れて歩いているの?」

すこしイラついたのか、彼女はムッとした表情を見せる。

「……そつこつ遠野はいつも女の子をそばに連れているよね

それ今、関係ある?

つて言つか、この状況でそれを

いや、ほくもんそこ変なこと話してくるナビや。

「誤解だよ、……わりと男子ともこるよ? 学校じゃ友達いないからアレだけど」

「ふうん、わたしも似たようなものかな。本当に友達と呼べる人なんてそうそういないしね」

「本当の友達、ね」

友達に嘘も本当もあるものだろ?か。

ハミに言わせれば、友達と言つその言葉 자체が有象無象のその他大勢そのものを意味しているらしくけど、一般的にはそこには心の

支えであるとか、自分の居場所であるとか、なみなみならぬ意味や意義を持つて考えられる場合もある。

「あなたは幽霊を信じますか」
「え？」

「いや、本当の友達とか嘘の友達とか。ぼくにはそれと同じレベルに感じられる」

「いるものに信じるも信じないもない。
いないものに信じるも信じないもない。」

幽霊、妖怪なんてものは定義もあやふやなものに過ぎない。正体はなにかと聞かれれば、いまいちそれもピンとこないもの。

人間がいなければほとんど存在しないようなもの……友達と言つ言葉がそれと違うとはぼくには思えないのだ。

「ぼくにとって、友達つて言つのは幽霊と変わらないのかも知れない」

学校でのぼくが、いるのかどうかもわからない石像のような人間であるように。いてもいなくとも同じような幽霊であるかのよう。いるのかもしない、それでも。

「信じるには値しない。」

「幽霊なら本物も偽者もない、存在すらあやふやなんだから。それ

「ううつ、そういう価値のあるものだ、と社会的に教えられる。
だけど、それはそれとして。」

本当の友達、嘘の友達、そんなものがあるのだろうか。
ぼくにはどうも「うつ感じられる。」

なら、本物も偽者もそれは同じものだと言えない？ どちらも見ている人間の主觀とあやふやな定義みたいので決め付けているだけなんだし」

「遠野は……そういう人だよね」

「うん、ぼくはそんな人だよ」

いるのかどうかもわからないものは、いてもいなくても同じ。いたとしても、ぼくと関わりがあるかどうかなんてわかりはしない。

「わたしも本当は根本的にそなうなかもしれない、本物になりたいと思つてもどこまでもなれない偽者。それでも、わたしは……」「ぼくはそういう意味で言つてるわけじやないんだけじね」

大神アスカの一重身である彼女からしたら、色々と考へることはあるんだろうけど。

あくまでぼく自身には、事実としてそつ捉えていふと言つこと以上感情はない。

「……あなたにとつて、学校のクラスメートは幽靈と変わらない、そういうことでいいんだよね？」

「そうだね、と言つより学校 자체がそつだよ。でも、みんなにとつてもぼくはそういう存在でしょ？ 絶対に目に入らない、入つても入つたと氣付かない、いてもいなくとも損も得もない」

「……わたしは違つ」

「やつ？」

その言葉は重いな。

ぼくはどんな痛みより、その重みが苦痛だな。

「信頼には責任を持つてこたえるべき、そつ黙りてしまつのは別に悪いことじやないんだうね？」

「……なんの話？」

「でも、ぼくだつて……好きでそつ黙つてこゐわけじやない、そういう話。出来るからつて、やつしてこゐからつて、それが好きなわけじやないんだ」

「ぼくの言葉に彼女が目を見開く。

なにをその言葉で思つてこゐのかはぼくは知らないし、知りようもない。

「したいことをしてゐるわけだけど、しなければならぬって言つ……なんて言つのかな、強迫観念みたいのがあつてさ、どにかでそうこう自分に気付いてしまつたら、もつ自由でもなんでもなによつたな気分になるんだよ」

「いつもそんな風に思つてこゐの？」

「いや、たまに思つだけ。でも、たくさん選択肢があつたとしても、自分にその選択が選べないんだつたら、そんなものないと変わらないんだよ」

「自分には選べない選択肢、そつね、確かにそんなのばかりだね」「だから、もじやり直せたらなんてことに意味はないよ、どうせそれは選べないし、選んだといつて後悔はするし、過去は消えない」

「……あなたはなぜそんな風に生きられるの？」

「そんな風？」言つてゐる意味がわからぬいけども、どんな選択肢を選んでもどうせ後悔するなんなら、自分の好きなことをしよう開き直つてゐるだけ

例え、それが強迫観念じみた義務感でも、絶対に解決にはならぬ手段でも。

「ぼくはぼくがしたいと思つたからやる。

どんな結末を迎えても、だ。

「ぼくは普通の人間だからね、絶対に成功させるとか、全ての責任を取るとかそんなことが自分には現実的に不可能だって知ってるんだよ。たつた一人の人間が出来ることなんて、たかが知れてるからね」

「自分の意思どおりに動けている気がしないのに？」

「そんなものたいしたことじやないさ。正真正銘一切の不純物の混じりつ気なしに純粹に自分の意思で生きている人間がどれくらいいるって？」

自分はそつだと断言した人間は他人のことを思いやれない馬鹿か、他人の影響力を知らない愚か者だよ。

人間は自分の意思じや生きていけない生き物なんだ。もとからそう出来ているといつても過言じやない、新しく力や物が手に入つたぐらいで揺らぐんだよ。アイデンティティっていうんだつけ？

自分が自分だと思う意識、それって思い込みじやなかつたらなんだつていうんだ？

ぼくらは勇者でも賢者でも神様でもない、ぼくらはどこまでも高く登りつめなくていい。ささやかにそこそこに生きていければ満足していいんだ。それは悪いことじやないだろ？ それとたまに自分の好きなことが出来れば最高だ。たとえ、それが誰の意思であつても

「も」

大神アスカと瓜二つの彼女は、とうとう殺戮から田を逸らし、ぼくを忌々しげに見た。

初めて見る表情だ、とぼくは思った。忌々しげに見られることが体は初めてじやない、だけど彼女はそれだけじやない。

その表情の奥には、どこか羨ましそうな、物欲しそうな子供のような感情が見て取れた。それと、なんだろ？ ぼくには理解できないにか。

「わたしはあなたが嫌いなのかもしれない」

「そうかもね」

今でこそ校内の石像をしているが、もつと幼い頃にはよく憎まれたし疎まれたし嫌われたものだ。まるで親の仇のように、いやそれ以上かな、自分が住んでいる場所の全ての存在の仇のようにぼくはその目で射抜かれてきた。

「あなたは異質だと思う、わたしの世界にあっちゃいけない。絶対に認めることが出来ない、わたしが望まない答えを持つている。それはきっと全部を壊してしまつ、わたしは決してあなたを認めることが出来ない」

「そう」

「わたしは……いつも光を求めてきた。太陽のような眩しい光を、そんな光を持つ人を」

「ぼくは苦手だな、そういう人」

「絶対に手に入らないことがわかつてゐるから、望まずにはいられなかつた」

「身体にも心にも合わないから手に入らないんだよ、拒絶反応が出るどどこかでわかつてゐるから」

「そうなのかも知れない、いやきっとそうなんだね。でも、あなたはそれを失くしてしまつんでしょう？ その光を隠して、別のものにしてしまつんでしょう？」

その日に沸き起つるのは恐れ、それでもなお、なにか常に揺らがない心を一つ、彼女は持つていて、それはぼくが絶対に持てないものだ、だからぼくはそれがあることに気付ける。

それは……持つてゐるのがつらく、重いものだ。それをぼくは知

つて いる。

「仮に そ うだと し たら、君は ど う す る ん だ？」

「……でも、そ うだ と し ても。そ れ で も、わ た し は……あ な た か ら
目 が 離 せ な い。ど う し て も」

「……そ う」

「ねえ、遠野。あ な た は な に を し に 来 た の。あ な た に は な ん の 危 険
も な い、そ う わ た し が し て み せ る。な ら、あ な た に は な ん の 関 わ り
も な い こ と で し ょ う」

「なるほど、守 つ て く れ て る 気 だ つ た わ け だ」

少 な く と も、送 り 犬 の ほ う の 彼 女 は。
い や、彼 女 達 は……か な？

「見 ら れ て い る と 落 ち 着 か な い ん だ よ な、ぼ く」

「今 だ け、……だ か り。そ う す れ ば」

「……君 を 助 け に 来 た」

「え？」

彼 女 の 表 情 の 变 化 は 見 て い て 面 白 い、そ う 思 ひ。
自 然 と ぼ く は 笑 み を 浮 か べ る。

「だ か ら ね、ぼ く は 君 を 助 け に 来 た ん だ。勝 手 に 恩 着 せ が ま し く 自
己 中 心 的 に 傲 慢 に も ね、そ の 邪 魔 は 絶 対 に させ な い」

「……なるほど ね、大 神 アス カ を 助 け た い わ け？ あ ん な ろ く で も
な い 女 を？」

「ろ く で も な い つ……」

「あ ん な 女 の ど こ が い い の？ ろ く な こ と し て な い、結 局 他 人 に 依
存 し て 生 き て る だ け じ ゃ な い、し か も、そ の 相 手 す ら 食 い つ ぶ し て。
あ ん な の に 生 き て る 資 格 な ん て な い！」

「……勝手に勘違いしないでくれるかな、やる気が削がれる」

なんでいちいち、まへのまへごぬいとを曲解するかな。

「いいかい、よく聞いてね？」

「ほくはわかにすこねひすてんぢてん。」

はぐかたせここにいるのが

「ぼくは君を助けに来たと言つたんだ、大神アスカじやなくて君を」

ほくほに」り、と笑ひてみせる

そして。

「チエックメイトだね、ねえ、キツキさん」

その時、敷地内にいた送り犬達が全て消し飛んだ。

言葉とこの鉛の弾丸（後書き）

遠野の言つことは真に受けたらアウトです。
彼は何だって言こますから。

10.

ぼくがキツキさんにとってもった作戦は簡単だ。
それは一言で言つてしまえば 陣取り。

キツキさんがぼくの所持している武装や呪具を確認したのは、別に暇つぶしでもなければ戯れでもない。単純に戦力確認だ。
そして、そのことをぼくは十分に理解し、その必要性を即座に省いていた。つまり、ぼくは予めいくつかの呪具をキツキさんに渡していた。

あの時点では想定出来る、戦場や状況、パターン、考えられた中で策定したいいくつかの作戦と必要な小道具。
ぼくではなく、キツキさんが持つことでより様々な使いようが出来るようになる呪具。

では、ぼくはいつキツキさんに指示を送っていたのか。いつ、ぼくはその策定した作戦を伝えることが出来たのか。

車内であらかじめ伝えてあつた?

いや、違う。その全てを言うだけの時間はない。

ましてや言つだけでなく、それを完璧に相手に理解をさせるのは非常に困難だ。

では、そもそも伝えたのではなく長きに渡る、いや……『永き』に渡る戦闘経験キツキさんに、その実行する作戦を任せた?
それも違う、それだとぼくがタイミングを合わせられない。

ぼくがどの作戦を実行するのかを理解していること、それはキツキさんの実行する作戦状況に合わせての援護射撃を効果的にする、そのための大きな要素だ。

こつ、どこで、どれくらい相手の氣を削ぐか。

段階的に行いつ中でそのタイミングが外れることじがありてはならぬい。

キツキさんはその経験が豊富過ぎて、ぼくではその一つ一つに合わせられないのだ。

そして、なによつもキツキさんはそれを『許さない』。

あくまで今回の件はぼくが自ら言い出したものであり、キツキさんは成り行き上それに付き合つてゐるに過ぎない。

ぼくが主体として動かないのであれば、キツキさんはなにもしない。ぼくを連れて事務所へ帰るだけだ。

キツキさんはそういう厳しさを含めて公平なのだ。それは冷徹なまでに、と評することも出来るだらうが、そもそもキツキさんには見知らぬ他人を気に掛ける義理はないのだから、十分に心が広いと言えると思う。

さて、結局その答えはなんなのか、と言えばそれは少々反則的な手段だと言える。

ぼくはそもそも指示を『送つていない』のだ。でも、その意思と意図は伝わつてゐる。

ぼくの意思とは無関係に。

だが、だからこそ、ぼくの援護射撃に的確に合つたタイミングでキツキさんは行動出来たのだ。

そう、それは確かに反則だとも言える。

我、今では夕ヶキツキを名乗るモノは腕を振るう。力任せに、一切の技量を必要としないその一撃をぶつける。ただ叩きつけるように、叩き割るようにして、その巨大な獣の塊に向かって撃つ。

それはうちにとつて児戯に等しいものだつた。

相手はたかだか、送り犬^ごとき。人間の狼への敬意と畏怖、山道での得体の知れない視線と言うよりもしない幻想に抱かれた妄想の産物。

あくまで生物と言うものの型にはめられたそれは、不壊でもなければ不死でもない。

ただ、そういうモノの特徴として殺しても、滅することは出来ないと言うのが問題だつた。元が形のないモノであり、ただそれに型を与えただけである以上、その大元である存在が消えない限りは消滅しえないのである。

もつともそれがきちんとした一定の人格を得ているものならば、それは一度壊わしてしまえば元通り再編する事がない。

つまり、もしもこの目の前にいる大神アスカと言う少女を『模したモノ』を、我がこの手で破壊してしまえば、一度と同じ人格のモノは現れない。

似たモノが現れてたとしても、それがどんなに類似していても、それはもう別のモノなのだ。

間違いなく、目の前にいる人の形をしたコレに関して言えば、二つとない存在なのだつた。

例えこのモノがどこかの誰かから分化したモノであつても、どこ

かの誰かの不完全な複製品のようなモノであつても、日の光を浴びた本体から伸びた影のようなモノであつても、全く同様の存在はない。

だが、我的車が復元できなくなれば新しく買うように。目の前のコレにも替えはあるのだ。同じものはない、けど替えは利く。

この世に存在するモノはだいたいそうだ。

人間も同じものはない、けど替えは利く。

……遠野の面白いところはそれを理解し認め、人間と言う存在に諦めて絶望している癖に、それでもなお人間を辞めていないところだろう。

そう、この者はまだ人間を辞めていない。いつでも辞められるその場所のにいるのにも関わらず、辞めてしまいたいなんて一欠けらも思っていない。

なぜ、ここまで私はそれを断言できるのか。

……今も伝わってくるからだ。

遠野、と言う子供は頭がどこかおかしい。

あの巫月から数多くの呪具を受け取り、さらに自身の手でそらに使える呪物を搔き集め、いくつものそれらを常に保持し、呪具同士の効力が打ち消さぬように計算尽くされた形で使用し、自らの安全を確保し続けているこの人間は異常だ。

そこまでして自分の安全を確保している癖に平然と、自分の命を天秤の上に載せて見せる。賭け札の一枚として使い、たいして価値も見出していない配当金をせしめようとしている。

今この時も、である。

もし、我が殺す気になればこの子供は死ぬのだ。

なにせ、この者の首筋には我的牙が埋め込んであるのだから。

そう、実はこの者が自ら搔き集めた呪物の中には、この『夕卦キツキの牙』すらも含まれているのだ。

遠野は自らが使う道具を、ちっぽけな鞄に入れて持ち歩く。その一つにこの夕卦キツキの牙はあった。

今、この者はその牙を自ら首筋に抉り込むように埋め突き刺し、その上から絆創膏を貼つていい加減に固定しているのだ。

だからこそ、この者の意思は我に伝わる。この者の『今』考えること思うこと感じる」と、今なにをして、今心臓がどれほど動き血が流れているか、手に取るようになるにわかる。

そして同時に、我がこの者を操るうと思えばそれは容易く叶う。ただの人間に過ぎぬ、遠野を操るメリットは置いておいても、それは可能だ。殺すこともまた容易い。

心臓を止めるように念じるだけで、我的牙は遠野の心臓を潰すだろ。

この人間は自分の今あるすべてが他者に暴かれること、その生殺与奪の権利を握られることにほとんど恐怖を抱いていない。それも人外のモノに、だ。

我を信用している、と言う面がないわけではない。それでも状況によつては、我が自ら敵に回る可能性を認識している。その時には自分が確実に死ぬことも。

いや、仮に信用していたとしても、自分のすべてを他者に知られるに忌避を覚えないのはなんだ？

正直、牙を人間ごとに預けたのは気まぐれだった。

本来、自分の身体の一部を渡すことは、弱みを握らせることに他ならぬ愚策だ。それでも巫月のような者にならまでも、我がただの人間にそれを渡したところで、問題にならぬと思ったのもまた事

実。

不用意と言えば不用意。

だが、それもおもしろいと思ったのだ。これをこのただの人間がどう利用するのか、それに純粹な興味を抱いた。

実際渡してみれば、おもしろい、どころの話ではない。到底笑えなどせぬ。

たかだか、我に自分の考えを読ませたい、などと言つわけのわからぬ理由でこの者は、自らに牙を打ち込んだのだ。そんな愚かで狂つた真似をする人間が他にどこにいよう？

……何の力の持たぬ癖に、狩人に名を連ねるだけのことはある。人の身で、そのちっぽけな個人が人外を狩る身に置くこと自体が、考えるまでもなく愚かにして異常なことで、どこかが狂つていて歪んでいなければ出来ぬことなのだから。

そこまでして、この者が我に示した指示はとても単純明快なものだつた。

要は陣取り、なるほどその通りだ。

遠野は我にこの敵の本拠地、巣の敷地内に、言わば敵の保有する結界内に結界を創り出すことを考えたのだ。

車内で与えられた道具は、ダーツのような形をした金属製の鋭く尖つた杭、その羽のような部分には水晶が装飾されている。それに結界を張るための呪符をでたらめにも巻きつけたもの。

本来の一切を一切無視することを前提とした呪具。便宜上、遠野はコレを『結界針』と呼んでいるが、コレを敷地の角、四方へと打ち込むことで結界を張るための補助としよつと言つのだ。

馬鹿なことを考える、はつきり言つて幼稚だ。

しかし、可能。それも成功させればこの送り犬の群れは結果内から除外される。

その本質が領域、結界による影響を受けやすいものなのだ。

結界の中に結界を張る、その愚考を我は認め、こつして実行しようとしている。その代わり、一切、遠野の身を護ることは放棄して、だ。

遠野の作戦はそれを前提にしなければ成り立たぬ。

私は異形の群れに踊りこむ、我はこの策に乗つた。
遠野と言つ者の、その価値を見定めるために。

私は結界を張るためのもう一つの策を組み込むべく自ら実行した、それは殺戮を広げる順。時計回りに敵の血肉を自らの足跡として、その形作られる円を自身の領土として主張する。

敵の血で染め上げた地を占有する、それは古来より行われてきたこと。

支配のための一つの作法、作業。

その中で一定の間隔で持つて、四隅に結界針を打ち込んでいく。作法を無視した呪具を、むりやり儀式と言つ形に整える。

それは死の舞踏を踏むように、同時にそんな纖細さのない荒々しき戦いを表すよつこ。

……遠野は策を実行せずとも、それで殲滅可能ならばそれで良しとしていた。

それが叶わず、と判断して遠野は口を開く。

「……あまりいい光景じゃないな、そつは思わない？」

敵の将に向け、寝惚けているかのようなたわ」とを。

怪物を殺せぬ、鎧びきつた鉛の弾丸を撃ち込むかのよう

。元の戦闘稼動時間は短い。

なにせ、我はずつと人の血を直接獲ることほぼ絶つてゐるのだ。
間接に間接を繋げたようのものが、毎口の糧。

だからこそ、全力は出せぬ。

長くは戦えぬ。

最強であつても最大ではない、我に出来ることは我が身に着けて
いるものの、その性質を書き換えることくらいだ。

所有権、支配権を持つ意思持たぬ物体の性質を作り変える。それ
以外は少々、骨が折れる。こうして、なにかの補助がなければ術を
使うことも難しい。

それを知つてゐる、遠野の弾丸は強力。

「あなたは幽霊を信じますか
」「え？」

相手の予期せぬ言葉を選び、作られる思考の空白。
同時に僅かに動きの波に作られる、間隔。

我が結界針を打ち込むのは、その隙間。

私はそのタイミングを事前に知り、合わせる。

行き当たりばつたりのよくな遠野の会話は、無造作に見えて実は
一定のリズムがある。

その一定のリズムに無理やり相手を引きずり込む、その理解不能
な狂言回し。

「でも、ぼくだって……好きでそう思つてゐるわけじゃない、そう

いう話。出来るからって、そうしているからって、それが好きなんだけじゃないんだ」

自らが信じてもいないことを、自身に信じ込ませ、次には忘れてみせる。

嘘をつくのではなく、真実を言いつのでもなく、その場その場で自分の本音を造り出す。

そこには黒も白もなく、灰色と言う色さえもない。明るくも暗くもなく、透明ですらない。

目に見えない、使い古され錆び付いた鉛の弾丸。

相手が何かにすがりつとすればするほどに、それは強力な呪いとなる。

苛烈にして壮絶、百を犠牲にして一を与えようとする、凄まじい攻め。私は大神アスカと言う少女の姿を模した、このモノの力量に内心驚嘆し、賞賛を送っていた。

浮かぶ笑みは自然と湧き上がるものの、強者となりうる器に出会えたことに対する喜び、それとこの時代には物珍しいものに対する興味深さ。それも今はない。

もはや、目の前に群れる狼ども知略と戦術を駆くした戦いは存在しない。

「今だけ、……だから。そうすれば

「……君を助けに来た」

ほら、また鈍くなる。

それを残念に思うも、もし同じように猛攻が続いていれば、我的は完全に尽き失われていたに違いない。

敵を軽くいなし、行われる袖に隠された結界針を打ち込むだけの作業。

もつ打ち込む終えた、あとは華やかな終幕を飾るだけ。

その布石を、もう遠野も我も終えている。

退屈な戯曲は終わる。

さあ、今観客は動きを止める。

「いいかい、よく聞いてね？」

遠野がなにを言つのか、それがどんな結果となるのか。
我にはわかる、その言葉がどんなに異常かを。ふざけたもののかを。

「ぼくは君を助けに来たと言つたんだ、大神アスカじやなくて君を」

遠野はそう言つてこいつ、と笑つてみせる。
周囲を埋め尽くす観客達が、その動きを止め我を仰ぎ見る。
そして……。

「チョックメイトだね、ねえ、キッキさん」

私は儀式を完成させらる。

ここに宣言する、ここは我的支配域だと。

「失せうつ、この地は我が貴い受けたりつ！」

それと同時に、敷地内にいた送り犬達が全て消し飛んだ。

*

もつ見える範囲に犬は一匹もいない。

残つてゐるのは、送り犬を操つた本体とも言つべき、彼女が居るだけだ。

犬がいたと言ひ痕跡、その舞い散つた血肉の後すら消えてゐる。

「思つたより簡単にいつたねつ？」

もう軽やかにキツキさんが言つたこと、ぼくは思わず吹き出す。

「またまた、なに言つてゐるんですか。実は結構、ギリだつたでしょう？」

「ん~、いやいやつちはもつとキツイと思つてたよつ。遠野つちがなにもしてくれなかつたらアウトだつたね」

「くれなかつたら……つて、キツキさんはまた思つてもいないこと

を。

ぼくの笑いは苦笑へと変化する。

「ぼくはなにもしてませんよ、楽しく愉快におしゃべりしてただけで」

「それが一番のファインプレーだと思つけどねつ、たぶん他の誰にも出来ないと思つよつ」

ぼくらが会話をしている中で、一歩づつ踏み込んでくる大神アスカの姿をした彼女。

「……なにをしたの？」

その田にあるのせ、もはや驚愕の色ではなく敵意と憎しみ。ぼくはさつときあと回じよつて返す。

「ちょっとしたサプライズ。驚いたかな？」

彼女はぼくの言葉を無視する。

「……わたしを騙したの？」

ぼくは上着で隠してあつた、首筋の絆創膏を剥がし牙を引き抜いた。

痛みに顔をしかめることなく、ぼくは彼女へと近づきながら、その牙を胸のポケットへとしまう。

牙のそのぞんざいな扱いに、キツキさんが複雑そうな表情をした。

「違うよ。ぼくは大神アスカじやなくて、君を助けに来たんだよ」「わけのわからないことを言つて……わたしは大神アスカでしょう。いいから本当のことを言つたら?」

「そうやって人を疑わずにいられないのは、君自身が嘘に塗れているからかな」

「……なにを」

「一つ、君は純粹に大神アスカなのか?」

「一つ!?」

さつまでいた、あの犬達。

あれがすべて、大神アスカの一部なのか?

それを操る彼女は大神アスカだけから生まれ出でた存在なのか?

「いつたい、あれだけの犬はどこから連れて來たんだろうね?」

「なにを言つているんだい? 遠野つち、あれは狼に対する恐怖や畏怖と言つた感情の産物。歩いている時に、ありもしない監視されているような視線を感じると言つた。そんなものの集合物だよ?」

キツキさんがぼくの言葉に反応する。

本気で困惑しているかのような声色、いやいやそれって演技じゃなくてマジなんですかね？

牙でぼくの思考を全部読んでたわけじゃないんですか？

「Iの時代にそんなものがあるわけないじゃないですか。妖怪や怪異は生きているんですよ、時代とともに変化し続けると云つ意味ですね。

Iの時代に狼へのそんな感情は残つてませんよ、もう絶滅したんですね。そういう感情が化石として残つて、どこから掘り起こしてきたんならまだしもね」

「じゃあ、遠野っちはアレはなんだつて言つのかなつ？」

「さあ？ だからそれを聞いてるんじゃないですか。ねえ、あんな大所帯どこのから君は引っ張つてきたの？」

田の前にいる彼女は答えない。

あくまで沈黙を保ち続ける。

「ねえ、遠野っち。この娘、どうするの？」

「いや、だから保護しましょ！」

「本氣でつ！？」

「え？ ああ、もちろん大神さんも保護しに行きますけど」

「そうじゃなくてつ！？」

なんだよ、もつづるさいな。

……いつたいなにがそんなに気に入らないんだ。

その時、背後から放たれた聞き覚えのある声。いや、聞き慣れた声。

「おーおー。……無様だな、人狼」

その声はいつものような軽い調子でなく……。

乱暴でぶつきらぼうな中に、親しみを感じるものではなく。それでも、間違いなくその人は……。

「赤霧先輩？」

「あ？ ああ、なんだ。お前か、遠野」

そう、そこには学生服の上から暗緑色のコートを羽織る、赤霧先輩がいた。

その手には、抜き身の『魔剣』『血汐闊咲』。眼差しは完全に狩人として、刃を振るう時の眼。

「相変わらず、ひどい顔ですね先輩。今日は誰を狩る気ですか」

いつ現れたのか、わからない。
平然と唐突に現れた、狩人。

「お前みたいな雑魚を相手する気はねえよ、遠野」

「……じゃあ残りは必然的に女の子になりますけど?」

「ふん、よっぽどその方が健康的じゃねえか。もつともどっちも人間じゃねえけどな、なあ人狼？ なあ、吸血鬼？」

そう侮蔑するような口調で、赤霧先輩はキツキさんと『彼女』に向けて言った。

『彼女』からは困惑が、キツキさんからは怒氣が伝わってくる。

「ずいぶんでかい口を叩くね、出来損ない一つ！ ……言い直すなら今のおちだけど?」

「吸血鬼如きが、調子に乗るな。お前はただの獲物に過ぎない」

キツキさんは赤霧先輩に向かつて踏み出す。

そしてぼくは説得を諦める、相手が何であったとしても、もうキツキさんは止まらない。

この誇り高く主觀と感情を持つて裁く公平を自らに課す、魔術のアバター化身は決して例外を許さない。

「……一度目だ。死ぬまでの僅かな間だが覚えておくといい、我をこの眼の前で『吸血鬼』と呼んだ人間を一人たりとも生かしたことがない」

「血を啜らない吸血鬼が笑わせてくれるな、今のお前にどれほどのことが出来るつてんだ。弾丸のない拳銃リボルバ、罪人を処刑しない断頭台ギロチンみたいなもんだろ?」

「使い物にならぬ処刑刀エカセキユーシュほどではないな、穢れた血。汚れた朱が我に届くとでも」

あの、もうぼくが空氣ですね。

どうでもいいんで、専門用語を織り交ぜたつぽい会話はやめくれませんか。とりあえず通訳を要求します。

ぼくはため息をつく。

「んじゃ、ここは任せますよ、キツキさん」

「ああ、任せてもらつていいよつ。すぐに終わらせるけどね」

またまた強がつちやつて。

今のキツキさんに赤霧先輩のスペックは無理でしょ?つ?

「援軍は呼んじきますよ、一応ね」

「……ハニちゃんかな?」

「そしたら下手すると、ここにいる全員で殺し合いじゃないですか。バトルロイヤル

それは「メンですね」

「まあ、任せると。いらなこと思つたが」

「ええ、任せられましたよ。一番相応しく相手を呼んでおきまや」

それだけを言つてぼくは彼女に向き直る。

「で、君はびつあるの。まぐに大人しく付いてきてくれる?」

「それは出来ない、言つまでもない」と思つたが?

「だよねえ、じゃあどうする気」

「遠野は確かにこの敷地内での、『庭』での優位性は得たみたいだけだ

けど、でも……」

そう言つて彼女は、送り犬へと姿を変える。

(わたしの家の中は変わらず、わたしの領地なんだよ?)

走つていぐ、一匹の犬。

もちろん行き先は、大神家宅。

彼女は玄関の戸をすり抜けるようにして消えていく。

「そりや、どうだううね。そこまでしだりだつて所有権を主張で出来なこさ」

「ひちはいわば、相手の城を包囲して兵糧攻めしている間みたい

なものだ。

優位っちゃん優位。でも、城はまだ落ちてない。

なのに相手には援軍が来てしまったから、戦線の維持は危つい。

「まあ、追うしかないんだけど」

どつちにしても、キツキさんは他人の家に無断で侵入できないんだから、おいていく予定だつたし丁度いい。

ぼくは大神家の玄関へと向かつ。

鍵は……かかるていない。

ぼくはノブをひねり、扉を開けた。

「遠野つち！」

キツキさんが背中を見せたまま、赤霧先輩に対峙しつつ声をかけてきた。

ぼくは足を止める。

「なんですか？」

「最後に一つ」

「はい」

なんだろう、アドバイスだろうか？

「擬人化には無限の可能性がある！ そう、うちは信じてるつ！」

返答の代わりに、ぼくは玄関の扉を叩きつけるようにして閉じた。

……すこしキツキさんは痛い目をみたらいと想つ。

布石とこいつの墨石（前書き）

一ヶ月ぶりの更新になりました。戦闘描写は苦手で好きじゃないのでどうも、筆が遅くなってしましました。

今回はまたも人外バトルです、いったいどうなることやら。

11.

またわたしは繰り返す。
あの時の出来事を。

やり直すことの出来ない、もつ既に終わってしまったことを。
直さないままに、わたしはやり直す。

また彼女は呟いた。

……まるで凍えているかのよつな、寂しそうな田で。

「あなたがいなければ、気が付かなかつたのに」

それがどうこう意味なのか、まだ私にはわからない。

ねえ、それはやつぱりそういうことなの？

全部、私のせいでこうなつているつてことなんだよね？

私のせいであなたは死のうとしている？

私があなたになにかをしたせいで、今あなたはここにいる？

なら私を恨んでいるよね？ あたりまえだよね？

……ねえ、わたしがいなければよかつたでしょ？

……ねえ、わたしは傍にいなければよかつたんでしょ？

……ねえ、本当はわたしはずつと邪魔だつたよね？

……ねえ、わたしは本当に重荷だつたでしょ？

……ねえ、答えて。わたしがあなたを殺したんでしょ？

ああ、違うか。

わたしはこれからあなたを殺すんだ。

何度も何度も、殺すんだ。

これからずっと殺し続けるんだ。

私はこのあと、何が起こるか、それを知っている。
私は彼女に向けて、一步を踏み出そうとする。
でも、足が動くわけはない。

あの時、私は動かせなかつた事実は揺るがない。
だから、どんなに頑張つても足は動かない。
過去はもう動かない。

彼女は言つ、一切の虚構を含まない声で。

「私はアンタを許さない」

そうしてわたしに決別するかのように背を向ける。
もうわたしなんて要らないと、もう背負つてなど行けないと。
おそらくその目が見つめるのは、自分がずっと暮らしてきたこの
町。

わたしといたこの町。

ただその目が、どんな風にこの町を映し、どんな想いを抱いてそ
こに立つているのか、わたしにはわかりようもない。

だから、彼女はここにいる。

わたしが理解出来なかつたから、彼女はこれから死ぬ。
わたしが彼女を殺すんだ。

それでも、わたしは。

どんなに罪深くても、何百何千何万やり直しても同じなのだとし

ても。

わたしは。

その時、一步を踏み込もうと僅かに彼女の重心が傾いた。それに気付いたわたしは、頭の中が真っ白になつたま。

『何か』を叫ぶ。

反射的に『何か』を叫ぶ。

それに気付いた、彼女はゆっくりと振り向く。その表情は見る前から知つている。

「アスカ」

涙が溢れそうな目と、溢れんばかりの感謝と喜びに満ちた笑顔。わたしが今まで見た中でも、最高だつた笑顔。

わたしが今まで見ることの出来なかつた、引き出すことの出来なかつた本当の。本物の。

止められない。

私は手を伸ばせない、だつてそんな顔をされたら。まるで、私が……。

彼女は謳うのだ、そう感謝を。

「ありがとね」

そう、自ら心の底から望んでそうするかのよう。

初めて鳥が羽ばたくように、もうこの大地になど用はないというふうに。

力強く一步を踏み出し、そのままの笑顔でゆっくり崩れ落ちていく。

わたしは手を伸ばせない。

彼女を掴むことが出来ない、そうすれば助かつたかもしれないのに。

だつて、彼女が……。

彼女がつ！

「手を伸ばしてっ！」

え？

「掴むの！ 勇気を出してっ！」

わたしは自分の後ろからそんな叫び声を聞いた。

どこまでも必死な、その声を。

わたしはそれに振り返ることも出来ず、彼女が墜ちていくのを見る。

ああ、また、だ。
また……だ。

そして、またわたしは繰り返す。

あれ？ なにかがおかしい？

なにが、だろう？

でも、わたしは……意識が遠くなるのに身を任せた。

*

ぼくは一步づつ、家の奥へと歩みを進める。
家の窓と言う窓はすべてカーテンによつて締め切られ、明かりは何一つ灯されてはいない。朝にもかかわらずかなり暗い室内。
ぼくはその中を、一人……いや、二人で進んだ。

そう、今ぼくは一人じゃない。

ぼくの背後を続くよう歩む、女の子。

大神アスカの一重身。

左腕に痛々しい、血の滲んだ包帯を巻いたこの娘。例え、彼女がぼくの味方でなく仲間でなく、その力が状況になんら変化をもたらさない程に微少だとしても。

ぼくは一人じゃない。

さて、ぼくはどこまでやれるのだろうか。

決して、幸福な結末が想像出来ないけれど。もし、ぼくたちの未来が明るいものでないのなら、ぼくたちが生きている価値がないのだろうか。

その答えは、もう出している。ぼくはそれでも今、生きているという形で。

さあ、悪あがきを始めよう。

残酷な終わりが来る時間を引き延ばそう、この現実に解決なんてないし、今さら全てをなかつたことになんて出来ない。

だいたいぼくは正義の味方じゃない。みんなを幸せになんかしない。

どこまでもどこまでも先延ばしにして、なにかがどうにもできないうらいそれで歪んでしまったとしても、それでも生き続けよう。

大丈夫、ぼくはそれでも一人じゃない。

誰も彼もを道連れに、地獄よりも最悪な世界を鼻歌交じりに闊歩しよう。

みんなみんな一緒なら、どんな道のりも悪くない。

ぼくはメールを打ち始める。

どうにもならないこの状況、とりあえずカードを切り始める。

切り札はまだ、それはぼくのためにとつておこづ。

メールだけで十分のはずだ、通話はしなくていいだろつ。
今の状況なら、それだけで食いついてくる。来ないのならそれまでの執着と想いだつたつてことだ。それなら、ぼくが一緒にいる価値なんてない。

さてさて、まずは運命を変えてみよう。

行き止まりから、崖底にある暗い泥沼へ。

もう先がないレールから、もう少しだけ長く続く未完成のレールへと乗り換えよう。

ふふつ……キツキさん、毎回思うんだけど。

貴女が読んでいると胸を張つた、そのぼくの思考はほんとうにやれで全てですか？

だとしたら大笑いです、今あるぼくの全てがその手のひらのうち？

『今ある全て』ならば、それは『全て』には不十分です。

全てとこのはね、キツキさん。

現在のだけでなく、過去も未来のも含めるんだよ、キツキさん。これからぼくがなにを考えるか、読んでいるのかな。キツキさん。これからぼくがなにをするのか、わかっているのかな。キツキさん。

人の全てを総る、なんて不可能なんだよ。思考する存在である以上は。

メールを打ち終え、ぼくはゆつくりと振り返る。

虚ろな闇を眼にぼくを見つめる。どこまでも付いてくる、共に歩むモノ。

ぼくはそれに笑いかける、その光景を母を慕う幼子を見ているかのように微笑ましく思い。

ぼくは手を伸ばす。

無反応なその女の子。

ぼくは手を伸ばす。

それでも動かない、その血まみれの右腕。

ぼくは手を伸ばす。

光のない漆黒の田は物言わぬ。

なんの想いも感情も伝えてはくれない。

じゃあ、ぼくが話そう。

じゃあ、ぼくが伝えよう。

ぼくがなにを考えて生きているか。

ぼくがなにを想い生きているか。

ただの人間でしかないぼくが、ただの人間のまま、どうやって生きているのか。

頼りない小さなその手。見ているだけで、痛みを幻覚してしまい
そうな、目を背けつむりたくなるようなその手。

それをぼくは握りしめた。

一方的に手を繋いだ。

「一緒にいく?」

返答はない。

それでもぼくは笑う。

ぼくには道連れが少なくとも一人いる。
なら、どここの地獄も怖くはあるまい。

ぼくは沈黙したままのその娘に語りかけながら、歩みを進めた。

決して離そうとしない固くしっかりと握りしめるその手は、彼女ではなくぼくの方の手だった。

*

有卦キツキは白衣の袖を再び硬化させた。

鋭利には程遠い、鈍く重たい鈍器のように。

鉈か斧、固い物体を勢いで叩き割る物へと、その性質を変化させた。

「それが全力か、魔術の化身マジックアバター
「これで十分だ、朽ちた処刑刀エクゼキュー・シュー」

そう言い放ち、有卦キツキは一步を踏み込む。

人の身には成し得ない、遙か遠き一步。

人の十の歩みを、軽々と彼女は一倍二倍と超え、たつた一步で踏み込んでみせる。

その距離を移動する勢いのまま、振るわれ叩きつけられる右腕。

「たかだか化け物が、人に勝てると思つなよ

それをいなす、刃。

まるで金属同士がぶつかったような衝撃音は、キンッと小さく心地よく響いた。

自らが放つた大振りの一撃が空撃つた感覚に襲われ、上半身を前のめりにバランスを崩す有卦キツキ。

「五分と五分の同じ条件ならば、人間の方が貴様らよりも圧倒的に上だ」

いなした刃は返される。

容赦なくそれはなぎ払われる。

それは昔から行われてきたことの繰り返し。

荒ぶる怪物達に対し、人が容赦を加えたことはない。

目を見開く、有卦キツキ。

反射的に頭を庇つみつに左で覆つも。

「ぐつ

硬化させた袖が僅かに、刃を逸らす。

左手の平と指の肉、そして骨がそがれ。額の肉が刃に削りとられ、遅れて出血する。

有卦キツキにとつて、力の源である血が失われる。

「まだだ」

赤霧のどこまでも冷静なその声。

しかし、どこかそれは狂氣と熱意に彩られている。さらりと含まれるのは踊るよみうに弾む喜びと……。

ほんの僅かな期待。

有卦キツキは身体を反らし、宙で身体を倒し回転せしむるよみうに背後へ飛んだ。

それを追う、一閃。

物理強化された白衣はそれに触れるも、ぎつぎつ通すことなくその役目を果たした。

有卦キツキの目は捉える。

赤霧 咲斗の目を。

遠野が狩人の目と評した、その冷徹なまなざしを映し返す。

嗤つている。

赤霧咲斗は嗤つてている。

化け物である有卦キツキが戦う光景を。
嘲笑しているのだ。

羽をもぎ取られた蛾が羽ばこつとする様を見る。
羽ばたけるはずもなく、それでもなお蠅燭に灯された火を目指そうとするその光景を。

惨たらしい死に向かつて、まるでそれが希望であるかのように無意味に足搔く、無知で
白痴な虫けら。

今のは有卦キツキに、赤霧咲斗はそれを重ね合わせ見てている。

「巫山戯るなつ！」

穿つような怒声。

宙に回転する一瞬に有卦キツキはそれに至り、同時に反撃した。
その体勢で殴ることなど出来はしない。

そこから射たれるのはつぶて。

左の手から、小さな石のような塊が赤霧咲斗のその目に向かつて
放たれる。

その塊は先ほどそがれた骨と肉を、自らの筋力によつて凝縮した
物体。

自らの身体の一部であるが故に、それもまた呪物。

肉は血の塊。

血は我が力の源なり。命なり、祈りなり。
血塊よ、『焼き尽くせ』。

念じられた通りに、有卦キツキの身体の一部はその役割を果たす。全身が魔術の触媒となりうる、彼女だからこそできる技。

その瞬間、血塊は破裂する勢いで自らの敵を焼き尽くす。はずだつた。

「甘い」

振るわれる三度目の刃は。

巨大な烈火の炎を纏い、その寸前につぶてを焼き払い。

そのまま焰は意思ある大蛇の如く、有卦キツキに襲いかかつた。

落下の中、右手を地につき怪力によつてさらに後方へと飛ぶ。炎の大蛇をどう退けるか。

その判断は速い、白衣をつかみはぎ取る。

足が着地する前に、術式を描き成立させる発動まで1秒とかからない。

代償は不要、その白衣は既に契約が成立したもの。

身に纏っている物は、全ていつでも自らの身代わりとなりえるよう、その準備が成されている。

着地と同時に創り出されるのは、白い魔物。

大きな口と黒目が存在しない、顔だけの怪物。

それは巨大な大蛇をいともたやすく飲み込んだ。

その魔物が燃え出すような気配はない。

思わず感心したような声を漏らす、赤霧咲斗。

「……ほ、思つたよりやるじやないか、もつ終わると思つていたけどな」

「我を舐めるのも大概にするんだな、失敗作」

「だが、その失敗作に随分追い詰められているようだな？」

それを聞いて、有卦キツキは愉快な冗談だと高笑いを始める。

「お前にはそう見えるか？」

傍らに浮かぶ、顔だけの白い魔物。

鼻がなく、白目と口だけのその存在は自らを創りだした主と共に、空気を震わせることがなく笑う。

「次の一手で終わりだ、貴様はその出自に相応しく今度こそ焼却処分にさせてもらひ」

「なにをする気は知らないが、自らの手の内を晒すなんてな。愚かしいにも程があるぞ、どこまでもお前達は人類の上にいる存在だと思つているのか？」

「ふん、人類？ 笑わせるな、貴様は人ではあるまい。人でもあらず、化け物となるにもなれない出来損ない。まだ半妖の方が真っ当だ」

その言葉を鼻で笑う、赤霧。

あまりにも場違いだと、そう一笑にふす。

「俺が人間かどうかはどうでもいい話だ、少々特殊なだけの人間。それ以上の力は保有していないと言う事実だけが、闘争において持つべき視点だろ？ その点で言えば、俺はお前らよりも人間と戦う

方がまだおもしろいね

「なんだと？」

「誕生してから600年の月日が経つとも、この程度。 実に
がっかりだ、人はその間に闇という闇を照らすだけに、 焼き付く
さん程に研究と研鑽を、その種をあげて重ねてきたといつのに、お
前達は未だここまで化け物止まりだ」

「……黙れ」

「お前達はいつまで経つても変わらない、次々に生まれ出でる癖に
成長もなくそこで終わる。生まれた時から死んでいるようなもんだ、
生きている理由なんぞ『えられた性質を全うするだけ。それを生涯
を賭けて覆すこともないし、そうしようともしない』

「黙れっ！」

「哀れだよ、化け物。お前達はどこまでも化け物にしかならない。

……人間とは違つてな」

「……イルキントウシユ、殺せつ！」

白い魔物にそう呼びかける有卦キツキ。

主の声に呼応するように、魔物はその姿を瞬く間に変えて見せる。
その姿は真っ赤な炎の塊、強大な熱気が風となつて周囲に吹き荒れ
る。そして、獰猛な敵意を両の眼光から叩きつけるように赤霧に浴
びせた。

同時に有卦キツキはそのカジュアルな服の性質と形状を変化させ、
袖から鎌のような刃を出して見せる。

赤霧咲斗は呆れた、とばかりにため息を吐いて見せた。

「随分と『テタラメ』な能力だ、確かに夜間に勝負を挑めば勝てなかつ
たかもな」

「今なら勝てると言つのが思い上がりだ、狩り手えつ！」

焰の化身と化した魔物、イルキントウシユと呼ばれたモノ。 その

主である有卦キツキは同時に赤霧に向かつて駆けた。

さらに有卦キツキは自らの姿を透過させ、その動向を悟られづらくなる。

正面から迫る、炎の塊は赤霧が出して見せた大蛇よりも圧倒的な火力を纏っている。先ほどのように、かき消すことは不可能。影に隠れるように進む、有卦キツキはもし赤霧咲斗がイルキントウシユなんらかの対応を見せたとき、その隙を突くように伏兵としてあつた。

現在、有卦キツキが戦闘を演算した中で出来る最高の火力を持ち得る戦術。どちらの攻撃も直撃すれば、簡単に赤霧を殺せる。

そして、これ以上のことは今の自分には出来ない。と言つ限界でもあつた。

「源は魔血解放、役は属性反転・極大解釈、果は烈火炎刃」フレイムタン

赤霧は咳いていく。

自らの親指を、剥き身の日本刀の姿をした魔剣『血汐闕咲』に擦りつけ、自らの出血を促す。

魔術を扱うのに、詠唱が不可欠なわけではない。

だが、詠唱すると言う行為そのものが、自らの成したい事柄、望みを言葉によつて形にしてみせると言つことが、儀式として成立しうる。

誰にでもなく、自分への宣誓。

これから自分はこれを現実にしてみせる、と言つ宣言。

それこそが儀式。誰もが行え、また行つてきた言葉という魔術。

「……行くぜつー」

迎え撃つ、と言わんばかりに魔物とその主に向かい走り出す赤霧。暗緑色の「一トはまるで、マントのようにはためく。

その走りは飛ぶようになると、言う形容詞が相応しいほど、の凄まじい速度に見えるが、それは一歩間違えれば五体がバラバラになりかねない危ういもの。

あくまで人の身程度の身体能力しかない彼にとって、それ以上の力を振るうことは大きなリスクだった。しかし、そのリスクを負うことを喜びとするように、その表情に浮かぶのは笑み。今日の前にいる敵を食い破らんとする獣のような笑み。

それに相対する有卦キツキとその従者である魔物が浮かべるのは、自らに愚かにも相対した出来損ないに対する嘲りと入り交じった強烈な怒り。

人にさえなれないモノ如きが、絶対の王者である自分に牙を剥いたと言う事実に対する憤怒。

その両者がぶつかる。

火炎を纏つた刃を魔物に赤霧が振るい、赤霧に食らいつくように口を見開いて迫る魔物イルキントウシユ。

影に潜む、有卦キツキは己の勝利を確信した。

「消え失せろ（解放しやがれ）」

赤霧の一聲。

共に、急速に減退しついに消失するイルキントウシユの焰。

有卦キツキが創りだした魔物、イルキントウシユの能力。

それは自らの許容量を超えない分だけのあらゆるモノを飲み干し、対象の性質を自らのモノにし、さらに予め主によつて与えられた工

ネルギーを上乗せする能力。さらに言えば、その許容範囲は川を飲み干すとも言われる恐るべきモノだ。

しかし、その飲み干せる回数は一度きり。再び、飲み干すには自らが飲んだものをはき出す必要がある。

赤霧のしたことは単純だ。

イルキントウシユの焰を、自分のものであると即見抜き、最も効果的なタイミングでその炎をその源へと……つまり、触媒となつた自分の血へと戻したのだ。

ほどんど無力な、元の白い姿になつた魔物。
その刹那に、振るわれる刃。

「なつ」

なんの抵抗もないかのように、その大きなイルキントウシユの身を貫通する猛る炎と刃。

それはそのままの勢いで、有卦キツキへと振り下ろされる。

両腕で刃を振るう赤霧の身体からは、赤い鮮血のような霧状の煙が上がる。

人間には反応し得ないその速度に対し、それが予測出来なかつたのにも関わらず、有卦キツキは反射的に両手の鎌と化した刃で護りに入る。

しかし、それもたいした意味をなさない。

言外に密かに激突の間際に発動していた魔術は、鮮血沸騰。

その血と引き替えに、人を超える身体エネルギーを得る魔術。

魔術を同時に一重以上で組み、発動する多重術式は本来なら不可能と言われるが、魔術師としては2流、時に3流以下と言われる彼

デュアルマジック

オーバーブラッド

には可能だつた。

赤霧は喉の奥から全身から絞り出すよつて叫ぶ、空氣を震動させる絶叫。

「うううううあああああ！」

単純な加速と力による一撃と炎の火力。

有卦キツキの華奢な身体は押しつぶされんばかりの勢いで、地面に叩きつけられ、発動していた透過の魔術が解除される。

ブチブチブチッと筋肉の纖維がちぎれる音が、赤霧の両の腕から響く。

同じく奏でられるのは斬撃の音ではなく、地面を揺らすような衝撃。

振り抜かれる刃。

刃を振りぬかれたその瞬間、即座に立ち上がる有卦キツキ。その頭を赤霧の額へと叩きつけカウンターを行つ。

身体を灼かれ、両腕を完全に破壊された有卦キツキは、自らの身体をあえて地面に押し込めるこことによって、その攻撃を凌いだ。

その状況下でもなお、戦う闘志と反撃する思考を忘れない有卦キツキ。

それは長き戦いの歴史とも言つていい、今まで存在してきた経験による反射動作。

「ふやけんなあつ！」

舌打ち混じりに叫ぶ赤霧。

ぶらんと腕が垂れ下がる、有卦キツキはその足を振るつ。

血は肉、肉は血なり。

事前に準備された魔術によって、隙なく自らの攻撃によって負った筋肉纖維やダメージを回復しながらも、魔剣を持たぬ左腕でその蹴りを受け止める。

当然のように碎かれる腕。

赤霧は自らの身体を守るために、背骨などの戦闘の続行に重要な骨を守るために、あえて腕の骨だけを碎かせた。

……それに痛みはない、赤霧は魔術を行使するために自らを極度の興奮状態、狂的覚醒させ、常人ではなしえない集中力を得ている。それは痛みなど自分が不必要と判断した感覚を一切麻痺させるものだ。

赤霧は戦うために元から、その肉体を魔術や魔薬ボーションによって改造しているが、それでも扱う魔術による強化には本来痛みを伴うはずなのだ。

場合によっては死にさえ至るような痛みを。

腕を楯にし攻撃を凌ぎ、赤霧が繰り出すのは魔剣『血汐闕咲』の刃。

しかし、その烈刃にはもはや炎はない。

赤霧咲斗に強力な炎を維持する才能は存在しない。

ただ、既に解かれつつある鮮血沸騰オーバーブラストによって発生した腕力によってのみ振るわれる刃。

剣術そのものに関して、卓越した技術を持つわけではないその剣撃は。

いつも簡単に経験という一点に勝る、有卦キツキが見切り。

自らの足先を蹴り出すように使って、刃の裏を掬うようにして捉えて、その圧倒的な勢いを利用して地面にめり込ませた。

身体を半回転させる有卦キツキ、深く深く、地面に突き刺さる魔

剣。

赤霧咲斗が持つ、唯一の武器らしい武器といえる血汐闕咲の刃は封じられた。

……そり、刃は。

赤霧咲斗は平然と魔剣を手放した。

何一つ、問題ない。

魔術の行使に、魔剣を持つことは重要ではない。魔剣と自分との間に血を付着させたことによって、繋がりがあると解釈出来る事実だけが重要なのだ。

強いて言うのなら、術者赤霧咲斗と魔剣との関係としての距離が重要なのだ。

相手が得物を失ったのを好機とし、全力で連撃をたたき込もうとする有卦キツキ。

だが、それは足技のみに限定される。

近接した戦いを得意とする赤霧に対し、いくら歴戦と言えどもそれは不足。

足に加速がかかる前に、その足の膝に叩きつけられるのは赤霧の拳。

ただの拳ではない、光を反射しない真っ黒に変色した腕による打撃。

素手の攻撃のはずなのになぜか鈍器のように重く強烈な一撃、それを連續でたたみ込む赤霧。自分が攻撃される前に潰す、怒濤の乱打。

膝を破壊された有卦キツキは、その勢いによって足を戻さざるを得ない。致命的な隙。

嵐のような乱撃にバランスを崩し、その瞬間撃たれた。

ただの左によるストレートに見えた。
それが左胸に向かつただけのように。
しかし、直撃と同時に火薬がはじけ飛ぶよつた破裂音。

無様に有卦キツキは転倒し……。

とうとう立ち上がることはなかつた。

*

朦朧とする意識の中、有卦キツキは赤霧咲斗を見上げる。
回復……は出来そうにない。
左胸に突き刺さる、3つの異物の感触。
それは小さな、杭のようなもの。

時間さえあれば、手足はどうにかなるかもしねり。

今すぐには血が足りないが、時間さえあればどうにかなる。

しかし、自分にはもう無理だ。

杭を抜かない限り、その部分は回復出来ない。

ヒュー、ヒューと呼吸音だけが聞こえる。

（ああ、うちもここまでかなあ……）

地面上に刺さる血汐闕咲を平然と抜き、ゆつくりと近づく赤霧咲斗。
もう身体から赤い霧が進ることはない。

「意外にやられたな、俺も」

そう笑いながら魔剣を鞘に收め、微妙に曲がる左腕を音を立てな

がら強制していく。

「どうした、化け物？ すっかりせつとの勢いがないだろ？」「…………」「…………」

「おい、いいからなんか話せよ」

腕を強制し終わつた赤霧はなにか丸薬をいくつか口に放り込む。それをかみ碎くようにして、飲み下し。有卦キツキの左胸を踏みつける。

「ぐ……かはつ……」

「」の状況下でもなお、有卦キツキは誇りをそのまま無くさない。それをまったく気にせず、足の裏をすりつけるようにして出血する傷口を開きのぞき見る。

血を源にする有卦キツキは、自らの血の状態をある程度を制御出来る。止血は意図しなくともなされるものだが、死の寸前では違つた。

「」のまま放つておけば、彼女は死ぬだろ？
それに満足がいかない、よつに呟く赤霧咲斗。

「ああ、駄目だな。一撃で殺すための技なのに、全然出来てねえ。
マジ、クソだな」「なに……を……？」

有卦キツキの目に疑問の光が浮かぶのを察する赤霧。
自分の言葉へ返答へ返答が来たことに笑顔を返す。

「いやな、お前も氣になつてんだり、自分がなに喰らつたか」「…………」「…………」

「さすがにしゃべれねえのか？まあいいが、俺は今までめえら
みたいな化け物を殺しまくってきたわけだ。その中には当然、吸血
鬼殺しみたいな技術テクもあんだよ」

「……え……お……つ」

「なに言つてんのかわかんねえよ、化け物。……でな、今俺が余興
に見せたのはパイルバンカー炸裂杭擊ワイルバンカちつて言つ、まあ、遊び半分の技でよ。撃つ
たら、自分の拳も逝くつて言つ笑える技なんだがな」

パイルバンカー……火薬式の杭打ち機。

……有卦キツキは聞いたことがあった。

吸血鬼への止めである胸への杭打ちを、現在では杭と槌ではなく
効率よく機械で行う場合もあるのだと。

まるで釘打ち機で作業をするかの如く、動きを止めた吸血鬼へ順
番にとどめを刺していく。

抵抗する暇もなく、一方的に虐殺アンデットされていった不死者達。
泣き叫ぶ、女子供の姿と自我を持った不死者アンデットを想像して、有卦キ
ツキは怒りを胸に抱いた。フェアでない、一方的な殺しの光景。

「詳細は省くけどよ、俺の人体の部品を生かした理屈でやる『硬化』
と『火薬生成』。んで、同じく俺の隠し武器でもある『金属生成』
の形状指定との組み合わせなんだが……おおざつぱなやり方は今のは全部同じなんだけどな」

赤霧の右手にある、なにか小さな金属製の塊。

それは杭と言つより、暗器武器である『寸鉄』と言つ道具に酷似
していた。

それを見せつけて、説明してみせる。

「とにかくこうこうものを作つて、持つとくわけだ。んで、指に挟
んで単純に爆発させて、殴る勢いと爆発による推進で撃ち込むと。

簡単だろ？ てめえらみたいなタイプは心臓止められたぐらいで死ぬんだから、まあ、当りや一撃必殺即死つてわけだ

そこまで説明してばつが悪そうに頭を搔く、赤霧。
つまらない恥を搔いた、と言わんばかりに。

「ただ、その爆発で腕の表面を硬化させていても、中身の方が無事じゃないし？ 今回は拳の骨にひびは入つただけだったから楽だけどよ、肝心の当たりが悪い。

ほり、狙つた場所に寸分違わず殴るなんて、フツー出来ねえだろ。俺はカシンフリー映画の主人公じゃないんだからな、ジャッキーみたいにはいかねえさ。しかも、爆発の衝撃で結構、ずれるんだよ。そこまではどうじょうもねえ、な

巫山戯た、事を抜かすガキだ。

有卦キッキはそう毒氣づいてするも、氣の抜けた音が口から出るだけなのを確認して、諦める。

じつや、もつ撃発する」とも罵声を浴びせる」とも出来ないらしい。

「さて。さてさて？ そろそろ止めと行こうか、俺、よく余計なおしゃべりをして相手を逃がすんだけじよ、今回はいいだろ。アントダつてもう抵抗どころか身動き一つ出来ないしな

作りだした、その小さな金属製の杭を指に挟み、持ち直す。

「今度はきつかり殺してやるからよ。なんか言い残すことば？

ゆつたりとした動きで、しゃがみ込む赤霧。

「ああ、しゃべれねえか。うるせえのは嫌いだが寂しいもんだな、アンタなら余計な命乞いもしないでさつと覚悟を決めて、殺せつて言ってくれんだろう?」

顔を有卦キツキに近づけ。
そのままを覗き込む。

「悪くない、まだ俺を殺したいって田だ。……そういうのは嫌いじやねえんだ。殺しあいつてのは殺して殺されてなんぼだろ?」

やうやくじが当然のよう語りかける、赤霧。

「やうじの覚悟がない奴とはやつあいたくなえんだよ、興醒めするからな」

少しでも、動けるのならその鼻を食いつかせつ、睡でも吐きかけてやるのにな。

有卦キツキはやう思いながら、赤霧を睨み付ける。
最後の一瞬まで田をつむるつもりはなかつた。

「OKOK、思つたよつは悪くなかった……前座にしてはな。これで一人田だ……いや、一匹田だな」

やうじつて、その手を改めて有卦キツキの左胸に添える。
いやにやと笑いながら、赤霧咲斗はもう一度必殺であるべき一撃を穿つつもつて。

「んじや、一知様いあんな~い。お先に~」

その時だつた。

赤霧の目がこぼれ落ちるのではないか、と言つ程に開かれ。突然、飛び退いてそのマントのような暗緑色のポートを翻し、楯としたのは。

飛び退いた赤霧を追つよう現れたのは、真っ赤に猛る大蛇。

「くわー！」

全身を炎に包まれる赤霧は、そのマントで防ぎ。こともたやすく、炎を完全になぎ払った。

足音。

一步一步、近づいてくる足音。

有卦キツキはそちらを向いてつとするが動けない。

（ 誰だ？ ）

覚えてはいた、遠野が呼ぶといつた援軍。

しかし、期待はしていなかつた。巫月が来るはずはない、ハミを呼ぶのでなければ後は事務所に戦える人材はいない。

肝心な残りの一人は、今こうして自分と敵として対峙して……。

「おーおー、そのポートまで俺と同じ仕様かよ。狡くねえか？」

「の声は……。

いや、そんな馬鹿な。

「まあ、血汐闕咲まで持つてんだから、それくらいの装備は当然か。そっちの方がコピーしやすいだろ？」「のポートは別に俺の専売特許じゃねえしな」

視界の端に現れたのは。

暗緑色のコートと、それに合わせた帽子を被る学生服の男。

日本刀の姿をした魔剣、剥き身の『血汐闇咲』を持つ、もう登場するはずのない人物。

赤霧咲斗、その人だつたのだから。

布石とこひのめの置石（後書き）

色々、連載を抱えてはいますが、出来る限り頑張って執筆するので気長に待っていただけすると嬉しいです。

仕返しといつ名の話し方（前書き）

更新待つててくだわった方、ほんとうに申し訳ないです！
一ヶ月以上も遅いくお待たせしてしまいました。

12.

ぼくは階段を上がっていく。

虚ろな窪みの双眼の、彼女の手を引っ張りながら。

さて、そろそろ援軍は到着しただろ？

赤霧咲斗に絶対に対抗出来る現在唯一の、保有戦力。

……赤霧咲斗、本人。

たぶん、この時間だと学校にも行かずに事務所にいるんだろう。最近はずつと夜出歩いていたようだから、日中は動きがあるまで休んでいるんだろうし。

この所、事務所で見るたびにソファーでなぜか寝ていた赤霧先輩。その割に、日が暮れる頃にはいなかつた。

もし、巫月所長が今までの事件を全てを把握していたとして。その情報を掴み、ぼくの前ではああいう風に装つていただけだとして、ぼくにはあえて情報を流さなかつたのだとして。

当然、赤霧先輩がなにも知らない訳がない。むしろ、こんな事態真つ先に嗅ぎつけて、身動き出来ない巫月所長と共に色々やつてたんだろう。

言われてみれば、そんな節がなかつた訳じゃない。と言つより、あつさりしきっていたのだ。あの一人が、こんな街全体どころか、世界でも有数の現象が起きているらしき状況で傍観？……ありえない。

ドッペルゲンガーがどんなに『ありえない現象』なのか、それを

説明したのは他ならぬ巫月所長だ。その希少性を知っているはずなのに、まったく興味がないなんておかしい。

「知的好奇心を失った時、人は死んでいるのと同義だ」

ぼくは呟く。

この言葉を言った、自分の上司のその顔を思いながら。

しかも、だ。

非生命体の活動が沈静化し、一区切り付いたタイミングで発生したしたあるこの事件。

その事件と今回の件がなんの関連性もないと言えるのだろうか。
……次から次へとなんの関係ない事件が、こんな退屈な場所を舞台として起こるのが現実だと。

馬鹿を言つてはいけない、それはどこのドラマだって話だ。ぼくたちは名探偵でもなんでもない、ぼくたちを中心には無条件で偶然事件が起こる訳はない。

……今までのこと全てが誰かが画策していた、と言う方が納得がいく。

だとしたら、巫月所長がなにもせずに傍観を選ぶのは不自然だ。

もちろん、これは飛躍した発想なのは自覚してる。

そんな誰かがいると決まった訳ではない、だが、その可能性があるかもしれない、と言つ時点で情報を集めるべきなのだ。

先行きが不透明なら、それを知りうとするのが巫月所長の役割だ。あの人は化け物と人間の境界線に立つ、調停者である人間なのだから。

それを前提に、さつきの赤霧先輩を見た上で考える。

そこから導き出されるもの、赤霧先輩が連日連夜出かけていた理由……それはこの事件の捜査か、あるいは自分の『一重身』を狩るためにだつたんじやないか、と。

ぼくは後者の可能性が高じようと思つ、狩りの対象を探すには空いての活動時間に動くのが手つ取り早い。もちろん、それは相手のアドバンテージが高い危険行為であるわけだけだ。

……と言つても、赤霧先輩は本当に『ドッペルゲンガー』に関してはあまり知らなかつたんじやないか。とは思つ。あれは演技でもなんでもなく、純粹な反応。

だつて、さすがにいくらなんでも、殺したら自分も死ぬつて言うのに相手を殺そつなんて馬鹿な真似はしないだろ？

*

俺は田の前の自称、赤霧咲斗を観察する。

なるほど、武装は同じだろ？。なぜかありえないことに血汐闊咲までも。

顔は、まあ世間に嫉妬されるほどに良い男だ。ただ惜しいな爽やかさが足りない。俺の次ぐらいの順位に甘んじておけ。

……つて、容姿は別にいいんだよ。問題はその実力だ。

万全な状態でないとは言え、魔術の化身であるキツキがここ今までやられたつーことは、本氣でそこそこやれるんだろうな。

それも、喰らつた技は炸裂杭打ち。こんな趣味丸出しの馬鹿技やるのなんて俺くらいだよなあ。

本氣で、こいつは俺のドッペルゲンガーなワケか？

「しかしそれも奇妙だな、自称『一重身』

刀の背で軽く、肩を二三度叩きながら俺は言ひ。問いかけると、うよりは、独り言を呟くよう。元々の自分の思考を言語化し、整理する。

これはいつも俺が冷静するためにやっていることだ。精神制御のための儀式。だが、冷静であることは、思考が冷却、よつするに『冷めている』ことを意味しない。

自分自身を見失わぬ、常に自分であること。すなわち、『覚めている』ってことだ。

「そもそも自分と同じ存在と言つがな、そんなものはありえないだろ。人に限らず、全く同じ物体が座標の違う場所に同時ににあるなんてのは絶対的な矛盾だ。前提が論理破綻している。なぜなら、別の身体を持つてしまった時点でそれは異なる時を刻む別人だからだ」

時間は相対的であり、絶対ではない。

その個体の現在位置にすら影響される程に時間つてのは曖昧な存在だ。それも宇宙と地球、なんて規模どころかこの地球のどこにいるか程度のレベルで、だ。何をどうつくりつたところで、環境や個人差、身体的精神的状態つてのも含めれば、それの身体が老いる速度はけして同時にりえない。

同じ人間は同時に複数存在できない、存在した時点で別のモノなのだ。

仮にこのドッペルゲンガーの現象が魔術によるものだとしたら、それは成立不可能なモノになる。破綻した魔術は構築した瞬間に崩壊するはずだからだ。

崩壊しながら再構築され続ける魔術式はあっても、崩壊 자체は避けられない。

「なら、お前はなんなんだろうな、自称一重身」^{おれ}

俺はもう一人の赤霧咲斗に観察するよつこ、あるいはただのいしこを見るよつこ、足元から頭のてっぺんまで見定める。それに対しても帰ってくるのは挑戦的な眼光。

へえ、こいつ、俺に喧嘩売つてんのか。たかだか、俺から分化しただけの存在の癖して？

……嘗めてんな、マジで。

いいぜ、別に。俺はよ。

同じ条件で戦えるつてなら、楽しくやれるだいだ。

「まあ、アレだぜ。五分と五分の戦いつてのはまともにやりやあ滅多にない話だぜ、現実的にはそんな戦闘は存在しない。なあ、ドッペルゲンガーあ？」

俺はそう言いながら、敵に、俺と同じ顔で全く同じ格好をしたヤツに近づく。俺のドッペルゲンガーと言ひ言葉にわずかに眼を見開く、キツキ。

おいおい、今氣付いたつて言つのかよ。ドッペルゲンガーつてことに？

いや、俺なんか最近知ったんだけどよ、その単語。

もし、俺と彼奴に違いがあるとすりや、俺はコートに合わせた色の帽子を被つてるつてトコと、俺はまったくの無傷で相手はそうでもないつてトコだ。

俺は表情は勝手に笑みを浮かべ始める。

……おもしろいな、田の前のこいつは消費した血液を回復できていない。なのにも関わらず、俺自身はほとんど血液を消費した状態

にない。

こうなるとドッペルゲンガーが保有するダメージ共有の[定義]に、血液は含まれていなくなる。

ふむ。なら、失血死は狙えるな。

「でも、めんどいんでその首跳ねるけどな」

地面に寝転がってるキツキからの田線がきつくなる。

ああ、コレ。見たことある眼だ、こいつ馬鹿か、みたいな眼だ。なぜわかるかって？ よくこの田で見られたからだよー。

「なんだよ、キツキ。ここまでされてんだぜ？ こいつ生かしどけないだろ、今すぐ殺そうぜ？」

「…………つ」

「はあ？ どう考へてもオレの方が強いだろ？ が

「…………つ！？」

「いやいや、俺。もつとこい男だし。こいつよつ

「…………？」

「眼悪いにもほどがあるぜ、話にならねえな

「…………え」

「いいからもう黙れ、さつわとこいつ殺してやるから

「…………うつ」

「…………」

そんな俺たちの会話を信じられないものをみるかのよう、傍観する田の前の二重身。

言つてみれば、絶句つて感じの表情だ。

俺はまず浮かべねえな。いや、たぶん。……実は自分でも知らねえけど。

自称一重身は口を開く。

「いやいや。お前等、話になるならなって。そもそもそれで話成り立つてんの？」

「は？」

なに、まづい、見ていろかと思えば、なに言つてんだ？

「見てわからねえのか？」

「わかるかっ！」

「どう見ても会話してるだろ？が」

「片方、まともに発声してないけどなー！」

「お前、会話が発声だけで成り立つとでも？ とまづか、言語を必ず必要とすると思つてんの？」

例えば、日本語が通じない人間相手でもその気になれば会話が出来るだろ？。言葉の通じない相手でも、ジェスチャーなどがあるし、声真似や指さしで動物や作業を示すことも出来る。表情、雰囲気、時間や場所などと言つた状況、そのすべてが会話のための材料だ。ジエスチャーが会話にならないと言つ奴は、別の世界に帰れ、現世じゃやつてけねえよお前。つまり『あの世』に帰れ。一言で言つと死ね。手話や手旗信号、モールスを全否定か、お前は？

なら、いつそ間に電波やら電気やら挟む現在の通信方法すべてを否定しろ、たわけ。発声ですら、空気振動を媒体にした間接手段だろ？が。

てか、言葉が意思疎通の「ミミコニケー・ショントールにしかならぬ奴は、みんな死ねばいいと思つ。そんなお前は、たぶん、他の奴と気持ち共有できねえよ。一生。

と言つうか、人類は誕生から人間外のものと対話するべく、憑依や解釈なんでものを用いて自分より偉大な存在から知識を得ようとしてきたんだぞ？

自分たちがその先祖の末裔だつて自覚しろ、自称現実主義者。—
言で言つと、死に至るほどの馬鹿。つか、死に至れ馬鹿。

「と言つわけで、お前は死ね」

「さつきから死ね死ねって。俺を殺そつとしかしてねえよな、お前
？」

「当たり前だらうが、自分と似たような顔してる奴はおおよそ気に
入らん。つか、俺の人生パクンな。そして、その血汐閑咲を俺に寄
越せ。……え？ なにそれ、買ったの？ 売つてんの？ それとも
全部、自分で作つたの？ コスプレかお前、マジ死ねばいいのに」

田の前の自称二重身は、何を言われているのか即座に理解して、
嫌悪感いっぱいに顔をゆがめた。

なるほど、理解力はあるらしい。

「チツ、てめえみたいのが元々俺だと思つとマジでむかついてくる
ぜ」

「うつせ、お前が俺の訳ねえだらうが。俺の方が断然いい男だし？」

「顔は同じだ、バカ」

「は？ なに言つてんの、お前」

マジ、くだらない。この程度の奴と俺は戦わなきやならんの？
いつもこの時、フツーは中身が違うと言つのだらうが、そんな小さ
い些細なレベルじゃない。

「どう考へても、お前より断然俺の方が格好いい生き方してるだろ
うが」

俺は胸を張り誇る。

例え、数多くの俺と言つ可能性があつたとしても。それだけ多く

の可能性があり、それがシャドウとして秘められているのだとして
も。

断言してみせる、今いる俺がもつとも最高の生き方をしてい
る、とな。

「てめえは俺じゃねえ、俺のしたい欲に食らいついて生まれ出たん
だとしても。俺の持てなかつた可能性を秘めているのだとして、
もはやそれは俺じゃねえ。俺のなるかもしなかつた可能性？ そ
んなもん、この世にいる全員がそうだろうが！」

俺の殺してきた奴。

その全員が俺のたどるかもしなかつた末路だ、俺はそのすべて
を背負つて今ここにいる。

強い奴も弱い奴も、俺がそっちの方の才能を持つて努力したらな
るかもしなかつた可能性だ。頭のいい奴も悪い奴も、性格のいい
奴も、悪い奴も。モテる奴もモテない奴も、俺のそつなるかもしけ
なかつた他人という名の可能性だ。

「だけどな、そんなもん関係ねえ！ 俺は『赤霧咲斗』、俺が『赤
霧咲斗』！ てめえは俺と同じ身体と中身と能力を持つた、別の可
能性と生き方の同姓同名の別人だつ！」

俺はそう言って日本刀の姿をした魔剣、血汐閑咲を振りかざし、
目の前の相手に叩きつける。

鮮血沸騰を併用し、身体能力を遙かに向上させて

全身からほとばしる、赤い霧。視界を一気に染色する真っ赤な色。
俺の視界は完全に赤に染まる、その世界のすべてが……。

「なつ！ お前えつ！」

奴は硬化した両腕を交差させて、魔剣を受け流す。

全身を背後にそらし、掛かる怪力を可能な限り無効化するために。そのまま身体を回転させる形で放たれる蹴り、それは俺の頬をかすめるもダメージにはならない。それでもわずかな怯む隙となり、着地と同時に放たれる斬撃を許す形になる。

許すと言つても、斬撃を放つことそのものだけだ。まともに受けやる気はまったくない。

俺はその放たれた刀の横つ腹を、膝をたたきつけて跳ね上げた。

「くつ

「読みやすいんだよ、馬鹿が」

跳ね上げられた刃が軌道を逸らし俺の肩の肉を削ぐ、かと思ひきや、防刃を兼ねるコートが打撃へと変換。違和感はあるものの、戦鬪に支障はない。また痛みもない、この状態で痛みという危険信号は邪魔であるために感覚から完全に除外している。

俺はそのまま接近、刀を持つ人間にとつては動きづらっこいの上ない、肉薄する間合いで詰め寄り。

そのまま突進するように、硬化した肘をその左胸にぶち当てた。

「がはつ

奴の胸から、バキバキッと言つ氣味のいい音が響くのと同時に、俺の胸からも似たような音が響き出す。

そのまま奴は無様に転げまつた。しかし、それでもなお魔剣をその手から離すことはない。

当然だ、俺との戦いでその剣を手から離せば、勝つどころか逃げられるはずもない。

「おい、立てよ。俺はお前と違つて寝てる奴を殺して楽しむ趣味は

ねえよ、さつさと戦え」

さて、「コイツは俺のどんな可能性なんだ？」

技量そのものはさつきの攻防からして、実質的に差はない。当たり前の話だが、より上の能力を持つた自分で訳じやなさそうだ。まあ、俺の一番やりやすい動きをしてくるんで読みやすすぎる。その上、疲労や血液量の関係で俺が上だからこそ、こいつして圧倒出来る訳なんだが。

「……なんだ、そりや？」

そいつはなんとか立ち上がりながらも、俺に問う。

「お前、見たら？ わかつた？ 俺に今与えたダメージはそつくりそのまま、お前も喰らってるはずだ。アバラが何本かいがれてるだろうが！」

「それがどうした。最初から承知だ」

「承知だと？」

「当たり前だろうが、てめえがキツキとの戦闘で喰らったダメージ。俺も受けてんだ、馬鹿！ 拳は碎けるは、全身の筋肉は死ぬまで、あやうく激痛の余りにショック死するところだつての」

遠野のメールが届いてから、俺がどんなに笑えない目にあつたかわかつてんのか。
意味不明だつたぞ、なんでこんなに死にそつなつてんだ俺、つてな。

その辺の地面で突然、身体のあちこちから出血かつ複雑骨折しながら、悶える人間が客観的にどう見えてるのかなんて考える余裕すらなかつたわ。

出血は即、反射的に止めたけどな。そこは慣れてるんでもう無意

識に出来るレベルだ。

「まあ、アレだ。咄嗟に魔薬使って、強制的に狂的覚醒^{トランクス}入って、痛みを解いたから生きてるけどな。フツーの人間なら耐えきれなくてそのまま死ぬつつの。そんな理由で俺死んでみ？ お前もショック死で死ぬのかって話だつ！」

「そりや殺意に用覚めるだろ、俺。
いきなりそんなことになつたら犯人殺していいレベルだろ、マジで。

「……ああ、そういうや、お前が回復すると連動して俺も回復するのな？ 勝手に身体の傷治り出すから何事かと思つた。アレか？ 身体の損傷度だけは共有してるつてトコか？」

「どこからどこまでが連動してんのか、未だにわからんねえけどよ、ただ、俺が硬化や身体強化使つてもお前がされてないからな、解釈的にはそんなもんだろ、たぶん」

「一ことは、俺が今、コイツの首はねたら俺の首も飛ぶのかね。
……微妙なトコだな、仮にそならその後、俺もわずかな間は生きてるだろうから速効でくつつけたら俺は無事か？ でも、そしたらアイツも治るのか？ それとも術の対象がいつたん死んだ時点で術が解除なのか……いや、そもそも魔術なのか、この現象？」

「うん、不明だな。

「ま、どっちでもいいや。どっちにしても俺はお前殺すし、とりあえず

「……つぐづぐイカしてやがるな、俺」

「今さらだろ。自称一重身」

「だな、俺がイカしてるのは今始まつた事じやない」

自称「^{おれ}一重身」は、くつくつくつと肩を震わせながら小さく笑った。目が変わる、心地良い殺意が籠もった目。ヤツは俺と全く同じ、相対するが故に反対に見える形に魔剣を構える。正式な剣術でない、同じ我流の構えで。

……これでようやく俺を殺す氣で来る訳だ。

「そうだ、お前がなんであるかはどうでもいい。お前が俺の可能性かどうか、なんて知った事じゃない。お前がいる理由も目的すらもどうでもいい。重要なのは……」

「殺し合つて面白いかどうかだろ？ 赤霧咲斗。獵獣にとつて狩りは食事、つまり生活の一環だが、狩人にとつては……必ずしもそうじゃねえ」

「わかつてんじゃねえか、自称「^{おれ}一重身」

武装や術式が同じ、つても異流の鮮血魔術師である俺達が、現在保有する血液量に差があるなんてのは実際かなりのハンデイだよな。いや、本来、鮮血魔術師なんて名前すらおこがましい。血液を付着させて、魔剣との身体に繋がりを得、その後直接血液を消費して魔術を扱う。亞流どころか、異流の鮮血魔術。人成らざる身、禍^ま血を持つからこそ使える異能。

フツーの鮮血魔術師と違つて、技量よりも血液量がその術の効果を左右する。……それは向こうもわかつてやがる。

……いやな、そもそも鮮血魔術なんて扱う魔術師がフツーじゃなって突っ込みは、スルーだけどな。

「ならば……やる手は一つだろ」

俺の言葉を合図にしたかのように、一重身は接近戦は不利と見て

距離をとる。その上で魔術をあえて紡がずに攻撃を仕掛けってきた。

それはそうだろう、魔術を紡ぐ間に俺は近接して高速戦を仕掛け
る。魔術を一切使わせず、鮮血オーバーブラント沸騰ブリーラントを使った上で連撃を叩き込み、

どう足搔いても確実に斬殺するだろう。

俺の予測通りの決断だが、それは最善の行動だった。それはその手に握った、小さな金属状の杭を一本投げただけの攻撃。

ただし、その狙いは俺ではない。

キツキだ。

「そう来るよなつ、やつぱー！」

俺はすぐに斜線上、一重身とキツキへ間に入り、その杭を左手で弾く。魔剣で弾けば、ヤツは必ず攻撃を仕掛けてくる。なにせ、相手は俺と同格の相手だ。油断は出来ない。

その間に、魔術を紡ぐ一重身。それを防ぐために接近するも、キツキへの斜線をふさぐように意識しなければならないため、防御や回避もままならない状態と言つ無防備な直進。

ヤツはあえて杭を一本づつ投げていた、まとめて強化された膂力で投げれば、俺に手傷を負わせられるだろうに。時間を稼ぐために、俺の一番嫌なポイント、呼吸を計つて撃ち込んでくる。

一重身は複数の杭を既に練成し隠し持つている。それがいくつかのかもわからないために、どうしても俺の動きは消極的なものにならざるを得ない。しかし、かといってこの状態で相手に接近しなければ、キツキに近づけさせないよう牽制が出来ない上、俺が消耗戦を強いられることになる。

……そう、俺はたつたそれだけの手で追い詰められていた。

「狡いだろ、お前つ！」

相手は答えない。まあ、だろうな、と思つ。

俺の言つたのは戯れ言だ、実際返答を期待はしていなかつたし。これは狩りだ。決闘じゃない、俺は戦士でなく決闘者でなく兵士でなく、狩り手。ならば、相手の弱点を突くのはなんら卑怯でないだろ。

俺も相手に護るべき相手がいたら、人質にするなりなんなりするだろう。キツキを殺すなら日中を狙うに違ひない。可能なら、疲弊した状態で。

だが、相手が俺と同じ思考、狩人としての目線でいるのなら……。

「 つ！」

またも放たれた杭に気づき。

同じように、左腕で弾く。それは自分の中での最善最速の動き。機械化されたパターン。

しかし、同じ事をされたのではなかつた。

飛来する杭の陰に隠された、もう一つの杭。『丁寧に、より目立たない色合いに調整された状態で。

……性格悪過ぎンだろ、お前つ！ 上手くいっている手を変える必要はない、そんな寝言が命取りなのは俺は知つてたはずなのにつ！？

反射的に身体を逸らそうとして、それを止める。裏にはキツキがいる。いつも通り、勘や反射神経で動くことは許されない。

自分の冷静な思考と、本能的な動作が相反した時、人間は停止するしかない。それは大きすぎる隙だった。

杭はよりもよつて右肩に刺さる、それは計算されたが故に。ともに杭が爆ぜた。碎ける肩の骨と筋肉。神経までもが確実に傷つけられ、俺は衝撃で魔剣を手から離れる。傷を回復させようにも、入

り込んだ破片によつて阻害。

その間に呴かれる、術式。唱えずとも紡がれる、しかし、精神集中をより強固なものにするべくの詠唱。

「源は魔血解放、役は属性反転・極大解釈・靈獸使役……果は炎蛇サラマ使役シドラー」

二重身は左手に握りしめられた魔剣を使い、術を構築。魔剣から現れる、燃えさかる炎蛇を再び使役し始めた。それは俺が一番最初にソイツにたたき込んでやろうとした魔術。

おそらくやられた仕返しのつもりだろう、間違いない。なにせ顔が陰険そうだ。

迫り来る大蛇、落とされた魔剣。前回の仕返し。

……わかる、コレでアイツと同じようにコートで防げば俺は死ぬ。いや、殺さないまでも戦闘不能だろう。

なにせ、アイツは俺だ。俺と戦い方が同じなら戦術の組み立て方はアレに近い。

キツネ詰め将棋。

手からこぼれ落下していく魔剣を、地面すれすれで蹴り上げる。空中で回転する刃。それを術を紡ぐのと同時に、袖に仕込んでおいた呪紙を持ち左手で触れ、術式を発動。仕込んだうちの一枚に呪紙は燃え尽きた、触れた勢いでさらに回転を掛け宙に続けて浮かし続ける。

無詠唱で即座に扱う魔術。源は魔血解放、役は属性反転・拡大解釈・従伏退散。簡易の限定的な耐火魔術、焰薙アンチフレイムぎの魔術。

炎を扱う魔術師である以上、耐火魔術は基本中の基本。ではあるが、それでも単純に炎そのものを扱えない俺には難易度が高い。だ

からこそ、俺の「一トは素材としても魔術的にも耐火に優れているものを使っているのだ。

実際に魔術を使用せねばならない事態では、簡易な魔術に限られるが、予め術をある程度あえて未完成のまま構築しておき、札や紙などに描く。こつして回数が制限される使い捨ての道具ではあるが様々な応用が利く状態にしておくのだ。

そのうち、一枚を焼き捨てる形で俺は術を構築する。

炎薙ぎの術式を発動させた宙を舞う刃は、迫り来る巨大な炎蛇をいとも簡単にバラバラに切り裂く。その回転を続ける魔剣に対し、左腕を翻す形で、仕込んでいたもう一枚の呪紙を掴んだままの形で握る。

入念に防備され、決定的なダメージを与えるのに適さない炎。回避する手段が幾重にも想定されていることが互いにわかっているはずの攻撃手段。

では、なぜ火炎で攻撃を仕掛けたか。簡単な話だ。
放たれた火炎は攻撃ではなく、目くらまし。

炎の大蛇がかき消され、現れるのは投合されたであろう飛来する三本の小さな杭。

そして、それに追いつかんほどの速度で迫る、一重身。
一重どころか、三重の仕留めるための一手。

俺の組み立てる戦術は予測出来ない奇策じゃない。予測されたところでどうしようもない、相手を追い込むための追い詰め続ける次の一手のための攻撃の連続。最後の最後で仕留めるタイミングを計るだけの作業。

それが狩人の戦い方にして…… 娯楽までの繋ぎ。

必殺技なんて狩りにはいらない。バイルパンカ 炸裂杭撃ちなんてのは、勝ちが決まってからの遊びだ。あれが決まる段階なら、別に魔剣で串刺し

にすればいいだけの話。

そう、俺にとつて殺し方なんてのはもう遊べる段階のことだ。狩りつてのはそこまで追い込むまでの戦術と手段をいくつ用意出来て、どんな順番でどう組み合わせるかってことでしかない。

どう殺すか、どう遊ぶか、それを楽しみに凶器に狂氣を乗せ、その命の重さを量る。仕留めるまでの苦労が多い程、殺す時、愉しい。苦労が報われるその一瞬のための努力と作業、思考と苦心の積み重ね。

きっと、なんにでも同じ事が言えるのだろう。仕事でも遊びでも趣味でも。成功や完成した瞬間のために頑張っているとも言えるし、それまでの苦労が面白いとも言える。俺の場合、それが狩りだっただけだ。

それを実際にやられてみると、ま、笑えないんだけどな。自分との殺しあい、おもしろいかと思いきやつまらない、どう殺しに来てどう殺しに行けばいいのか、まるわかりだ。

「意外と退屈だな……」「重身」
おれ

「そうだな、俺。だから、わざと終わらそつ」

言葉を交わすことの出来ないはずのわずかな時間。
確かに俺達は意思を疎通出来た、言葉なんて必要なく。刃と刃のぶつかり合いでによつて。

感覚で判断、今飛んできている杭に炸裂の仕掛けはない。アレはどうやるのか、今の俺には思いつかないが、後で考えれば分かる程度のネタだろつ。それでも、おおよそ手間の掛かる仕込みなのは分かる。

右肩が上がらないため、腕一本で出来る対応を強いられる。対応は困難、俺は武道に關しても魔術に關しても天才ではない。ただ異

能に恵まれただけの凡人だ。

では、どうするか。

喰らおう。その攻撃。

呪紙が燃え尽き、同時に思考が加速する、冷たいなにかが頭を流れる。なによりも熱い猛りが全身を支配する。

そつ、この世界は……真紅だ。なによりも紅く美しい、それが世界だ。これが俺の生きる戦いと狩りの世界だ。

……俺はおよその目測で杭が当る位置を予測、瞬間に硬化するかどうか、しかし、当然、それは万全なモノになり得えない、強化された膂力による投合を防ぐ程の強度は生まれない。その案を棄却、次善の策を採用。

きつちり、三発が直撃。ダメージを受けるのを前提に、全身の筋力を増加し弾力性を高めた上で、損傷部位の骨の強度を増加。ぎりぎり戦闘に支障はない程度に抑える事に成功したと判断し、一重身を迎撃つ。

視界に入る事実から情報修正。現状の状況は悪化。

高速での思考は相手も行っているだろう、判断は向こうも正確だ。さらに相手の状態が認識よりも良いコンディションにある様子、鮮血沸騰を併用しての身体強化がされている上に、右肩が回復されている。

相手の肩には金属の破片が存在しない、だが一方こいつたは破片が刺さったままだ。この状態で相手が回復した場合はこいつたが回復が適用されないと言う理屈なのだろう。

ようするに金属の杭での攻撃を多用したのは、相手は回復出来ないが自分は回復出来る、と言う状態を作るための布石。恐らく、その上で増血剤の服用をし持久戦に持ち込んで、短期戦で決めようとするとであろう俺をいなして、無力化しようと考えたのだろう。

「まつたく……いやらじい」との上ないな！」

俺は相手の一撃を剣で受け止める。斬ると言つよつは、激突される血汐閑咲。さらにそれを全く同じく血汐閑咲で受け止める。銀色に輝く美しき凶器は、今の俺には紅い血に染まるよつた刃に見える。

刀匠の長い年月を経て、積み重ねられた歴史ある技の結集。計算され尽くした数百数十万の魔術の結晶。それがへし折れるんじゃないか、と言う程の衝撃。

定跡としては、背後にその攻撃を受け流すことでその力を霧散させ、押し負けや身体へのダメージを減らしたいところだ。だが、残念ながら背後には護るべき、有卦キツキがいる。それは不可能だ。

……と、思つてゐるだらうなあ。

俺は避ける、素直に。

力を抜きすぎない程度に、適度に力の流れに任せる。歓喜の鳴き声と共に軋み、火花を咲かす刃達。

見惚れてしまう程に、俺の愛刀達は華々しかつた。

それが俺の頬を掠めていく、その刃が肉を攫つていく熱さすら愛おしい。交差する形で、一重身を斬りつける俺の握る魔剣。予測外の動きに、まともに胴体に入つていく刃。

硬化と対怪物クラスの防刃纖維のコート、その相互作用によつて切り裂かれる事はない。それでも十分に、人を超えた臂力による一撃は斬撃ではなく衝撃という形で、ダメージを与える。

それでも、なお、一重身を行動不能に追いやりには至らず、俺はとうとう積み重なるダメージによつて、それを追うことが出来ない

までになった。キツキに迫る、一重身を止められない。

このまま斬り合えば、勝負は未だわからない。全体的な血液の保有量としては、依然として俺の方がかなり上だ。損傷は多くとも、使えるエネルギーの総量が大きい以上、逆転はありえる。

撃ち込まれた杭は、俺の作りだしたモノ。それを分解する術もまた、俺は持っているのだから。単純にバラバラとなつた細かい破片を、戦闘中という状況では瞬時に取り除くことが出来ないだけのこと。

こういった不確定な状況で俺の取る手は、二つのうちどちらか。確実に勝てるように戦術を組み立て直すか、それが見いだせないなら逃げるかだ。

ここで俺が取る戦術は、まずキツキを人質にする。そして、俺を殺すか、俺が追つてこれない程度にダメージを負わせて逃げるか。この場合、どちらにしてもキツキは殺される。

やばいよな、うん。この状況やばいだろ？

じゃ、お前はこう疑問に持つはずだ。

なぜ、赤霧咲斗あおれがこんな下手を打つた、とな。

はい、残念トランクス。お前が眞実に気付くのは全てを失つた後だよ、てめえの敗因は喋りすぎだ、馬鹿。

「ぐげややああああつ

突然、顔面にとてつもない衝撃を受けたような気がして、悲鳴を上げながら地面を転げ回り悶える。幸い、狂的覚醒トランクスによって痛みはないが、鼻の音が砕け散つたような音がした。おそらく、頬の骨まで同時にイカれたと思われる。

なんで？ 不思議？

やべえ、鼻血凄い勢いで止まんねえ。涙も鼻水も全然吹き出すよ

うに止まんねえ、なにが起きてんの？ なに、ビリした俺？ これ
つてすぐえミステリイ。

……いや、原因わかつてんだけどな。

悶える俺が空を仰ぐよじして、顔面を押さえていると、空を飛
ぶよじにして暗緑色のコートを羽織った誰かが、マントをなびかせ
るよじにしてスクリューしながらぶつ飛んだ。

残念ながら、それは俺だった。

……これつてマジ、ミステリイ。

いや、なにが起きてんのか、すぐえわかつてんだけどな。ただ認
めたくないだけでな。

なにかが地面を転げ回った挙げ句、なにかぶつかる音がした。同
時に俺の頭蓋骨が軋んだ。ひびが入ってなければ幸いだ。

「つて、なに顔狙つてんだよ。」

俺は起き上がる……いや、立てなかつた。
自分に妥協、這うよじに見上げる。

もひろん、そこにいたのは魔術の化身マジックアバターこと。

ぎり、ぎりの状態で、なんとか復活した有卦キッキその人（？）だ
つた。

それはそれはもつ、輝くよじに憤怒な笑みで牙を剥き出して魅
せ、見せて。

露出の多くなつた、結果ややセクシーになつてしまつた普段着を
身に纏い、殺意満々に、ズタボロ雑巾のよじになつた俺達を見下ろ
していた。

「とつあえず、どちらでもいいからそのムカツク面張つたおそれと

思つてやつ

「いやいやいや、どつちを殺す氣だよ、お前つ！」

「なに言つてんのつ、赤ちゃん^{ベイビー}。どつちでもいいじゃんつ。どつちでもいいから攻撃したら死ぬでしょつ？」

「……だれがベイビーだよ」

相当、怒つてね？ ロイツ。

いやいや、今まで俺お前のこと護つてたんだよ。いや、殺そうとしたのも俺だらうけどさ、この状況見たらみんな混乱するじゃねえかよ。

この状況、かなりすげやばいへうりにミステリイー。
……てか、俺死ぬんじゃね？

*

「えーと、ここのは？」

ぼくは辺りを見回した。

恐らく、フツー大神さんの部屋に入つたはず……。

なんだけど、周囲はどこまでも黒くまつ暗な空間。

それは、手を繋いだ状態で背後に続く、大神さんの双眼にもよく似ている。まあ、双眼というかただ窪みなんだけどね。

奇妙なことに、灯りの存在しない暗闇の中にはずなのに。自分の姿や、背後の大神さん。

そして、目の前にいる大神アスカと同じ姿をした彼女の姿ははつきりと見えるのだ。

……不思議だねえ。

「あなたはもうここから出られない」

彼女はまくへむけり出でる。

ぼくの意思など、関係なことと言ひよひ」と

……ちょっと氣に入らないかな。

「えーと、ぼくの質問に答えてはくれないの？」

「あなたの目的はわたしをその会話に組み込んで操ることでしょう？ 残念だけど、あなたを残してわたしは消えるわ。すこし、忙しいから」

「それは確かに残念、ぼく君と話すの好きなのに」

「わたしも残念……全てが終わってからゆっくりとね

本気でぼくと話す氣などないのだろう。

ゆつくつとその間に解けるようにして消えていく、彼女。しかし、ぼくは怖くはない。なにせ独りぼっちではないからね。

ぼくの表情を見て、なにを思ったのか怪訝そうな顔をしたけれども、結局、それ以上口を開かずに消えていった。

ふむ、どうしたものかな。

とりあえず、アレだね。

「彼女、後ろの大神さんに気付いてなかつたっぽいなあ？」

これはおもしろい発見かもしれない、なるほどなるほど。ぼくはますますその握っている手が、頼もしくなる。色白で華奢なその手はびつ考へても、ぼくを護ってくれるものではないんだけど。

そんなことはどうでもいい、女の子の手を握つている男は強くなきやね。せめて気持ちぐらこはせ。

「わー……」

ぼくは周囲を見渡す、完全なる漆黒の世界。声の響きから、部屋の広さがわかるかと思いまや、そいつ言つた概念が通用する空間ではなさそうだ。音は聞違いなく出でているのだが、響いていようと叫つ感覺が氣薄。かといって音が「ひもつて」いる訳でもない。

「いやあ、アレだね。例えるな」……。

「うん、それはそれとして。

「辺りに田印になるもの無し」

では、助けは呼べるかな?
はい、無理です。

携帯の電源、なぜか入つてません。

充電はバッテリだつたはずなので、壊れてるんじゃなければ純粋にここじゃ使えないんだね。ここに入る前に、赤霧先輩に連絡したしね。高確率でここじゃ使えないと判断。

あー、これじゃ巫月所長呼べないや。ま、いいか。電話したら、まずなぜ危険なことしてるって怒られそうだし。怒られたくないから、電話したくなかったんだよね。

うん、非常事態に電話して上手くウヤムヤにじよつかと思つたのに。惜しいつ。

ぼくは鞄を漁る。

使えるものはいくつかあつた。異空間を脱出出来るような便利アイテムはないけど、異空間に異常事態起じせるぐらこの禍々しい呪

物はいくつかあつたはず。上手く使えば、この空間を悪霊でいっぱいにして、空間の持ち主の制御下から突き放すくらいは余裕だろ？。
なんだつたら、キツキさんの牙、また刺せばいいや。助けてくれないかもしないけど、巫月所長に報告くらいこはしてくれるだろ？。
……ありや？

「鞄の中身空っぽだねえ？」

中身、どこだ？

全部、鞄の中から出すとやばいものばつかなのに。あえて言つながら、某ホラー映画のビデオテープが触るだけで呪い発動するぐらいのレベルで。

即死しないしね、せいぜい一週間以内に死ぬ程度の呪いだから、そこまでひどくないんだけどね。治すのも簡単だし、きちんと準備してやれば誰かに代わりに呪われてもらえばいいだけって言う程度の呪いだから。

まくは空っぽの鞄を空いている手で振り回しながら、考える。

この状況、どう解釈すればいい？ どう考えるべき？

希望や絶望なんてわかりやすいもの、少なくとも「これは無」というだった。

仕返しといつ名の話し方（後書き）

基本的に登場人物頭おかしいかも、と思つたりしています。

身近にいたら、反応できないレベル通り越して、認識を拒否する
レベルですね。

執筆、お待たせしないよつに頑張ります！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2152o/>

銀の弾丸なんてない～紅月編

2011年6月2日13時15分発行